熊本県文化財調査報告　第242集

The NishikataHyakuta Site

西片百田遺跡

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う
埋蔵文化財調査

2007
熊本県教育委員会

The NishikataHyakuta Site

西片百田遺跡

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う
埋蔵文化財調査

2007
熊本県教育委員会

序

県南部の主要都市である八代市は、古くから文化財の宝庫としても知られ、中でも県を代表する装飾古墳である田川内古墳・大鼠蔵古墳群をはじめ、古麓城跡、八代城跡などの国・県指定史跡等、多くの文化財が知られております。

ここに報告する八代市西片百田遺跡は、九州新幹線建設事業に伴い発見された遺跡で、平成12年～14年度にかけて発掘調査を実施したものです。調査の結果、弥生時代中期から古墳時代初頭に及ぶ各種の遺構・遺物が検出されました。なかでも、弥生時代後期の住居跡からは重弧文長頸壺型土器、所謂免田式土器が多数出土しており、八代平野における弥生文化の一端を知ることができました。

本事業における八代地区での埋蔵文化財発掘調査は終了し、随時調査報告書が刊行され、八代市の歴史を語る上で重要な遺跡の存在が明らかにされつつあります。

本報告書が広く県民の皆様に利用され、郷土や文化財の理解・愛護に活用されることを期待します。最後に、調査を進めるにあたり、八代市をはじめ多くの方々からのご指導・御協力を賜りましたことに対して、ここに厚く御礼申し上げます。

平成19年3月31日

熊本県教育長　　柿　塚　純　男

例　言

1　本報告書は熊本県教育委員会が2000年（平成12年）8月1日から2002年（平成14年）4月19日にかけて、八代市西片町字百田において実施した発掘調査の成果を報告するものである。

2　本遺跡は当初「西片町遺跡」として、日本鉄道建設公団九州新幹線建設局(現：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局以下、「鉄道建設・運輸機構」と言う。）と熊本県が埋蔵文化財の保存・調査に関する協議を実施し、平成12年から平成14年にかけて八代地域における埋蔵文化財の試掘・確認調査が終了したのを受け、八代市教育委員会と県文化課の協議の結果、平成14年6月25日付け教文第814号で遺跡地図へ追加登録（遺跡範囲・名称変更）を経て「西片百田遺跡」に変更された。

3　この調査は「九州新幹線建設工事」に伴うものとして、鉄道建設・運輸機構の依頼を受けて熊本県が実施した。

4　発掘調査は年度毎に以下の人員にて行った。

2000年（平成12年度）　長谷部善一・緒方智子

2001年（平成13年度）　長谷部・坂田和弘・上髙原聡・洲崎明子・荒木孝宏

2002年（平成14年度）　長谷部・洲崎

5　遺構の写真撮影は長谷部・上髙原・洲崎が行った。

6　本書で使用した土壌色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に準じている。

7　遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅱ系による。髙さは、東京湾平均海面（TP）を基準とする海抜髙で表す（日本水準原点：H＝24.4140m）。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することになったが、九州新幹線建設工事はすべて日本測地系によっているため、本書の平面座標も日本測地系で表示している。

8　遺物の実測などの報告書に関する記述は、後述する「報告書の作成」に別記する。

9　本書で使用した地図は、八代市都市計画課の承認を得て使用している。

10　本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。

11　報告書の編集は、文化財資料室長　野田拓治のもとに、長谷部・上髙原がおこなった。

また、調査および調査報告の迅速化のため、以下の業務委託を行った。

現地調査

・4級基準点測量及びメッシュ杭設置業務　有限会社和樹コンサルタント

・遺構実測業務　株式会社埋蔵文化財サポートシステム　熊本支店

・空中撮影　株式会社九州航空、株式会社写測エンジニアリング

・自然科学分析（土壌分析）　株式会社古環境研究所

報告書作成

・デジタルトレース業務　株式会社埋蔵文化財サポートシステム　熊本支店

西片百田遺跡発掘調査報告

—九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

第Ⅰ章　序　言 …… 1

1　調査に至るまでの経緯 …… 2

2　本調査の経緯 …… 2

3　調査の組織 …… 3

4　報告書の作成 …… 4

第Ⅱ章　調　査 …… 5

1　調査・地域 …… 7

A）遺跡の位置 …… 7

B）八代地域の地理的環境 …… 7

C）遺跡の歴史的環境 …… 11

D）既往の調査 …… 17

E）測量 …… 17

F）地区割り …… 17

G）調査の方法 …… 18

2　調査日誌抄 …… 23

第Ⅲ章　遺構・遺物（弥生時代後期から古墳時代初頭の集落址） …… 37

1）1・2区 …… 40

2）3区 …… 81

3）4区 …… 103

4）5区 …… 131

5）6区 …… 137

6）7区 …… 149

第Ⅳ章　自然科学分析 …… 173

第Ⅴ章　まとめ …… 183

図版（カラー・モノクロ） …… 191

報告書抄録（西片百田遺跡） …… 243

挿 図 目 次

Fig.1 西片百田遺跡位置図
Fig.2 各地点の柱状図
Fig.3 大鼠蔵貝塚出土資料実測図
Fig.4 洗切遺跡出土樽形瓶実測図
Fig.5 西片町遺跡周辺出土円面硯実測図
Fig.6 西片町遺跡周辺出土青磁椀・皿実測図
Fig.7 周辺地形図
Fig.8 周辺遺跡分布図
Fig.9 周辺地形図
Fig.10 西片百田遺跡全遺構配置図
Fig.11 1区遺構配置図
Fig.12 1区SD01・包含層出土遺物実測図
Fig.13 2区遺構配置図
Fig.14 2区SI01実測図
Fig.15 2区SI01出土遺物実測図
Fig.16 2区SI02実測図
Fig.17 2区SI02実測図
Fig.18 2区SI02出土遺物実測図
Fig.19 2区SI02出土遺物実測図
Fig.20 2区SI02出土遺物実測図
Fig.21 2区SI02出土遺物実測図
Fig.22 2区SI02出土遺物実測図
Fig.23 2区SI03実測図
Fig.24 2区SI03出土遺物実測図
Fig.25 2区SI04実測図
Fig.26 2区SI04出土遺物実測図
Fig.27 2区SI04出土遺物実測図
Fig.28 2区SI04出土遺物実測図
Fig.29 2区SI05実測図
Fig.30 2区SI06実測図
Fig.31 2区SI06出土遺物実測図
Fig.32 2区SI06出土遺物実測図
Fig.33 2区SI07実測図
Fig.34 2区SI08実測図
Fig.35 2区SX01実測図
Fig.36 2区SX01出土遺物実測図
Fig.37 2区SX01出土遺物実測図
Fig.38 2区SX01出土遺物実測図
Fig.39 2区A-A'～F-F_土層断面図
Fig.40 2区G-G'～K-K'、3区A-A'～D-D'土層断面図
Fig.41 2区包含層出土遺物実測図
Fig.42 2区包含層出土遺物実測図
Fig.43 2区包含層出土遺物実測図
Fig.44 3区遺構配置図
Fig.45 3区SI01実測図
Fig.46 3区SI01出土遺物実測図
Fig.47 3区SI02実測図
Fig.48 3区SI02出土遺物実測図
Fig.49 3区SI03実測図
Fig.50 3区SI04実測図
Fig.51 3区SI05実測図
Fig.52 3区SI05出土遺物実測図
Fig.53 3区SI05出土遺物実測図
Fig.54 3区SI05出土遺物実測図
Fig.55 3区SI06実測図
Fig.56 3区SI07実測図
Fig.57 3区SI07実測図
Fig.58 3区SI07出土遺物実測図
Fig.59 3区SI07出土遺物実測図
Fig.60 3区SI08・09・10、SK31・32実測図
Fig.61 3区SK27・28実測図
Fig.62 3区SK29出土遺物実測図
Fig.63 3区包含層出土遺物実測図
Fig.64 4区遺構配置図
Fig.65 4区SI01実測図
Fig.66 4区SI01出土遺物実測図
Fig.67 4区SI02実測図
Fig.68 4区SI03実測図
Fig.69 4区SI04実測図
Fig.70 4区SI04出土遺物実測図
Fig.71 4区SI05実測図
Fig.72 4区SI05出土遺物実測図
Fig.73 4区SI05出土遺物実測図
Fig.74 4区SI05出土遺物実測図
Fig.75 4区SI05出土遺物実測図
Fig.76 4区SI07実測図
Fig.77 4区SI08実測図
Fig.78 4区SI08出土遺物実測図
Fig.79 4区SI09実測図
Fig.80 4区SI10実測図
Fig.81 4区SI11実測図
Fig.82 4区SI11出土遺物実測図
Fig.83 4区SI11出土遺物実測図
Fig.84 4区SI06・12実測図
Fig.85 4区SI06出土遺物実測図
Fig.86 4区SI12出土遺物実測図
Fig.87 4区SD02・包含層出土遺物実測図
Fig.88 4区包含層出土遺物実測図
Fig.89 5区遺構配置図
Fig.90 5区SD01～04実測図
Fig.91 SI01・02、SK01実測図
Fig.92 5区SI01・02出土遺物実測図
Fig.93 5区土層断面図、包含層出土遺物実測図
Fig.94 6区遺構配置図
Fig.95 6区遺構配置図
Fig.96 6区土層断面図
Fig.97 6区遺構検出状況
Fig.98 6区No.227・228・229出土状況
Fig.99 6区No.227・228実測図
Fig.100 6区No.229実測図
Fig.101 6区No.230出土状況、実測図
Fig.102 6区包含層出土遺物実測図
Fig.103 6区包含層出土遺物実測図
Fig.104 7区遺構配置図
Fig.105 7区SD01～06実測図
Fig.106 7区SD06出土遺物実測図
Fig.107 7区SI01実測図
Fig.108 7区SI01出土遺物実測図
Fig.109 7区SK10実測図
Fig.110 7区SK10出土遺物実測図
Fig.111 7区SK10出土遺物実測図
Fig.112 7区土層断面図、包含層出土遺物実測図

表 目 次

Tab.1　八代地区調査一覧
Tab.2　土器観察表
Tab.3　石製品観察表

表 目 次

PL.1　八代平野から有明海、雲仙望む
PL.2　八代平野　新八代駅周辺調査・工事状況
PL.3　7区SK10遺物出土状況
PL.4　2区SI02出土遺物
PL.5　1区完掘状況
PL.6　2区SI02炉土層断面、SI02炉完掘状況、SI02完掘状況
PL.7　2区SI04遺構検出時遺物出土状況、SI04完掘状況、2・3区完掘状況
PL.8　2区SI05完掘状況、SI06完掘状況
PL.9　3区SI01遺物出土状況、3区作業風景、SI01完掘状況
PL.10　3区SI02遺物出土状況
PL.11　3区SI03遺構検出状況、SI03完掘状況、焼失住居炭化物出土状況
PL.12　3区SI04完掘状況、SK27・28完掘状況
PL.13　3区SI05遺物出土状況、SI05完掘状況、3区作業風景
PL.14　3区SI07遺物出土状況、SD01・02完掘状況
PL.15　3区SI07遺物出土状況及び炉周辺完掘状況、SI07完掘状況
PL.16　3区完掘状況（一部引渡し済）
PL.17　4区SI02遺物出土状況、SI11遺物出土状況(近接)、SI11遺物出土状況
PL.18　4区SI03完掘状況、SI09完掘状況
PL.19　4区SI05遺構検出状況、SI05遺物出土状況
PL.20　5区完掘状況
PL.21　5区SD02完掘状況、SD03完掘状況、7区SD03・06完掘状況、7区完掘状況
PL.22　6区SI01遺物出土状況、SI02遺物出土状況、6区溝状遺構調査状況、6区調査風景
PL.23　6区完掘状況
PL.24　7区SK10遺物出土状況、SK10遺物出土状況(近接)、SK10甕内小型丸底壺出土状況、SK10完掘状況
PL.25　1・2区出土遺物
PL.26　2区出土遺物
PL.27　2区出土遺物
PL.28　2区出土遺物
PL.29　2区出土遺物
PL.30　2区出土遺物
PL.31　2区出土遺物
PL.32　2区出土遺物
PL.33　1・2区出土遺物
PL.34　3区出土遺物
PL.35　3区出土遺物
PL.36　2・3区出土遺物
PL.37　4区出土遺物
PL.38　4区出土遺物
PL.39　4区SI05出土遺物
PL.40　4区出土遺物
PL.41　4区出土遺物
PL.42　5・6・7区出土遺物
PL.43　6区出土遺物
PL.44　6区出土遺物
PL.45　6区出土遺物
PL.46　7区SK10出土遺物
PL.47　7区SK10出土遺物
PL.48　歴史的環境参考資料（八代市博所蔵・江上敏勝コレクション）
PL.49　歴史的環境参考資料（大鼠蔵貝塚出土資料）
PL.50　歴史的環境参考資料（大鼠蔵貝塚出土資料）

第Ⅰ章
序章

第Ⅰ章　序言

本書は、九州新幹線建設工事に伴い八代市西片町字百田において発掘調査を実施した成果をとりまとめたものである。当該遺跡の立地する八代平野南部は「八代平野条里跡」範囲にあたり古くから周知され、古代から中世にかけて水田が開かれていたことが窺える。平野上は条里設置されたあとも、干潟の広がる八代海沿岸という性格から近世まで広く干拓が行われ、地域の歴史を語る上で重要な地域である。

1　調査に至るまでの経緯

本調査に着手するにあたって当時、日本鉄道建設公団 九州新幹線建設局[1]（現：独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構 鉄道建設本部 九州新幹線建設局）は、昭和48年11月13日に整備計画の決定された「新八代・西鹿児島間建設事業」を計画し、事業予定地内の埋蔵文化財の有無を熊本県教育委員会に照会した。

それを受け、教育庁文化課では事業予定地内の埋蔵文化財分布調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地をはじめ埋蔵文化財の存在の可能性のある地域を取りまとめ、詳細な踏査並びに必要に応じて、掘削を伴う試掘・確認調査が必要である旨、公団に回答した。その後の協議の結果、建設側である公団から新幹線建設計画に伴う路線を始め計画・設計変更等は不可能であること、また現地保存も不可能であるとの回答を得て、遺跡の取り扱いについて協議を行い、記録保存止む無しと判断し、平成8年度から用地取得等の条件が整った土地から予備調査（試掘・確認調査）を継続して行った。

調査は日本鉄道建設公団から熊本県教育委員会への委託とし、文化課はそれを受託し平成12年度から八代地域における埋蔵文化財発掘調査を開始した。平成12年度に本調査に着手した遺跡は、「西片町遺跡」、「中片町遺跡」[2]である。

2　本調査の経緯

西片百田遺跡が立地している八代平野は、昭和40年代に大規模な圃場整備が終了し水田・イ草と通年で収穫できる作物が多く作られている。本事業に伴い、用地買収が熊本県により実施されたが、優良耕作地域であるため用地買収は計画通りに進捗せず、当初、文化財調査に着手できたのは計画全体の一部で、予備調査を数次に渡って行うも、遺跡の広がり及び密度・性格を知るまでには至らない状況であった。そのため、平成12年度に本調査に着手すると伴に、周辺地域の予備調査も平行して行うという、変則的な状況であった。また、周囲には建設工事に供する工事用道路及び駅が運用される際のアクセス道路がないため、鉄道建設・運輸機構及び八代市とも協議を重ねながら調査を行った。

調査及び確認調査の結果、遺跡は予想以上に周辺地域に広がっており当面の工事に伴い、個別には調査が対応できないため、仮設道路として当面、対応するよう関係機関と協議し、その間に調査工程を調整し随時本調査を実施した。

調査区の設定は1区からの調査ではなく、用地買収及び調査に関する周辺整備が完了した地域から開始したため、調査区番号は数字が前後している。発掘調査の経過及び進捗状況については後に、調査区毎に月日に沿って記す。

（長谷部）

1　調査を実施した平成12年当時は日本鉄道建設公団であったが、平成13年12月に閣議決定された「特殊法人等整理合理化計画」に基づき、平成15年10月1日付けで日本鉄道建設公団と運輸施設整備事業団が統合し、新たな法人として設立されている。本書では、当時の委託先であった日本鉄道建設公団として表記している。

2　遺跡名は、八代地域での予備調査が終了した平成14年6月に、それまで統一していなかった遺跡名の整理を行い、大字＋小字名を基本として遺跡名の変更を行っている。よって、それ以後は、「西片町遺跡→西片百田遺跡」、「中片町遺跡→中片小路遺跡」と称している。

3　調査の組織

今回報告する調査は、熊本県教育委員会が主体で調査を実施したものである。以下、発掘調査の責任者と年度毎の調査担当者及び補助員を掲げる。

2000年（平成12年度）

発掘調査主体	熊本県教育委員会
発掘調査事務局	阪井大文（文化課長）
	川上康治（課長補佐）
	島津義昭（課長補佐）
	中村幸宏（主幹 総務係長）
	高木正文（主幹 調査第1係担当）
	高谷和生（参事）
	坂田和弘（参事）
調査担当者	長谷部善一（主任学芸員）
調　査　員	緒方智子

2001年（平成13年度）

発掘調査主体	熊本県教育委員会
発掘調査事務局	阪井大文（文化課長）
	小田信也（課長補佐）
	島津義昭（課長補佐）
	中村幸宏（主幹 総務係長）
	高木正文（主幹 調査第1係担当）
	高谷和生（参事）
	坂田和弘（参事）
調査担当者	長谷部善一（主任学芸員）
調　査　員	上高原 聡・荒木隆宏・洲崎明子

2006年（平成18年度）

報告書作成責任者	熊本県教育委員会
報告書作成事務局	梶野英二（文化課長）
	吉田　恵（課長補佐）
	江本　直（課長補佐）
	高宮優美（主幹 総務係長）
	小谷仁志（主任主事）
整理総括・指導	野田拓治（主幹 文化財資料室長）
整理担当	長谷部善一（主任学芸員）
	上高原　聡
	（西片百田遺跡調査担当）
整理補助	坂本千恵

調査及び整理に対する助言及び協力者（順不動、敬称略）

牛嶋　茂（独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所）、佐藤信二（国立八代工業専門学校）、小畑弘己（熊本大学）、下村 智（別府大学）、新東晃一（鹿児島県教育庁文化財課）、弥栄久志・宮田栄二・前野潤一郎・上野園謙二・東 和幸（鹿児島県立埋蔵文化財センター）、山田元樹・坂井義哉（大牟田市教育委員会）、八代史談会の皆様、吉永 明・澤田宗順・米崎寿一・西山由美子（八代市教育委員会）、宮部武典（熊本県立熊本西高等学校）、青木勝士（熊本県玉名地域振興局）、杉本和樹（西大寺フォト）、西本和美、宇田員将、和田敏郎、米村 大、松尾 茂、村中智恵、横田 愛、稲葉貴子、北原美和子、唐木ひとみ、北原美奈子、入舟多美子、緒方涼子、中島史子、柿原尚子、木村典子、高松孝子、今村幸枝、緒方千代子、永山邦子、山内洋子、吉岡直子、戸田紀美子、清水千郷、園田智子、今福英子、田中洋子、上田律子、境美恵子、田中知恵美、岩下恵美子、坂本貴美子

4　報告書の作成

報告書の作成は、執筆や遺物の整理など一部を2001年（平成13年）に開始し、本格的な作業は2006年4月から行った。

遺物の整理は、西片百田遺跡調査事務所および熊本県文化財資料室にて行った。

報告書の作成に際しては、各執筆者が整理した内容を長谷部と上髙原による討議を経て、最終原稿とした。

1. 本書の執筆分担は、以下の通りである。

第Ⅰ章	序言		第Ⅲ章	遺構・遺物	
	1・2	長谷部		1－A・D	上髙原
	3・4	上髙原		1－B・C	上髙原
第Ⅱ章	調査				
	1－A・C～G	上髙原		2	
	1－B	髙田		3	上髙原
	2	上髙原・長谷部	第Ⅴ章	まとめ	上髙原

2. 本書に掲載している、遺物の写真撮影は独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所 牛嶋 茂専門員の指導のもと西大寺フォト 杉本和樹が行った。
3. 図面・図版・挿図・表の作成は、主に坂本千恵が主に行い、西本和美が補助した。
4. 遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅱ系による。高さは、東京湾平均海面（TP）を基準とする海抜高であらわす（日本水準原点：H＝24.4140m）。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することになったが、九州新幹線建設工事はすべて日本測地系によっているので、本書の平面座標も日本測地系で表示している。
5. 発掘遺構は遺構の種別を示す以下の記号を使用した[1]。
   SA（柵）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）、SG（池）、SI（竪穴式住居跡）、SK（土坑）、SS（足場）、SX（その他）
6. 本書中で表記している遺物の器種を表す用語として「椀」「杯」については、木偏で統一している。
7. 本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。
8. 註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。
9. 報告書の編集は、文化財資料室長　野田拓治のもとに、長谷部・上髙原がおこなった。

1　遺構の種別を示す記号は、独立行政法人奈良文化財研究所分類を用いている。

第Ⅱ章
調査

第Ⅱ章　調査

1　調査・地域

A　遺跡の位置

西片百田遺跡は、八代平野の南端に近い八代市街地の北東のはずれに位置し、球磨川の河口近くにあたり球磨川水運の基点として、また薩摩街道の渡河地点としても交通の要衝として栄えてきた地域に立地している。

古代の八代（夜豆志呂）においては、同市内の二見を経由し葦北町佐敷を経て鹿児島方面へ繋がる西海道が存在し、それらを繋ぐ駅路の推定地として市内に「片野」（現在の上片町付近）、「朽網」（現在の二見本町）が知られている。この片野駅推定地は本遺跡から東に約1kmの場所に当たっている。

B　八代地域の地理的環境

遺跡の地理的環境

西片百田遺跡は、熊本県八代市西片町字百田に所在し、八代平野南部に位置している。八代平野は不知火海東岸に発達した沖積平野であり、九州山地から流下する球磨川、水無川、氷川や砂川によって形成された複合三角州と、その先に発達した干潟を人工的に埋め立てた干拓地によって構成されている。

平野部分の西端からほぼ3km付近までが自然に陸化した地域であるが、球磨川の河口付近はその堆砂量が大きいため、約4.5km先まで陸化しており、八代市街地西端まで広がっている。

平野東側には益城町小池から芦北町海浦沖に延びる日奈久断層が存在しており、九州山地西端に直線的な断層崖を形成し三角末端面をみることができる。この断層崖には幾筋もの谷が形成され、崖錐や小規模な扇状地が発達している。

また、大分県臼杵から竜峰山の東側を通り八代市宮地町にかけて、中央構造線の延長部として内帯と外帯をわける臼杵ー八代構造線がある。この構造線の北側には内帯である白亜系の堆積岩類や古生界の変成岩類からなる肥後帯、南側には外帯である中生界の黒瀬川構造帯や三宝山帯等の堆積岩類がある。水無川の流路はこの構造線に伴う破砕帯の影響を受ける一方、球磨川は外帯の複雑な構造帯の地域を、深く谷を削り込みながら八代平野に出る。平野に出た球磨川は北向きの流れを西に大きく蛇行し、八代海に注いでいる。

八代平野の地下地質

日本鉄道建設公団九州新幹線建設局は九州新幹線本線工事に先がけ、平成12年から平成13年にかけて妙見トンネル出口から新八代駅までのボーリング調査を行っている。熊本県教育委員会はそのボーリングコア資料の提供を受け、宮地地区のボーリングコアの化学分析を委託した。（詳細は巻末調査報告書を参照）

(1) 堆積物の概要

今回化学分析を行ったボーリングNo.164870からNo.226570までの4本と、資料提供は受けたが分析を行わなかったNo.038000とNo.257335の計6本のボーリングコアの柱状図をFig.2に示す。（ボーリングNo.の数字は新八代駅起点からの距離）

地表から数mは表土や粘性土～砂があり、その下に球磨川の氾濫による堆積物とみられる層厚16～7mの玉石混じりの砂礫層、その下位に礫混じり砂～シルト質層、その下位にはシルトや砂を挟みながら砂礫層が厚く堆積している。

九州山地側のNo.257335の12m以深には流紋岩がある。この流紋岩は臼杵ー八代構造線上に存在し、宮地東小学校近くの水無川左岸では、風化して陶石（リソイド石）となった露頭がみられる。また、古麓町では中生代の宮地層である砂岩頁岩互層が九州山地につながる山体を形成している。

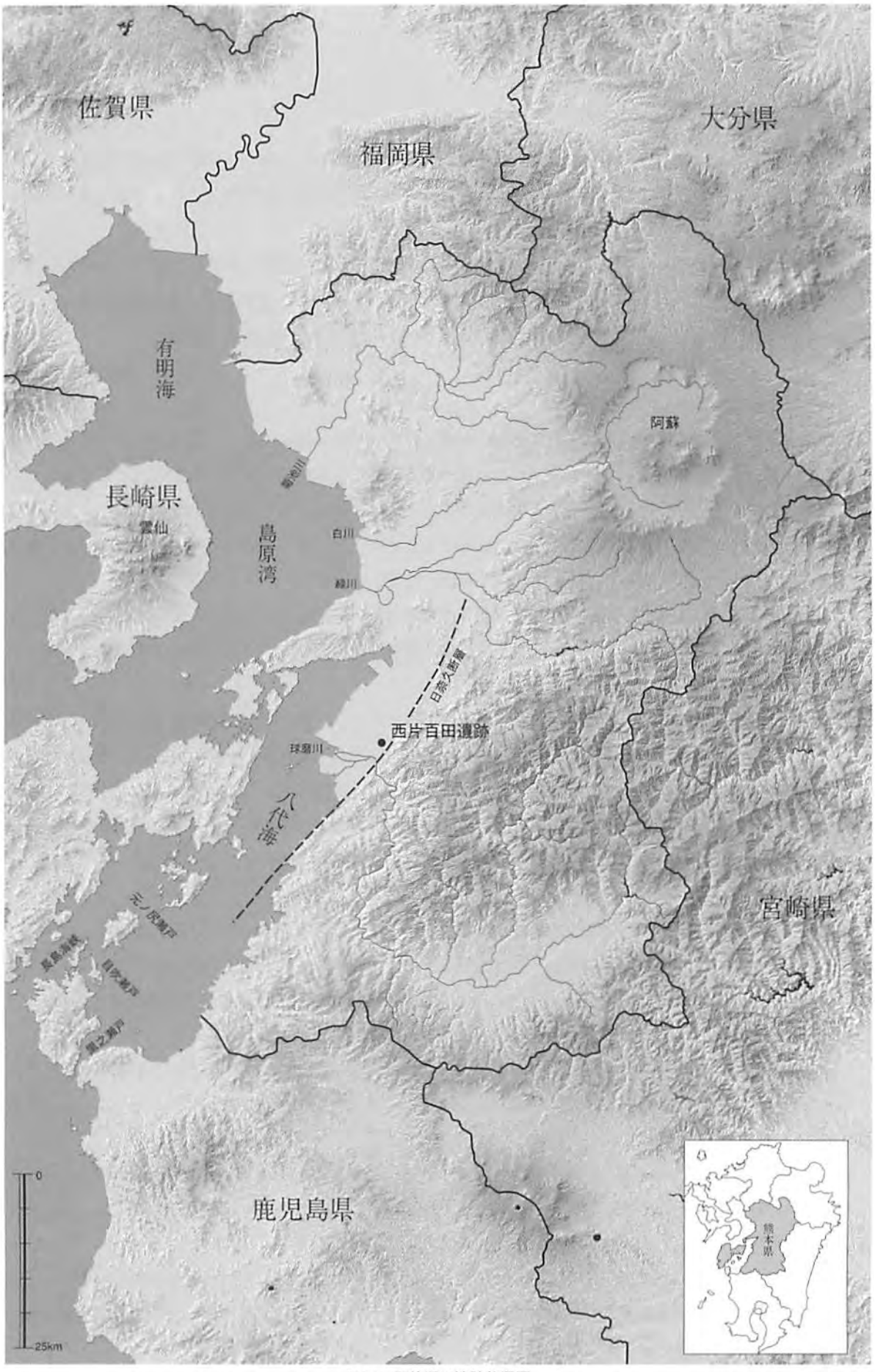


Fig.1　西片百田遺跡位置図

(2) 化学分析の結果

標高マイナス10mからマイナス13mに堆積しているシルト質層の炭化物から年代測定で7,000～7,500年前（放射性炭素年代）の数値が得られた。これらのシルト質層は縄文海進と呼ばれる高海面期に堆積したと考えられ、鬼界アカホヤ火山灰（K－Ah：6.3千年前）は上位の砂礫層の堆積時に流れ去ってしまったことになる。また、姶良Tn火山灰（ATn：約2.5年前）や阿蘇4火砕流堆積物（Aso－4：8.5～9万年前）は今回のボーリング深度では見いだすことができなかった。

また、各地点のシルト質堆積物から、海水～汽水生種および汽水生種によって特徴づけられる珪藻が見いだされた。河口周辺の泥質海底あるいは、常に海水が流入する海岸近くの湿地のような堆積環境を想定することができる。

(3) 八代平野の形成史

八代平野形成の大きな要因には、地殻変動と海水準変動との二つが考えられる。

八代平野東部の日奈久断層の活動で、数万年の間に平野側が少しずつ落ちては河川の洪水堆積物や崖錐堆積物に埋められてきた。熊本県の調査では日奈久断層の活動が鉛直方向で0.1～0.4m／1,000年と報告されており、過去7,500年で最大3.0mの沈降が想定される。しかし、沖積地の断層変位データが不足しているため断層活動がどの程度、平野の形成に影響を与えているか、不明な部分が多い。

海水準変動により、八代地域でも過去に海水面の上昇と下降を繰り返している。ヴュルム氷期と呼ばれる7万年前から始まり1万年前に終わった最終氷期のうち、約2万年前頃の最終氷期最盛期には、海面が現在より約100m下がり、気候も現在の東北地方程度に寒冷化していたと考えられる。当時の海岸線は牛深沖まで後退しており、八代海は完全に陸化し、九州山地や天草諸島に囲まれた盆地になっていたと思わる。球磨川をはじめ、盆地を流れる河川は元ノ尻瀬戸や目吹瀬戸を通り、一本の川となって長島海峡を通って東シナ海へ注いでいたのであろう。この頃は後期旧石器時代になるが、当時の人々の海岸地域における営みの場は、今はすでに海底に埋もれているだろうと思われる。

最終氷期最盛期以降、海水準は上昇を始め、約6千年前までに約100m上昇し（縄文海進）、最高潮期には現在より約3m高くなっていたと考えられている。気候も今よりわずかに温暖化しており、人々は豊かな自然を背景に生活を営み、その痕跡は八代平野の周囲に存する貝塚として残っている。

この時代の堆積物が、標高マイナス12m～13mのシルト層である。今回の化学分析では、当時の海水準や海岸・海底地形を正確に復元することは困難であるが、少なくとも当時の八代平野では、満潮時に九州山地の近くまで海水が流入し、美しい海岸地形が広がっていたに違いない。

その後、海退が始まって八代海も陸化していき、弥生時代にはほぼ現在の八代平野が形成されて、人間が生活できる環境へと変化していった。河川の氾濫による土砂が堆積することで、平野低地も少しずつ乾き始め、人々の生活が盛んになり、宮地観行寺遺跡付近に定着していったものと考えられる。（髙田英樹）

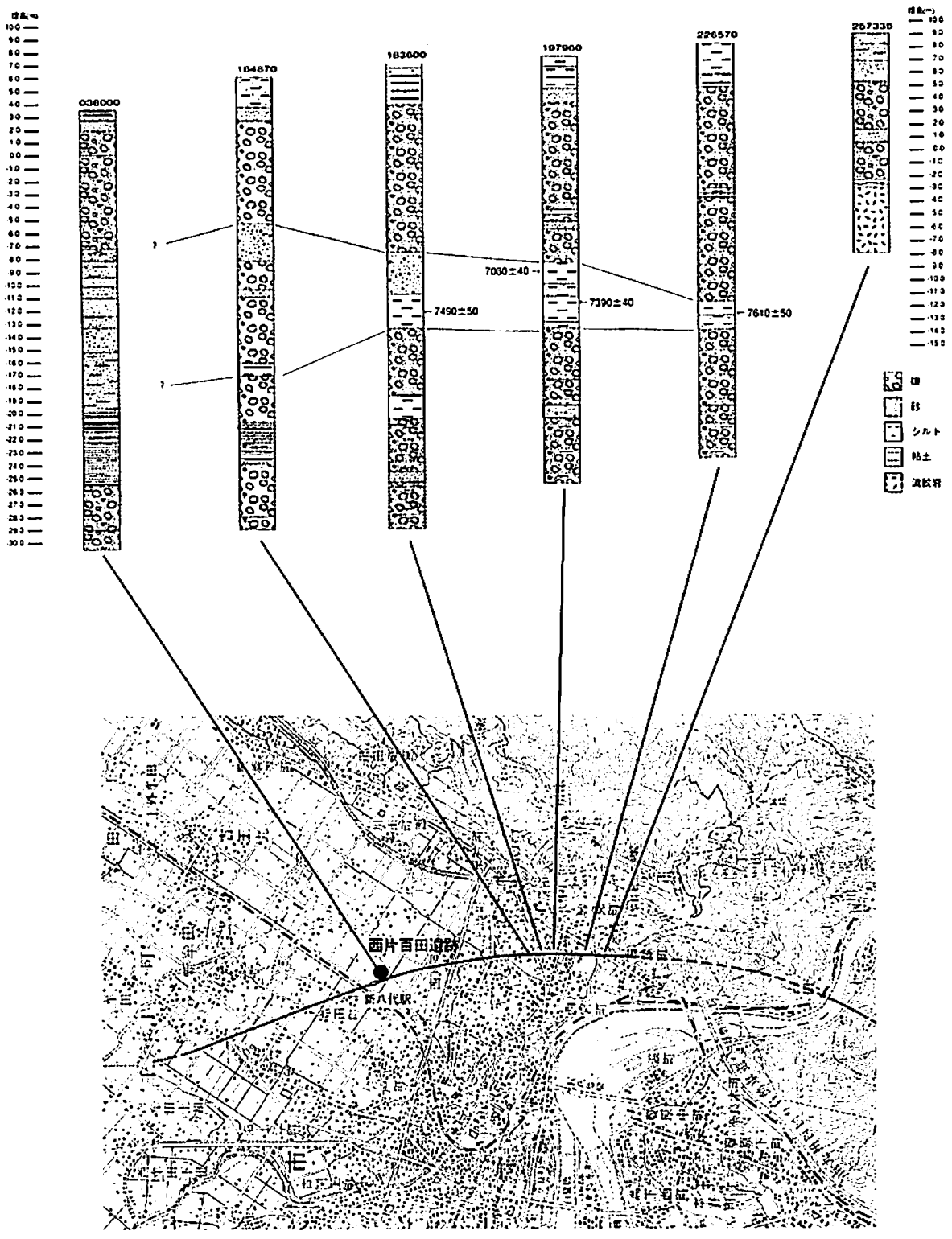


Fig.2　各地点の柱状図

旧石器時代

八代市では、現在のところ明確な旧石器時代の遺跡は見つかっていない。しかし近隣の旧石器時代の遺跡として、氷川町（旧宮原町）に所在する立神ドトク遺跡[4]、岩立C古墳[5]が挙げられる。

立神ドトク遺跡からはナイフ形石器1点、細石刃核1点、細石刃3点、そしてブランク1点が出土している。大半の石器が遺跡周辺で容易に採取できるチャートを使用し、特にナイフ形石器は非常に小型であることからナイフ形石器終末期の所産と想定される。また、岩立C古墳からは黒曜石製のナイフ形石器1点と頁岩製の細石刃1点が出土している。

両遺跡の石器は出土層位が不安定で原位置をとどめていない。しかし、少なくとも当概期には八代海を望む台地上までは人類の生活の痕跡が認められることが明らかになっている。

縄文時代

八代平野において縄文期を示す資料は多い。確認された資料の多くは地元研究者によるもので、工事中等不時発見による遺物採集が多い。

また、平野内周辺部には、縄文後期の海進により形成された多くの貝塚が残されており、明治期にE.Dモースも訪れ調査を行った大野貝塚を始め、西平式土器（後期後半）を標識土器として設定されている吉野西平貝塚（いずれも旧.竜北町、現.氷川町）、有佐貝塚（旧.鏡町、現八代市）など多くの貝塚が存在している。近年、産島（八代市郡築町）や高島（昭和同仁町）[6]から押型文土器や曽畑式土器が採集され、早い時期から干潟を始め海への進出があったことが窺える。

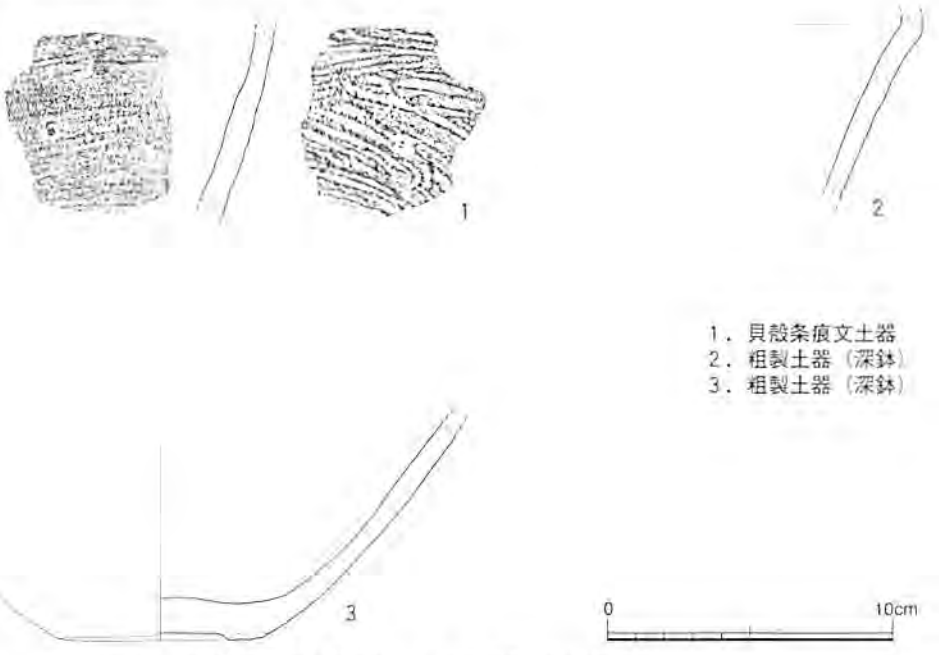


Fig.3　大鼠蔵貝塚出土資料実測図（熊本県教育委員会所蔵）

弥生時代

昭和25年に宮地町においてボーリングが行われた際に、地表下1m付近から弥生、若しくは古墳時代の土器が出土し、当時、宮地町在住であった盛高靖博氏により採集されている。

その後、同じく宮地町在住の江上利勝氏により平野内から出土する土器が注目され、弥生から古墳時代の資料の蓄積へと繋がっている。また、江上は『熊本史学』第27号（昭和39年11月発行）に「八代地方の弥生遺跡と出土遺物について」として資料紹介を行い、八代地域における弥生時代研究に先鞭をつけてい

る。近年、八代市教委による調査や周辺での新幹線関連文化財調査等により宮地町で出土した資料はその多くが現在、土師器であることが判明しているが、八代市域の弥生時代に最初に目を向けた事象であろう。

昭和40年代には平野上の圃場整備が進むなかで、氷川流域にあたる八代郡鏡町有佐（現.八代市）の有佐貝塚付近でも宮城慈郎が弥生土器を採集し、近接する鏡町平島でも縄文晩期から弥生前期にかけての資料が採集されている。

昭和52年には同じく圃場整備事業により藤坂正人により東法道遺跡[7]が確認されている。昭和61年、八代市豊原下町字下堀切で「下堀切遺跡」が調査され[8]弥生後期の集落を巡る溝が確認されている。その後、さらに市教委により、昭和62・63年度事業として調査が行われ[9]、弥生後期土器、石器、木器等が出土し、標高約2.4mの球磨川南岸における沖積平野上にも弥生時代に人々の生活痕があったことが調査の上で証明された。

西片百田・園田遺跡周辺においても、縄文後期の鎗楼堂貝塚が大田郷小学校北側で確認され、また熊本労災病院建設時にも弥生時代の土器が出土している。

西片園田遺跡は、隣接地にあたる熊本県八代地域振興局の建設に伴う事前調査において県文化課で発掘調査を行い[10]、弥生後期の自然流路の一部が確認され、多くの土器とともに木器・木製品等の遺物が多数出土している。

西片百田遺跡は平成14年度には新八代駅へのアクセス道路となる県事業による道路工事が行われており[11]、調査範囲は一部が接しており、本調査区において検出していた弥生後期から古墳時代前期の集落の広がりがさらに大きく広がるのが確認された。

古墳時代

八代平野周辺における古墳群は多くが、九州山地が平野へ張り出している縁辺部、いわゆる平野を見下ろす高台に多く築造されている。

多くの古墳が築造されている八代平野周辺の代表的な地域として、中の城古墳、端の城古墳、姫の城古墳からなる前方後円墳を主体とする野津古墳群（旧竜北町西部）や、竪穴式石室に舟形石棺を有する大王山古墳（三号墳）を始めとする小円墳群を構成している古墳群（旧宮原町西部）や、八代市北部、龍峰山山麓に位置する小円墳群、球磨川北岸に位置し沖積平野へと範囲を広げている八代大塚古墳群、球磨川南岸の数は少ないが、小円墳を主体とする古墳群、八代平野南限に位置する日奈久地域の円墳群、現在は干拓によって陸続きとなっている八代海に浮かぶ島嶼にあたる大鼠蔵島、小鼠蔵島の古墳群がある。なかでも大鼠蔵島の最高部に位置する楠木山古墳は竪穴式石室を持ち、碧玉製紡錘車が出土するなど八代地域で最古段階となる前期（4世紀）頃のものとされている。

西片百田・園田遺跡周辺はこの中では、球磨川北岸地域にあたり、遺跡から東に約1kmの位置に前方後円墳を主体とする八代大塚古墳群[12]が点在している。この地域は、大塚古墳[13]（前方後円墳）を中心に長塚古墳（円墳）、茶臼山古墳[14]（円墳）、高取上の山古墳（前方後円墳）からなる古墳群を形成して、6世紀前半[15]とされる大塚古墳を中心として、この地域では比較的大きな墳丘築造が継続的に認められる首長墓的存在である。

対照的に周辺には、「鬼の岩屋」[16]と呼ばれる、安山岩の巨石を利用し小墳丘で横穴式石室を有する円墳により構成されている上片町鬼の岩屋古墳群、龍峯地区の谷川・行西古墳群、9基からなる乙丸古墳群（宮地町）、12基からなる皆下古墳群（竹原町）がある。これら、小規模な古墳群の調査事例は無いが、表採されている遺物や、開口している横穴式石室の構造等から築造年代は6世紀後半から7世紀初頭頃と想定される。また、八代大塚古墳群のやや北に位置する平野上には規模が大きな墳丘を持つ、東片町古墳群（御経塚古墳・岡の上古墳・むかいやぼ古墳・天神古墳）、西川田古墳群（第一～第三古墳、岡塚第1号墳・岡塚第2号墳（前方後円墳）がある。築造年代は、八代大塚古墳群に後続する時期のものと思わる。

球磨川左岸の平野部から球磨川河口、八代海の島嶼に至る広い範囲には、県内で多く見ることのできる装飾古墳が点在している。八代市鼠蔵町に所在する鼠蔵古墳群にある、大鼠蔵石棺群出土の石棺側壁に線刻[11]で施されている石棺装飾や、同市敷川内町に所在する五反田古墳、同市日奈久新田町の田川内古墳などが知られている。

また、詳細な出土地点は不明であるが八代市内、洗切遺跡周辺で同時期の資料として、江上氏により樽形瓶（Fig.4）が出土している。

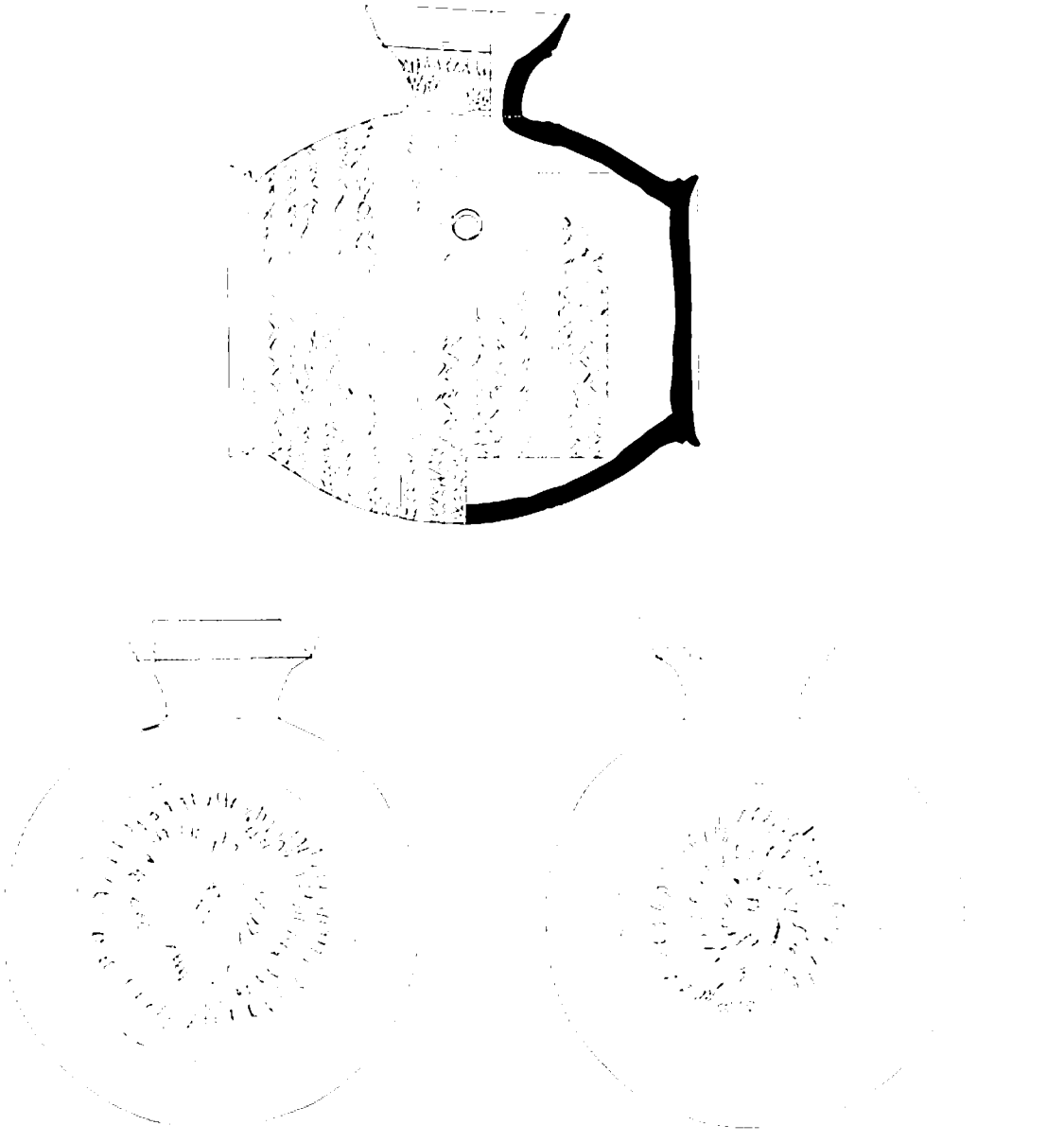


Fig.4　洗切遺跡周辺出土樽形瓶実測図（八代市立博物館所蔵）　0　10cm

古代（奈良時代～平安時代）

奈良時代の八代郡は「夜豆志呂」[12]と表記され、「木行・高田・小河・肥伊・豊福」の五郷を峨せる。このうち「高田」は球磨川左岸の現在の奈良木町一帯と考えられ、駅路の「朽網」は二見本町、「片野」は球磨川右岸地域の上片町に比定され、上片町の北隣の川田京坪遺跡[13]（川田町西）では「川大」とヘラ書きさ

れた土師器が出土し、当時識字層が居たことをうかがわせる資料である。

洗切遺跡（清水町）[10]では奈良三彩と「王成古」と墨書された須恵器と、「宣」「旦仲」「高人」「四郎」「五月」「六寺」等とヘラ書きされた土師器が出土している。興善寺廃寺（興善寺町）[11]、五反田遺跡、観行寺遺跡（宮地町）、能寺跡（古麓町）、御神寺跡、妙見上宮跡（妙見町）などでは古代の布目瓦が表面採集されている。沖片遺跡（西片町）、宮路池尻遺跡、宮地観行寺遺跡（宮地町）、古麓能寺跡（古麓町）では陶硯が出土し、御内遺跡（古麓町）からは瑞花双鳳八稜鏡が表面採集されている。また、本遺跡からも昭和34年に森田氏によって8世紀代と推定される陶硯（円面硯）が表面採集されている。御神寺跡と興善寺廃寺からは塔心礎が発見されており、善寺廃寺に建立されている明言院には平安時代初頭の作とされる毘沙門天立像が伝来している。

「続日本紀」には、「八代郡正倉院」での記事の他に、宝亀3（772）年10月11日条で「肥後国葦北郡人家部嶋吉、八代郡人高分部那理、各献白亀」が見える。天養元（1144）年頃の肥後国訴状写「高野山文書」に「当国住人八代藤三重永、同所従家四郎別当舎弟」が「久万郡住人貞倫並舎弟六郎重平等」に与力して高城内の雑物人馬を押取り、田畑所領を押領したことが知られる。また、仁安元（1166）年には平清盛に大功田として「肥後国御代郡南郷」が与えられている。

また、詳細な出土地点は不明であるが同時代の資料として、西片町遺跡（旧西片百田遺跡・西片園田遺跡）周辺において、故江上氏により、陶硯（円面硯）（Fig.5）が表面採集されている。

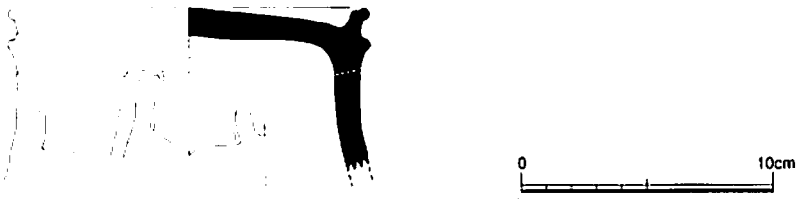


Fig.5　西片町遺跡周辺出土円面硯実測図（八代市立博物館所蔵）

鎌倉時代

鎌倉時代には、平家領であった八代庄は、平家没官領として健久3（1192）年11月に一条能保室に譲られた。文永7（1270）年2月の預所沙弥某宛行状「小早川文書」に「三箇所村内八千把中九郎跡名跡云々」とあり、健治2（1276）年10月7日付の兵庫助某宛行状「小早川文書」に「八代庄三ヶ所村内八千把村新開事」とあるので、13世紀中盤頃までに八代海に面した八千把村（八千把町）周辺までが八代庄の荘域として開発が進み、開田が行われていたことが窺われる。

また、正和3（1314）年4月日付の八代庄伊賀左衛門入道代光蓮申状「舛田文書」では「八代庄三ヶ所村弥松」「同庄大田郷宮地白木社云々」と見え、延暦14（795）年遷座の伝承を持つ妙見社が14世紀初頭には確実に宮地村に存在したことが窺われる。また、北条得宗人の伊賀左衛門入道が八代庄を管理者であることから、八代庄が他の肥後国の郡名荘園と同様に北条得宗領の中に組み込まれていたと推定される。

この時期にあたる同安窯系並びに龍泉窯系青磁が、悟真寺（妙見町）、辻遺跡（西片町）、西片稲村遺跡（西片町）、中方小路遺跡（中片町）、鐘楼堂遺跡（井上町）から出土している。また、本遺跡からも昭和42年に森田氏により、12世紀中頃～後半と推定される龍泉窯系青磁椀や同安窯系青磁皿が表面採集されている。

また、詳細な出土地点は不明であるが同時代の資料として西片町遺跡（旧西片百田遺跡・西片園田遺跡）周辺において、故江上氏により、龍泉窯系青磁椀[12]・同安窯系青磁椀[13]そして同安窯系青磁皿[14]（Fig.6）が表面採集されている。

Fig.6　西片町遺跡周辺出土青磁椀・皿実測図（八代市立博物館所蔵）

南北朝・室町時代

南北朝期には、名和義高は後醍醐天皇から八代庄地頭職を与えられ、建武2（1335）年5月15日「八代庄高田郷内志紀河内村」（敷河内町）を出雲国杵築大社に寄進している（『千家文書』）。

名和氏は、現地支配代官として内河義真を派遣し、名和一族として阿蘇・菊池氏と共に南朝方に属して転戦した。建武5年8月日付の相良定頼申状案（『相良家文書』）では建武2年4月22日に「於八代庄、対干内河彦三郎致合戦之刻、親類若党等数輩、或被討、或被疵間」と見えて、内河氏が南朝方として活動していることが窺われる。

貞和3（1347）年9月12日付の少弐頼尚預状（『相良家文書』）では八代庄三ヶ所村郷弥松村・同郷大村（大村町）・大田郷杭瀬村（古麓町）・同郷内福正原村（福正寺町）・同郷萩原村（萩原町）・同郷吉王丸

村（千丁町吉王丸）・同郷内京泊等を北朝方の相良定頼に「萩原城料所」として預け置くことが見える。さらに明徳2（1391）年9月日付の武雄大宮司跡代新兵衛尉軍忠状（「武雄神社文書」）に「八町嶽城」が見え、同年7月2日に北朝方の今川了俊方が同城を攻撃し、南朝方の名和顕興を降伏させている。

戦国期・豊臣期

名和顕忠は家督相続を巡り、相良為続の後援を受けた代償として、文明15（1483）年に高田350町を相良氏に割譲した。しかし、相良氏の北薩侵攻の最中に名和氏が高田を奪回したことを契機に、文明16（1484）年3月7日相良為続が「八代三ヶ所城」を攻撃し落城させ、名和氏を逐い、相良為続が八代を領有した。

相良氏は、文明17年から人吉と八代を結ぶ道路整備等の領域支配を開始したが、明応8（1499）年には肥後国守護職の菊池能運の仲介で名和顕忠が八代に復帰した。しかし、文亀元（1501）年11月15日に再び相良長毎が八代に進出し、以降天正9（1581）年12月1日の相良義陽の討死まで八代は相良氏の支配領域の中に組み込まれることになった。

相良氏支配下での八代では、天文3（1534）年1月16日に「新築城於八代鹿巒」とあり（「球磨外史」）、中世八代城（古麓城）と城下の整備が行われた。天文12（1543）年1月19日に「八代七日市、九日市焼候」、同18年4月19日に「八代杭瀬三町焼失」、同23年12月18日に「杭瀬一日市、九日市、両町西方一方焼亡、七日町其余不焼候」等焼失記事が見え（「八代日記」）、中世八代城下に城下町が建設されていた。

また、天正10年以降に肥後に進出した島津氏家臣が八代に駐留し、旧相良氏家臣の八代衆の屋敷を宿館として利用している（「上井覚兼日記」）。

天正15（1587）年4月に八代滞在中の豊臣秀吉を訪ねたルイス・フロイスは「幾つもの美しい川が流れ、多数の岩魚が満ちあふれている。海は城の麓に主要な町に入るの一里手前まで入り込み、その町へは海路からでなくては入ることも登ることもできないようになっている。これは一層その地を安全に確保せんがためである。見渡す限り、小麦や大麦の畑が展開し、清浄で優雅な樹木に覆われた森には多くの寺院が散見し、小鳥たちの快い囀りが満ちあふれている」（「日本史」）と、当時の八代の景観を描写している。

また、この時期に当たる龍泉窯系青磁や景徳鎮系染付等が、古麓城跡、古麓能寺遺跡、古麓城下遺跡（古麓町）、宮地小畑遺跡、宮地池尻遺跡（宮地町）から出土している。

しかし、天正16年閏5月3日に小西行長が肥後南半国の領主として豊臣秀吉から派遣されると、麦島に豊臣期八代城（麦島城）が建設され、中世八代城（古麓城）とその城下町は廃絶し、麦島に機能移転した。

江戸時代

慶長5年（1600）年9月に小西行長が関ヶ原合戦により除封された後、肥後国（球磨郡を除く）を加藤清正が治めた。加藤清正は八代地方の支配防衛拠点として豊臣期八代城（麦島城）を改修し、吉村橘左衛門・堤権右衛門を城番に配した。城番は野尻久左衛門・蟹江与三兵衛に交代したが、慶長17年6月14日に加藤忠広が就封すると加藤右馬允正方を城代として配した。加藤忠広は元和8（1622）年8月に松江に近世八代城（八代城）を建設し、引き続き加藤正方を城代とし、麦島から松江に支配拠点を移転させた。しかし、加藤忠広が寛永9（1632）年に除封され、肥後国は同年10月4日に細川忠利が治めることになり、細川忠興が八代城主になり、八代は細川忠興領「八代御領」となった。細川忠興は同年12月25日に八代城に入場したが正保2（1645）年に没すると、細川光尚は細川立孝と忠興旧臣を宇土に移し、松井佐渡守興長を八代城守衛に配し、以後八代は松井氏の知行となった。

八代城下を除く八代は、細川藩政では種山手永と高田手永で行政区分されたが、海岸線では明暦元（1655）年に松崎村地先の「山城殿手開」と呼ばれる松井氏主体の干拓を始め、細川氏と松井氏による干拓が積極的に進められ、八代平野西部は幕末まで干拓地によって拡大している。

交通網も豊臣期八代城築城に伴い整備が進められたと推定され、中世八代城(古麓城)の城下を通過していた中世薩摩街道が方見堂（上片町）で西進するように改変されている。さらに近世八代城築城に伴い出町で八代城下に引き込む近世薩摩街道が形成されている。さらに十里木から550m西の地点で「萩原通り」と呼ばれる八代城下を通過せずに萩原渡で球磨川を渡河し、豊原村（豊原下町）に南下する「新道」に分岐している。この道は「薩州之御家中、御隣国之御飛脚」（永青文庫「街在」）が利用する近世薩摩街道の新設バイパスとしての機能を担っており、島津氏の参勤交代にも使用されている。

十里木のある中片野川村（中片町）は、慶長12（1607）年作成の「肥後豊後検地諸帳目録」に見られ、「元禄肥後国絵図」では「下片野川村之内中片野川村」と記載されている。「肥後国誌」でも高田手永に属する「大田郷」のうち「下片野川村ノ内」と記載されている。石高は735石で、寛永21年7月付細川忠興宛行状で下片野川村のうち300石を蓑田平七に知行させている。また、宝暦年間（1751～64）の肥後国中寺社御家人名附に「直触医師本郷意伯」が見える。

なお、明治8（1875）年に下片野川村（西片町）と長野村（長野町）と合併し片長村となり、隣接する上片野川村（上片町）と北片野川村（東片町）は合併して片野川村になっている。

D　既往の調査

ここで、今回報告する調査以前に行われた、西片百田遺跡（旧西片町遺跡）周辺の発掘調査を簡単に振り返っておく。

まず、今回の調査地を中心として見て南側において、1995年度に本県文化課が地域振興局建設に伴い建物基礎部分のみの発掘調査を行っている。そのなかで、八代平野中において弥生時代後期の竪穴式住居跡を確認している。その中には、熊本県内で普遍的に出土する重弧文を施し、長頸でそろばん型の体部を有している壺、通称「免田式土器」も含まれている。さらに、球磨川下流域において古墳時代初頭のものとして2例目となる木製品が出土し注目されている。…また、2002年には八代市教育委員会により先にあげた西片町遺跡の園田地区において送電鉄塔建設工事に伴い144㎡で発掘調査が行われている。ここでも、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物が出土しており、周辺に大規模な遺跡の存在を窺わせるだけの資料を出土している。…さらに、今回報告する調査の後にも八代市教育委員会による新八代駅周辺整備事業による発掘調査が断続的に行われ、小銅鐸を含む弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての良好な資料…が出土している。

E　測量

西片百田遺跡の発掘調査を開始するにあたっては、事前に基準点測量と水準点測量を実施した。基準点測量は日本鉄道建設公団が国土地理院の1級基準点を元に新幹線路線内に敷設した。

ちなみに、2002年4月1日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は当初より日本測地系に基づいているためそれを踏襲した。そのため、本書の平面座標は日本測地系で表記し、同時に世界測地系への変更数値も併せて表記した。

F　地区割り

本遺跡の調査では、先にあげた座標をもとに本遺跡のみで完結するGridを設定した。東西にA、B～、南北に1、2～と表記し最小単位（1Grid）を10m×10mとした。

また、1区から7区の区分けは圃場整備後の水田区画に従い、基点側となる北西側の調査区域を1区とし割り振った。

調　査

調査の手順と方法は以下の通りである。

まず、重機による表土剥ぎを行い、作業員により精査を行った。次に、調査区内に土層確認トレンチを設定して、土層の堆積の把握に務めた。これは、当該調査区の水はけが悪いための雨水対策も兼ねている。その後、掘削・精査を行い、遺構検出を行った。本調査区は、冬は井草、夏に米を作るという八代特有の年間を通じた水田の影響と沖積平野に特徴的な粘質土及び粘土のために、地山層と遺構埋土の色調・質感の差異が僅かであり、検出には困難を極めた。

検出作業によって確認された遺構は、状況に応じて埋土の堆積を確認しながら掘削作業を行った。

また、住居跡については、柱穴や炉跡、貯蔵穴などの附帯施設に注意を払い調査を行った。さらに2001年度調査にて住居跡の炉周辺からガラス玉の出土があったため、以後、住居跡の排土を全て2ミリメッシュのふるいを使用し洗浄を行い、ガラス玉の検出に務めた。これらの遺構は、各段階において実測作業と写真撮影を行い、遺跡の記録・保存に務めた。

記　録

実測作業は、平板測量で1／100の遺構配置図を作成した。また、それぞれの遺構は基本的に1／20とし、平面図と土層断面図を作成した。また必要に応じて、1／10で実測作業を行った。

写真撮影は、大型カメラを主として35mmカメラ補助的に用い、遺構検出状況・土層断面・完掘状況を基本に、適宜、遺物出土状況が必要な箇所を撮影した。写真記録は、4×5inchi（トヨフィールド・トヨ社）、35mm（F3・ニコン社）を使用した。フィルムは、モノクロフィルムT－MAX100（コダック社）とカラーリバーサルフィルムE100S（コダック社）を使用している。

上述した発掘調査と併行して2001度年からは、4区調査終了と同時に、現地で執筆および、遺物の洗浄・註記・接合・復元を行い、整理・報告作業の迅速化に務めた。

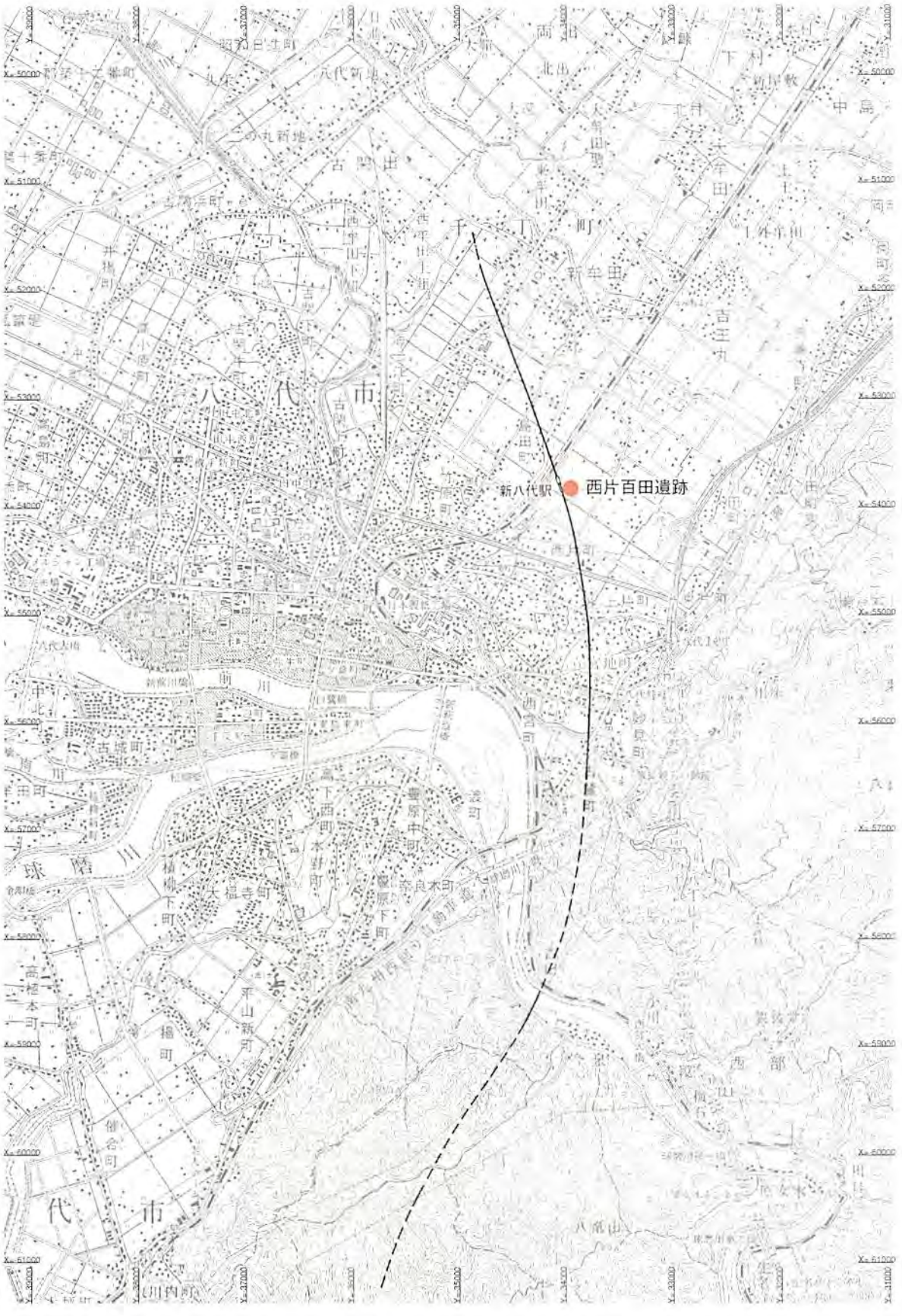


Fig.7　周辺地形図

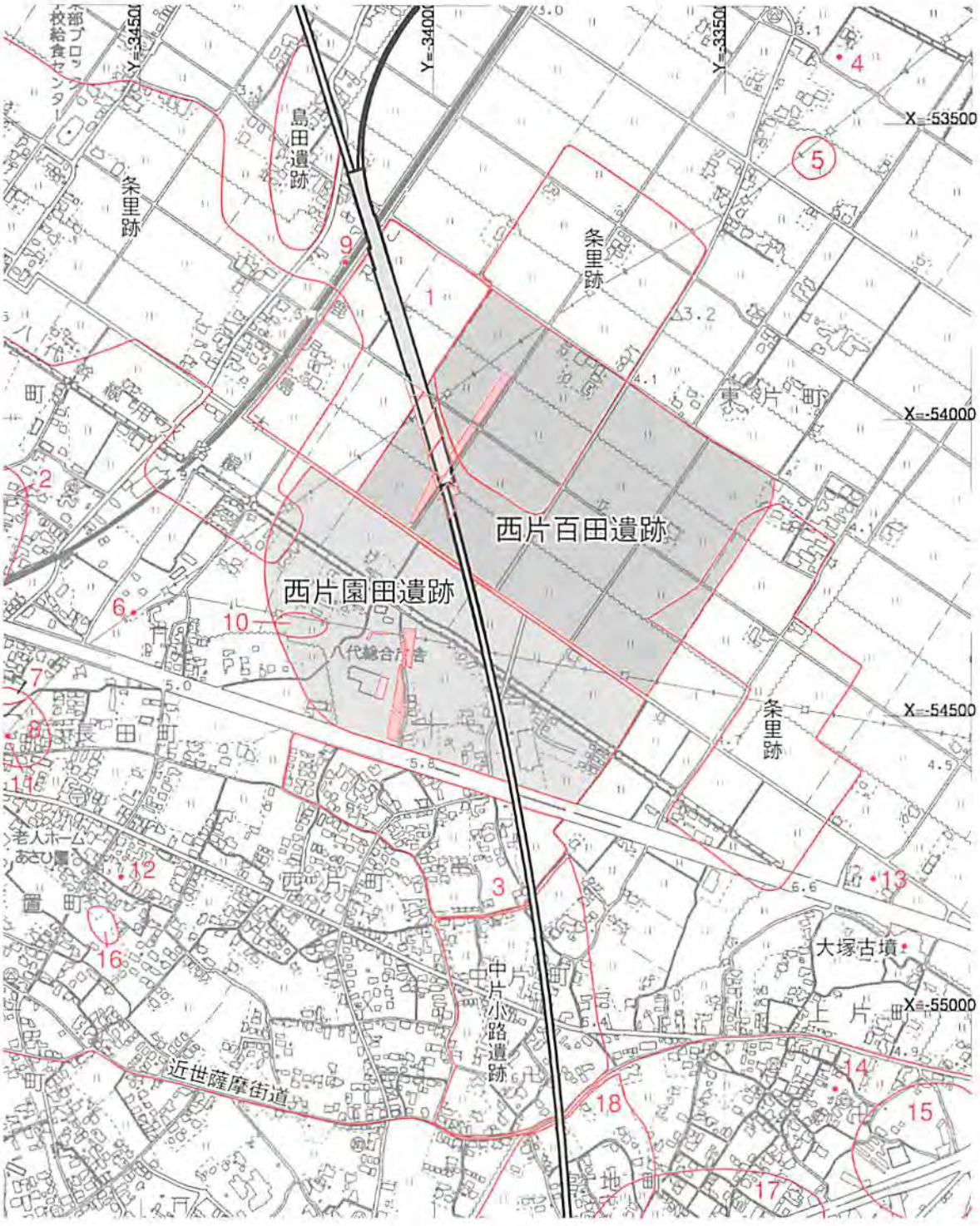


Fig.8　周辺遺跡分布図

1. 上日置女夫木遺跡（弥生～中世）
2. 竹原町古墳群（古墳）
3. 西片稲村遺跡（弥生～近世）
4. 橋ノ上貝塚（古墳）
5. 沖片遺跡（弥生）
6. いら塚古墳（古墳）
7. 鐘楼堂貝塚（弥生～古墳）
8. 鐘楼堂遺跡（縄文～古墳）
9. 用七遺跡（古墳）
10. 長田町遺跡（縄文～古墳）
11. 長田町古墳群（古墳）
12. 虚空蔵古墳（古墳）
13. 長塚古墳（古墳）
14. 高取上ノ山古墳（古墳）
15. 鬼の岩屋古墳群（古墳）
16. 白石貝塚（弥生～古墳）
17. 乙丸古墳群（古墳）
18. 宮地年神遺跡（弥生～古代）

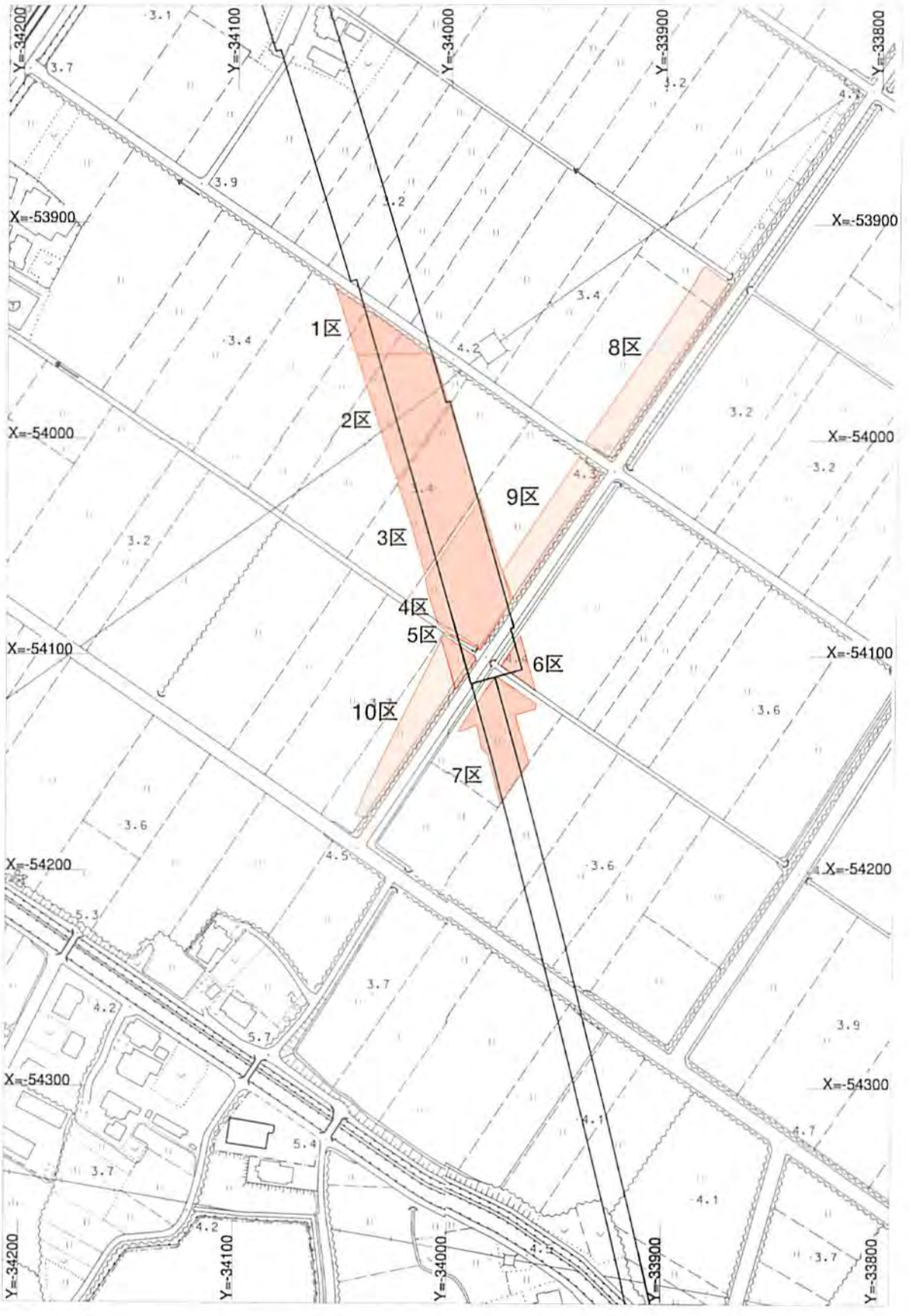

Y=-34200
Y=-34100
Y=-34000
Y=-33900
Y=-33800
X=-53900
X=-54000
X=-54100
X=-54200
X=-54300
1区
2区
3区
4区
5区
6区
7区
8区
9区
10区

Fig.9　周辺地形図

Tab.1　八代地区調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査期間	調査員		時代	主な遺構・遺物
1	長野遺跡 （本線部） 調査面積1,500	水俣市長野町	H9.12.8～ H10.3.31	村崎孝宏	中川裕二	縄文・弥生 中世	掘立柱建物2棟 縄文後期～晩期土器、石器 楔形石器、石核、剥片類 龍泉窯青磁碗
2	古麓城跡 （本線部） 調査面積3,800 調査面積2,200	八代市古麓町 （H12年度） （H13年度）	H12.12.5～ H13.5.31 H13.10.9～ H14.4.30	出田久斉 西山由美子 古城史雄 青柳博晃 宮崎 拓	米村 大 荒木隆宏 水野哲郎 松尾　茂	中世	五輪塔群 須恵・土師、瓦器、龍泉窯青磁
3	古麓能寺遺跡 （本線及び変電所） 調査面積4,528	八代市古麓町 字能寺	H13.4.28～ H14.3.20	青木勝士 松尾　茂		古代・中世 近世	竪穴住居跡、貝塚、石組井戸 掘立柱建物跡、柵列、墓壙 須恵・土師、龍泉窯系青磁 景徳鎮系染付・福建系陶器 朝鮮王朝系白磁 常滑系陶器
4	古麓城下遺跡 （本線部） 調査面積505	八代市古麓町 字砥崎	H14.1.8～ H14.4.20	青木勝士 米村　大	松尾　茂 本多麻紀	古代・中世	溝、土坑、柵列 須恵・土師・龍泉窯系青磁 景徳鎮系染付・瓦質土器等
5	宮地観行寺遺跡 （本線部） 調査面積1802.7	八代市宮地町 字観行寺	H13.10.9～ H14.6.30	山城敏明 宇田員将 角田賢二	池田朋生 豊原加奈子 濱田教靖	古代・中世 近世	配石遺構、溝、竪穴住居跡 掘立柱建物址、土坑等 須恵・土師器・龍泉窯系青磁等
	（側道部） 調査面積352.4	八代市宮地町 字観行寺	H15.5.6～ H15.9.30	高田英樹	宇田員将	古代・中世	製鉄関係遺構（炭窯、溝） 敷石溝、土坑等 須恵・土師器 鉄滓、鍛造剥片
6	宮地小畑遺跡 （本線部） 調査面積1072.1 調査報告書	八代市宮地町 字小畑	H14.2.1～ H14.6.3	坂田和弘 長谷部善一 中村幸弘 米村 大 宇田員将 洲崎明子 村中智絵	水野哲郎 宮部武典 坂口圭太郎 和田敏郎 上高原聡 内田成香 本多麻紀	古墳・古代 中世・近世 近代	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴等 埋没河川、貝塚（中世） 須恵・土師器、龍泉窯系青磁 同安窯系青磁、緑釉陶器、木器 人骨・獣骨・貝等
	（側道部） 調査面積1530.4	八代市宮地町 字小畑	H15.4.1～ H15.10.12	長谷部善一 宇田員将	和田敏郎 三宅一生	古代・中世 近世	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴等 埋没河川 須恵・土師器、龍泉窯系青磁、緑釉陶器等
7	宮地池尻遺跡	八代市宮地町		八代市教委			
8	キリシタン寺院跡	八代市宮地町		八代市教委			
9	宮地年神遺跡	八代市宮地町		八代市教委			
10	中片小路遺跡 1区・2区 （本線部） 調査面積	八代市中片町 字小路	H12.8.1～ H13.3.31 H13.10.1～ H14.2.28	出田久斉 米村　大 坂口圭太郎 森　貴史		古墳・中世 近世 中世・近世	近世掘立柱建物跡、近世墓 旧河川等 掘立柱建物、井戸、溝等
	3区・4区 （側道部） 調査面積1,200	八代市中片町 字小路	H14.12.4～ H15.3.12	長谷部善一 村中智絵	高田英樹 松尾　茂	縄文・古墳 中世・近世	縄文の遺構は未確認 古墳初頭（溝） 中世（土坑・流路）、近世（墓、流路）
11	西片稲村遺跡 （本線部）2,800	八代市西片町 字稲村	H13.4.15～ H13.9.28	坂口圭太郎	森　貴史	弥生・古代 中世	井戸、住居址、掘立柱建物等 須恵・土師等
12	西片百田遺跡 （駅舎及び本線部） 調査面積6,282	八代市西片町 字百田	H12.7.1～	長谷部善一 緒方智子 洲崎明子	上高原聡 荒木隆宏	弥生後期 古墳初頭	竪穴住居跡、溝、土坑 弥生中期（重弧文土器）、 古墳時代初頭土師器
13	上日置女夫木遺跡 （駅舎部） 調査面積3,000	八代市上日置町 字女夫木	H13.10.1～ H14.1.31	中村幸弘 後藤貴美子 和田敏郎	高谷和生 古閑敬士 濱田教靖	弥生前期 弥生後期	方形周溝墓・円形周溝墓 住居址 弥生土器、土師器等
14	島田遺跡 （本線部） 調査面積1530.4	八代市島田町	H13.8.6～ H14.3.29	野田英治 和田敏郎	西山由美子 濱田教靖	弥生前期 弥生後期	住居址、土器溜、溝 弥生土器、石器等

4区　2000年

西片百田遺跡の調査開始。調査は長谷部と緒方智子が担当した。

8.1　本日より調査開始。事務所の設置と表土剥ぎを行う。土師器の甕等が出土。

8.2　前日に引き続き表土剥ぎを行う。

8.3　引き続き表土剥ぎを行いつつ、調査用具の搬入を行う。

8.4　表土剥ぎを行う。

8.7　本日より作業員入場。調査区東南の掘削とNo.1トレンチの調査を行う。

8.8　調査に伴い掘削を行うと北西一東南に幅約30cmの溝状遺構が検出される。また、幅3cmほどの溝状遺構も検出する。

8.9　調査区の掘削を進めつつ、先日の溝状遺構の広がりを確認する。また、第1トレンチの分層および実測を行う。

8.10　現在、掘削している層は床土と包含層が混ざっている状態。出土遺物も弥生土器や青磁など時期もバラバラである。本層直下に包含層と考えられる灰色粘質土を確認。

8.16　遺構掘削を行う。数基の遺構を確認する。

8.22　既に検出されている溝状遺構は、時期不明ながら水田を区画していた溝と考えられる。

8.23　調査区南側に排水溝を設置する。

8.24　排水溝と第1トレンチの土層観察より、本調査レベルは南側から北側に向かい傾斜しており、中心付近が東側・西側より若干落ち込んでいる地形であると考えられる。

8.25・28・29　調査区掘削を行う。

8.30　調査区全体にトレンチャーが走っていることが確認された。

8.31　確認されたトレンチャーは後世の遺物を下まで巻き込んでいる為、早急な完掘を目指す。

9.1　調査区北西側で5層まで掘削を行う。また5層中から出土した長頸壺の一部は免田式土器であった。

9.5　引き続き5層上面までの掘削を行う。遺物は散見される程度の出土量である。

9.6　調査区西側で検出した溝を1号溝とする。圃場整備前の水田に伴う排水溝と思われる。

9.7　1号溝および調査区の掘削を行う。

9.11　前日に引き続き、1号溝と調査区掘削を行う。1号溝は掘りすぎたようである。また調査区掘削の結果、5層中には多くの遺物を包含していることが判明する。

9.12　トレンチャー等を完掘して、調査区全体を5層上面まで掘り下げた。調査区は北西側に向かって緩やかな傾斜が認められる。また、本日より4級基準点測量及び、メッシュ杭設置が始まる。

9.18　5層上面の状態で調査区全景の撮影を行う。また、平板測量による平面図作成と土器集中箇所の実測を行う。

9.19　調査区を南北に走る溝を検出し調査を行う。

9.21　5層の掘削を開始する。土器片の出土が少しずつ増えてきている。

9.22　5層の掘削を行い、鉄片が1点出土した。

9.25　土器の出土は全体的には散漫であるが、一部集中して出土している箇所が確認される。

9.26　掘削と平行して遺構の検出作業を行うが、5層の土質に手間取り検出は困難を極めている。

9.28　前日に引き続き、調査区の掘削と遺構検出作業を行う。

10.2　以前、免田式土器の出土した箇所から、さらに新たな免田式土器が一部、土圧で押し潰された状態で出土した。

10.3　土器集中出土箇所の実測と掘削を行う。

10.4　調査区北側については遺物の出土量が非常に希薄である。南側に一部、土器の集中が認められる。

10.5　調査区全体を3cmほど掘り下げたが、明確な遺構などの検出に至らなかったので再度調査区全体を掘り下げることとする。

10.10　前日に続いて2回目の掘り下げを行う。

10.11　掘削を進めていく過程で、遺物の集中する箇所が限られてきたので、サブトレンチを入れつつ遺構の検出に務める。

10.13　県道（停車場線）の確認調査を行う。4区では光波測距儀による遺物の取り上げを行った。

10.16　遺構の検出にかなり苦戦する。2個体の甕が、埋納あるいは供献されたと考えられる土坑を検出する。

10.17　新たに土器片を含む土坑を検出した。これを2号土坑とする。

10.18　5層の掘り下げを中心に行う。

10.19　3回目の5層掘削を開始する。炭化物の出土も多く認められ、幾つかの遺構の存在が考えられる。台石出土箇所から住居跡の炉跡と推定される遺構を確認した。

10.23　引き続き掘り下げを行う。

10.24　遺構検出作業を行うも、明確な線引きが難しい。

10.25　南北に走る溝と台石を伴う住居跡を検出する。

10.27　遺構検出作業を中心に行う。

10.30　遺構検出にかなり苦戦している。

11.06　東西に走る溝状遺構を検出する。

11.14　排水溝の断面観察から、調査区中央が最も低く落ち込んで南北に上がっていく地形であることが分かった。

11.22　調査区を南北に走る溝状遺構は幅80cm程で、深さは10cm程度であり、焼土をブロック状に含む。

11.27　溝状遺構で確認された焼土は、溝内を筋状に延びており、溝底面に達するか達しない程の深さまで認められる。

11.28　3基の遺構が検出され、それぞれの掘削を行う。

12.14　4層から5層にかけて検出されている遺構は、本来4層中より掘り込まれていたと考えられる。

12.15　住居跡と考えられる遺構からは、完形に近い甕と伏せた状態の杯が出土している。

12.19　溝状遺構と切り合うように不定形の遺構が検出された。

12.21　竪穴式住居跡、第3号住居と第4号住居跡を検出するも床面検出が難しく、掘り抜いている可能性も考えられる。また先日から出土している杯と甕の箇所からは新たにガラス玉が出土した為、以後、排土の洗浄を行うこととする。

4区　2001年

1.9　本日より調査再開。排土の洗浄を行うも、ガラス玉は見つからなかった。

1.10　H－19・20Gridより溝状遺構と方形の掘り込みを確認した。

1.11　H－19・F－16Gridの掘削および遺構検出を行う。

1.16　F－16・17・19Gridにかけて認められる溝状遺構は、埋土に焼土が広がっている。また、この溝周辺には幾つかの遺構があるようである。

1.17　H－19Gridより1軒ないしは2軒と考えられる竪穴式住居跡が確認される。

1.18　3号住居跡検出状況と5号土坑完掘状況の撮影。

1.19　引き続き行っていた土壌洗浄よりガラス玉2点が出土。また、H－20グリッドで土坑と考えていた遺構は、再検出の結果、溝状遺構であることが確認された。

1.22　調査区掘削と遺構検出を行う。

1.24　H－15・16・20Gridより3軒の竪穴式住居跡が検出される。

1.31　調査区南端で確認された東西軸の溝状遺構と南北軸の溝状遺構の関連を改めて考える必要がありそうである。

2.5　調査区南端の軸を違える2条の溝状遺構は、直角に屈曲する1条の溝状遺構であることが確認された。

2.8　各Gridの掘削作業および遺構検出を行う。

2.21　それぞれの遺構を調査するも、本調査区の土質の把握に手間取っているため、なかなか調査が進展しない。

2.22　竪穴式住居跡S004・6の調査を行う。

2.23　前日に引き続き、それぞれの遺構の掘削を行う。

3.8　H－17Gridで検出された竪穴式住居跡は、埋土の状況や遺物から中期の遺構と考えられる。

3.9～20　各遺構の調査及び調査区掘削を行う。

3.21　S010の残った部分は平面では確認できるが

断面では確認できない。溝の中心がずれているようで別の遺構が切り合っていると考えられる。

3.22　S015はほぼ完掘する。気候がどんどん良くなって土の乾燥が早くなり、土色が見えにくい。

3.26　S010の土層観察の結果、南側半分が緩やかに傾斜しているのに対して、北側半分は急激に落ちている。再度、切りあいも考えつつ確認を行う予定。

3.27　S010を完掘する。

3.28　S014を完掘する。

4.16　本日より2001年度の調査を再開する。緒方の退職に伴い、洲崎が配属になり森、松尾、上髙原も調査に参加する。S004・12・17の調査を中心に行う。

4.17　S012は炉の燃焼面の確認を行う。また、S017は床面の確認を行うが、明確な床面の判断がつきにくい。

4.18　H－18・19Gridの遺構検出を中心に行う。あわせて、島田地区の試掘調査を行う。

4.19　竪穴式住居跡S019にベルトを残しつつ、掘削を行う。また島田地区の試掘調査も引き続き行う。

4.20　S017の炉及び貯蔵穴などの住居内遺構を検出しているが難しい。

4.23　土坑S022が検出される。合わせてそれぞれの遺構の調査を行う。

4.24　S012を完掘する。焼土が炉によって切られていた。また、S019は床面検出中。

4.25　S019の立ち上がりを確認するためにサブトレンチを設定する。土層観察の結果、別遺構と切りあっていると考えられる。

4.26　S019・17の調査を行う。

4.27　方形の竪穴式住居跡S006と楕円形の竪穴式住居跡S024が切り合っており検出が難しい。

5.1　S006炉跡を検出する。またS017炉跡を完掘した。S019竪穴式住居跡掘削中。

5.2　H－18・19Grid4層を掘り下げる。また、方形周溝墓と推定されるS011を検出する。さらに、S006・024の切り合い関係及びS019の調査中。調査区内杭打ち事前打ち合わせを行う。

5.7　引き続きS019の附帯施設を調査。貯蔵穴を確認する。また、炉跡は現代の排水溝によって壊されたものと考えられる。

5.8　G－19・20Grid6層上面まで掘り下げを行う。また、S011・019を調査中。S006と024の切りあい関係、S014の柱穴確認が難しい。S025を完掘。

5.9　4区の遺構を完掘した。

5.10　4区調査終了。

1・2・3区　2001年

1・2・3区は、それぞれ隣接して位置している事から同時に調査を行う。調査は主に、長谷部、上高原が担当した。

4.5　2区表土剥ぎ開始。南東端にて4区の4層に相当する層を確認した。

5.10　1・2区を人力で掘削する。溝と円形の遺構2基を検出する。片方の円形の遺構に、溝が切られていることを確認。調査区西側で土器が集中して出土。

5.11　1・2区の掘り下げを行う。あわせて、上日置町女夫木地区の排水路予定地の試掘を行う。試掘調査の結果、遺構が確認されたことから、本線部分についても再試掘が必要であることが判明した。

5.14　2区の土層を把握するために、4本のトレンチを設定して砂層まで掘削を行う。その結果、調査区西側は微高地で東に向かうにつれて徐々に湿地化していき、調査区東側は湿地であったことが想定された。

5.15　新たにトレンチを設定し、更に土層の堆積状況を確認する。沖積平野特有の粘質土やシルト層の堆積状況を把握するには、しばらく時間がかかりそうである。

5.16　引き続き、土層の堆積状況の把握を行う。3トレンチの土層断面から溝を確認する。断面での確認も難しいことから、平面での確認はさらに困難になることが予想される。

5.17　2区の掘削を行う。また、トレンチ内の土層を改めて確認した結果、昨日の溝は地形の落ち込みであると判断した。

5.18　2区の掘り下げを行う。また、各トレンチの土層堆積状況から各層についての対応関係の検討を行う。

5.22　2区を掘り下げ、さらにトレンチの掘削もおこなう。また、当遺跡の範囲内に予定されている西片BⅠの確認調査を行う。

5.23　2区の掘削及び精査を行う。土層の確認も継続中である。また、西片BⅠ（確認調査が終了）本線未確認部分の周辺に多くの埋蔵文化財が広がっていることが予想される。

5.24　2区の掘り下げ作業、および土層堆積状況の把握を行う。

5.25　引き続き前日と同様の作業を行う。2区F－7・8・9Gridのトレンチより自然堆積の層を確認。丘陵の旧地形復元の際に、鍵となる層と考えられる。

5.29　2区の掘り下げ作業を行う。土層の堆積状況も整理されてきている。

5.30　2区E･D－10Gridの掘削を行う。

6.1　2区の平面掘り下げを行う。また、各トレンチ内の分層・註記を行い、調査区の基本土層モデルを作成する。

6.4　前日に引き続き調査区掘削、トレンチ内の土層把握に務める。また4区の土器洗浄を開始する。

6.5　雨の為作業中止。いよいよ雨季に入ったようだ。

6.6　新幹線本線部分の試掘調査を行う。前回の確認調査同様、土器が出土していることから何らかの遺構があることが想定される。

6.7　C－5Gridの表土除去、1区の2トレンチ掘削を行う。

6.8　調査区掘り下げ作業を行いつつ、各トレンチ掘削・実測・写真撮影などを行う。

6.11　1区のメッシュ杭打ちを行う。2区は掘削作業を行いつつ、遺構検出に務める。

6.12　2区掘り下げと1区3トレンチの掘削・実測を行う。

6.14　昨日の雨のため調査区復旧に半日かかる。午後からは、2区掘り下げ作業と崩壊トレンチの復旧を行う。

6.15　1・2区の近・現代遺構の検出写真撮影を行う。

6.18　2区の近・現代遺構の掘削を開始する。

6.19・20　雨の為作業中止。2区は完全に水没する。室内で土器の註記・接合を行う。

6.21　先日からの雨の為、調査区の水抜きを行う。県の水中ポンプだけでは排水が間に合わないため、作業員の水中ポンプを借用して調査区の復旧を行う。

6.22　雨天中止。室内で土器整理のみ実施する。

6.25　調査区復旧に半日かかる。午後から近・現代遺構の掘削を行う。そこで、円形遺構は粘土採取の穴で、溝状遺構は4区にまでつながる旧排水溝であることが推定された。

6.26　1・2区の境界に検出された河川遺構は、出土遺物から圃場整備前の遺構であることが確認される。また、2区の円形遺構は、底から水が湧き出てくることから、検出された3基のうち一基の掘削にとどめる。

6.27・28　雨の為作業中止。図面・写真整理と土器整理を行う。

7.2　1区、旧河川跡掘削。2区、円形遺構掘削。石畑氏の畑の試掘を行う。計5本のトレンチ掘削を行うが、遺物の出土は見られなかった。

7.3　前日同様、旧河川および円形遺構の掘り下げを行う。

7.4　旧河川、円形遺構の完掘写真を撮影する。これまで調査に携わっていた荒木が、玉名へ異動となる。

7.10　1区の平面掘削を行う。4区でいう4層が1区まで広がっていたので、1区全体を4層でそろえる事にする。また2区の遺構検出を行い、C－5・6Gridに数軒の住居跡が確認された。

7.11～13　雨により作業中止。土器洗浄や石膏入れなどの室内作業と、図面・写真整理を行う。

7.16　2区C－5・6Gridから検出された数軒の住居跡にサブトレンチを入れる。サブトレンチ内よりガラス玉が出土したため、以後、住居跡内の排土については洗浄を行うことにする。

7.17　雨天中止。本日は妙見宮氷室祭。

7.18　1区にトレンチを設定し遺構の検出を行う。そこで、土坑一基が確認される。1区では遺構の密度は低く、他の遺構の検出される可能性は低いようである。また2区C－5・6Gridの住居跡の切り合い

関係は非常に複雑であるが、西側の住居跡については検出が終了し、S001とする。

7.19　B・C－6Gridで検出された住居跡をS002とする。住居内からは多量の礫と土器・炭化物が出土した。また4区で確認された住居跡同様、台石も確認された。

7.23　S001の床面の確認を行う。旧河川に切られた箇所より焼土集中域が見つかり、炉跡は流失したものと考えられる。S002は炉跡が確認された。また、出土状況から破砕して捨てられたと推定される土器が出土している。さらに1区では、住居跡と推定される遺構が検出され、それを切るように長方形の土坑状の遺構が確認されている。本日より八代市立博物館で新幹線に関連する遺跡の速報展の展示を行う。

7.24　S002では流れ込みと考えられる礫の下から多量の土器が出土する。またS002の排土洗浄の結果、ガラス玉2点が確認された。土坑と考えられるS003も検出された。八代市立博物館にて考古速報展が始まる。

7.25　午後より、S001・2・3及びその他のGrid掘削を行う。

7.26　S001・2・3の遺物出土状況撮影及びその他のGrid掘り下げをおこなう。

7.27　S003を完掘する。また溝であるS004・5を検出する。

7.30　S005の調査を進める過程で、溝に土坑が切られていたことが新たに分かった。そのため溝S005と土坑S006の2遺構に分離した。

7.31　S004・5の掘削および他のGridの掘り下げと遺構検出を行う。

8.1　S001は床面までの掘削を進める。炭化物の出土が認められた。またS005とS006については1つの住居跡の可能性が出てきた。今後さらに調査を進めていく。

8.2　各Gridの掘削作業と遺構検出を行い、土坑S007を検出する。S004を完掘する。

8.3　各Gridの掘り下げ及び遺構検出を行う。S002・007の調査も進める。

8.6　S001に切られている住居跡S009とS002に切られている住居跡S010を検出する。

8.7　S008・9の掘り下げを行う。S008からまとまった量の土器が出土した。

8.8　S001・2・8・9の調査を進める。各住居跡とも土器や炭化物が出土している。

8.9　S001・2・8・9の掘り下げや出土土器の取り上げ作業を行う。S008からは多量の炭化物と焼土が確認された。

8.10　S001・8の掘削を行う。S008の中央付近から炭化材が出土し、その下から炭化したカヤが大量に確認された。これは消失家屋の屋根部と推定される。

8.16　S001・3・8・9の精査および掘り下げを行う。これまでS003は土坑と考えていたが、周囲の精査・検出の結果から住居跡の一部である可能性が出てきた。またS009について、遺物の出土状況などからもう一軒住居跡が切りあっていると予想される。

8.17　S001をさらに掘り下げるが、僅かに炭化物を確認するも土器などの出土は見られなかった。また、S002の洗浄した排土の中からガラス玉が発見された。以後、排土の洗浄により数点のガラス玉が見つかる。

8.21　S009を切っているS001以外の住居跡をS010とする。さらにS001中から炉跡と推定される焼土集中部分が3箇所確認された。この炉跡はS001・9・10にそれぞれ対応すると考えられる。

8.22　1区掘削と平行してS001・3・10の調査を行う。八代市商工会、八代市新幹線推進室来跡。

8.23　1区の掘り下げ作業を行いつつS009・10の掘削を行う。

8.27　八代市立博物館での考古速報展終了。展示遺物撤収のため現場作業中止。

8.28　1区の遺構検出作業を行う。また、S009の土層断面の確認を行う。

8.29　1区掘り下げを行う。ならびにS003・9の調査を引き続き行う。

9.3　1区の掘削および遺構検出を行う。併せてS009・10の精査を行う。

9.4　S009・10の掘り下げを行う。また、1区の北

端より溝S012を検出した。

9.7　1区の遺構検出作業を行う。S009・10の遺物出土状況の撮影を行う。

9.10　2区を中心に掘り下げ作業と遺構検出を行う。

9.11　S009・10の調査を進めながら、各区の掘削および遺構検出を行う。土坑S013が検出された。

9.12　重機による3区の表土剥ぎを開始する。多数の土器が出土しており、2区から続く溝も検出されている。併せて、1・2区の掘削作業も行う。

9.13　2区を中心に掘削および遺構検出作業を行う。溝らしき遺構が検出されるが、未だ不明確である。

9.14　切り合い関係が複雑であったS009・10もなんとか整理がついてきた。併せて各Gridの掘り下げ作業・トレンチを入れながらの遺構検出作業も継続する。

9.17　切り合い関係にある住居跡の新旧関係が整理されてきた。S002・8の関係はこれまでの想定と反して、S002がS008によって切られていた。また、S001・9・10についても、古い順にS009、S010、S001となる事が分かった。S001については、S009・10の調査過程において床面を掘りすぎており、すでに完掘していた。反省しなければならない。

9.18　これまでの2区の遺構検出作業から、土坑S015・17・18と溝S016が確認された。それぞれ平面と断面の関係を把握しつつ掘削を行う。

9.19　土坑と想定して調査を行っていた遺構が、住居跡であることが確認された。よってS014として調査することにする。また、同じく土坑と認識していたS018についても溝に結論が改まった。

9.20　S002を完掘する。二本柱で炉跡・貯蔵穴を備える住居跡であった。さらにS013・15・18も完掘した。

9.21　S008・9・10・14を完掘する。1区および2区の一部（B～E－6Grid）の調査期限が本日までであった。S010のように不十分な調査のままで終了させた事は、今後強く反省していかなければならない。深夜、1区および2区の一部調査終了。

9.22　2区の残り部分の調査を開始する。土坑S019・20を検出する。土層断面の状況からS013・15とほぼ同時期の遺構であることが確認された。また八代市役所において以前、八代市立博物館で開催された考古速報展のパネル展示を行う。

9.26　S019・20を完掘する。以前検出していたS016は遺構ではないとの判断から欠番となっていたが、今回新たに土坑S016として調査をおこなう。なお、本日より（株）埋蔵文化財サポートシステムが遺構実測委託で現場入りした。

9.27　2区の掘り下げ作業および遺構検出を行う。

9.28　土坑S022～24を検出する。併せて、各Gridの遺構検出とS016の掘削作業を行う。

10.1　雨の為作業中止。調査区内の排水と図面整理を行う。

10.2　2区の掘り下げを行う。また、翌日の空撮の準備を行う。

10.3　調査区精査および周辺清掃をして空中撮影を行う。

10.4　C・D－7・8Gridの掘り下げを行う。またS022を完掘するが、どうやら掘りすぎたようである。

10.5　昨日に引き続いて、C・D－7・8Gridの掘り下げおよび遺構検出を行う。幾つかの遺構を検出するが現段階では不明確である。また、S023・24を完掘した。

10.10　C・D－7・8Gridにかけて住居跡S025を検出する。また、D・E－7Gridでも住居跡らしい遺構を検出するが全体の把握が難しい。

10.11　C－7Gridより土坑S030～032を検出し、周辺にピット数基も確認できた。そのほかS026～029も検出された。S026は土坑であるが、S027は自然の落ち込みと確認された。よって欠番にする。さらにS028・029は住居跡と想定されるが、検出ラインが曖昧なため再検出を行う。またS025からは免田式土器片が出土している。ガラス玉出土の可能性を考慮して、排土は洗浄することにする。

10.12　S026・032を完掘する。またS030の掘削も行う。

10.15　S028・029にサブトレンチを入れて遺構検出につとめるが、断面でも立ち上がりを確認し難い。併せてS030・各Gridの掘削も行う。

10.16　前日と同様の調査を行うが、雨の為午後から作業中止。

10.17　雨天中止。室内にて図面および写真整理を行う。

10.18　E－8Gridで土坑S034・035を検出した。S034・035は切り合い関係にあり、S034がS035を切っている。さらに掘削を進めてS034を完掘した。またS028・029の南西で検出されたピットを柱穴1、S025の北東で確認されたピットを柱穴2とした。

10.19　S028・035の調査を進めながら、各Gridの掘り下げを行う。

10.23　S025より貯蔵穴、炉跡を確認。特に炉跡からは灰を掻き出した痕跡も認められ、当時の空間利用の一端を窺うことができる。また、S028・033の検出ラインを確定する作業が難航している。さらに、切り合い関係にあると考えていたS034・035は切り合い関係にはなく、S035は円形から方形のプランに変更になった。

10.24　各Gridを掘り下げつつ、S025・033・035の調査を行う。

10.25　各Gridの掘削および遺構検出作業を行う。E・F－8Gridより溝と土坑を検出する。この溝は近世の遺構と考えられる。

10.26　これまでの掘削および検出作業から、土坑S036・037・038と溝S039・040・041を確認する。そこで各遺構の調査に入る。また、八代市役所にて行われていたパネル展示終了のため、撤収作業を行う。

10.29　引き続きそれぞれの遺構の調査を継続する。

10.30　S017・025・036の調査を進める。

10.31　写真撮影のため宮地観行寺遺跡にて作業。

11.1　雨のため作業中止。

11.2　S025の灰を掻き出した痕跡部分を完掘する。また、S028・033などの遺構の調査も行なう。

11.5　前日からの雨で調査区内に溜まった水抜きを行う。本日より3区F－9・10・11Gridの掘削を開始する。

11.6　2区のそれぞれの遺構を調査しつつ、3区の掘削および遺構検出作業を行う。

11.7　E・F－11Gridに3本のトレンチを設定して、3区の土層の堆積状況を確認する。

11.8　昨日から掘削を進めているトレンチの断面観察から、炉跡を持つ住居跡と土坑、2区でも検出されていた新しい時期の溝が確認された。

11.9　3区のGrid掘削を進める。また、S025を完掘した。

11.12　2区と3区の境界にもトレンチを設定して2・3区の全体の土層把握に務める。

11.13　断面観察から住居跡が確認された3区のトレンチ周辺を掘削して、住居跡全体の検出を行う。そこで、住居跡に切られている溝も併せて確認された。また、すでに検出されていた新しい時期の溝も完掘した。八代市教育委員会に本遺跡出土土器の貸し出しを行う。

11.14　S028の炉跡の調査を行いつつ、2・3区の掘削を行う。

11.15　S025・028・033の調査に手間取っている。また、F－11Gridより土坑を検出する。

11.16　前日同様、それぞれの遺構の調査と各Gridの掘削を行う。

11.19　調査区内に設定したトレンチの土層の把握を行う。土層の堆積は火山灰台地と異なっており、色調に目を奪われてしまうとなかなか整合性がつかない。S028を完掘する。

11.20　2・3区の各Gridの掘り下げを行う。

11.21　引き続きそれぞれの調査区の各Gridを掘り下げる。S033を完掘する。

11.22　土坑S042と住居跡S043を検出する。また、B－7、C～F－7・8Gridまでの調査を終了して新幹線建設工事へ引き渡した。

11.26　2区の各Gridの掘り下げ作業を行う。また、S014・015・017の掘削を行う。

11.27　土坑S044・045を検出し、掘削を始める。

11.29　雨により作業中止。図面・写真整理を行う。

12.4　2・3区の掘り下げ作業を行う。

12.5　S042を完掘する。また、住居跡S046（E－11・12Grid）と土坑S047～052、溝S053・054を検出する。

12.6　2・3区の各Gridの掘削作業を島田遺跡の作業員を中心に行っていく。また、土坑S052～061を検出する。

12.7　3区全体の一段目の掘削作業が終了する。そ

の結果、数箇所で土器が集中して出土していることが確認された。また、土坑S062・063を検出する。さらに、S047～057、59～061を完掘する。

12.10　土坑S064と免田式土器の出土した住居跡S065、土器集中出土部分S066を検出後、すぐさま掘削に入る。また、S058は二つの土坑が切りあっていることが確認された。

12.11　S058・064を完掘する。また、S066は一度図化作業を行って遺物を取り上げた。ところが、その下からさらに土器が密集して出土した。

12.12　各Gridの掘削及び検出作業と、それぞれの遺構調査を引き続き行う。そこで土坑S068を検出した。

12.13　S066出土土器を全て取り上げると、掘り込みが確認された。

12.17　雨天により作業中止。調査区の排水作業と、図面・写真整理を行う。

12.18　土坑S069～072を検出する。併せて、S069・071を完掘する。

12.19　住居跡S073とS046（2区）・074・075を検出した。さらに、S068を完掘した。

12.20　S077～079、溝S080を検出する。また、S053・054を完掘した。

12.21　住居跡S081と土坑S083・084、炉跡S082を検出した。また、E－11Gridより7基の柱穴が確認され、それぞれ3P1～3P7とする。12月22日に女夫木遺跡で行われる現地説明会資料として、本遺跡の土器およびパネルを貸し出す。

12.25　雨天中止。調査区の排水作業と図面・写真整理を行う。

12.26　S046・065・074・076・077を完掘する。ここで、S046は住居跡以外の可能性が考えられる。

12.27　それぞれの遺構の調査と各Gridの掘削作業を行う。S066を完掘する。

12.28　S085～088を検出する。また、S046の炉跡と考えられていた遺構は、別の遺構であることが確認されたのでS083として完掘した。さらに、S065を完掘した。本日で今年の作業を終了し、2区および3区の一部を新幹線建設工事に引き渡す。

7区　2001年

1～3・5区と同時並行で調査を行っているので、雨天中止時の記述については前述の調査日誌と同一である。調査は主に、上高原が担当し長谷部が補助した。

7.16　排水溝の設置や調査区確定のための土塁築造などの環境整備を行う。

7.25～27　調査区整備を行う。

7.31　調査区の南北両端にトレンチを設定して、土層の堆積状況の把握に務める。その結果、南北ともに堆積状況に変わりは認められなかった。しかし、下層では北側が砂層、南側が粘土層であった。

8.6　調査区内の掘削作業を進めながら、メッシュ杭打ちとレベル移動を行う。

8.7　調査区内を掘り下げつつ、トレンチ内の土層観察を行う。土層の堆積状況は4区と同様である。石包丁が1点出土した。

8.8　各Gridの掘削を行う。南側トレンチより近現代の遺構が確認された。

8.9　H－23・I－23・24Gridの掘り下げを行う。

8.10　H－23Gridに先行トレンチを設定し5層を確認する。調査区全体を5層に併せて掘り下げることとする。

8.16　H－23・24Gridの掘り下げ作業を行う。H－24Gridよりほぼ一個体の甕が出土した。周辺を精査して遺構の検出に務める。

8.17　H－24Gridにサブトレンチを設定し遺構検出を行う。溝状の遺構を検出するが、平面で確認するには現段階では難しい。さらに掘り下げて5層上面で再度検出する必要がある。また、溝状の遺構と明らかに埋土の違う遺構がサブトレンチ内で確認された。

8.21　H－24GridよりS001・2を検出する。共に土坑である。また、H－24・25、I－24Gridに渡って溝S003を検出した。

8.22　S001・2・3の土層断面を確認しながら掘削を行う。

8.23　S001・3の掘り下げを行う。S003の断面中

に焼土の集中箇所が確認された。しかし、現在のところ詳細は不明である。

8.24　I・J－25Gridを掘り下げる。

8.28　I－23Gridを精査する。土坑2基、溝1条・住居跡1軒と推定される遺構を検出する。

8.29　I－23Gridより確認される土器集中部をS005とする。しかし、遺構のラインは不明確である。

8.31　H－23・24Gridの遺構検出を行う。またS001・002の掘削も行う。

9.3　各Gridの掘削作業と遺構検出を行う。

9.4　H－23・I－22Gridに幾つかの遺構らしきものを検出するが、今のところ不明確である。

9.7　S001・002を完掘する。

9.10　7区水路部分の拡張を行い、調査区整備を行う。土坑S004、溝S006を検出する。

9.11　拡張部分を中心に掘り下げ、作業と遺構検出を行う。ここで溝S003は、複雑な枝溝状の遺構を伴うであろうことが確認された。したがってS003は、水田区画のような生産に伴う遺構であることが推定される。検出作業を慎重に行うことが必要である。また、土坑S007も検出された。

9.12　新幹線の工事工程の関係で作業を一時中止して、1～3区の調査に集中することになった。

10.2　本日より調査を再開する。

10.3　S004・006・007にサブトレンチを設定し、土層堆積状況と遺構深度を確認する。併せて、遺構検出も行う。

10.4　S004・006・007の掘削を進めながら、新たに住居跡S009を検出する。

10.5　S004・006・007・009の調査を行う。S004はS006・007と比べると遺構深度は深いようである。また、S006・007はS001・002と比べても浅いことが分かった。S009の遺物の出土量は少ない。

10.10　調査区内の掘削および遺構検出を行いつつ、拡張部分の杭打ちを行う。さらにS004・006・007を完掘する。

10.11　S009ならびに調査区の掘削を行う。H－22Gridより数基のピットらしき遺構を確認したが、すべて植物痕と判断した。

10.12　拡張部分の掘削および遺構検出作業を行うが、遺構は確認できなかった。

10.15　調査区の掘り下げ作業と遺構検出を行う。土坑S010を検出する。

10.16　前日同様、調査区掘削および遺構検出作業を行う。

10.18　S010は単層で細かな土器片が少量出土している。またH－24・25、I－24・25Gridにかけて住居跡S011を検出する。更にS011北側に遺構を検出中。

10.19　土坑S012・13を検出し、S010の完掘を行う。またS003の掘削を開始する。さらにI・J－24Gridより複数の小さな溝状遺構が検出され、S003の枝溝状遺構との関連に注意しなければならない。

10.23　S003の土層断面を改めて確認してみると、この溝は一時期のものではなく数度の掘り替えが行われていることが確認された。

10.25　H・I－24Gridより複数の小さな溝状遺構を検出する。水田等の生産遺跡にともなう区画、もしくは畦畔の可能性が考えられる。

10.26　平板測量を行いS003と複数ある溝状遺構の位置関係の把握を行う。また、I－24Gridで検出された南北方向を軸にする溝は、さらに南へ延びていくようである。

10.30　昨日、I－24Gridより検出された溝はS003と直交するかのように南北方向に延びていることが確認された。この溝をS014とする。また、S013を完掘する。

11.2　調査区の掘り下げと検出作業を行う。また、S014に3本のトレンチを設定して土層の把握に務める。その結果、遺構深度は70cmを測ることが確認された。しかし、この溝もS003のように複数の溝が切り合っている可能性を考慮しなければならない。

11.5　S011の検出ラインが未だ不明確である。午後より雨の為、作業中止。

11.6　調査区全体にかけて想定される溝S014の検出作業がほぼ終了する。また、S014に直交する状態で複数の小溝が検出されている。しかし、遺構の

残存状況が悪く未だ曖昧な状態である。

11.7　旧地形を把握するために、調査区全体にトレンチを設定して掘削を行う。

11.8　S014の掘り下げとトレンチ掘削作業を行う。

11.9　S014を掘削しつつ小溝の検出を行う。また、S014に切られて土坑S015が検出される。

11.12　S014に設定した5本のトレンチからそれぞれ溝底部分のレベルを測る。すると、S014は北に向かって緩やかに傾斜していた溝であることが確認された。

11.13　S014とそれにともなう複数の小溝の掘削作業を行う。小溝を掘り下げていくと、底面より幅5cm前後の長方形の遺構が小溝と直行する状態で幾つも検出された。

11.14　S014・015の掘削作業を行う。また、土坑S016が検出された。S007に近い形状である。

11.15　土坑S017を検出する。

11.16　S014～17の調査を行う。

11.19　S003・014・016の調査を行う。

11.20　S003・014の溝を中心に調査を進める。S003はＪ－23Grid付近で複数の溝が重なっていることが確認された。またS014はS003を挟んで、さらに伸びている。この部分は、覆土がそれまでと異なっているため便宜上S018としておく。

11.21　S014・018・015の掘り下げ作業を行う。また、S016を完掘した。

11.27　S003の掘削を行う。複数の溝の切り合いが非常に難解である。

11.28　土坑S021・022を検出する。

11.29　S017の掘削を進めると、古墳時代初頭の壺や高杯がほぼ完形で何点も出土した。同時性の高い一括遺物として好資料となりそうである。

11.30　S003・017の調査を進める。また、住居跡S019を検出するが遺構の大部分はすでに削平されており、わずかに炉跡と柱穴2基を残すのみであった。

12.1　S003・17・24の調査を行う。S017の壺の中からは小型丸底壺2点が入れ子状態で出土した。図化・写真撮影をしてS017を完掘する。

12.3　7区の南側の遺構を完掘する。調査区北側を残して工事に引き渡す。

12.4　本日より、7区で新幹線建設工事が始まる。また、工事の工程に合わせて年内は2・3区の調査に集中することになった。

6区　2001年

2001年は隣接する7区と同時に調査を行い、かつ1～3区の調査に集中した。そのため、本格的な調査は2002年からとなる。また、雨天中止時の記述については、7区と同様に1～3・5区の調査日誌と同一である。

調査は主に坂田和弘、上髙原が担当した。

9.3　本日より6区の調査開始。ベルトの設定を行う。

11.7　遺構検出面まで、調査区の掘削作業を行う。

11.8　J－20Gridの調査区北東端より、7区では認められないほど多くの土器が集中して出土した。住居跡の可能性が考えられる。

11.9　前日確認された土器集中部分から、ほぼ完形の免田式土器が出土した。

11.12　調査区の杭打ち作業を行う。

11.15　新しい時代の溝や撹乱掘削を行う。

11.16　7区と1～3区の調査を集中するために、作業を一時中止する。

3区　2002年

1.7　3区の掘削を行い、Ｅ－12・13Gridより土器集中部が確認する。後日、遺構検出を行う。また、S080を完掘する。

1.8　3区の掘削および遺構検出作業を行い、住居跡S089を検出する。そこで土器の集中部分が確認されている。また、S087を完掘する。

1.9　それぞれの遺構にサブトレンチを設定して、遺構の立ち上がりを確認する。併せて各Gridの遺構検出も行う。

1.10　土坑S090・92、住居跡S091を検出した。しかしS091は、検出面がほぼ床面であることが確認された。また、S073の炉跡と貯蔵穴を完掘した。

1.11　住居跡S093を検出した。併せて各遺構の調

査を継続する。

1.16　S089～092の調査を中心に行いつつ、3区の掘り下げ作業を行う。

1.17　引き続きS089～093の調査を行う。また、本日より住居跡の排土の洗浄も再開した。

1.18　それぞれの遺構の調査を行う。さらに、各Gridにサブトレンチを設定して、平面および断面から遺構の検出に務める。

1.21　3区の一部表土剥ぎを行う。またS090を完掘したが、S090と切りあうかたちで新たな遺構を検出する。S090と同一の遺構の可能性も考えられる。

1.22　午後から雨の為、作業を中止する。

1.23　これまでの遺構検出から、住居跡S094～099を確認する。特にS094～097はそれぞれが切り合い関係にあり、調査に時間がかかりそうである。また、S091を完掘した。

1.24　S089・090・093・098など、それぞれの遺構の調査を行う。そして、S90・098を完掘した。

1.25　S089・093・094・099の調査を行う。S099からは新たに土坑を検出し、完掘した。

1.28　S089・093・099の炉跡や柱穴などの附帯施設の調査をさらに進める。

1.29　S089を完掘する。また、S094と切り合い関係をもった土坑S100を検出した。併せて調査区引き渡しに備えて、3区の調査区全景を撮影。

1.30　S093～097の炉跡や柱穴などの附帯施設の調査を行う。またS094と切りあうように土坑S101を検出した。ただし、S097内の土坑とも考えられるので、注意が必要。

1.31　それぞれの遺構を完掘して、3区の調査を終了する。

5区　2002年

本調査区は、最後まで西片百田遺跡の調査を行った区である。そのため、1～3区終了後の雨天中止時の記述については5区に記していく。調査は主に、長谷部、洲崎が担当した。

1.28　表土剥ぎを開始する。そして調査区清掃後、メッシュ杭打ちと水準点移動を行う。また、撹乱掘削の後、トレンチ掘りを開始して土層の堆積状況の確認も行う。これから、4区で検出されていた方形周溝墓の溝の検出を行う予定。

1.30　各Gridの掘削を行う。

1.31　それぞれのGridを遺構検出面まで掘り下げる。

2.1　室内にて図面・写真整理を行う。

2.5　調査区南側は広範囲に撹乱を受けているようで、ビニルやプラスチックが出土している。

2.7　撹乱の掘削が終了する。あらためて、遺構検出面までの掘り下げを行う。

2.12　午前中はこれまで出土した土器の洗浄を行う。午後からは前日同様、各Gridの掘り下げを行った。

2.13　掘り下げた箇所の遺構検出を行う。溝状遺構と土器が集中している部分が確認されたが、どれもまだ確定はできなかった。

2.14・15　6区の調査に集中するため、大半の作業員は6区で作業を行う。残った作業員で引き続き、調査区の掘り下げを行う。

2.18　6区の調査も終了し、5区の調査に専念する。

2.19　調査区掘り下げ及び遺構検出を行う。遺構の存在は確認できるが、明確な検出には至らない。

2.20　午前は2区S033の排土洗浄を行う。午後から、遺構検出を行う。F－20Gridで浅い溝を検出し、完掘した。また、熊大生が2区S028の炉跡部分の排土をフローテーションにかけるために来跡した。

2.21　これまでの遺構検出作業から、住居跡・溝が確認できた。確認のためにサブトレンチを設定して、遺構の確定に務める。

2.22　雨の為、室内で図面整理と土器洗浄を行う。

2.25　引き続き調査区の掘削と遺構検出を行う。

2.26　土坑S001・002、溝S003・004を検出する。S001・003は切り合い関係にあり、新旧関係の把握が必要である。

3.1　それぞれの遺構を調査しながら、調査区の掘り下げ作業を行う。また、熊大生が2区S028・033の炉跡の排土を引き取りに再び来跡した。

3.2　前日同様の作業を行う。本日より長谷部が、

宮地小畑遺跡と西片百田遺跡5区の両遺跡を調査することになり、洲崎が主に5区の調査を行う。

3.6　S002を完掘する。また、S005・006を検出する。

3.7　西片百田遺跡全景の空中撮影を行う。また、これまで遺構検出が難航していたG－20Gridを一時休止して、G－21Gridの遺構検出を行う。

3.11　S001・005を完掘した。併せてG－21・F－20Gridの掘り下げを行う。

3.12　S003・004・005の切り合い関係が不明なため、全体的に掘り下げて前後関係の把握に務める。

3.13　S003を完掘した。S004に切られているようである。また、S003は7区で確認された溝と同一であると考えられた。併せて土坑S007・008と、S003に切られている溝S009を検出した。

3.14　S006・008を完掘した。また、昨日検出されたS007は遺構ではなかったので、欠番とする。

3.15　午前中は土器洗浄を行い、午後からはG・F－20Gridを掘り下げた。

3.18　G・F－20Gridにサブトレンチを設定して断面の確認を行いつつ、遺構検出に務める。

3.19　G－20Gridより住居跡、土坑を検出するが、まだ遺構番号を割り振るには至っていない。

3.20　住居跡S010、土坑S011・12を検出して、二つの土坑は完掘した。

3.25　S010の北側より免田式土器片が出土し、周囲の遺構検出を行う。すると、住居跡または土坑がS010と切りあい関係で確認された。

3.26　S010を切る住居跡S014と、S010に切られて消失した住居跡の炉跡部分S013を検出した。

3.27　S014の炉跡とピット2基を検出し、引き続き各遺構の調査を行う。

3.28　S014のピットは半裁の結果、柱痕は炭化して倒れたような状態で確認された。また、S013を完掘した。

3.29　S004・10・14の全ての遺構を完掘した。また、調査終了にむけて周辺整備を行う。

4.3　5区の完掘写真を撮影して調査を終了する。そのまま全員、宮地小畑遺跡の調査に向かった。

4.8～19　図面や写真、調査機材の整理などの残務処理を行う。また2002年度の調査のため、プレハブ移転を行う。

7区　2002年

本年の7区調査面積は僅かである。よって、6区の調査を優先する。

1.7　S009・027の調査を行う。S027はS003・023の続きの溝ではあるが、今回新たに検出したことから、便宜上S027として調査を開始する。

1.8　遺構検出の結果、H－22Gridより複数のピットを確認して半裁をおこなう。

1.18　S027の掘り下げを行う。

1.21　引き続き、S027の掘削を行う。

1.23　S023は完掘したと考えていたが、まだ掘り方の不十分な部分があったので、再度精査して掘り下げた。また、S027は土層断面観察から、複数の溝の複合した状態であることが分かった。

1.24　S027の切り合い関係を考慮しつつ、掘削作業を行う。

1.25　S027を完掘する。またS009を更に掘り下げた結果、炭化物を混じる層の中からわずかに土器片が出土した。弥生時代中期初頭のものと考えられる。

1.28　調査区全体の各Gridの掘り下げ作業が一段落する。併せて行った遺構検出の結果、遺物は散在する程度で、密集して出土する箇所は見当たらない。炭化物を含む土坑を一基確認したので、明日以降掘削を開始する。また、S027を完掘した。

1.30　S009の掘削を行う。

1.31　S009の下層より数点の遺物が出土した。しかし、遺構全体を掘り過ぎているようで全体像の把握は困難になってきた。擂鉢状の土坑を検出した。

2.5　S009を完掘して7区の調査を終了する。

6区　2002年

1.7　本日より調査を再開する。S001～004（6区）を検出する。これらの遺構は圃場整備以前の比較的新しい遺構であった。

1.8　S001を完掘する。また、S001直下より溝S006を検出する。更に、完掘した撹乱内より土坑S005が確認された。

1.9　S006は7区から続く溝であることが確認された。出土遺物はいずれも小片が多く、ローリングを受けた状態であった。また、S006と平行するように小溝3条を検出した。中にはS006を切っているものもあり、これらの溝はいずれも古いものではないと推測した。併せてS005も完掘した。

1.10　溝S007・008を検出し、S006と併せて掘削を行う。

1.11　溝S009を検出し、S006～009の調査を行う。そして、S006・007は離合している状態で、新旧関係は古い方からS006→007となることが確認された。

1.16　調査区の掘り下げと遺構検出を行うと、S006～009と直交して切りあう溝などが検出された。

1.17　S006～009と同様の溝S010を検出した。さらに、昨日検出された前述の溝と直交する溝をS011～018として調査を行う。また、S011～018については比較的新しい時期の遺構であることが推察された。

1.18　S006は掘削後の土層断面検討の結果、数条の溝の複合体と考えられた。これらが、掘り返した結果なのか、時期差に由来するかは現在のところは不明である。また、S006よりまとまった量の土器が出土したが、これらの土器は近接する遺構からの流れ込みの可能性が考えられる。

1.21　S006を中心に各遺構の調査を行う。また、6区全体の遺構配置確認のため平板測量も行う。

1.23　S006を中心にそれぞれの遺構の掘り下げを行う。以前、S006は数条の溝で構成されることが予想されていたが、これは少なくとも4、5条の溝の集合体であることが改めて確認された。

1.24　S006の調査を行いつつ周辺の遺構検出を行う。そこでS006を境に、J－20Gridでは東側に数軒の住居跡と考えられる遺構が確認できたが、J－21Gridでは東側は遺物が散見できる程度であった。

1.25　S006と切り合うように土坑があることが掘削過程の中から明らかになった。前後関係については検討中である。また、J－20Grid、S006東側より高杯など多くの遺物が出土した。この高杯はあまり見たことのない形式であった。搬入品の可能性も考えられる。

1.28　新たに土坑S020を検出し他の遺構と共に調査を行う。併せて、昨日出土した高杯の周辺を掘り下げて遺構検出に務める。

1.29　S007～18を完掘する。更に調査区全体と、これらの遺構の位置関係を示すように完掘写真を撮影する。

1.30　S006の調査を行う。

1.31　S006以東の土器集中部分の調査を行う。また、S020を完掘する。

2.5　S006以東の土器集中部分の遺構検出を行う。しかし、作業はなかなか難しく確定のラインが不明確である。

2.7　土器集中部分の土器を取り上げて、改めて遺構検出を行う。溝状遺構のようなものが確認できるが、やはり不明確である。併せて、S006の掘り下げも行う。

2.8　これまでと同様S006以東の遺構検出を行う。サブトレンチを設定して断面からの確認も試みるが、やはり遺構として確認できなかった。

2.13　S022～029を検出して掘削作業を行う。今日も、S006以東部分の遺構検出は確定出来なかった。

2.14　確認されている遺構のほとんどを完掘する。結局、S006以東部分については不明確なまま、調査期限を迎えてしまった。あと一日、出来る限り遺構の調査を行う予定である。

2.15　S023・030を完掘する。そして、調査区全体の精査を行い完掘写真を撮影する。本日で調査を終了する。

（上髙原）

脚注

i 平安時代中期に源頼により編纂された「和名類聚抄」中に、肥後国夜豆志呂と郡推定地名として記されている。

ii 熊本県教育委員会「立神ドトク遺跡」熊本県文化財調査報告第35集1979

iii 熊本県教育委員会「五ツ穴横穴群・岩立C古墳・大瀬田横穴群・高城古墳群」熊本県文化財調査報告第34集

iv 八代市史　第1巻　平成4年3月

v 『夜豆志呂』第49号

vi 八代市教育委員会「下堀切遺跡Ⅰ」八代市文化財調査第3集1988

vii 八代市教育委員会「下堀切遺跡Ⅱ」八代市文化財調査第4集1989

viii 熊本県教育委員会「西片町遺跡」熊本県文化財調査報告第153集1996

ix 現在、県文化課で整理中

x 「八代大塚古墳」大塚古墳発掘調査団・八代市教育委員会　昭和60年3月

xi 熊本県教育委員会「八代大塚古墳」熊本県文化財調査報告第136集1993

xii 現在は、円墳だが本来は前方後円墳であった可能性も指摘されている。

xiii 墳丘くびれ部から出土している須恵器群から出土しているものの中に、6世紀前半に位置づけられるものが出土しているためその時期に比定されている。(八代大塚古墳1993)

xiv 八代市教委 澤田が八代大塚古墳（八代大塚古墳1993）調査報告書中第Ⅱ章の古墳の位置と環境のなかで、鬼の岩屋タイプについて、「水俣石と呼ばれる巨大な安山岩の自然石を用い、石室内に両袖石を持った複室墳が鬼の岩屋古墳の基本的なタイプと考えることができる。」としている。

xv 弓や靫、紐で吊るしたような表現の鏡（円文）、三角板縦短甲、鏡（円文）を提げた鞘入りの太刀を配列している。

xvi 「和名類聚抄」（ⅰと同じ）

xvii 「川田京坪遺跡」

xviii 八代市・洗切遺跡調査団「洗切遺跡調査報告」1982

xix 熊本県教育委員会「興善寺Ⅰ」熊本県文化財調査報告書第45集1980

xx No.1は龍泉窯系青磁の椀である。12世紀中葉～後半のものである。内外面共に横方向の回転ヘラ削り、指抱で仕上げの後に施釉。内面にヘラ彫りで片彫りの蓮花文を施す。高台畳付け及び内部は露台。
No.2は龍泉窯系青磁の椀である。12世紀後半～13世紀前半のものである。内外面共に横方向の回転ヘラ削りで成形、指抱で仕上げの後に施釉。底部外面露台。体部外面にヘラ彫りで鎬蓮弁を施す。

xxi No.3は同安窯系青磁の椀である。12世紀中葉～後半のものである。内外面共に横方向の回転ヘラ削りで成形、指抱で仕上げの後に施釉。内面にヘラ状の施文具による略化した花文と櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有し、外器面に細かい縦の櫛目文を有する。

xxii No.4・5・6は同安窯系青磁の皿である。12世紀中葉～13世紀初頭のものである。内外面共に横方向の回転ヘラ削りで成形、指抱で仕上げの後に施釉。No.6は無文であるが、No.4・5は内面に篦による文様とジグザグ状の櫛点描文が施される。

xxiii 熊本県教育委員会「西片町遺跡」熊本県文化財調査報告　第153集　1996

xxiv 八代市教育委員会「西片町遺跡（園田地区）」八代市文化財調査報告　第18集　2002

xxv 現在、八代市教育委員会により整理中。

第Ⅲ章
遺構・遺物

弥生時代後期から古墳時代初頭の集落址

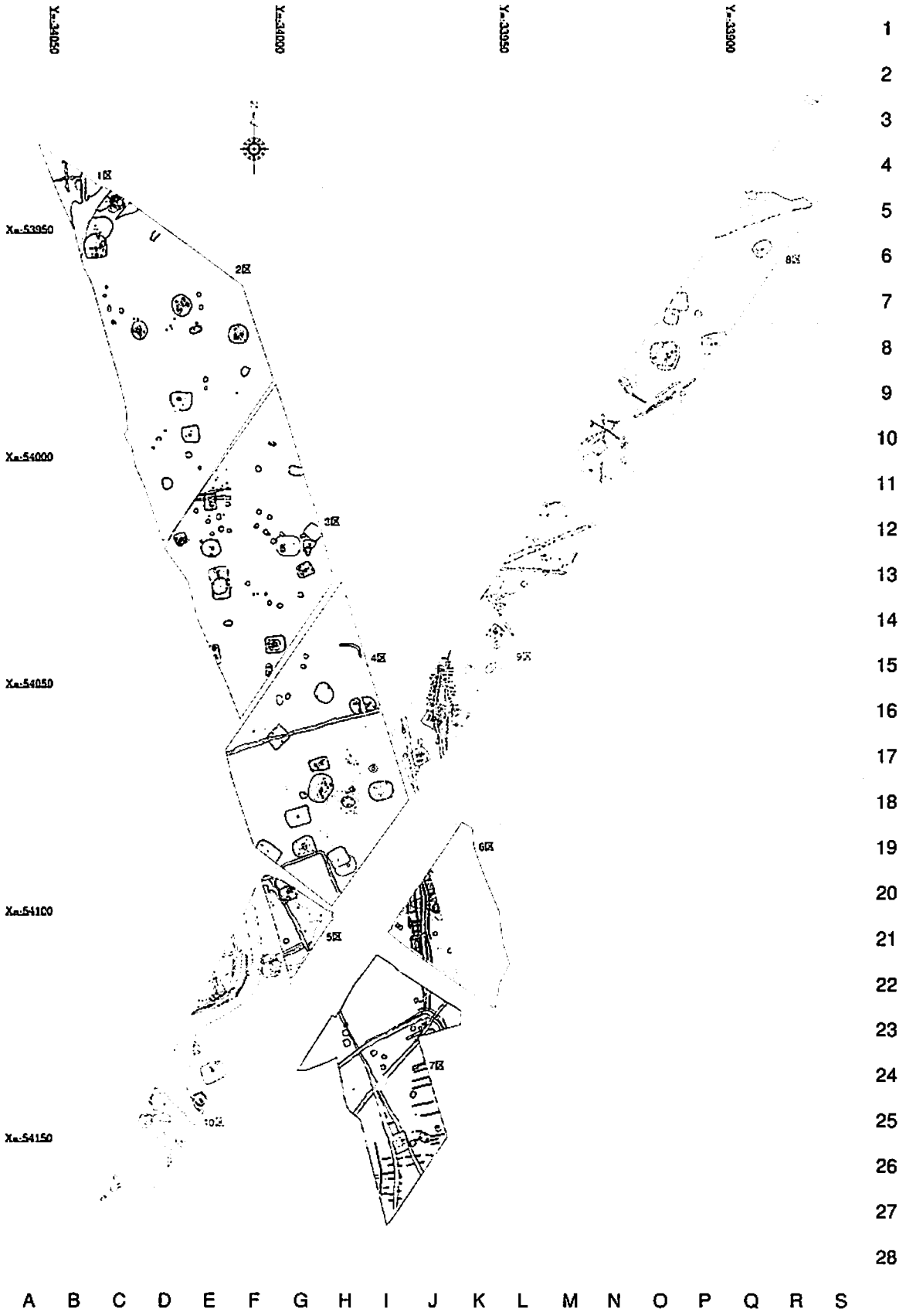


Fig.10　西片百田遺跡全遺構配置図（8～10区は、県事業に伴う調査分）

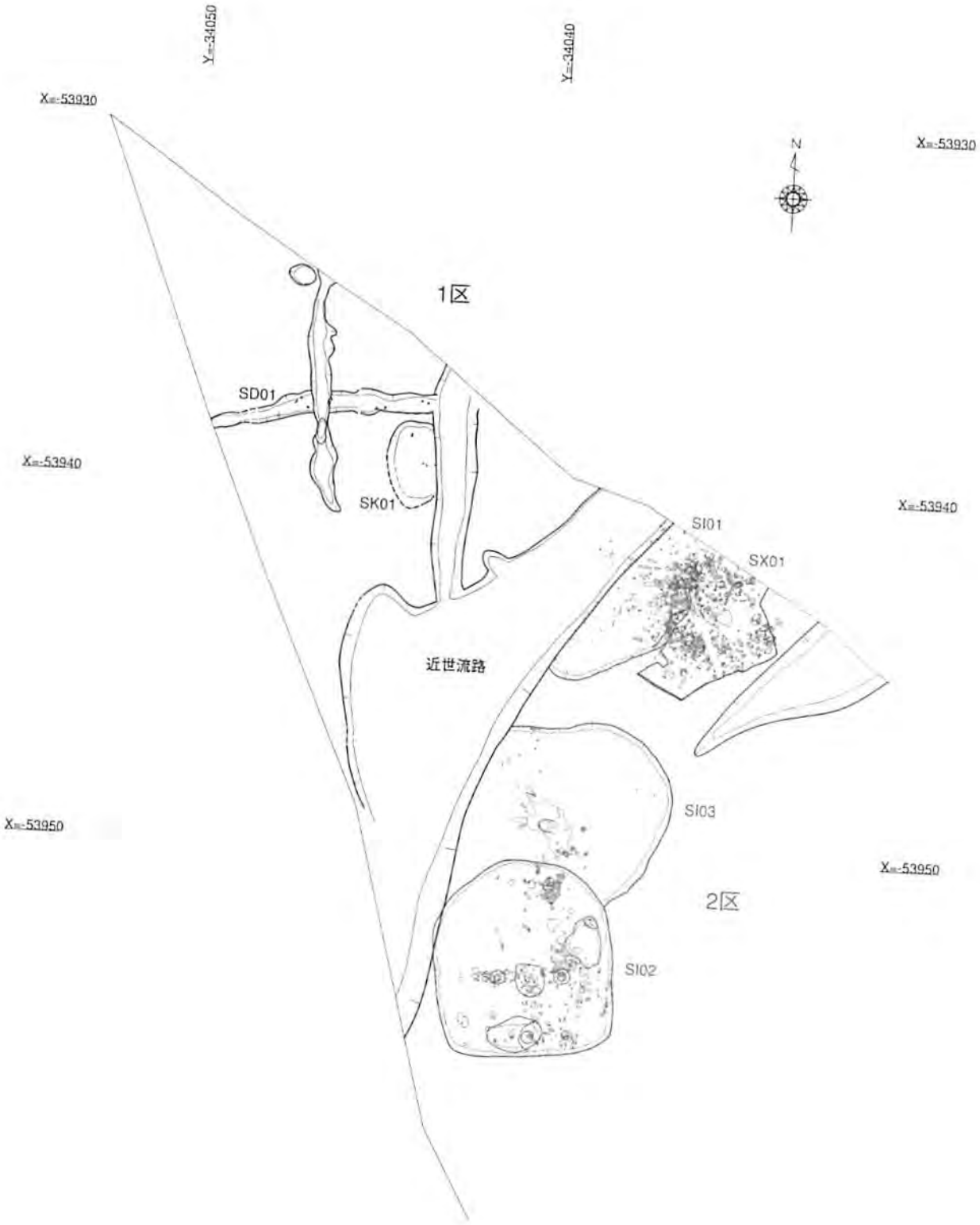


Fig.11　1区遺構配置図

1）1･2区

本事業において、西片百田遺跡として調査した範囲内では北東隅にあたる。土質は確認調査の結果やや粘性が強く、隣接する範囲の確認調査と同様、砕屑物のシルト（silt）層から粘土（clay）層へ、またその集合物である泥（mud）の広がり確認されている。1･2区は泥層からシルトから砂（sand）の混土する粘質土へ移行した地区で、地形がやや登り始める線上にあたる。そのような不安定な地形でありながら、竪穴式住居跡を含む多数の遺構が検出された。

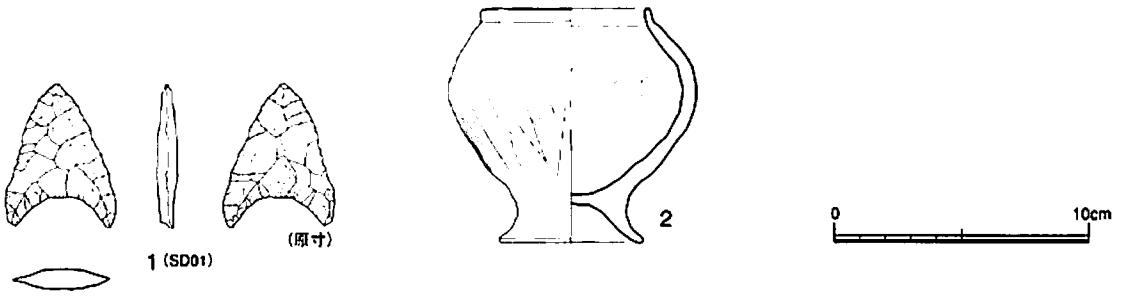


Fig.12　1区SD01・包含層出土遺物実測図

SD01

調査区を東西に走り、近世の流路に切られている。幅およそ0.6m、検出面からの深度は0.18mを測る。断面形態は逆台形を呈し、満幅は東側へ向かって徐々に細くなる。弥生時代後期の遺物片が数点出土しているが、激しく磨耗しているため図示していない。

1　安山岩製の打製石鏃である。平面形態は二等辺三角形を呈し基部は凹基式である。

SK01

長径2.2m、短径1.36m、検出面からの深度は0.2mを測る。土坑のおよそ半分を近世の流路に切られているが、本来の形は長楕円形を呈する土坑であることが推定される。底面より、細かく磨耗の激しい土器片が数点出土している。

包含層出土遺物

2　台付鉢形土器である。鉢部は深く最大径を中位に持ち、やや丸みを帯びる。口縁部は短く、僅かに直立し端部は四角に成形される。脚台部は緩やかに外反しながら開き、端部は四角に成形される。低脚で、内器面に僅かに指頭痕が認められる。

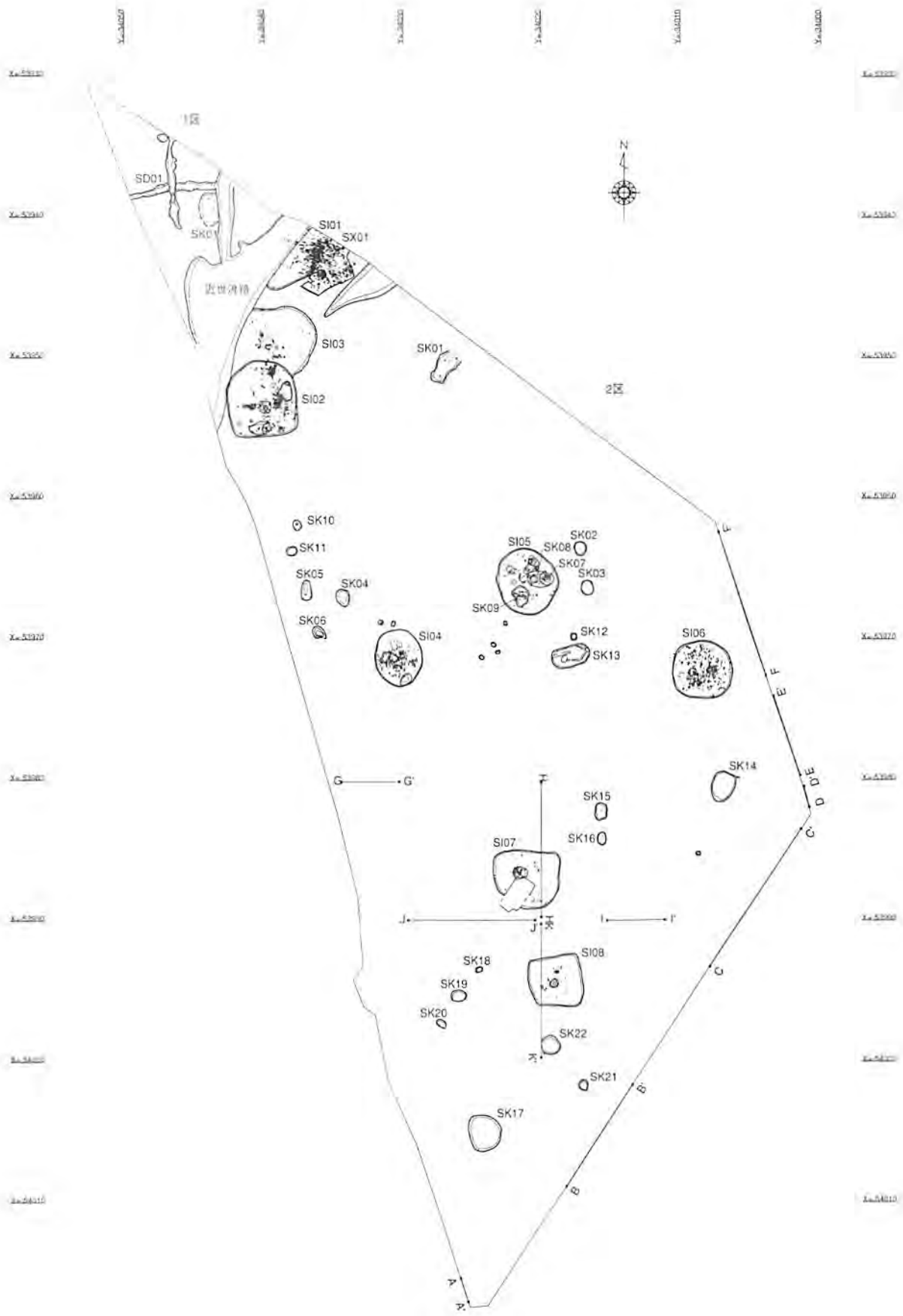


Fig.13　2区遺構配置図

Fig.14　2区SI01実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI01	主軸方向	A-A':N=36°-W
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SX01に切られる	土坑	未検出
規模・深度	0.36m	柱穴	未検出
面積	不明	備考	

周辺遺構との切りあい関係のため、住居跡のおよそ1/2が確認された。隅丸方形を呈する竪穴式住居跡と考えられる。長さ約30cmの炭化材の出土状況から、住居跡の中央部は既に近世流路により削平を受けていることが推定される。炉跡や柱穴などの付帯施設についても検出は出来なかった。また、遺物は東隅に集中しており、近接しているSX01出土遺物との関連を考える必要がある。

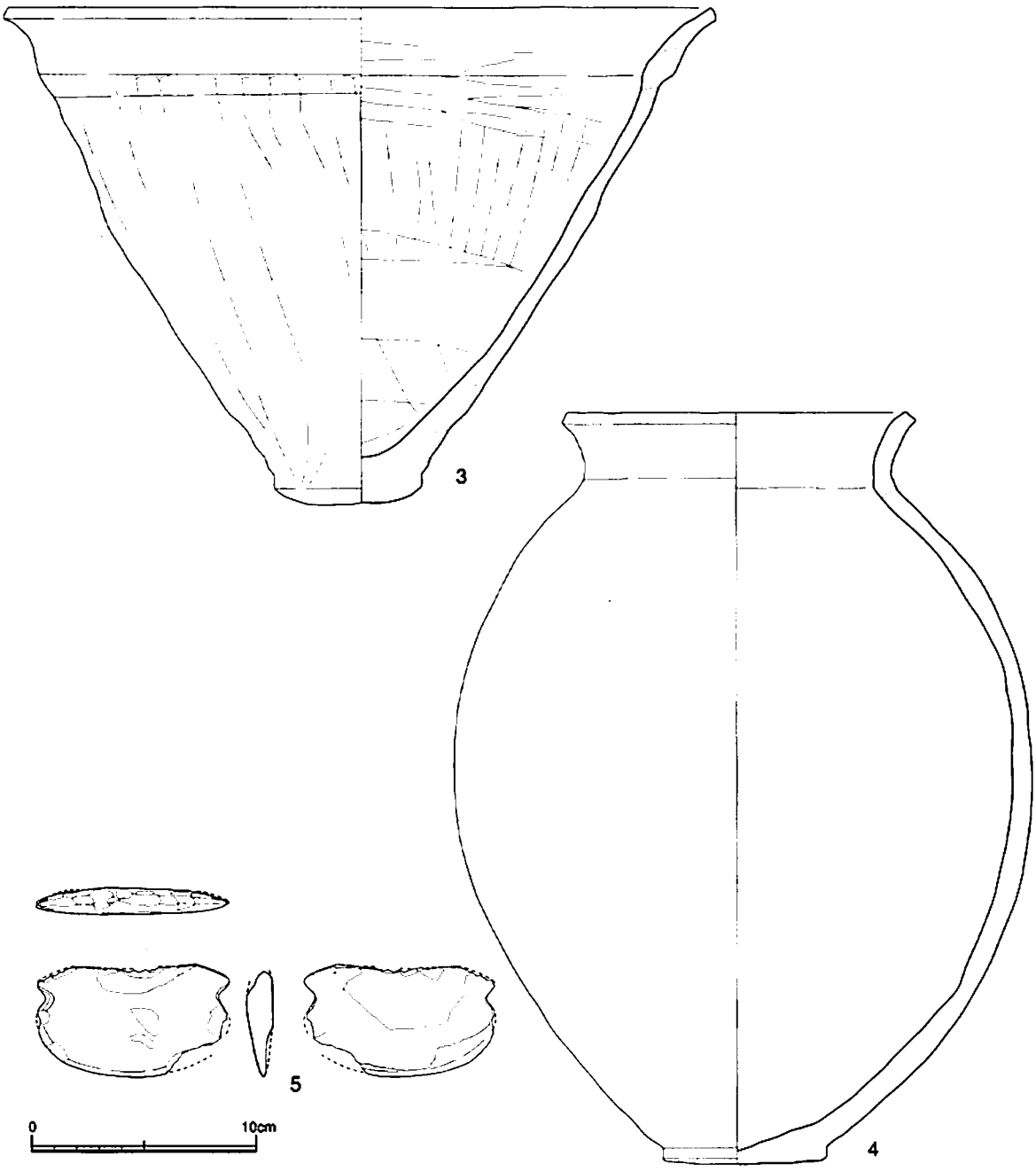
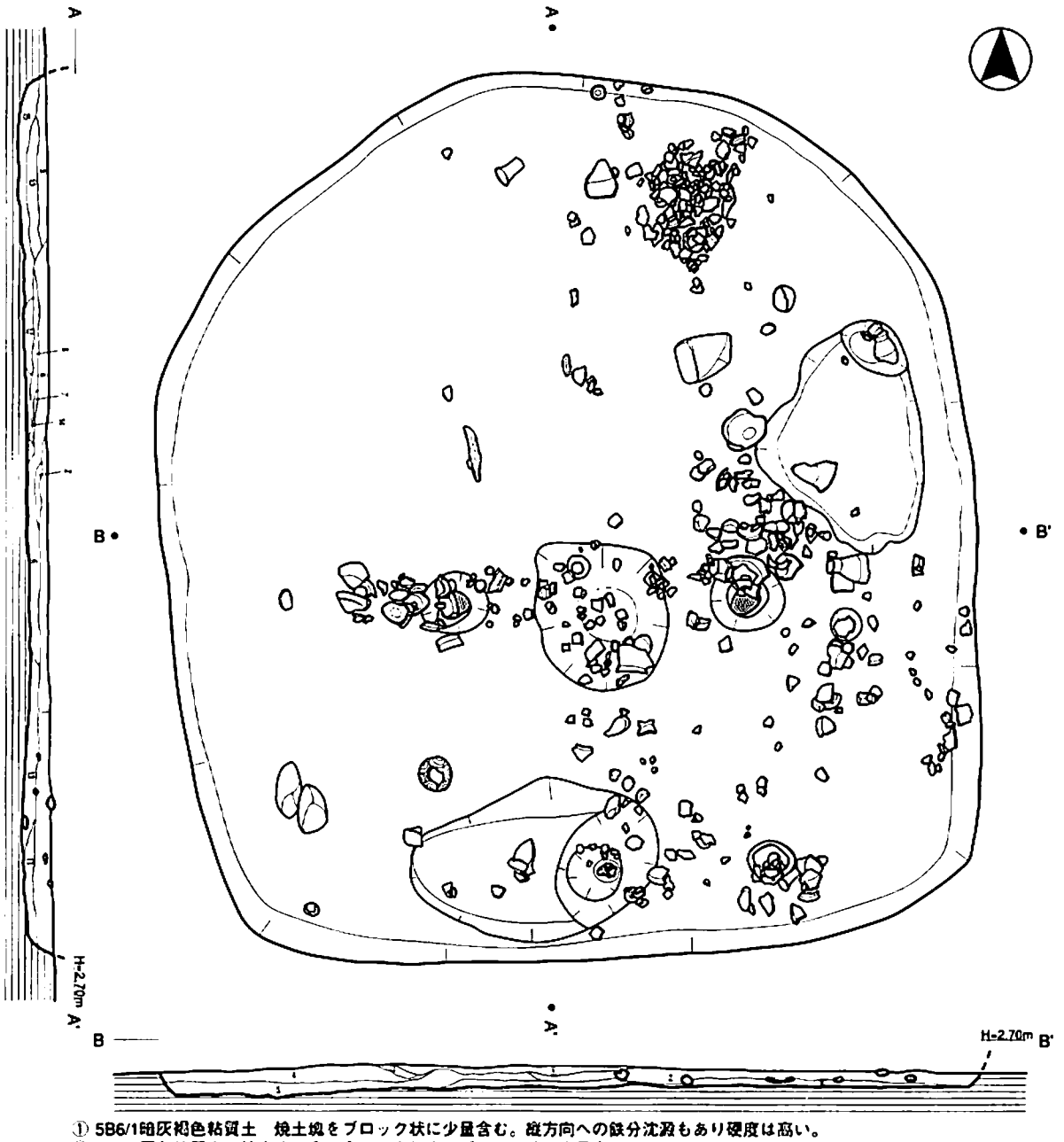


Fig.15　2区SI01出土遺物実測図

3　大型の鉢形土器である。凸レンズ状の底部を呈し、胴部は斜め上方へ直線的に立ち上がり口縁部に至る。口縁部は肥厚して僅かに外反し、端部成形は角張る。磨耗が著しいが工具によるナデ調整や削りにより胴部は薄く仕上げられる。土器断面に数条の粘土紐痕が観察される。内・外器面共に全体に渡って煤の付着が認められる。

4　甕形土器である。胴部最大径がほぼ中位にあり、平底の底部を呈する。口縁部はやや外反しながら上方へ開き、端部成形は角張る。内・外器面共に磨耗が著しく調整の観察は困難である。胴部全体に煤の付着が認められる。

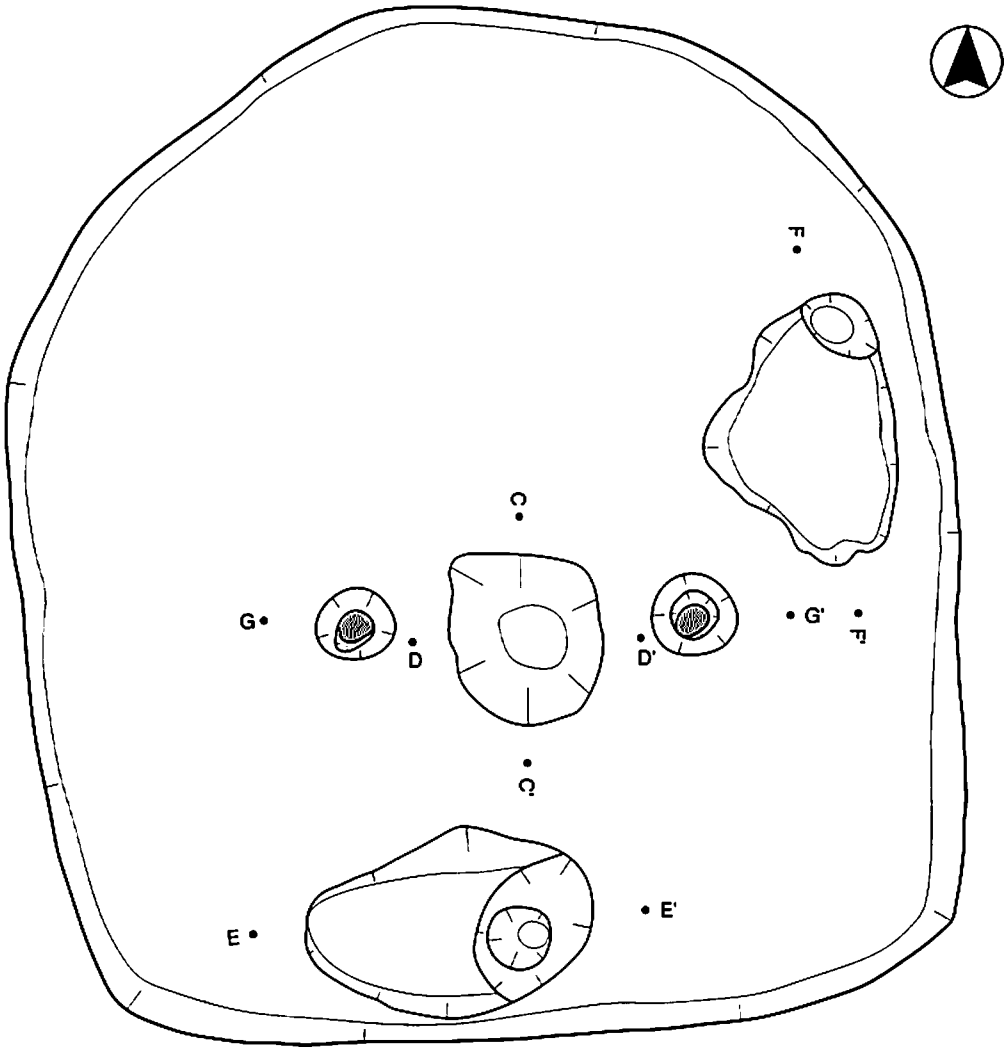
5　粘板岩製の石庖丁である。背部は直線的で、使用によるものであろうか磨り減っている。両端は欠損しているが、丸みをもった半円形の刃部を持つ。紐孔の穿孔は認められない。

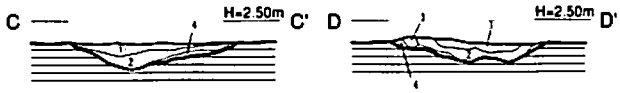


① 5B6/1紺灰褐色粘質土　焼土塊をブロック状に少量含む。斑方向への鉄分沈澱もあり硬度は高い。
② 5Y6/0灰色粘質土　焼土塊を密に含む。白粘土をブロック状に少量含む。
③ N4/1灰色粘質土　焼土・カーボンを粒状に多く含む。炉床内の土のようである。
④ 5B6/1灰色粘質土　①層と同様の土。
⑤ 灰色粘質土
⑥ 7.5Y6/1灰色粘質土　カーボンを棒状に少量含む。焼土ブロック（1～2mm）含。弥生土器含。
⑦ 2.5Y3/1黒褐色粘質土　燃焼面の一部の可能性が高いが、遺構に性格上炉の可能性は低い。弥生土器含。
⑧ 5B6/1青灰色粘質土　やや粘性高い。遺物は水平に堆積。鉄分沈澱が多く水分の集積層と思われる。
⑨ N7/1灰色砂質土　カーボンを粒状に少量含む。鉄分の沈澱が見られる。弥生土器含。
⑩ N7/1灰色砂質土　⑨層よりやや粘質である。弥生土器含。
⑪ 10BG5/1青灰色粘質土　カーボンをブロック状に含む。弥生土器の破片を多く含む。
⑫ 2.5Y3/1黒褐色粘質土　焼土をブロック状に含む。カーボンを粒状に多く含む。焼土の厚さから炉の可能性がある。弥生土器含。
⑬ N6/1灰色粘質土　カーボンをブロック状に多く含む。河原石（3～4cm）含。弥生土器含。
⑭ 5B7/1明青灰色粘質土　カーボンをシミ状に多く含む。炉床の可能性が高い。弥生土器含。
⑮ N7/1灰色砂質土　やや砂質。カーボンを粒状に含む。弥生土器含。

0　1m

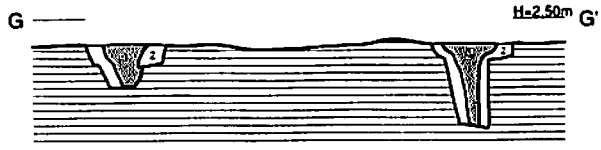
Fig.16　2区SI02実測図





① 2.5Y3/2黒褐色粘質土　焼土の粒を含む。小礫・スミ粒・土器含。
② 10YR2/1黒色混砂粘質土　炭化物・焼土含。
③ 10YR4/2灰黄褐色土　焼土・炭化物・小礫含。
④ 2.5Y4/2暗灰黄色砂層　炭化物を少々含。

① 2.5Y3/2黒褐色粘質土　焼土粒・炭化物・土器片含。拳大の礫あり。
② 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分を柱状に含む。炭化物の柱を少し含む。僅かだが砂を全体的に含。
③ 5Y4/2灰オリーブ混砂粘質土　砂質が非常に強い。土器粒・土器片・炭化物含。鉄分を柱状に僅かに含む。



① 10YR4/2灰黄褐色粘質土　柱根。拳大の礫・小礫含。砂が混じっている。鉄分含。スミの粒ごく僅か含む。
② 2.5Y4/2暗灰黄色粘質砂層　礫含。乾燥するとよくしまる。

① 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　柱根。土器片・礫・焼土粒含。鉄分をごく僅かに含む。よくしまっている。
② 2.5Y4/1黄灰色混砂粘質土　乾燥するとよくしまる。鉄分を僅かに含む。小礫を少量含む。

0　1m

Fig.17　2区SI02実測図

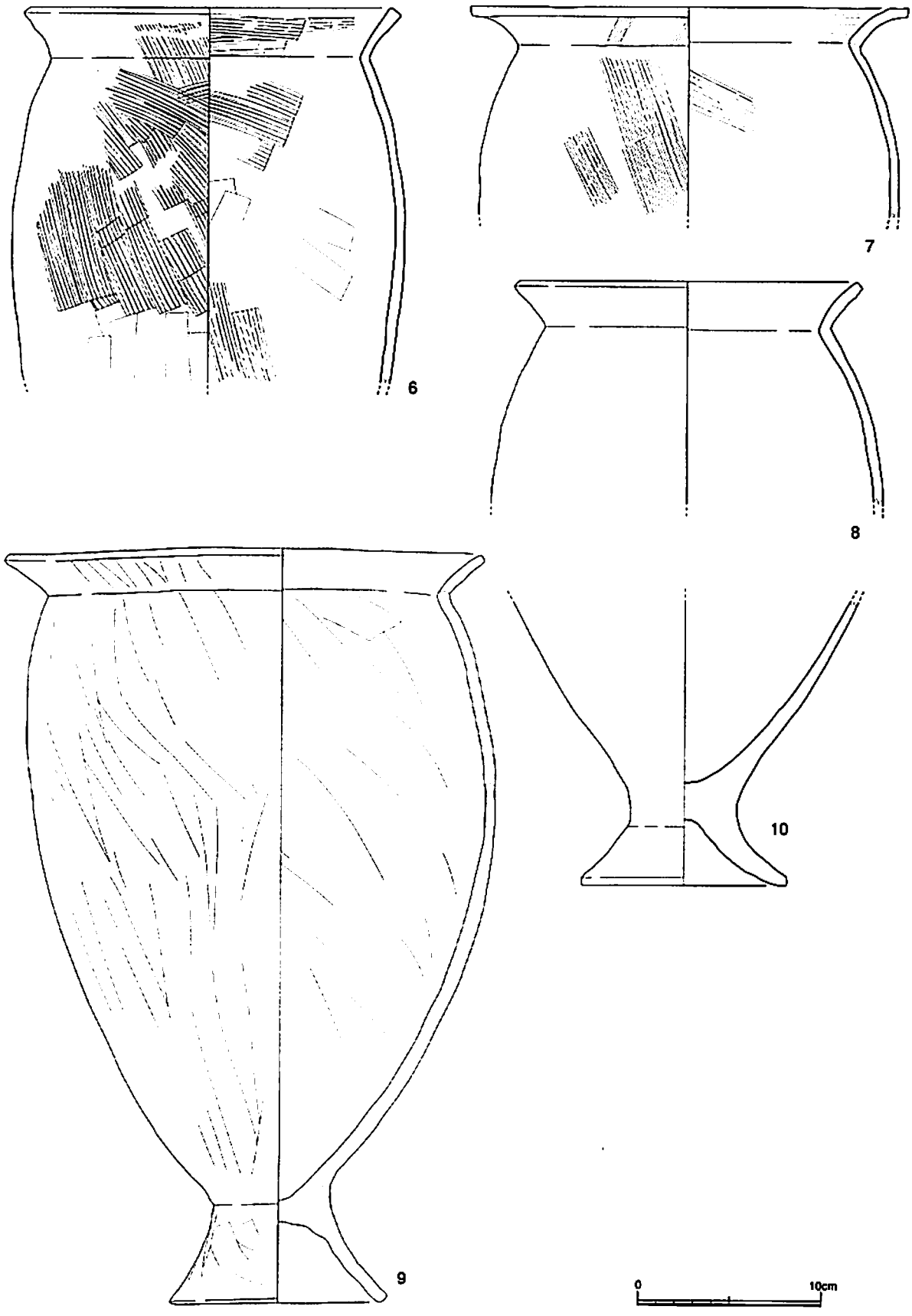


Fig.18　2区SI02出土遺物実測図

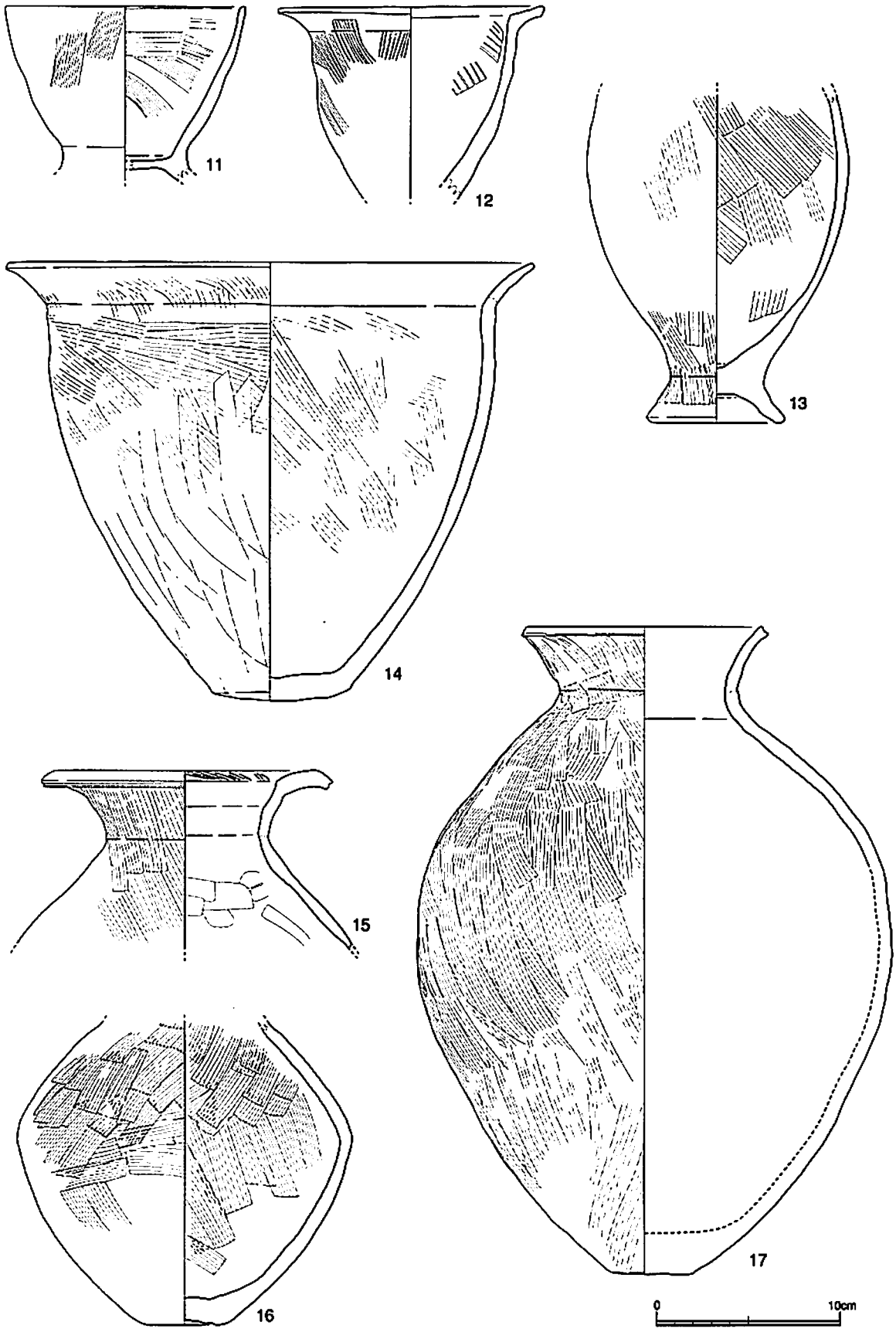


Fig.19　2区SI02出土遺物実測図

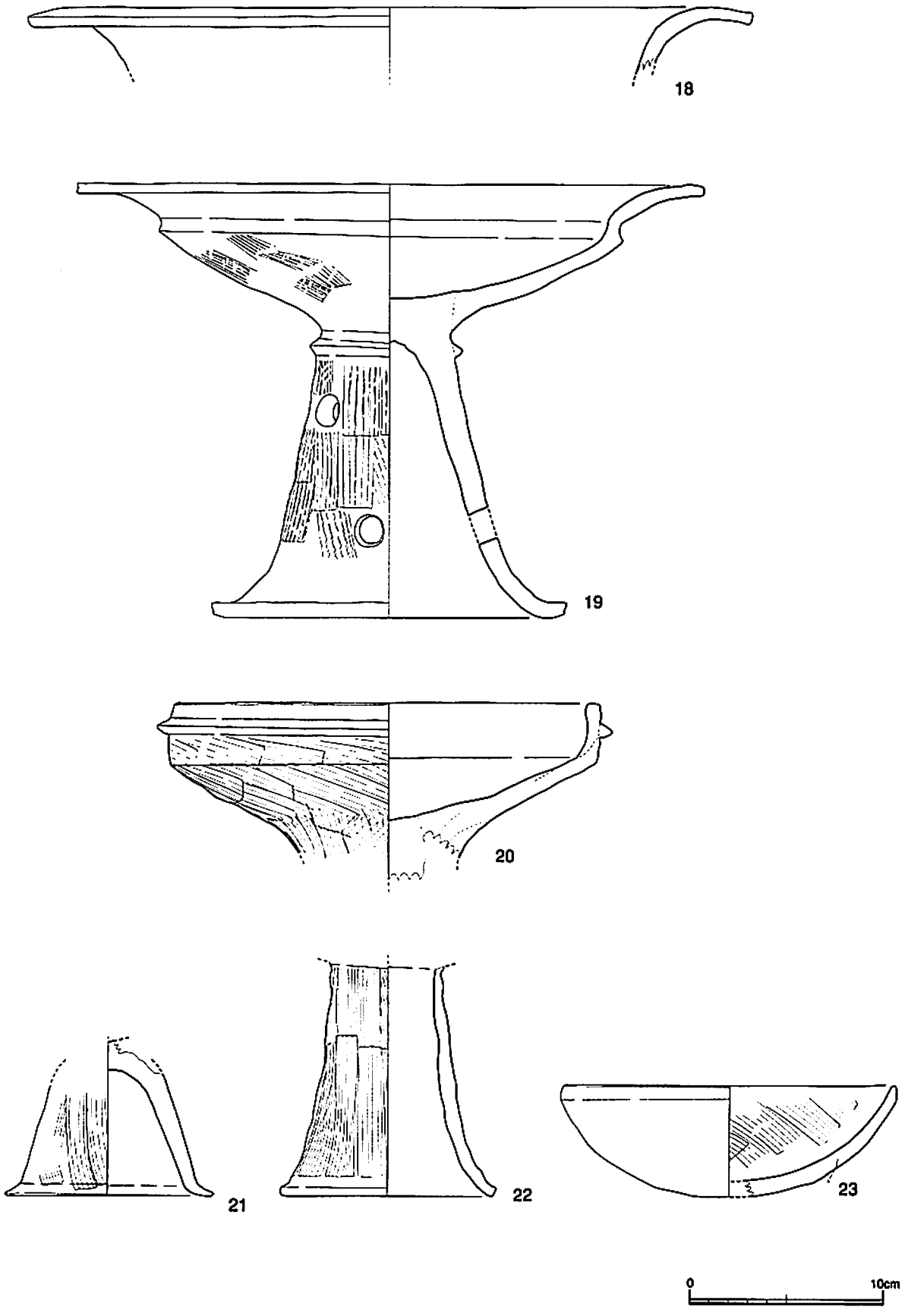


Fig.20　2区SI02出土遺物実測図

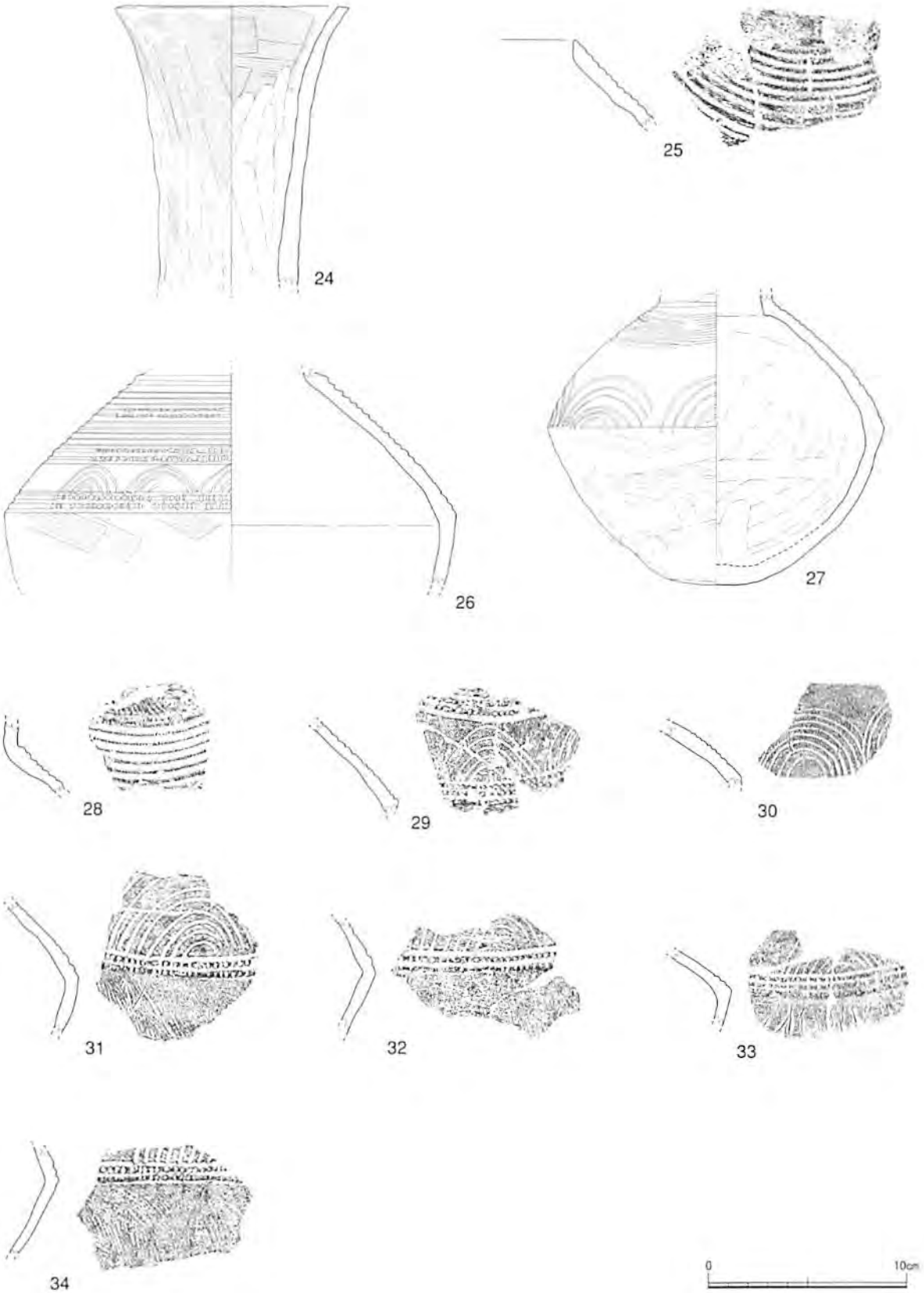


Fig.21　2区SI02出土遺物実測図

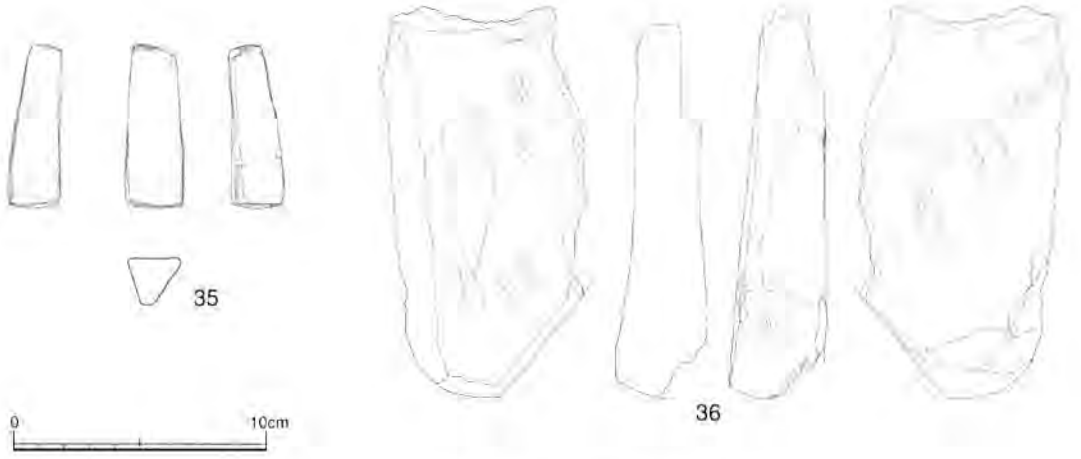


Fig.22　2区SI02遺物実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI02	主軸方向	A-A':N=2°
時期	弥生時代後期	炉	中央部　0.89×0.83×0.12m
切り合い関係	SI03を切る	土坑	南隅部　1.53×1.00×0.20m 東隅部　1.41×1.00m×0.11m
規模・深度	5.41×5.01m×0.17m	柱穴	P1　0.40×0.38m (柱痕0.18×0.17×0.23m) P2　0.45×0.42 (柱痕0.19×0.14×0.44m)
面積	23.43㎡	備考	

隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。多量の礫や土器、及び炭化物が出土し、4区のSI11（竪穴式住居跡）と同様に、台石も確認された。また出土状況から破砕後に置かれたと推測される土器が出土している。さらに、ガラス玉も出土している。

中央部に位置する炉跡は楕円形を呈し、地山層である砂層に浅く掘り込まれており、焼土と炭化物で構成されている。南隅部の土坑は炭化物・焼土で構成され、貯蔵穴と考えられる。また東隅部の土坑は浅く掘りこまれているが、遺物の出土等も認められず遺構の性格は不明である。そして炉跡を挟んで検出された柱穴は、共に柱痕を有しており、主柱穴であろうと考えられる。

6　甕形土器である。胴部最大径を上位に有し、肥厚した口縁部は「く」の字に屈曲して直線的に開く。端部はナデにより角張る。肥厚した口縁部と比べ胴部は薄く仕上げられる。内・外器面には上方へ掻きあげた刷毛目が明瞭に残る。

7　甕形土器である。口縁部は直線的に開き、端部で短く強く外反する。そのため口唇部には平坦部が僅かに認められる。胴部は最大径をやや上方に有し丸みを帯びる。

8　甕形土器である。胴部最大径を中位に持ち、口縁部は屈曲して直線的に開く。端部は四角に成形される。磨耗が激しく内・外器面ともに調整は不明。

9　甕形土器である。胴部最大径を上位に持ち、やや丸みを帯びる。口縁部は短く直線的に開き、やや角張る。脚台部は下方に向かい、やや開きながら直線的に開く。端部の成形は角張る。内・外器面に明瞭に刷毛目を残す。

10　甕形土器の脚台部片である。脚台部は緩やかに外反しながら短く開き、端部は四角に成形されて低い。外器面の調整は磨耗の為不明であるが、内器面および底部は僅かにナデが施されている。おそらく、8の口縁部片の脚台部と思われる。

11　台付鉢形土器である。底部から直線的に口縁部に至り、端部はやや尖る。内・外器面に明瞭な刷毛目が見られる。脚台部端部の形態は欠損のため不明である。

12　小型の甕形土器である。最大径を胴部上位にもち直線的に底部に至ると推定される。口縁部は強く屈曲して直線的に短く伸び、端部はナデにより角張る。内・外器面に刷毛目が認められる。

13　小型の甕形土器である。胴部最大径を中位にもち、脚台部はやや外反して低い。脚台部外器面および内器面に刷毛目をよく残す。胴部上位から口縁部は欠損して不明。

14　鉢形土器である。胴部最大径を上位にもちやや丸みを帯びる胴部を経て、凸レンズ状の底部に至る。口縁部は直線的にやや上方へ開き、端部は薄くなりつつやや角張る。外器面中位以下には上方向への削りが窺える。

15　壺形土器である。頸部は直線的に斜め上方へ開き、肥厚した口縁部は大きく外湾し上面に平坦面を施す。平坦面には明瞭な刷毛によるおさえが認められ、端部外面には口縁端部に沿って沈線が施される。

16　壺形土器の胴部である。胴部中位で屈曲し、やや上げ底気味の平底に至る。底部の調整は磨耗のため不明である。頸部より上部は欠損しているため不明である。

17　壺形土器である。胴部最大径が中位にあり、丸みを帯びる胴部を経て凸レンズ状の底部に至る。口縁部はやや外反しながら上方へ開き、端部成形は角張る。外器面全体には明瞭な刷毛目が観察されるが、内器面は磨耗若しく、薄い為か調整は不明である。

18　高杯形土器である。口縁部は端部に向かい大きく外湾し端部でやや下がる。よって、上面に僅かな平坦部が形成される。端部は角張り、内・外器面には薄く横ナデが観察される。口縁部以下欠損のため、全体の器形は不明である。

19　高杯形土器である。浅い杯部が胴部中位で屈曲した後、複合的に伸びる口縁部が外湾しながら大きく開く。口縁端部はナデ調整により角張る。また、脚部は下方に向かって緩やかに外反して据部は強く外湾する。据端部はナデにより角張る。上下それぞれ4箇所の穿孔が互い違いに施される。外器面には明瞭に刷毛目が認められる。

20　高杯形土器の杯部である。口縁は直立し端部付近でやや肥厚する。外器面には一条の断面三角形粘土紐突帯を巡らす。直線的に伸びる底部は脚部付近で肥厚する。外器面には明瞭に横方向への刷毛目が明瞭に残る。杯底断面には明確に脚部との接合面が認められる。

21　高杯形土器の脚部である。直線的に下方に向かい、据部で屈曲し端部は丸くおさまり低脚である。杯部形態は欠損のため不明である。

22　高杯形土器の脚部である。杯部接合面から外方へ向かって緩やかに外反し、端部はナデにより角張る。外器面には明瞭な刷毛目やナデが観察される。杯部は欠損して形状等は不明であるが、欠損部位の痕跡から外へ広がる杯部が予想される。

23　鉢形土器である。丸底を呈し、やや内湾する胴部がそのまま口縁部に至り、端部で上方へ屈曲する。端部成形は丸くおさまる。全体的に器面には磨耗が認められ、調整の確認は難しい。

24　長頸壺形土器の頸部である。ゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部に向かってやや外反する。口唇部はナデにより角張る。内・外器面ともに明瞭に刷毛目を残す。

25　短頸壺形土器の口縁部である。口縁端部は内面に平坦面を持つよう成形されている。口縁部直下より数条からなる横位沈線が施文される。

26　重弧文壺形土器である。胴部中位に緩い屈曲部を持つ。屈曲部上位は直線的で下位はやや丸みを帯びる。肩部は多くの階段状の条線が巡り、一部に刻み状の縦位短沈線が施される。その下位には直径4cm程の小型の重弧文が上向きに施される。さらに屈曲部には3本の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施される。屈曲部以下には刷毛目が認められる。頸部以上と底部は欠損のため不明である。

27　重弧文壺形土器胴部である。胴部中位に緩い屈曲部を持ち、丸底を呈している。肩部から胴部にかけて多くの横位沈線が施され、屈曲部直上には6重からなる上向きの重弧文が巡る。さらに屈曲部以下は刷毛目後ナデが施されている。頸部の立ち上がりを僅かに残す。

28　重弧文壺形土器の肩部である。多くの階段状の条線が施されている。条線部はヘラ状の工具を利用し丁寧に横撫でにより削り出される。頸部との接合面には刷毛目、内器面にはナデが施される。

29　重弧文壺形土器の屈曲部上位の施文帯部である。屈曲部には、横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施され、その間には3重からなる重弧文が上向きに施されている。

30　重弧文壺形土器の胴部、重弧文施文帯部である。8重からなる上向きの重弧文がやや丸みを帯びながら一部重複しながら、2箇所に施されている。

31・32・33・34　重弧文壺形土器の屈曲部片である。屈曲部は直角よりやや広く、屈曲部には横位沈線が巡る。その上に刻み状の縦位短沈線が施され、その上位には上向きの重弧文が施されている。屈曲部以下には刷毛目が施される。

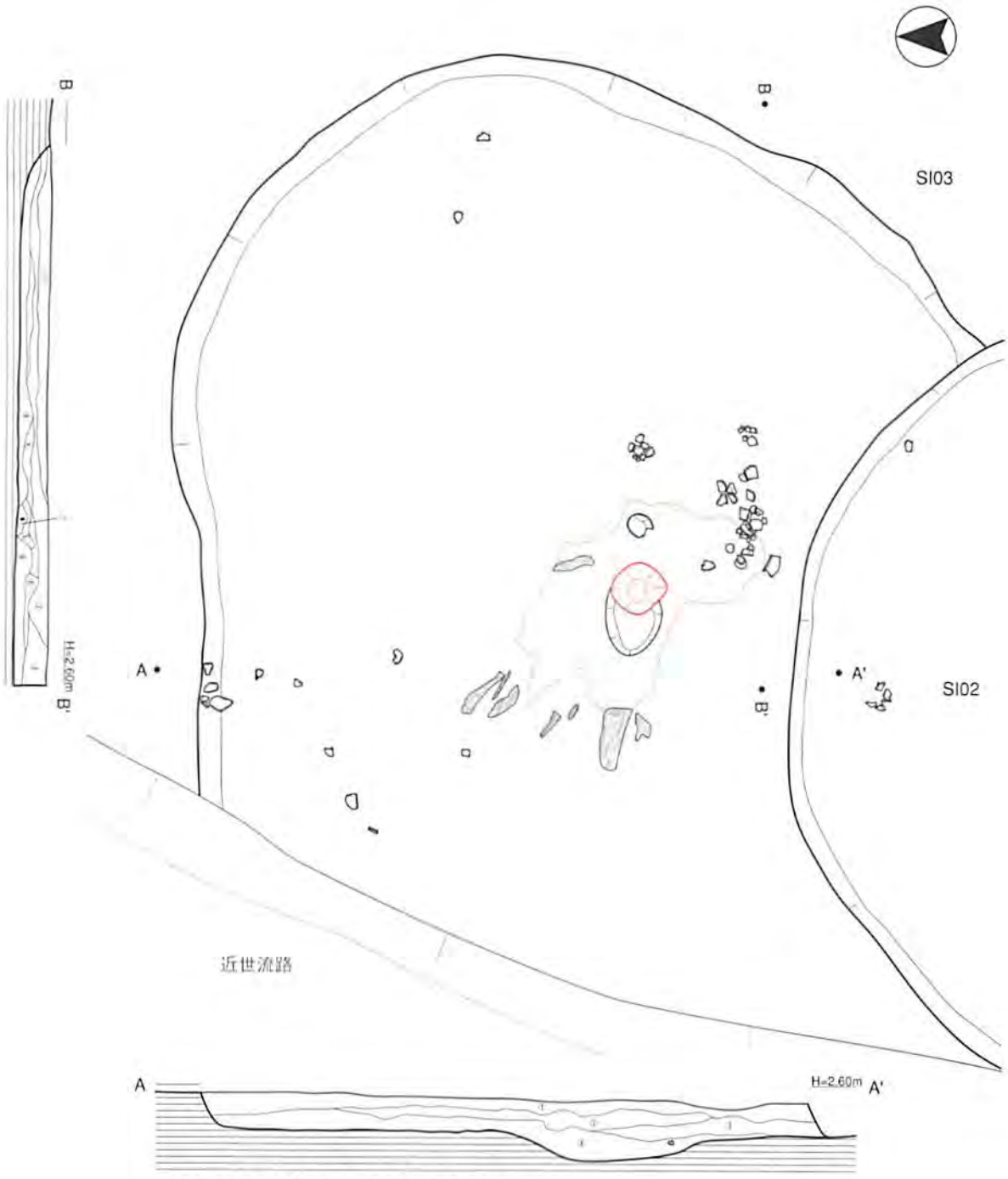
35　粘板岩製砥石である。全面に磨痕が認められ、磨跡により断面三角形を呈する。特に各端部では顕著に磨痕が認められる。それぞれの面の中心部は磨痕による窪みが見られる。

36　リソイダイト製の砥石である。表裏・側面に縦方向の磨痕が認められる。中心部は顕著に窪む。

遺構名	竪穴式住居跡SI03	主軸方向	A-A':N-90°
時期	弥生時代後期	炉	中央部　炉0.35×0.32×0.07m 掻き出し部0.4×0.35×.02m
切り合い関係	SI02に切られる	土坑	未検出
規模・深度	0.2m	柱穴	未検出
面積	14.14㎡（掘削部分）	備考	

切り合い関係のため、3/4ほどが残存した楕円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡掘削時から多量の炭化物と焼土が確認されている。住居跡の中央部では長さ約40cmの炭化材が数点出土し、木目から中央部に向かって倒れたことが予想される。またその直下より、炭化したカヤが住居跡全面に渡って出土した。これらは住居跡の屋根材であることが推定され、焼失住居である可能性が考えられる。

住居跡の中央部に位置すると想定される炉跡は浅く掘り込まれており、西側に灰の掻き出し部も確認された。土坑や柱穴は確認できなかった。



① 2.5Y6/2灰黄色粘質土　鉄分を柱状に多く含む。
② 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　カーボンを粒状に少量含む。
③ 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　②層に比べやや粘質で遺物（細片）を少量含。
④ 2.5Y7/2灰黄色粘質土　カーボンを多く含む。
⑤ 2.5Y7/2灰黄色粘質土　カーボンを粒状にわずかに含む。
⑥ 2.5Y5/2暗灰黄褐色粘質土　⑤層に比べやや粘質。
⑦ 2.5Y5/2暗灰黄褐色粘質土　粘性が強くカーボンをブロック状に多く含む。
⑧ 2.5Y6/6明黄褐色粘質土　弥生後期土器多く含む。

0　1m

Fig.23　2区SI03実測図

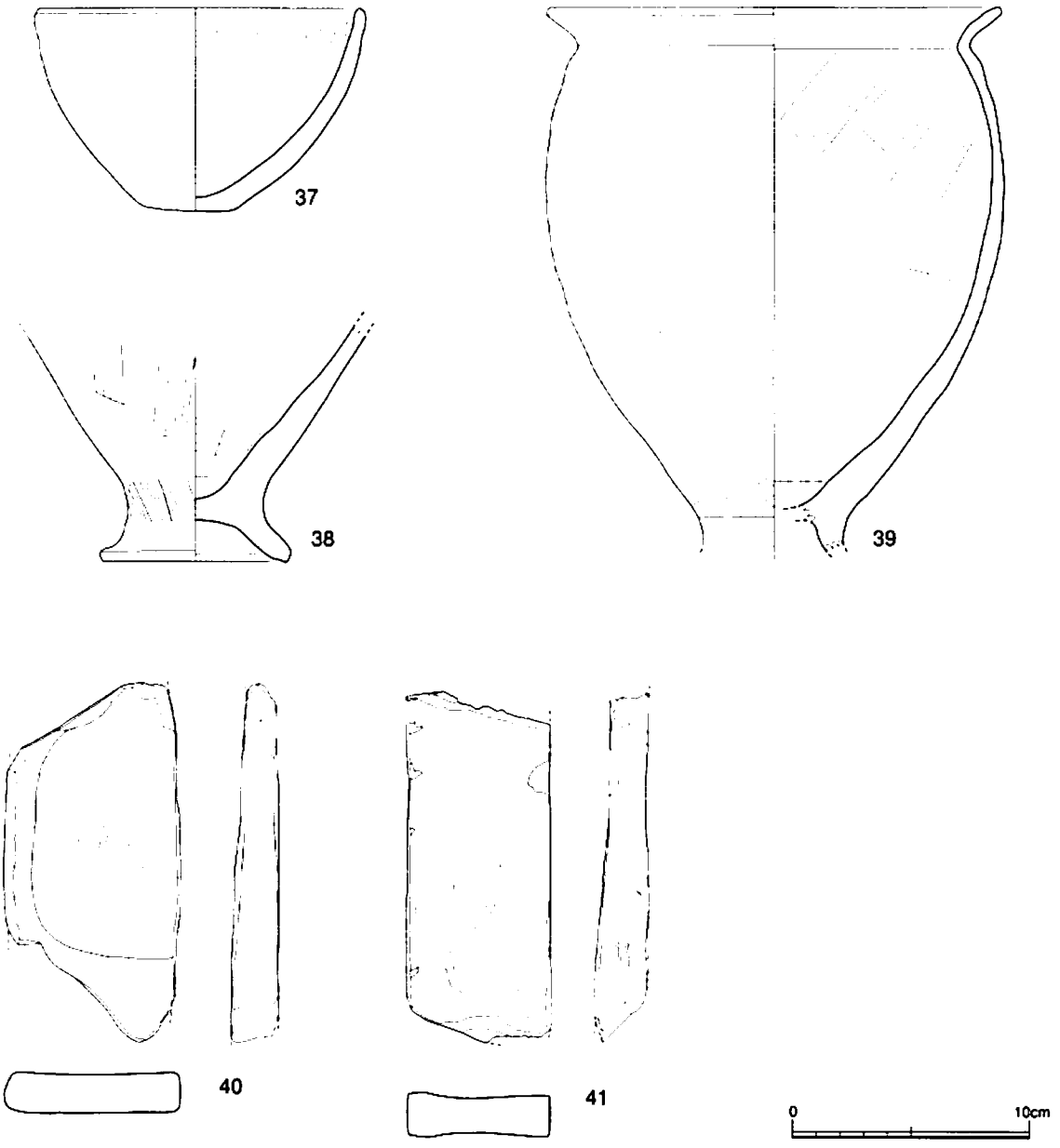


Fig.24　2区SI03出土遺物実測図

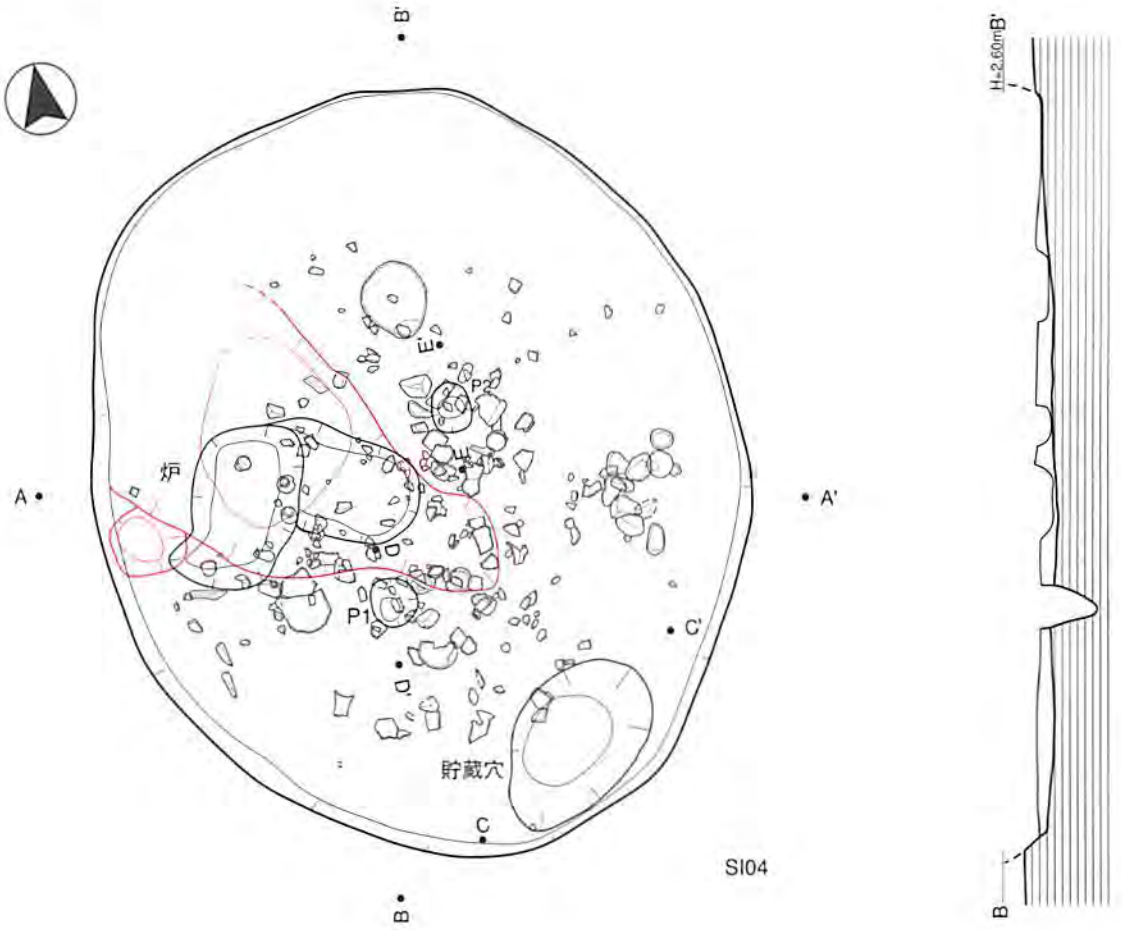
37　鉢形土器である。平底を呈しやや内湾する胴部がそのまま口縁部に至る。口縁端部は丸く成形される。口縁部付近の内器面には指頭圧痕が連続して観察される。

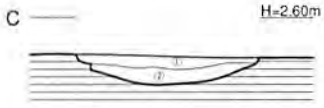
38　甕形土器の脚台部である。僅かに外反しながら短く開き低い。外器面の調整は磨耗の為不明であるが、内器面は刷毛目、底部にはナデ調整が施されている。

39　甕形土器である。胴部最大径を上位に持ちやや丸く、胴部は強く張り口縁部と胴部の境では強くしまる。口縁部は短く直線的に開き、内・外器面ともにわずかに刷毛目を残す。

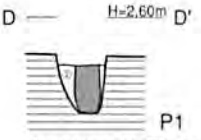
40　リソイダイト製の砥石である。1面だけに磨痕が認められ、中央部はやや窪む。

41　頁岩製の砥石である。表裏・右側面の3面に顕著な磨痕が認められる。表・裏面は使用により窪む。

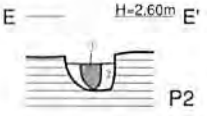




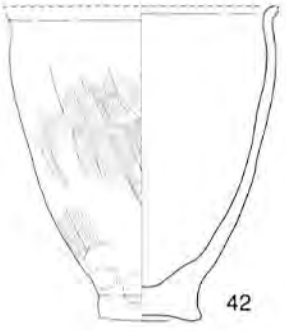
① 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　鉄分を部分的に含む。スミの塊（3～4cm程度）・スミ粒含。マンガン粒を全体的に多く含む。粘質はそれほど強くない。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土　粘質弱い。鉄分を全体的に含む。マンガン粒をごく僅か含む。スミ粒を微量（1～2粒程度）含。

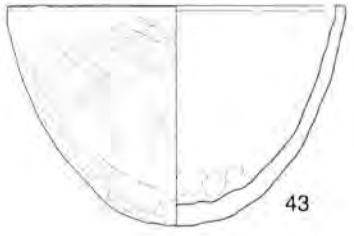


① 2.5Y4/2暗灰黄色粘土　柱根と考えられる。鉄分を柱状に含む。スミ粒・焼土含。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土　鉄分を柱状に含む。マンガンの粒含。スミ粒・焼土粒を含むが①層ほどではない。柱の掘り方と考えられる。



① 2.5Y4/2暗灰黄色粘土　柱根と考えられる。鉄分・土器粒・スミ粒含。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土　鉄分・土器片・スミ粒含。柱の掘り方と考えられる。





0　1m

0　10cm

Fig.25　2区SI04実測図

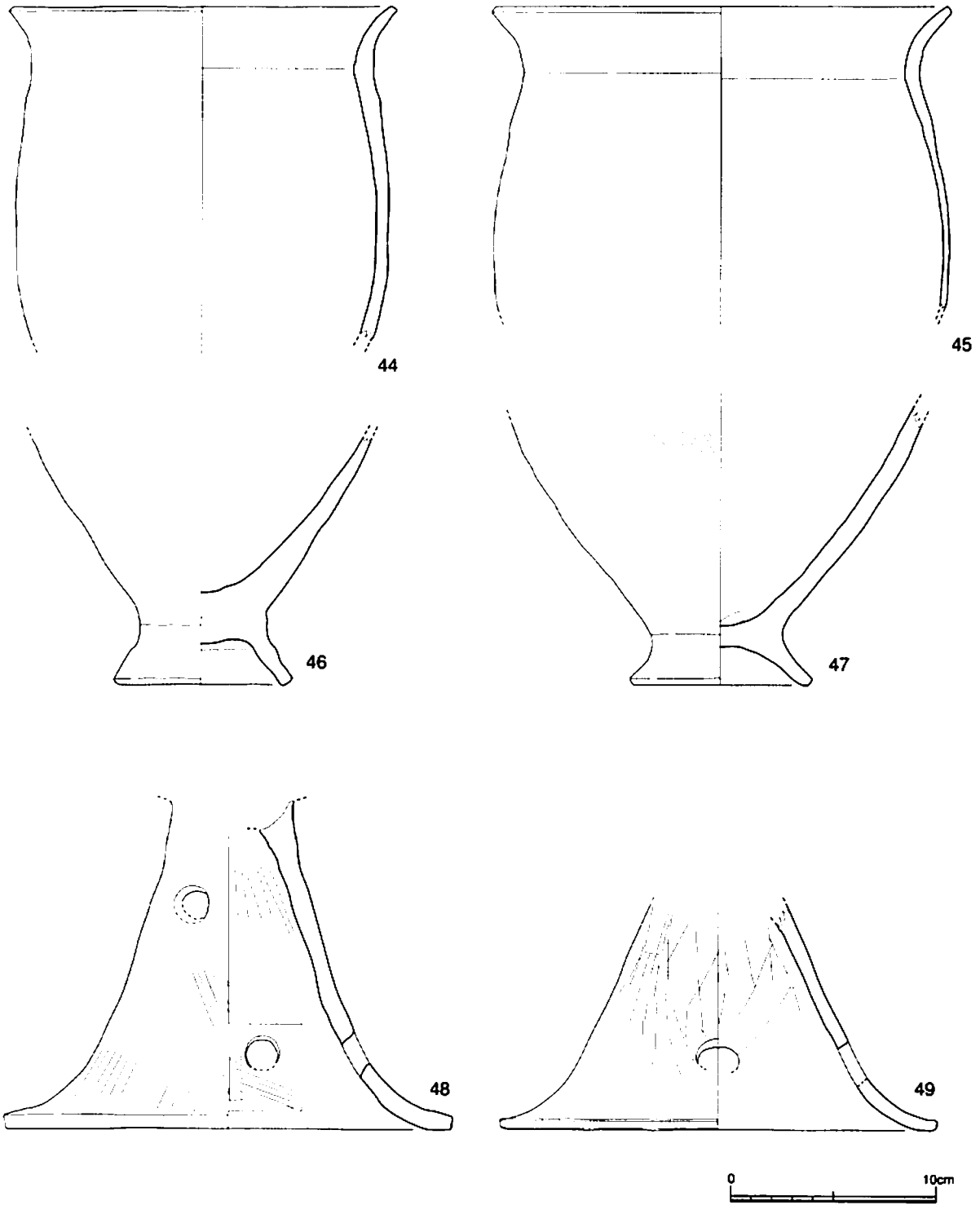


Fig.26　2区SI04出土遺物実測図

42　胴部最大径を上位に持つ小型の甕形土器である。口縁部は僅かに屈曲して短く外方へ開く。底部はくびれるがやや厚く、上げ底の脚台部を有する。外器面に刷毛目、内器面にナデが認められる。

43　丸底を呈する鉢形土器である。胴部は内湾しながら口縁部に至り、端部は四角に成形される。磨耗の為調整は不明瞭であるが、内器面底部に指頭圧痕が認められる。

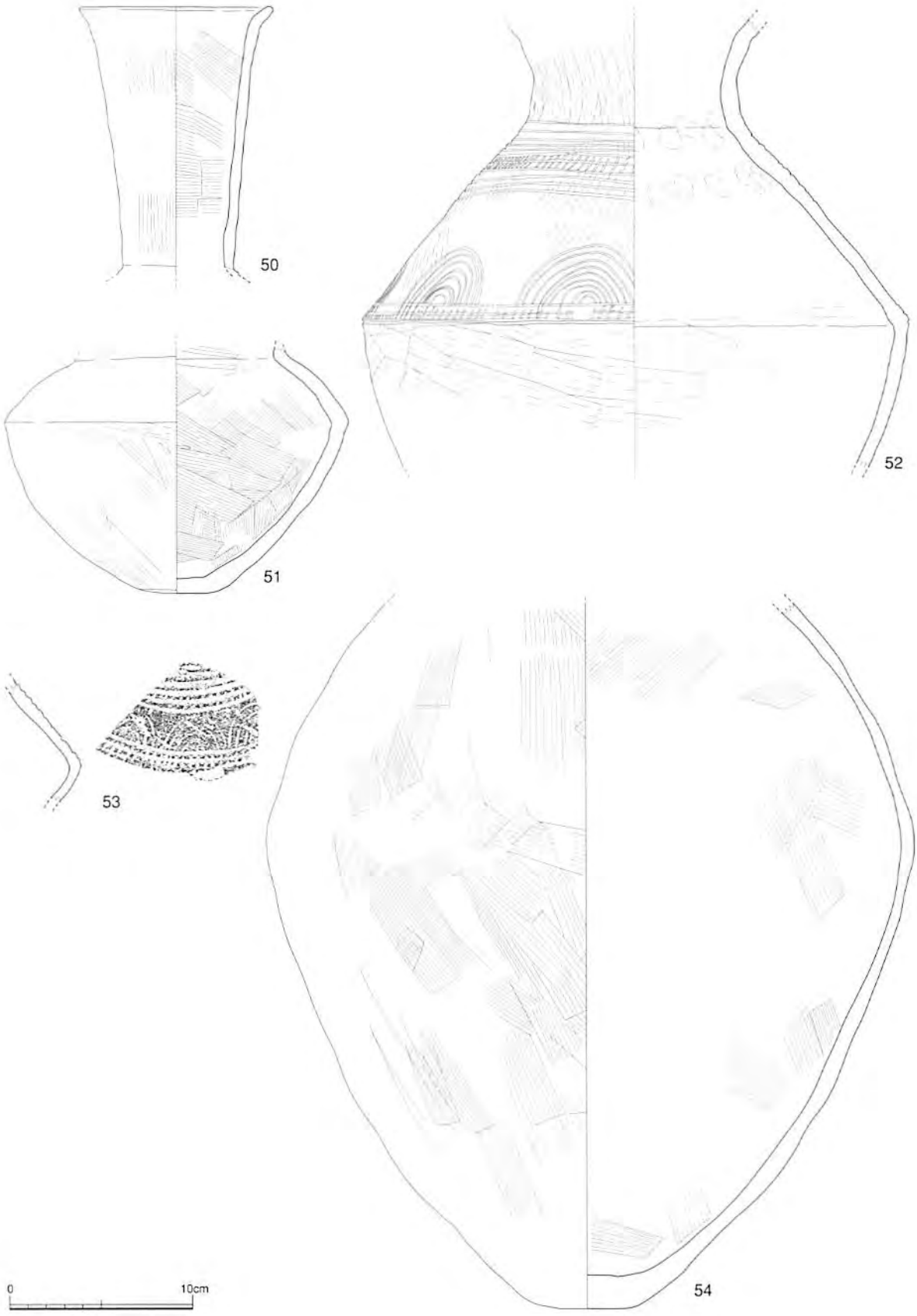


Fig.27　2区SI04出土遺物実測図

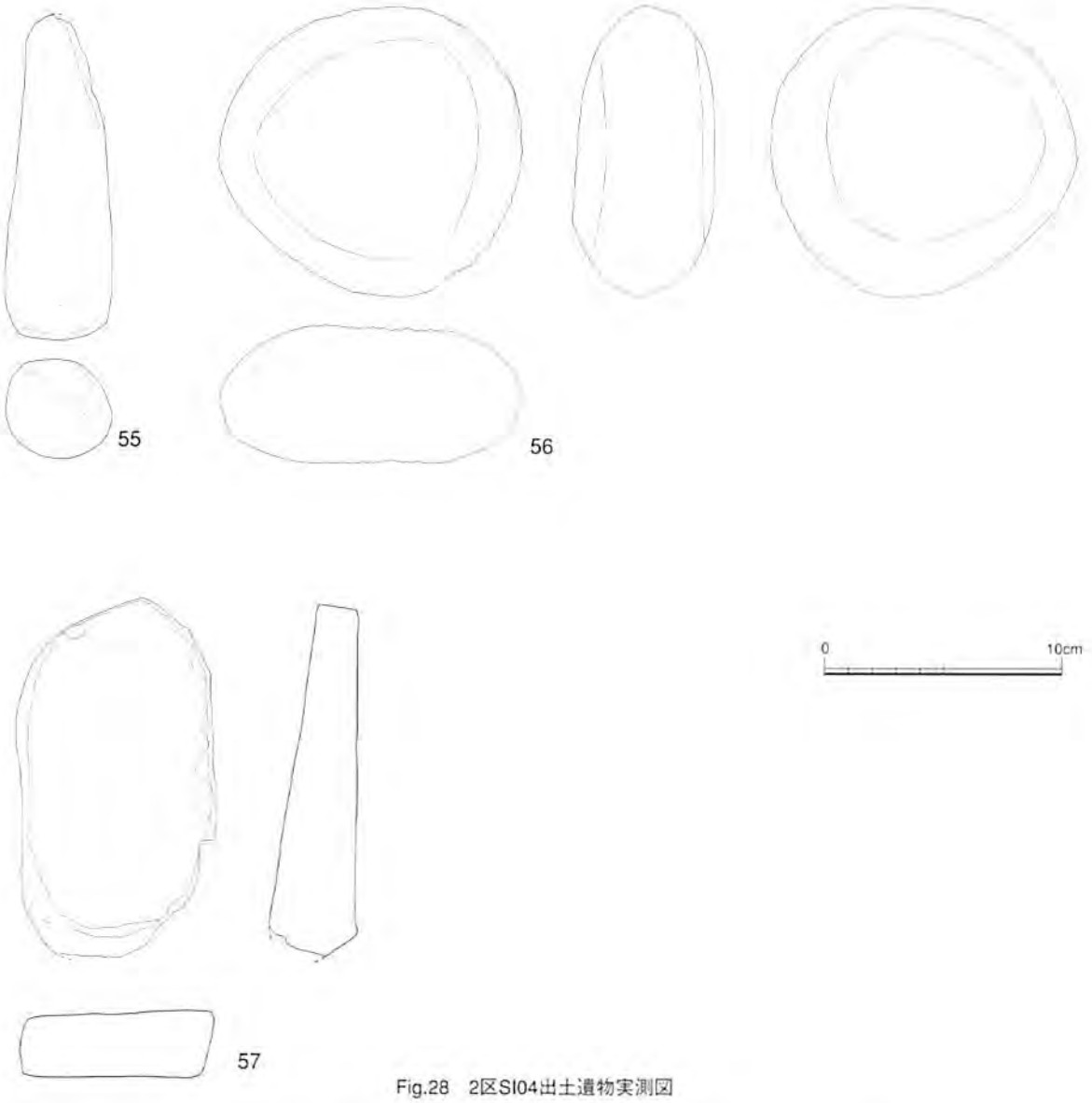


Fig.28　2区SI04出土遺物実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI04	主軸方向	A-A':W=2°
時期	弥生時代後期	炉	中央西部　0.87×0.55×0.1m 掻き出し部1.02×0.53×0.05m
切り合い関係	無	土坑	南東隅　0.85×0.41×0.16m
規模・深度	3.43×4.03m×0.1 m	柱穴	P1　0.25×0.2×0.18m (柱痕0.12×0.12×0.18m) P2　0.3×0.25×0.3m (柱痕0.14×0.12×0.3m)
面積	10.90㎡	備考	

楕円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の中央西部に位置する炉跡は、長楕円形を呈し浅い掘り込みを持つ。そして炉跡から東側に向かって、灰を掻き出した痕跡が認められる。南東隅部に位置する土坑は、長楕円形を呈して浅い掘り込みをもち、その埋土は炭塊・炭粒などを含むことから貯蔵穴と考えられる。また中央部に位置する柱穴は共に柱痕を有し、主柱穴と考えられる。

44　甕形土器である。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は緩やかに屈曲して上方へ直線的に開き、端部は四角く成形される。内･外器面共に磨耗のため調整は不明である。

45　甕形土器である。胴部最大径を中位に持ち、口縁部はやや肥厚し緩やかに外反して上方へ開く。端部は四角に成形される。肥厚した口縁部と比べ、胴部は薄く仕上げている。内･外器面共に磨耗のため調整は不明である。

46　甕形土器の脚台部である。脚台部は直線的に開き、端部は四角に成形されて低い。接合部に強い横ナデが認められる。

47　甕形土器の脚台部である。脚台部は直線的に開き、端部はナデにより四角く成形されて低い。胴部はやや丸みを帯びながら立ちあがる。おそらく、体部中位に最大径を有する器形を成すと思われる。

48　高杯形土器の脚部である。下方に向かい緩やかに外反し、裾部は強く外湾する。裾端部はナデのため角張る。復元した結果、上下それぞれ3箇所の穿孔が互い違いに施されることが想定される。外器面には明瞭に刷毛目が認められる。杯部は欠損している。

49　高杯形土器の脚部である。裾部は強く外湾し、端部は角張る。穿孔は3箇所に見られる。杯部・脚上部は欠損している。

50　重弧文長頸壺形土器の頸部である。ゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁端部で僅かに屈曲し開く。端部は丸くおさまる。胴部との接合面で剥離し、肩部施文部の横位沈線がわずかに確認される。内･外器面共に明瞭に刷毛目を残す。

51　短頸壺である。口縁部は欠損しているが短く外に開くことが推定される。胴部上位に屈曲部を持ち、算盤形を呈する。底部は凸レンズ状を呈する。内器面に刷毛目をよく残す。

52　重弧文壺形土器である。胴部中位にやや角度の浅い屈曲部を有する。肩部から胴部にかけて多くの横位沈線がめぐり、その沈線上に一部刻み目状の縦位短沈線が施される。その下位には10重程度の重弧文が上向きに巡る。また屈曲部には3条の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。頸部から上部は短く立ち上がり開き気味に端部へ向かう。端部は欠損している。頸部及び胴部屈曲部以下には、刷毛目が施され、内器面の頸部と胴部の接合部には指頭痕がわずかに認められる。

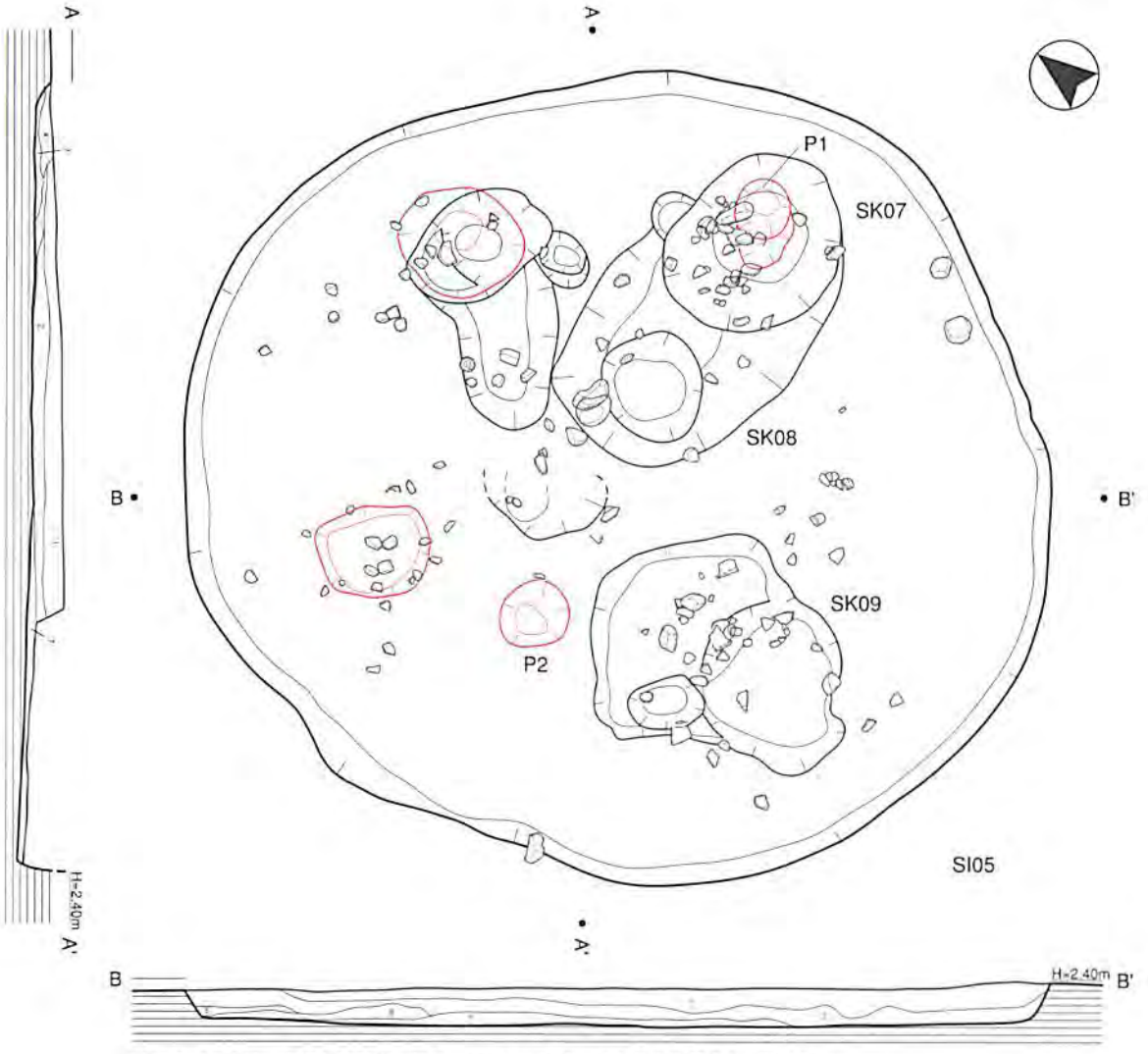
53　重弧文壺形土器施文帯部片である。胴部中位に直角よりやや広い角度で屈曲を呈する。肩部から胴部にかけて横位沈線が巡り、一部に刻み状の縦位短沈線が施される。その下位にはおよそ直径3.5cmの小型の重弧文が上向きに施されている。また、屈曲部上位には2本の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。磨耗が激しく器面調整・施文は観察しがたい。

54　胴部中位に最大径をもつ壺形土器である。底部形態は凸レンズ状を呈する。外器面は掻き上げた刷毛目を明瞭に残し、内器面は刷毛後ナデが認められる。胴部上位から口頸部を欠損している。

55　砂岩製の敲石である。棒状を呈し、両端部ともに敲打痕が顕著で、上部は使用による欠損が認められる。

56　敲石である。熔結凝灰岩製で扁平な円形を呈する。表・裏面中央部及び側面全体に敲打痕が顕著に認められる。

57　頁岩製の砥石である。作業面は表・裏両面に認められる。表面には縦方向の磨痕が顕著に認められ僅かに窪む。



① 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分・マンガン粒含。スミ粒を少量含む。粘性強い。
② 2.5Y4/2暗灰黄粘質土　鉄分を柱状に含む。マンガン粒・土器片・スミ粒含。粘性強い。
③ 2.5Y3/1黒褐色粘土　スミの塊・土器粒含。鉄分を少量含む。炉の掘り方と考えらえる。
④ 5Y4/1灰色混砂粘質土　鉄分を少量含む。スミ粒含。粘性弱い。
⑤ 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土　スミ粒・マンガン粒含。鉄分を粒状に含む。
⑥ 2.5Y3/2黒褐色粘土　鉄分・スミ粒・拳大の礫含。砂を若干含むが⑦層ほどではない。
⑦ 5Y5/1灰色混砂粘土　鉄分を全体的に含む。スミ粒含。

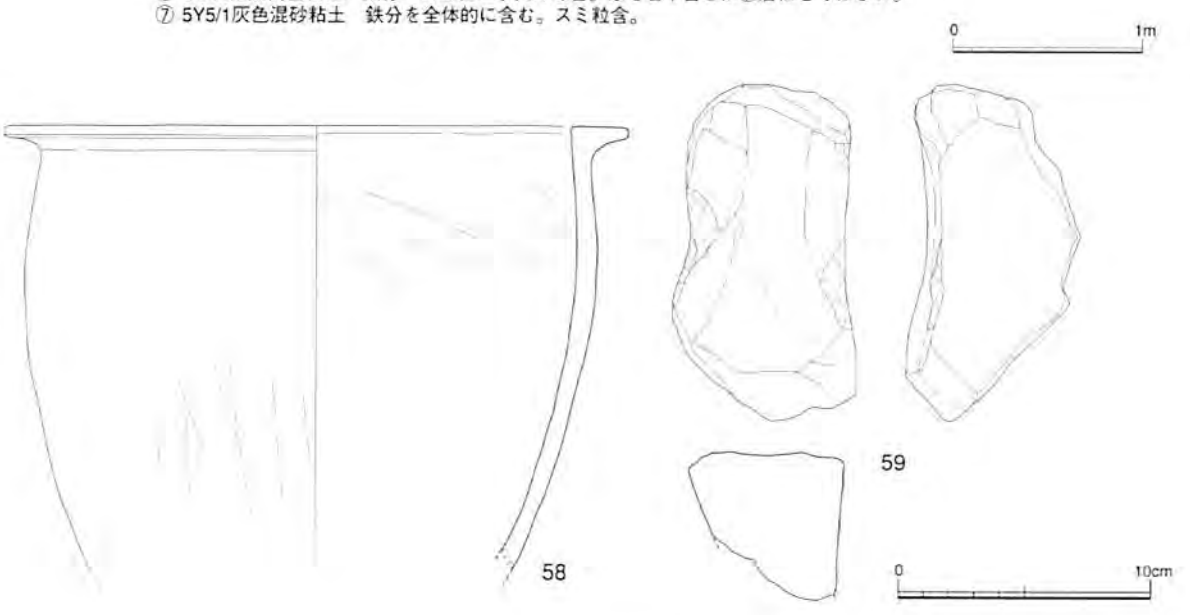


Fig.29　2区SI05実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI05	主軸方向	A-A':N=38°
時期	弥生時代中期	炉	北西隅部　炉0.78×0.52m×0.24m 掻き出し部　0.77×0.5×0.06m
切り合い関係	無	土坑	西部　1.59×1.15×0.02m 0.58×0.54×0.17m 1.03×0.84×0.06m 南部　1.35×1.12×0.05m
規模・深度	4.69×4.29m	柱穴	P1 0.33×0.3×0.65m P2 0.41×0.35×0.65m
面積	16.06㎡	備考	

楕円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の北西部に位置する炉跡を中心にして、住居跡全体に炭化物片や焼土が確認された。また、炉跡を中心として南側に向かって灰の掻き出し部も検出された。住居跡の東部に位置する土坑は長楕円形の浅い掘り込みをもち、さらに東西2方向に深い掘り込みを持つ。また南部の土坑は非常に浅い掘り込みをもつ。いずれの土坑も性格は分からなかった。さらに検出された2基の柱穴からは柱痕は確認できなかった。

58　甕形土器である。逆L字の口縁部をもち逆円錐形の器形を呈する。器面調整は磨耗のため明瞭ではない。底部は欠損のため不明。

59　リソイダイト製の砥石である。断面三角形を呈し全面に縦方向の磨痕が認められる。表面には敲打痕もあり、中央部は使用によりやや窪む。

遺構名	竪穴式住居跡SI06	主軸方向	A-A':W=1°
時期	弥生時代後期	炉	中央部0.67×0.54×0.11m
切り合い関係		土坑	未検出
規模・深度	4.25×4.12m×0.1m	柱穴	未検出
面積	14.60㎡	備考	

長楕円を呈する竪穴式住居跡である。住居跡全面にわたって多量の土器が出土している。埋土は粘質土であり粘土層を床面としている。住居跡中央部に位置する炉跡は円形を呈して浅い掘り込みを持ち、炭化粒を含む。

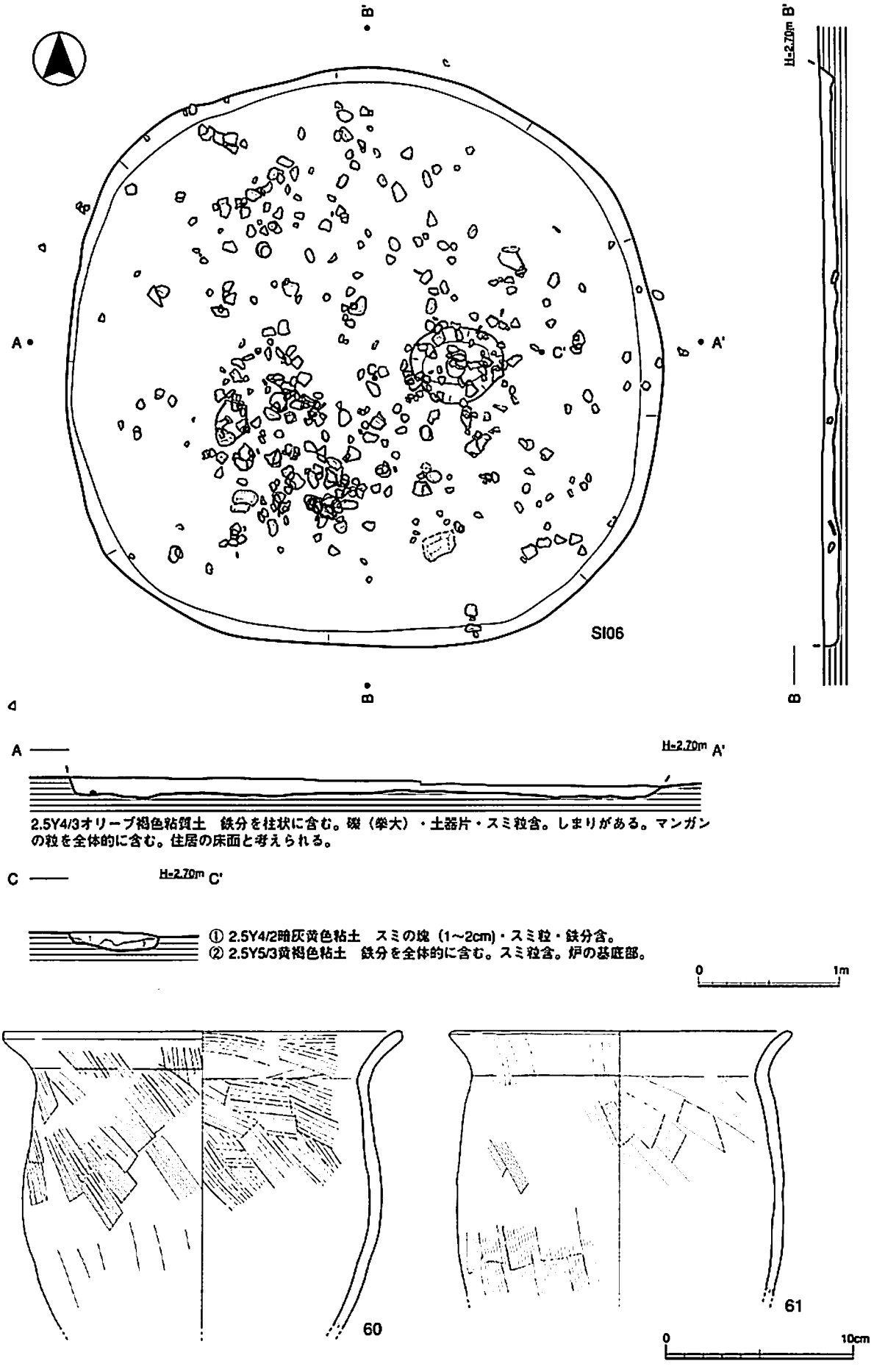


Fig.30　2区SI06実測図

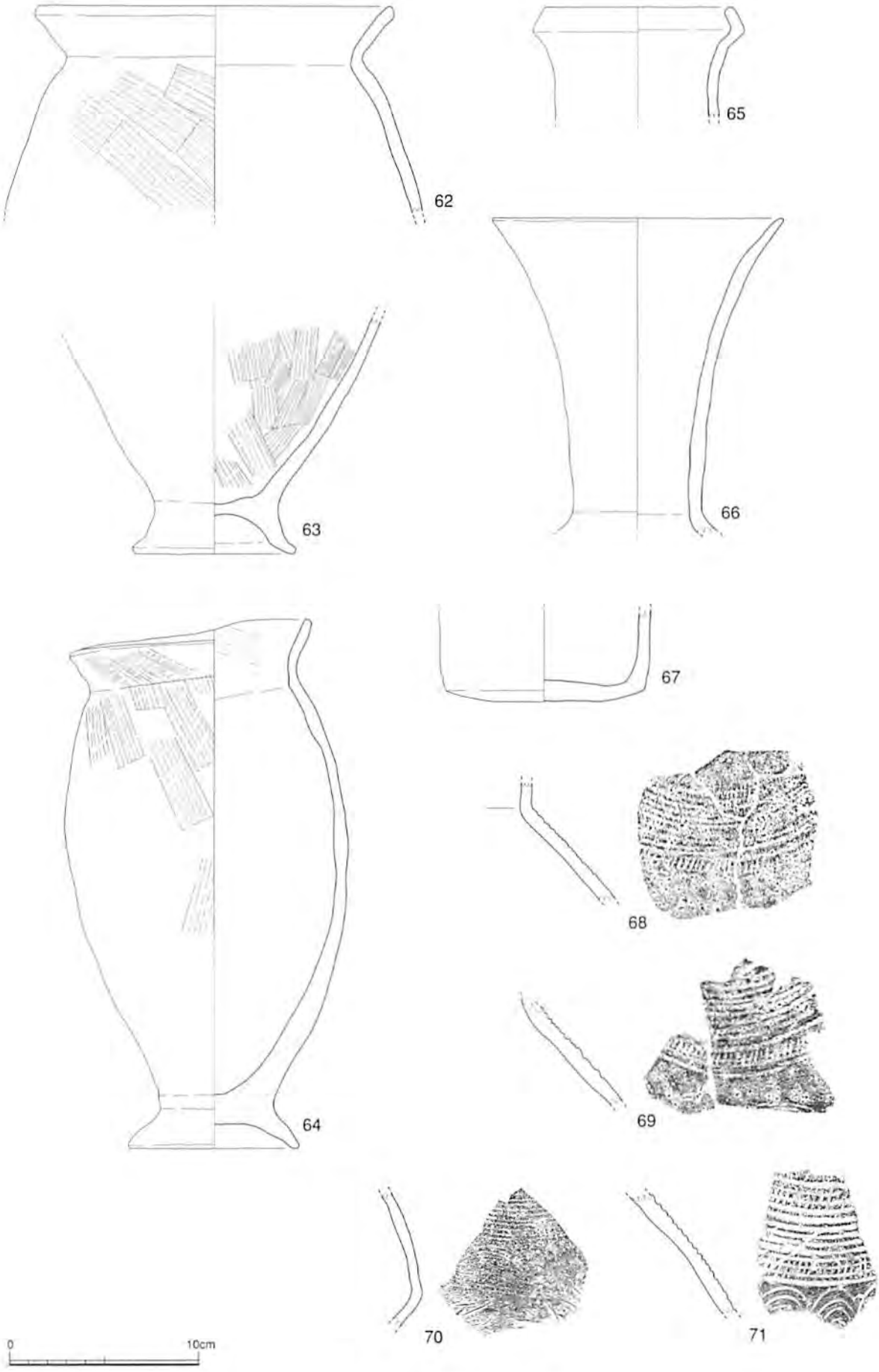


Fig.31　2区SI06出土遺物実測図

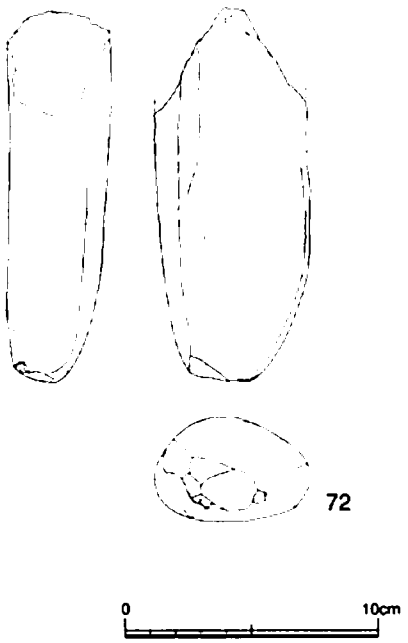


Fig.32　2区SI06出土遺物実測図

60　甕形土器である。口縁部はやや外反しながら立ち上がる。端部はナデによりやや角張る。胴部は最大径を中央部付近に有し脚台部へと向かう。内・外器面とも上方へ引き上げた刷毛目を明瞭に残す。

61　甕形土器である。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は僅かに屈曲して外反しつつ上方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。内・外器面ともに刷毛目を残す。

62　甕形土器である。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は屈曲して直線的に開き、端部は四角に成形される。頸部と胴部の境は強く横ナデにより押さえられる。

63　甕形土器の脚台部である。短く外反して低い。外器面の調整は磨耗の為不明である。内器面は刷毛目、底部はナデが施されている。

64　甕形土器である。胴部最大径を中位にもつ。口縁部は胴部よりやや屈曲して上方へ直線的に開き、端部成形は四角におさまる。脚台部は直線的に伸びて低い。

65　複合口縁壺形土器の頸部から口縁部である。頸部は直立し、口縁部はやや外反して開き、口縁端部に向かい内湾する。

66　長頸壺形土器の頸部である。胴部との接点からゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁端部付近で薄くなりつつ、更に大きく外反する。内・外器面とも著しく磨耗している。

67　丸底形土器である。底部は緩やかな丸底を呈し、直立するように直角に屈曲して直線的に胴部へ向かう。内・外器面には薄く横ナデが施される。断面観察より底部と胴部の接合面が観察される。欠損のため器形は不明であるが、ジョッキ型土器の底部であると思われる。

68　重弧文壺形土器の胴部片である。僅かに残る頸部直下より数条の横位沈線が巡り、一部に刻み状の縦位短沈線が施される。その下位に上向きに重弧文、屈曲部には横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。内器面は横ナデが施される。

69　重弧文壺形土器の胴部片である。頸部直下の部分で多くの横位沈線が巡り、刻み状の縦位短沈線が施されている箇所もある。磨耗が著しく、施文・調整などの観察はし難い。

70　重弧文壺形土器の胴部片である。途中にやや緩い屈曲部を有する。施文部は上位に横位沈線、その下位に上向きに重弧文、さらに屈曲部には横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されているが磨耗が激しく施文・器面調整は観察し難い。

71　重弧文壺形土器の胴部片である。上位の横位沈線文様帯は幅広く、刻み状の縦位短沈線が施される箇所もある。その下位には直径2.5cm程度の小型の重弧文が上向きに3箇所確認される。

72　砂岩製敲石である。棒状を呈し、敲打痕が表面全体と端部に顕著に認められる。特に端部は平坦になるほど使用されている。上部は欠損している。

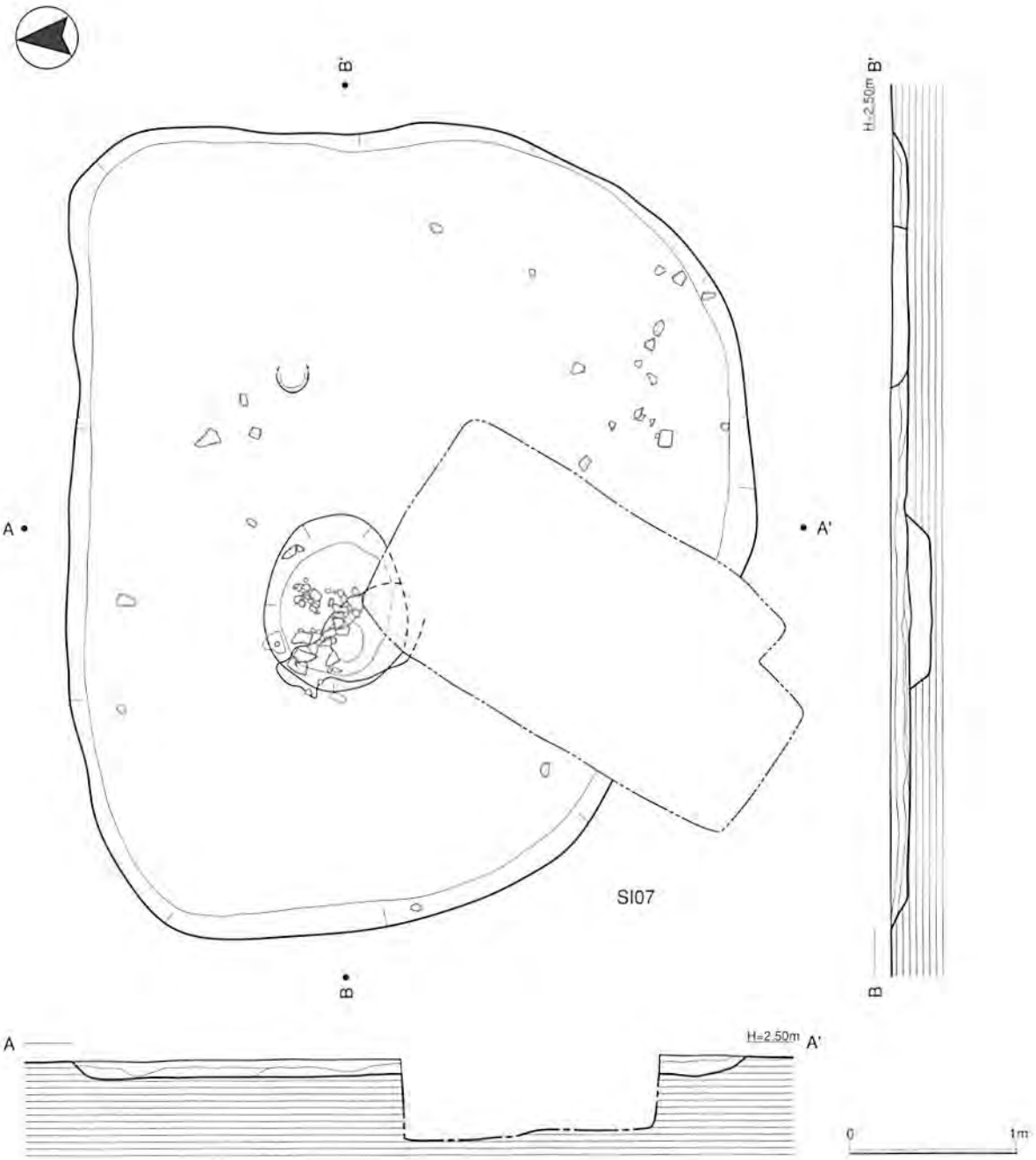


Fig.33　2区SI07実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI07	主軸方向	A-A':N=3°
時期	弥生時代後期	炉	中央部1.05×0.9×0.12m
切り合い関係		土坑	未検出
規模・深度	4.10×4.80m×0.24m	柱穴	未検出
面積	16.77㎡	備考	

北側に隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。しかし、南側は不定形の平面形をなす。遺構の一部をトレンチにより切られ、炉の一部にもかかる。住居跡の中央に位置する浅い掘り込みの下部より炭が集中して認められることから、炉跡と考えられる。遺物の集中は炉跡周辺が顕著である。

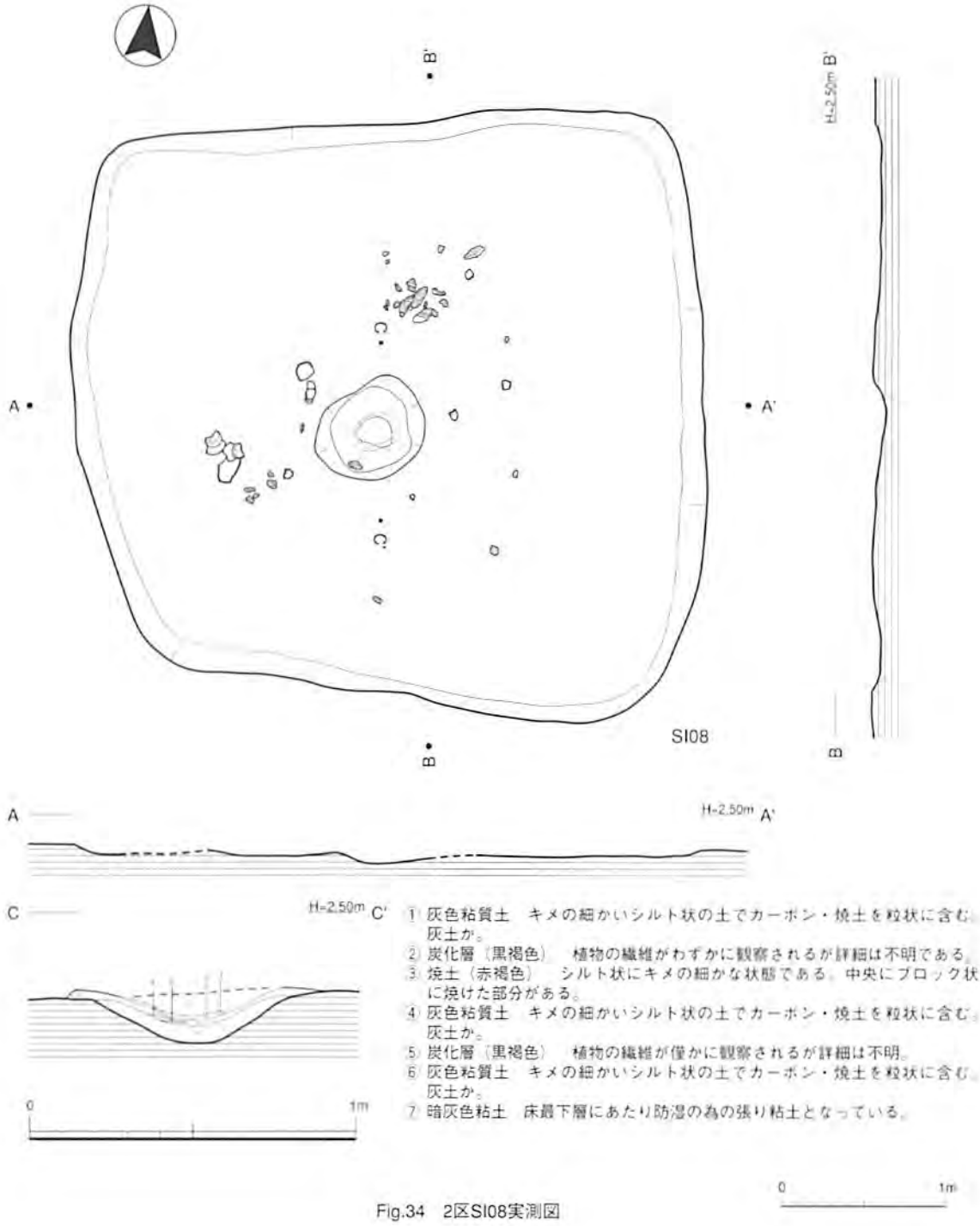


Fig.34　2区SI08実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI08	主軸方向	A-A':W=7°
時期	弥生時代後期	炉	中央部　0.62×0.62×0.15m
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	3.85×3.52m	柱穴	未検出
面積	12.71㎡	備考	

隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の中央部に位置する炉跡は浅い擂鉢状を呈している。粘土層、焼土層、炭化物層の順番に二度に渡って堆積している状況が確認される。また焼土は非常に比熱した状態であり、長期間に渡って使用されていたことが想定される。

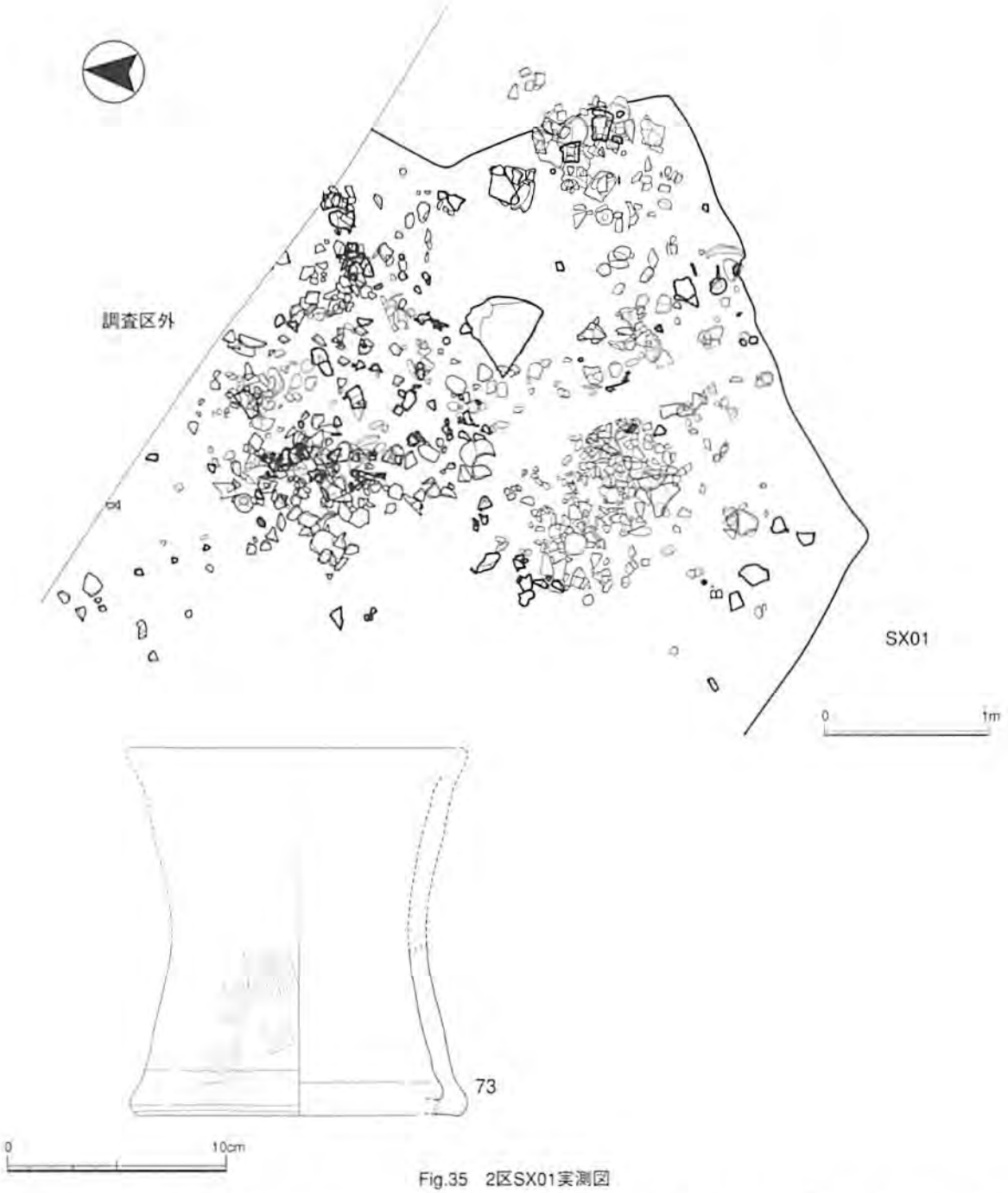


Fig.35　2区SX01実測図

大量の土器や台石が出土している。本遺構は平面プランの検出作業、土層断面観察、そして土器の分布状況より少なくとも2軒の竪穴式住居跡が切り合い関係で存在することが考えられる。しかし、地山と遺構埋土に明確な差異が認めらないことや、台石から想定できる床面の広がりが曖昧であることなどから調査は難航した。また、やはり切りあっているSI01との関係も同様な状況であるため不明確である。そのため、SI01とSX01の平面プラン、及び遺物の帰属については曖昧にならざるを得ない。

遺構名	SX01	主軸方向	
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SI01を切る	土坑	未検出
規模・深度	不明	柱穴	未検出
面積	不明	備考	

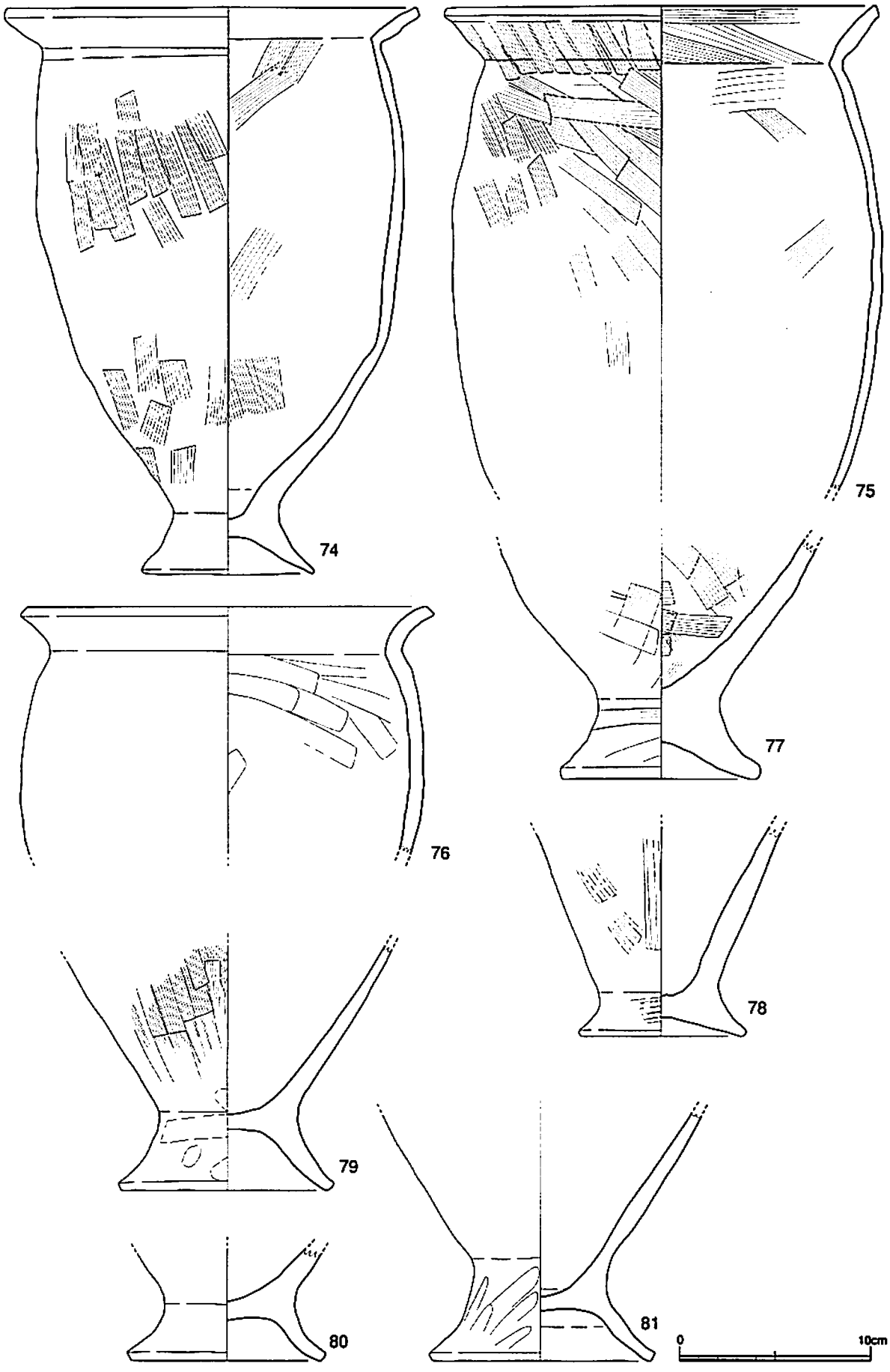


Fig.36　2区SX01出土遺物実測図

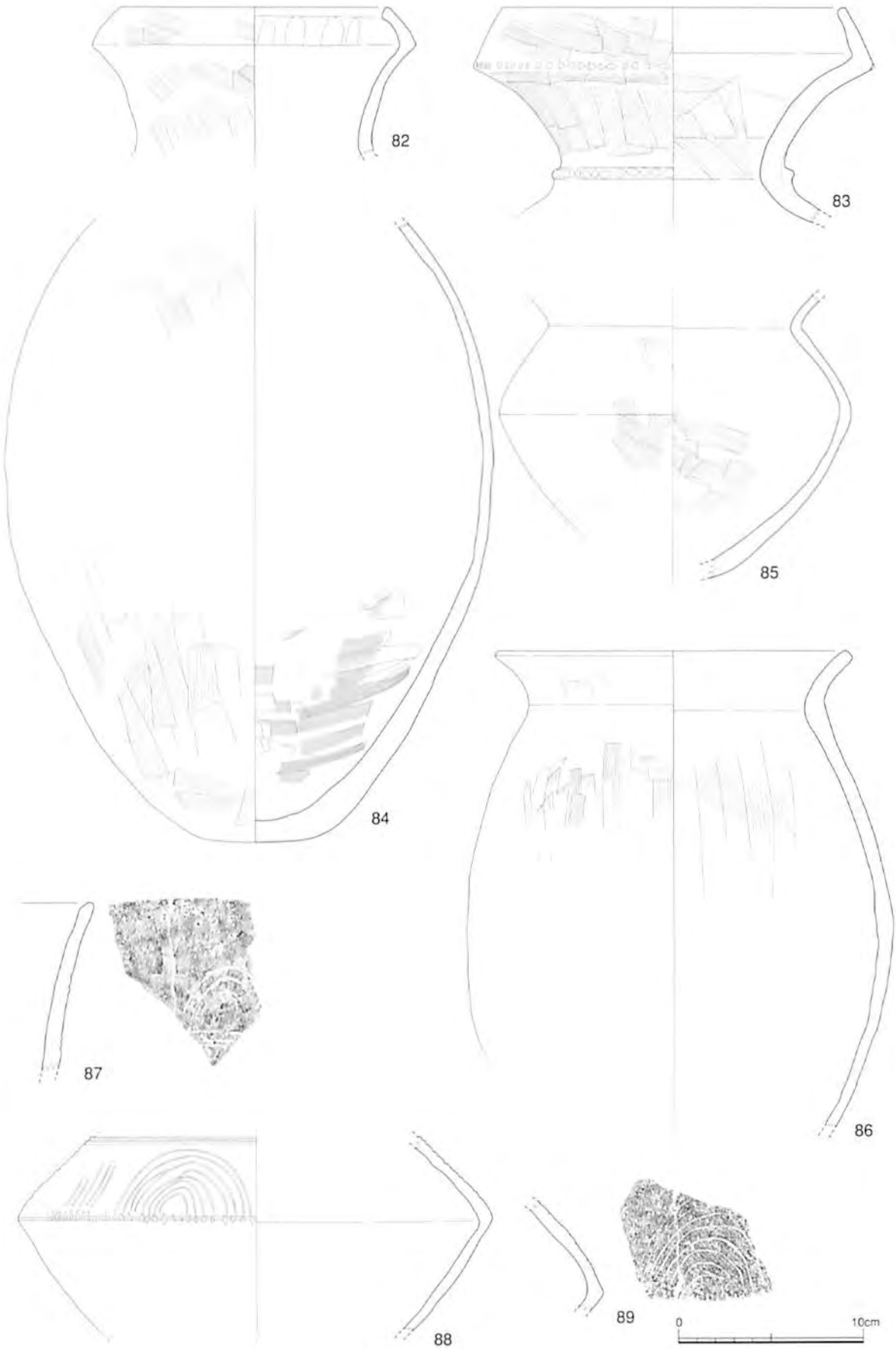


Fig.37　2区SX01出土遺物実測図

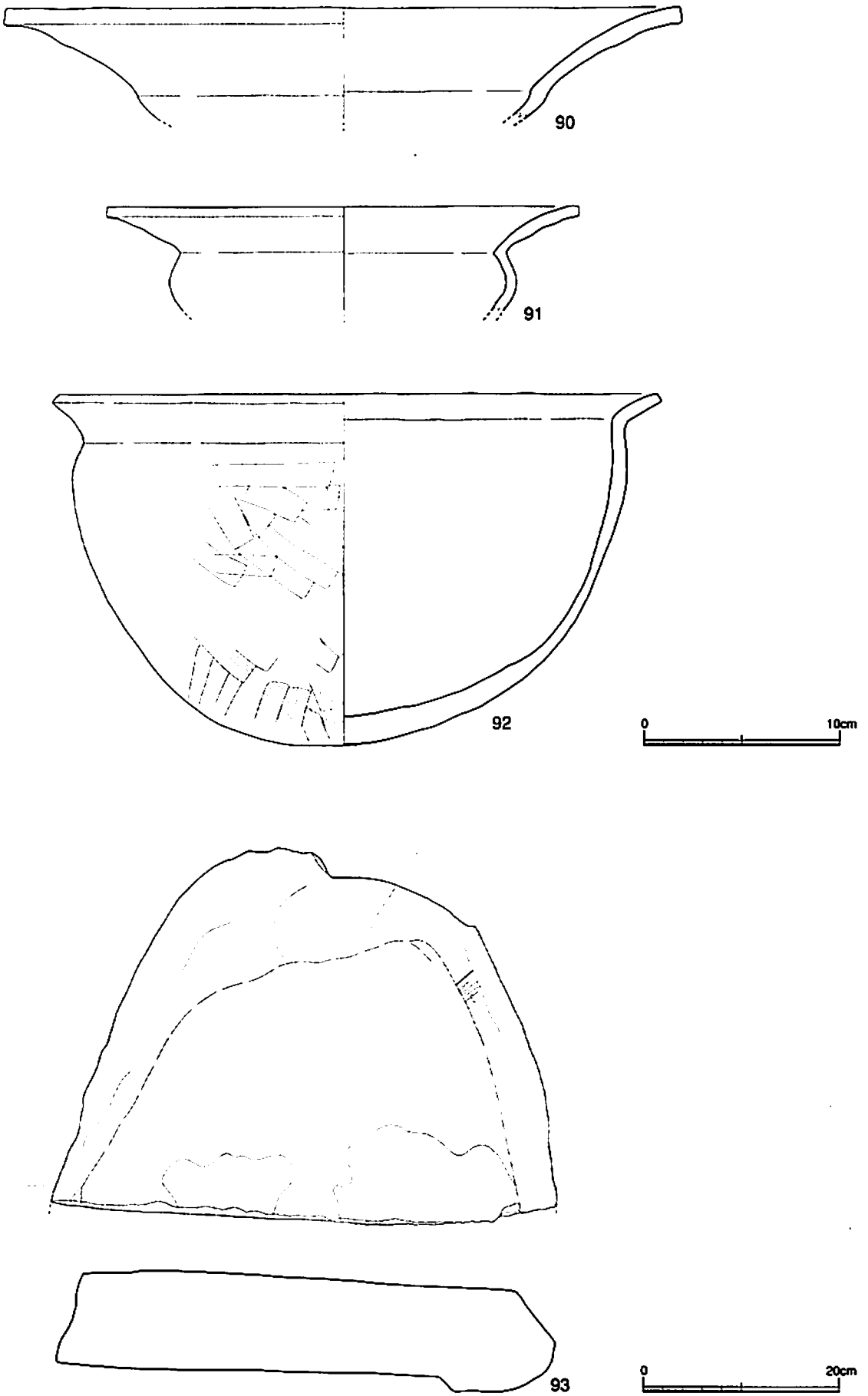


Fig.38　2区SX01出土遺物実測図

73　ジョッキ形土器である。平底を呈し、屈曲しやや内傾しながら立ち上がり胴部に至る。外器面は刷毛目、内器面はナデが施される。

74　甕形土器である。胴部上位から中位にかけて最大径を有する。口縁部は肥厚して「く」の字に屈曲して直線的に開き、端部はナデにより角張る。胴部は肥厚した口縁部と比して薄く作られている。脚台部は直線的に開き、端部成形は丸く低い。内・外器面共に上方へ掻きあげた刷毛目が観察される。

75　甕形土器である。胴部最大径を中位に有する。口縁部は肥厚して「く」の字に屈曲してやや外反し、端部はナデにより角張る。肥厚した口縁部と比べ胴部は薄く仕上げられる。内・外器面共に上方へ掻きあげた刷毛目が明瞭に残る。

76　甕形土器である。胴部最大径を中位に持ちやや丸みを帯びる胴部を呈する。口縁部は短く外反し、端部はナデにより四角におさまる。器面調整は内・外器面共に摩滅が著しく確認し難い。

77　甕形土器の脚台部である。緩やかに外反して開き、端部は丸く成形されて低い。内器面は全体的に刷毛目を残す。おそらく76の甕胴部の脚部にあたるものと思われる。

78　甕形土器の脚台部である。短く外反して開き、端部はナデにより丸く成形されて低い。底部外面から直線的に脚台部に至る。

79　甕形土器の脚台部である。僅かに外反して開き、端部は四角く成形されて低い。胴部はやや丸みを帯びる器形を呈するようである。

80　甕形土器の脚台部である。下方に向かい緩やかに外反して開き、端部はナデにより四角におさまり低い。

81　甕形土器の脚台部である。下方に向かいやや外反して開き、端部成形は四角におさまって低い。脚台部および底部は薄く仕上げている。外器面に縦方向にナデ痕が残る。

82　複合口縁壺形土器の口縁部である。やや外反して開き、のち強く屈曲して内傾する。外器面は刷毛目が認められ、内器面には指なでの痕跡が窺える。

83　複合口縁壺形土器の口縁部である。胴部接合部から頸部にかけて大きく外反して開き、のちに強く屈曲して内傾する。頸部には1条の刻み目突帯が貼り付けられ、外面屈曲部には刻み目が巡る。口縁部は横方向の刷毛目が認められ、頸部は縦方向の刷毛目が施されている。内・外器面共に刷毛目が観察される。

84　胴部中位に最大径をもつ壺形土器である。底部形態は凸レンズ状を呈する。内・外器面共に刷毛目を明瞭に残す。口頸部は直接の接点はないが82の複合口縁の頸部がくるものと思われる。

85　鉢形土器である。最大径を胴部中位にもち、頸部で「く」の字に屈曲して外反し口縁部に至る。内・外器面の調整はいずれも刷毛目調整である。口縁端部および底部の形態は欠損のため不明である。

86　甕形土器である。胴部中位に最大径をもつ。口縁部は緩やかに外反して開き、端部成形は四角におさまる。内・外器面共に刷毛目が認められる。

87　重弧文壺形土器の頸部から口縁部である。頸部はゆるやかに外反して立ち上がり、丸くおさめられた口縁端部に至る。頸部中位に上向きの重弧文が施文され、さらにその下位に横位沈線が巡る。内・外器面はナデ調整が施される。

88　重弧文壺形土器の胴部片である。胴部中位に直角よりやや広がる屈曲部をもつ。肩部から胴部にかけて横位沈線が施される。その下位には7重ほどからなる上向きの重弧文が施されている。さらに屈曲部に刻み状の縦位短沈線が施されている。磨耗が激しく器面調整などは観察しがたい。頸部および底部は欠損のため不明である。

89　重弧文壺形土器の胴部片である。直角よりやや広い屈曲部を持つ。8重の重弧文が上向きに施されている。さらに屈曲部には横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。磨耗が激しく器面調整は観察し難

い。

90　高杯形土器の口縁部である。浅い杯部から複合的に屈曲して外湾しながら大きく開き、端部はナデにより角張る。内器面には磨きの痕跡が認められる。脚部及び杯部の底面は欠損する。

91　高杯形土器の杯部である。椀状の杯部を持ち複合的に外反し強く外反する。端部はナデにより角張る。内・外器面共に刷毛目後ナデである。脚部並びに杯底部以下を欠損する。

92　大型の鉢形土器である。底部は丸底で胴部の最大径を口縁部直下に有し、頸部で「く」の字に屈曲して直線的に開く。口縁端部は角張る。外器面は刷毛目が認められ、内器面はナデが確認される。

93　粘板岩製台石である。作業面は図で示した面のみで明瞭に磨痕が認められる。側面に工具状のもので削った痕跡がわずかに認められる。遺構床面直上から出土している。

包含層出土物

94　甕形土器である。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は屈曲してやや外反し、端部は四角に成形される。外器面に明瞭に刷毛目が確認される。

95　小型の甕形土器である。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は屈曲してやや上方へ直線的にのびて四角い端部に至る。台部は緩やかに外反して開き、端部はナデにより四角におさまって低い。

96　小型の鉢形土器である。凸レンズ状の分厚い底部を持ち、やや内反しながら丸く成形された口縁部に至る。外器面は上方へ掻きあげた刷毛目が明確に残る。

97　大型の鉢形土器である。凸レンズ状を呈する底部から直線的に上方へのびて口縁部に至る。端部は丸く成形されている。内・外器面共に刷毛目が施され、内器面底部にはわずかに削りも認められる。

98　甕形土器の脚台部である。脚台部は棒状に作られやや上げ底を呈する。外器面に刷毛目を明瞭に残す。

99　甕形土器の脚台部である。胴部からややくびれて分厚く僅かに上げ底である。調整は磨耗のため不明。

100　壺形土器の口縁部である。頸部で屈曲し、大きく外湾して口縁部に至る。端部はナデにより角張る。頸部に数条の沈線が施される。外器面はナデが施され、内器面には刷毛目の後ナデが施される。

101　短頸壺形土器である。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部を持つ。屈曲部からわずかに内反しつつ立ち上がり、口縁部で直立するように短く屈曲する。口縁端部は丸くおさまる。屈曲部以下も僅かに内反しつつ尖り底気味の底部に至ると推定される。外器面はヘラ磨き、内器面はナデが施される。

102　高杯形土器の脚部である。下方に向かい緩やかに外反し裾部は強く外湾する。裾端部はナデにより角張る。3箇所の穿孔が施される。杯部との接合面で剥離している。

103　高杯形土器の脚部である。杯部から緩やかに外反しながら下方に向かい、裾部で強く僅かに屈曲しつつ四角く成形された端部に至る。内器面にはナデが認められる。

104　高杯形土器の脚部である。直線的に下方に向かい、裾部でやや外反して四角に成形された端部に至る。細く長脚である。器面調整は磨耗により不明である。杯部形態は欠損のため不明である

105　重弧文壺形土器の胴部片である。肩部に階段状の条線が施され、縦位短沈線も観察される。

106　壺形土器の胴部片である。そろばん型の胴部に直角よりやや広い「く」状に屈曲部をもち、直上に3条の横位沈線が施されている。器形などから重弧文壺形土器と考えられるが、重弧文が確認されていないことからここでは壺形土器として報告する。

107　重弧文壺形土器の胴部片である。直角よりやや広い屈曲部を持つ。4重の重弧文が上向きに施されている。さらに肩部及び屈曲部には横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。

108　重弧文壺形土器の胴部屈曲部以の下部位である。屈曲部上位に3本の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。また屈曲部以下は刷毛目が施されている。

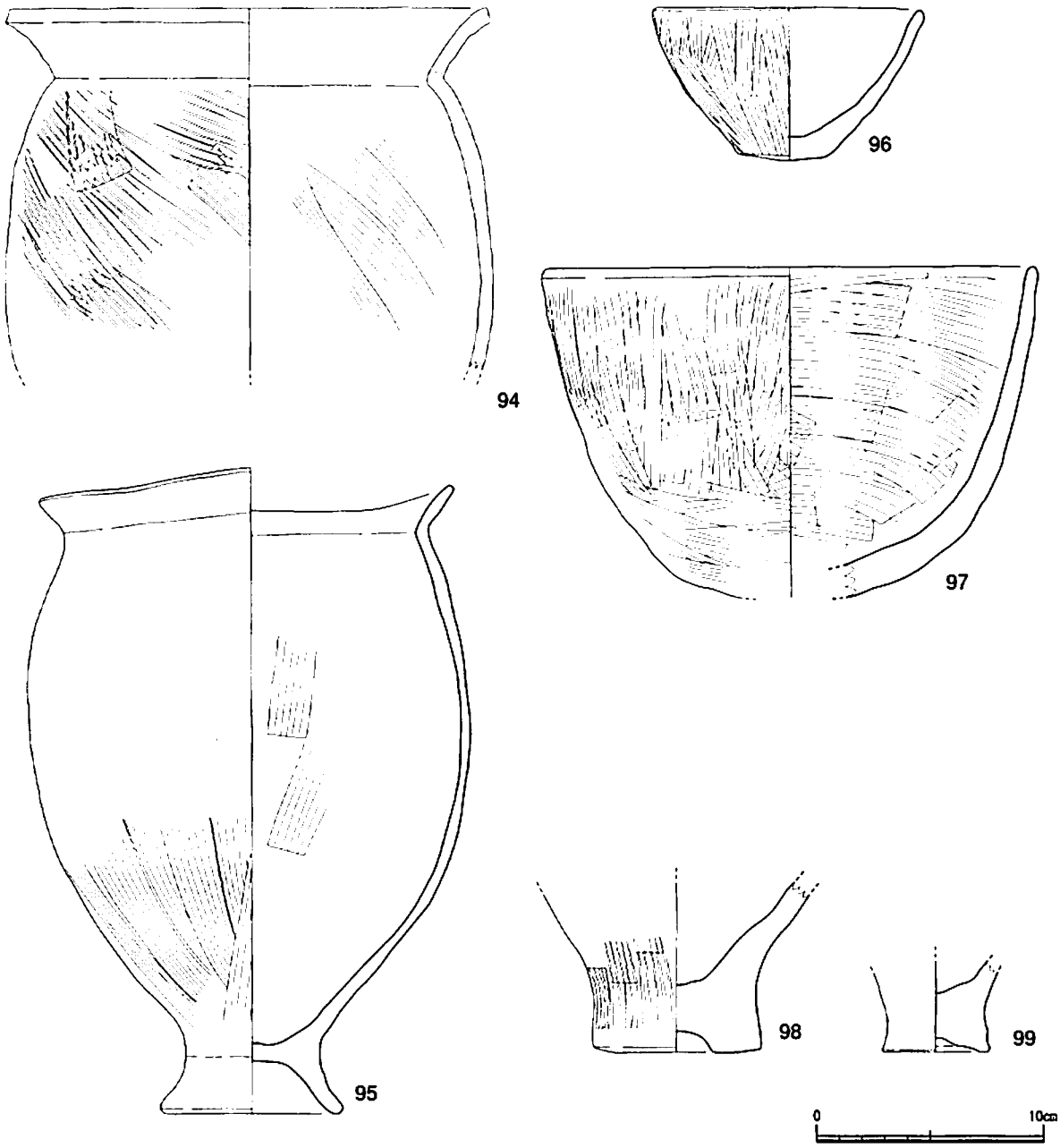


Fig.41　2区包含層出土遺物実測図

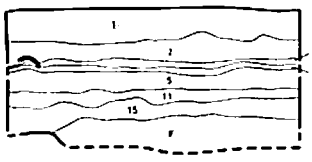
109　安山岩製の打製石斧である。直線に近い刃部を持つ。欠損のため全体の形状は不明であがおそらく、短冊状の形態を示すものではないかと思われる。

110　安山岩製打製石鏃である。二等辺三角形に近い形状を呈するが、基部でやや角度を変える。平基式で、やや大型である。

111　リソイダイト製石鑿である。形状は方形を呈する。刃部にはわずかに使用痕が認められる。

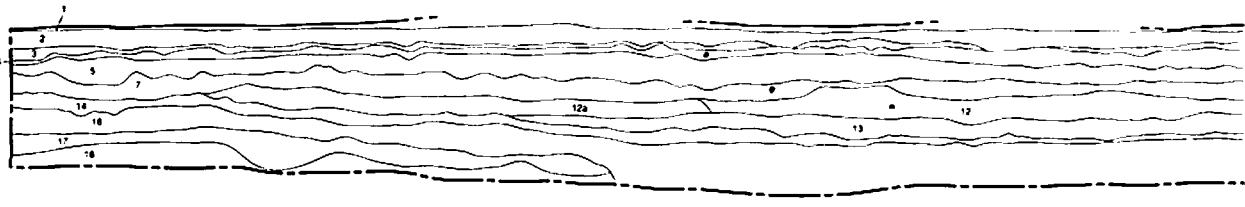
112　砂岩製の敲石である。平面形状は楕円形を呈し、敲打痕が表裏面中央部と側面の端部に認められる。表面中央部は使用頻度が多くよく窪んでいる。

A ——— H=3.30m A'

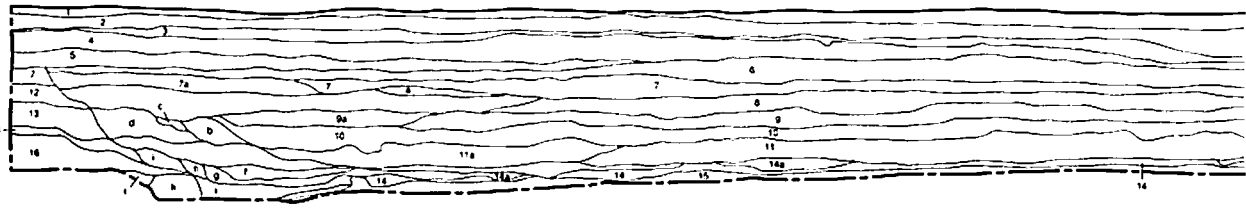


① 7.5Y6/1灰色土　鉄分、マンガン粒を少量含む。やや粘性を帯びる。
② 7.5Y5/1灰色土　しまりがない。マンガン粒を全面に含む。大きなものは径1cm程のものまである。土器粒が見
やや粘性。スミ粒（5mm程度）のものも入っている。
③ 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　マンガン粒及び鉄分を全面に含み土器を含む。
④ 2.5Y5/2暗灰黄色粘土　鉄分を（全面）非常に多く含む。マンガン粒も含む。

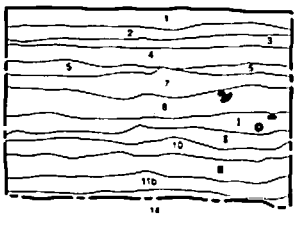
B ———



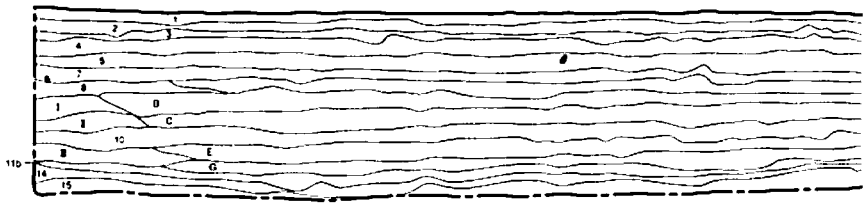
C ———



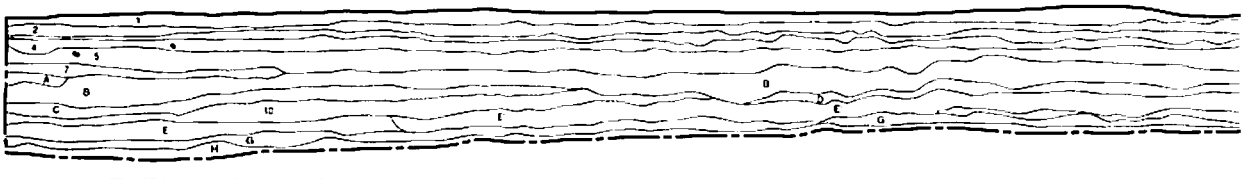
D ——— H=3.30m D'



E ———



F ———



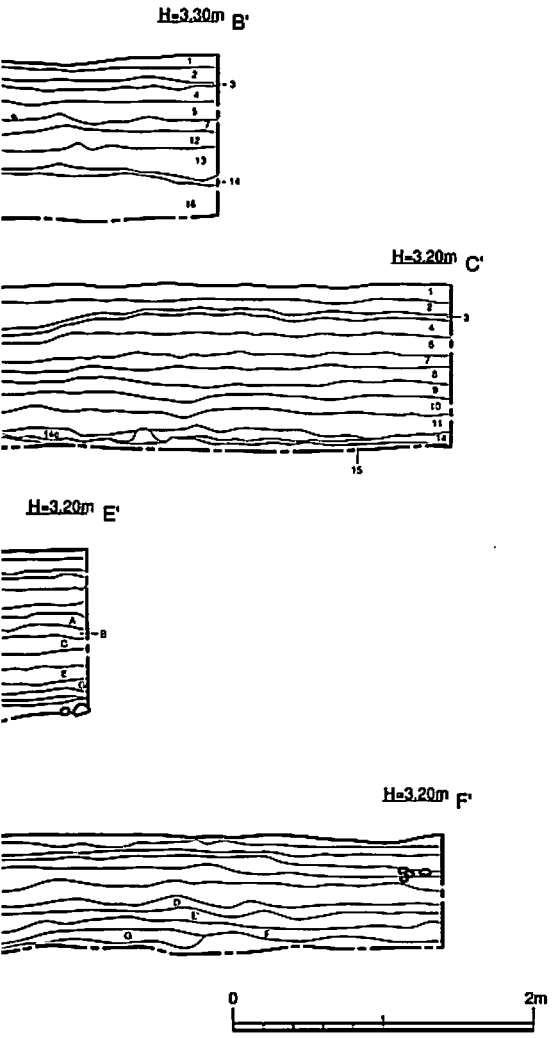
1　10YR4/2灰黄褐色土　鉄分を帯状に含む。しまり強い。鉄分は帯状だがムラがある。
2　2.5Y4/2暗灰黄色土　よくしまっている。鉄分を粒状に僅かに含む。
3　7.5YR6/2灰褐色土　マンガンの粒を極少量含む。1層より粘性がある。粘性は弱い。
4　10YR4/3にぶい黄褐色土　よくしまっている。土器粒含。鉄分が柱状に含む。所々に鉄分の塊（2～3mm程度）が含む。マンガン粒を極少量含む。
5　10YR4/2灰黄褐色土　上層によりしまりはやや弱い。マンガン粒を少量含む（部分的に集中する所もあり）。土器片・土器粒含。
5a　2.5Y4/2暗灰黄色土　小礫層。鉄分を柱状に含む。マンガン粒含む。やや粘性あり。
6　10YR4/4褐色土　全面にまんべんなく鉄分を含む。マンガン粒を多く含む。
7　5Y4/1灰色粘質土　粒状のマンガンを多量に含むが部分的に少量の所もある。全体的に含まれているが局部的に集中する部分がある。粒の大きさも1mm程度や1mm以下の粒もある。鉄分を柱状に含む。土器片・土器粒を少量含む。本来包含層である可能性。
7a　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　やや粘質を帯び3割程度の割合で鉄分を含み、マンガン粒を多く含む。鉄分を柱状に含む。
8　2.5Y5/1黄灰色粘質土　鉄分を柱状にやや多く含む。マンガン粒を少量含む。6a層よりも粘質が強い。
8a　2.5Y4/1黄灰色粘質土　マンガン粒を非常に集中して含む。マンガンも柱状に入る。鉄分をやや含む。やや粘質。鉄分を柱状に含む。7層ほど粘性強くない。
9　2.5Y5/2暗灰黄色粘土　全体的に鉄分を柱状に含む。スミ粒（2mm程度）・マンガン粒を微量含む。
9a　2.5Y5/1黄灰色粘質土　やや粘性を帯びる。全面に鉄分を柱状に含みマンガン粒をごく微量に含む。レンズ状堆積。
10　2.5Y5/1黄灰色粘土　10層ほど粘性は強くない。砂を含む。鉄分を少量柱状に含む。スミ粒（1mm程度）をごく微量に含んでいる。マンガン粒を微量に含む。
11　10Y6/1灰色混砂粘土　鉄分を粒状に含む。下部に砂を含む。
11a　2.5Y6/2灰黄色粘土　粘性が強い。少量鉄分を柱状に含む。レンズ状堆積。
11b　10YR5/1灰色混砂粘土　砂を混じる。鉄分をごく微量に含む。
12　10YR4/1褐灰色粘質土　鉄分を柱状に含む。マンガン粒を少量含む。15a層とはマンガン量と土色が違う。土器片含。
12a　2.5Y4/2暗灰黄色土　しまっている。鉄分を柱状に含む。マンガンの粒を少量含む。マンガンの量は断面図の右にいくほど多くなる。
13　2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　15層より粘質が強い。鉄分を柱状に含んでいるが16層の上部までである。スミ粒がごく僅か部分的に含む。
14　2.5Y4/2暗灰黄色混砂粘土　粘性弱い
14a　2.5GY5/1オリーブ灰色混砂粘土　12a
14b　10Y5/1灰色混砂粘土　僅かに砂を含む
14c　2.5Y5/2暗灰黄色混砂粘土　砂を僅か
15　7.5Y6/1緑灰色砂層　粗い砂。小礫を
15a　2.5GY5/1オリーブ灰色層　礫含まな
16　2.5Y5/2暗灰黄色砂層　しまっている
まれていない所とある。粘土の粒（5
17　2.5Y5/2暗灰黄色砂　しまった砂層。
18　5Y4/1灰色砂層　サラサラの粗い砂。

あ　5Y5/1灰色粘質土　全体的に鉄分を多
い　7.5Y5/1灰色粘土　鉄分を少量含む。
う　7.5Y5/1灰色粘土　鉄分を少量含む。

A　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘質強い。
僅かに含む。
B　5Y4/1灰色粘質土　粘性強い。鉄分を
B_　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘性は非常
を2～3個程度含む。
C　2.5Y5/2暗灰黄色粘土　粘質が非常
（1mm以下）を2～3粒程度含む。
D　5Y4/1灰色粘質土　粘性弱い。鉄分を
E　2.5Y6/2灰黄色粘土　鉄分を粒状に含
E_　2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　鉄分を柱状
F　2.5Y4/2暗灰黄色混砂粘質土　鉄分を
G　2.5Y5/2暗灰黄色粘土　鉄分を粒状に
H　10YR4/1褐灰色砂礫層　5cm程度礫が
※　a・b・c・d・e・f・g・h・i・j・k・l

Fig.39　西片百田２区A-A'～F-F'土層断面図

られる。



鉄分を部分的に含むが色は薄い。鉄分の塊をごく僅か含む。
層の砂が多量に混じる。
。一部僅かに鉄分を含む。
に含む。　鉄分をブロック状にやや多く含む。
含む。
い。
。鉄分を柱状に含む。鉄分の色は薄い。鉄分を多く含む所と、あまり含
nm程度）をごく僅かだが含む。

量。

量に柱状に含む。マンガン粒は微量。

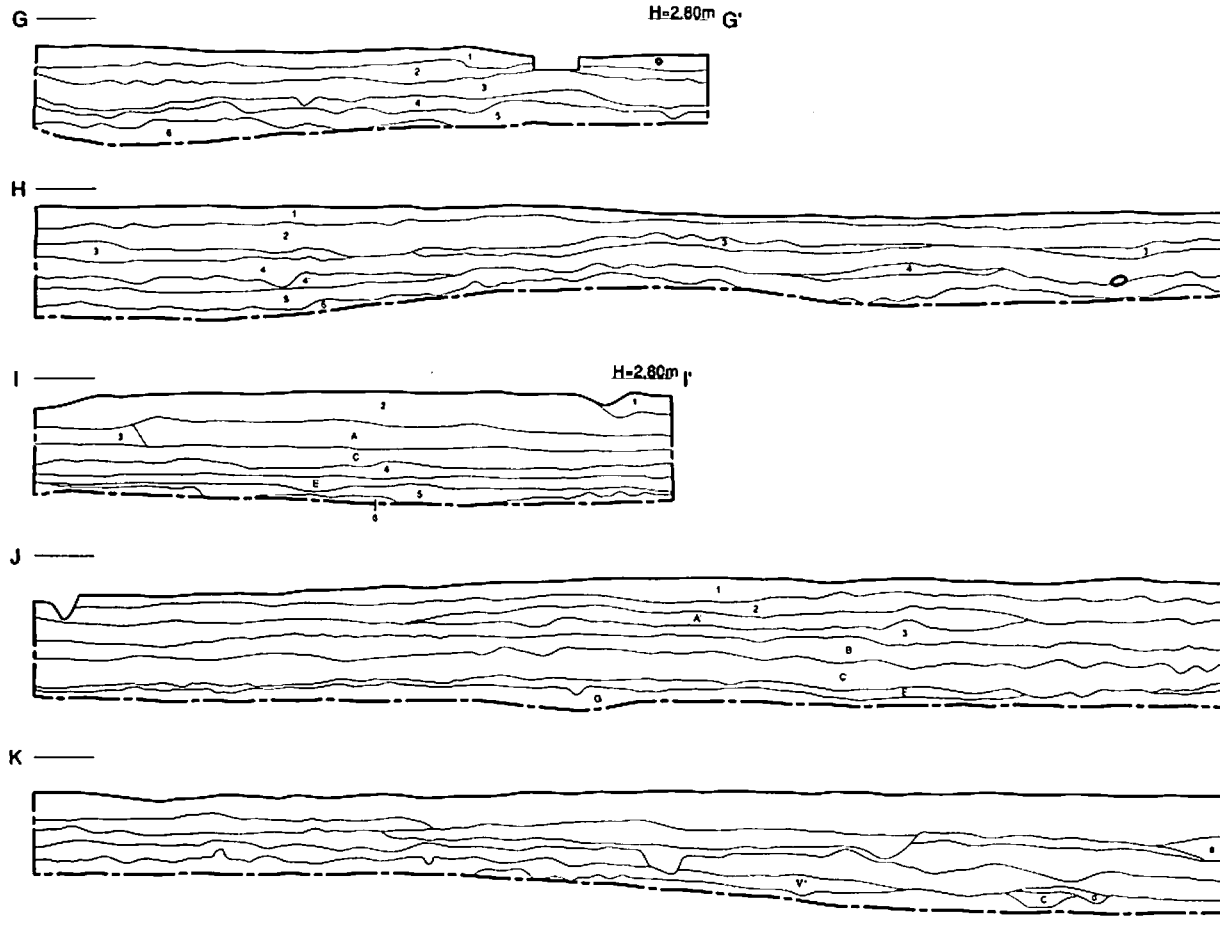
鉄分を柱状に多く含む。マンガン粒含。カーボン粒（1mm程度）をごく

粒状に（2~3mm程度）に多く含む。、マンガン粒(2mm)を1つ含む。
に弱い。鉄分を柱状に含む。マンガン粒をごく僅か含む。小礫(1、弱)

に強い。鉄分を柱状に少量含む。マンガン粒を微量含む。カーボン粒

柱状に含む。マンガンの粒をごく僅かに含む。
む。マンガン粒をごく僅かに含む（一部柱状あり）。
に多く含む（部分的に粒状になる）。
粒状に含む。粘質あり。
含む。粘性が非常に強い。
混ざっている。。
層は自然の落ち込みよる三角堆積と考えられる。

2区　G-G'～K-K'



3区　A-A'～D-D'

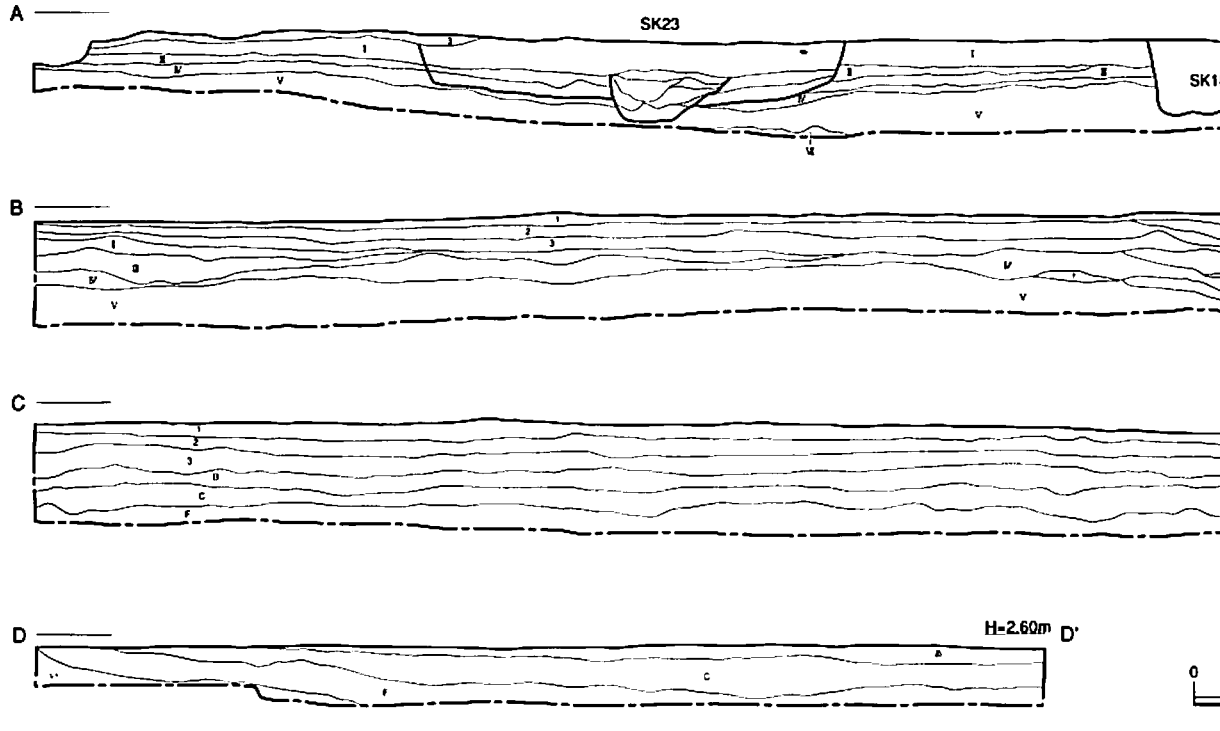
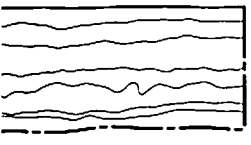


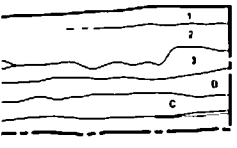
Fig.40　西片百田２区G-G'～K-K'、３区A-A'～D-D'土層断面図

H=2.80m H'

H=2.80m J'

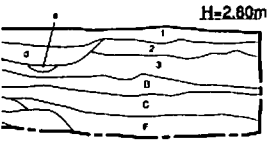


H=2.80m K'

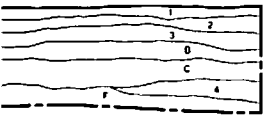


H=2.70m A'

H=2.80m B'



H=2.70m C'



2m

1　2.5Y4/2暗灰黄色土　マンガン粒を全体的に多く含む。小礫含む。鉄分を柱状に含む。土器粒・スミ粒を極僅か含む。
2　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　粘質強い。マンガン粒含。鉄分を柱状に含む。スミ粒を極僅かに含む。
3　2.5Y4/2暗灰黄色粘土　鉄分を柱状に含む。スミ粒含。
4　5Y6/2灰オリーブ粘土層　粘質が非常に強い。スミ粒含。鉄分を部分的に極僅かに含む。
4a　2.5Y5/2暗灰黄色粘土　鉄分を柱状に僅かに含む。部分的に砂を含む。
5　2.5Y5/1黄灰色混砂粘土　鉄分を柱状に薄く含む。
6　7.5Y5/1灰色砂層　水分をかなり含む。小礫を僅か含む。鉄分を一部分含む。

A　2.5Y5/1黄灰色粘土　粘性弱い。鉄分を柱状に含む。スミ粒含。マンガンの粒を全体的に含む。
A'　2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　粘質は弱い。マンガン粒を多量に含む。鉄分を部分的に含む。
B　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘質強い。鉄分を柱状に含む。マンガン粒を含む。カーボン粒（1程度）を極僅か含む。
C　2.5Y4/1黄灰色粘土　鉄分を柱状に含む。スミ粒（1～2mm程度）含。マンガンの粒を僅かに含む。
C'　2.5Y5/3黄褐色粘土　A'層より粘質強い。鉄分を全体的に柱状に含む。マンガン粒含。
D　2.5Y6/2灰黄色粘土　鉄分を柱状に含む。水分を多く含んでいるためかゆるい。
E　2.5Y4/3オリーブ褐色混砂粘土　砂が混じっているが5層程ではない。鉄分を柱状に含む。スミ粒を極僅か含む。
E'　5Y4/2灰オリーブ色粘土　部分的に砂が混じる所あり。極僅かだが鉄分を柱状に含む。
F　5Y4/1灰色粘質土　粘性強い。鉄分を柱状に（2～3 程度）多く含む。マンガン粒（1 程度）1つ含む。
G　2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質砂　粘質強い。鉄分を所々含む。この層の下から水が湧く。

I　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分を柱状に含む。マンガン粒を極僅か含む。
II　2.5Y4/2暗灰黄色粘質砂　鉄分を部分的に含む。スミ粒を含む。粘質は弱い。マンガン粒を極僅か含む。
III　5Y4/2灰オリーブ粘質土
IV　5Y5/2灰オリーブ粘質砂　鉄分を柱状に部分的僅かに含む。F層より砂が多い。粘性は強くない。
V　5Y4/2灰オリーブ砂層　鉄分を柱状に薄く含む。小礫を極僅か含む。
V'　2.5Y5/3黄褐色混砂粘土　鉄分をわずかに含む。小礫を含む。
VI　5GY4/1暗オリーブ灰色砂層　鉄分を僅かに含む。上層の砂層に比べて目があらい。

あ　10YR4/2灰黄褐色粘質土　粘質はそこまで強くない。マンガン粒を非常に多く全体的に含む。鉄分を柱状に含む。スミ粒・スミの塊を部分的に含む。
い　5Y4/2灰オリーブ粘質砂層　鉄分を僅かに柱状に含む。

a　2.5Y4/1黄灰色粘土　鉄分含。マンガン粒を僅かに含む。粘土としては硬い。
b　2.5Y5/1黄灰色粘質土　鉄分を柱状に含む。よくしまっている。マンガン粒をわずかに含む。
c　2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　に　鉄分を柱状に僅か含む。マンガン粒を僅かに含む。
d　5Y4/1灰色粘質土　粘質が非常に強い。鉄分を全体的に含む。マンガン粒・土器粒を僅かに含む。スミ粒含む。
e　2.5Y3/1黒褐色粘質土　非常に粘質が弱くマンガンを多く含む。鉄分を全体的に含む。
f　2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　粘性は非常に弱い。マンガンを全体的に含む。鉄分含。
g　2.5Y3/2黒褐色粘質土　溝の埋土と考えられる。鉄分を柱状に含む。マンガン粒を部分的に含む。乾燥するとバラバラになる。粘性は弱い。
h　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　溝の埋土と考えられる。鉄分を柱状に含む。b層より粘性が強い。
i　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質砂　部分的に鉄分を柱状に含む。粘質は強い。

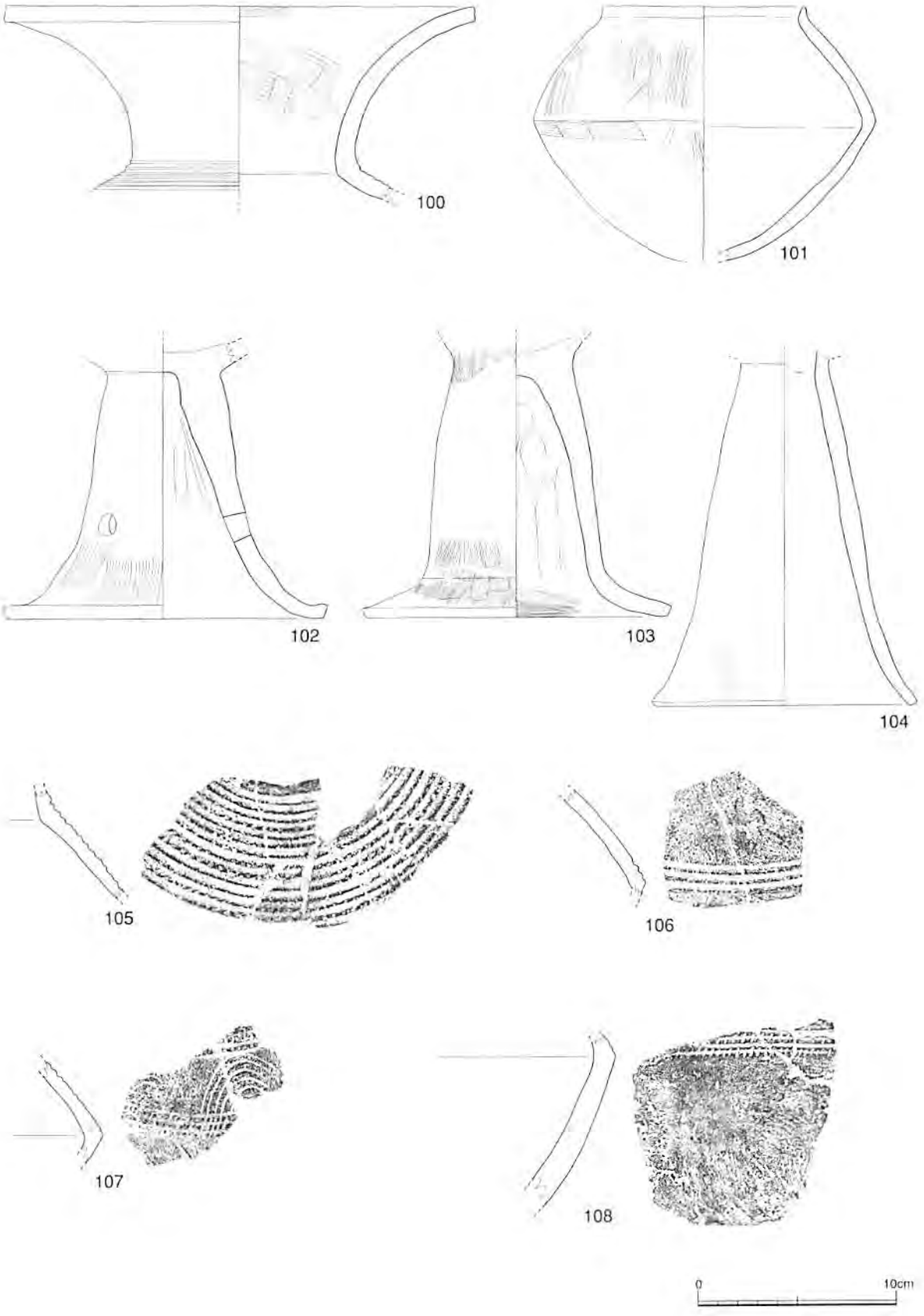


Fig.42　2区包含層出土遺物実測図

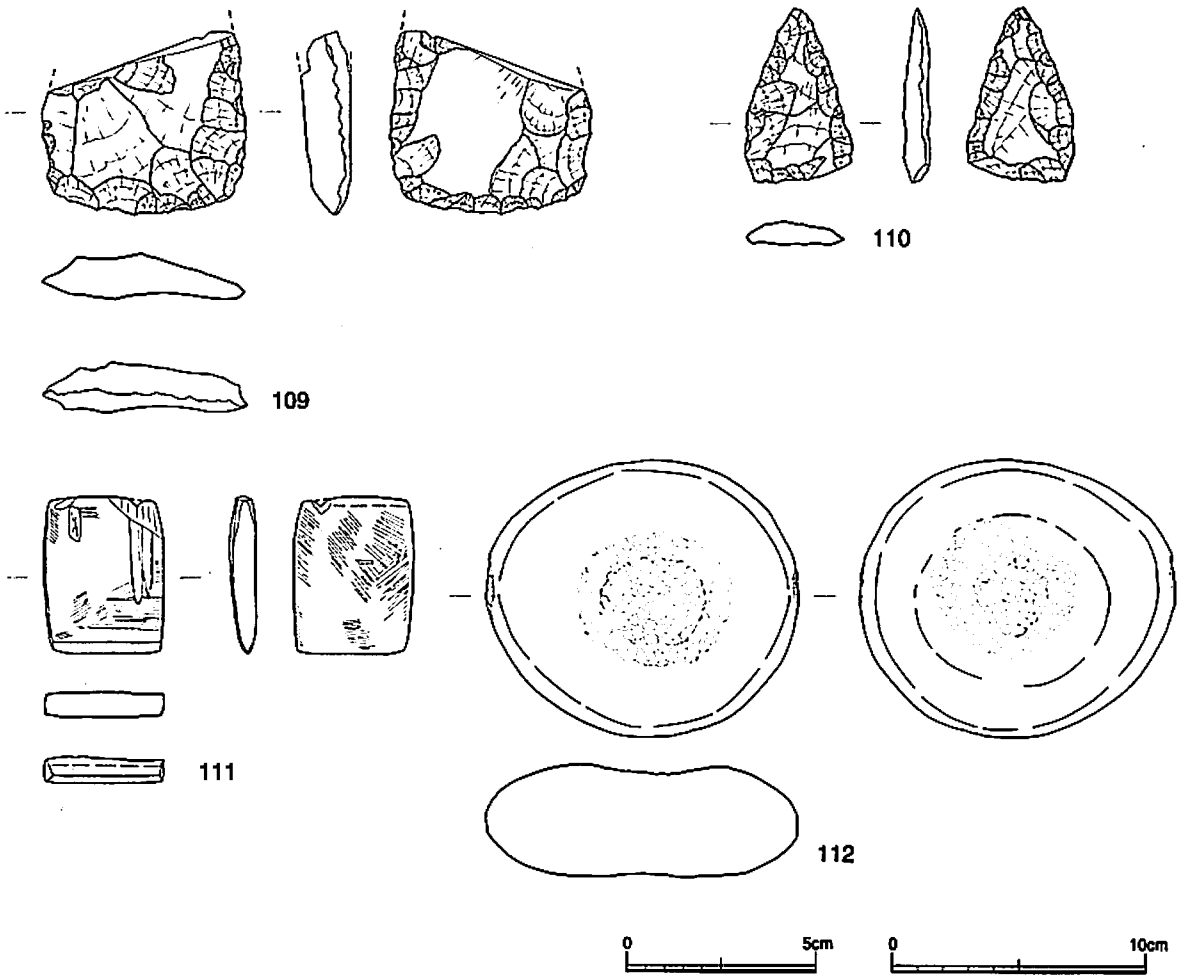


Fig.43　2区包含層出土遺物実測図

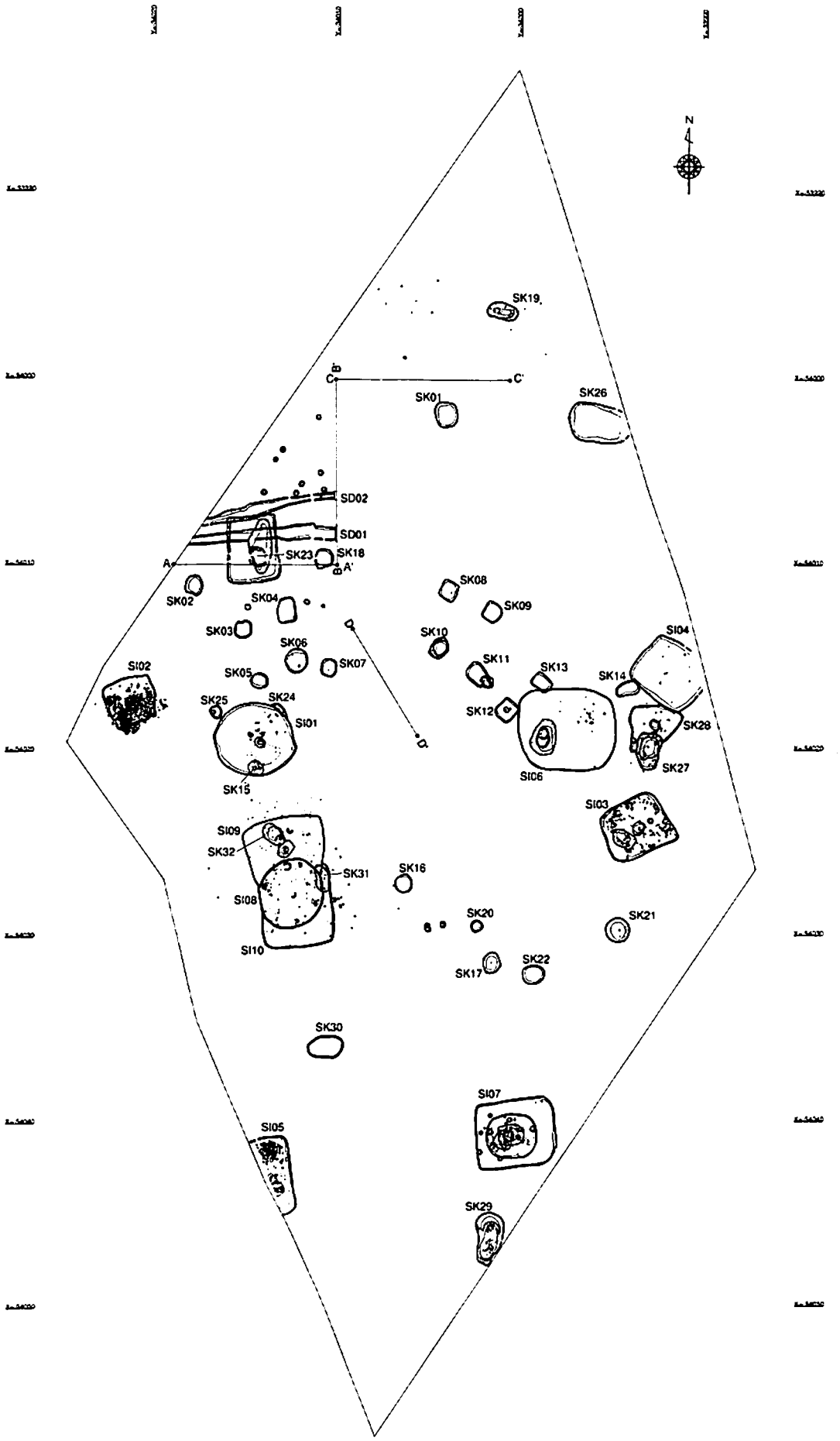
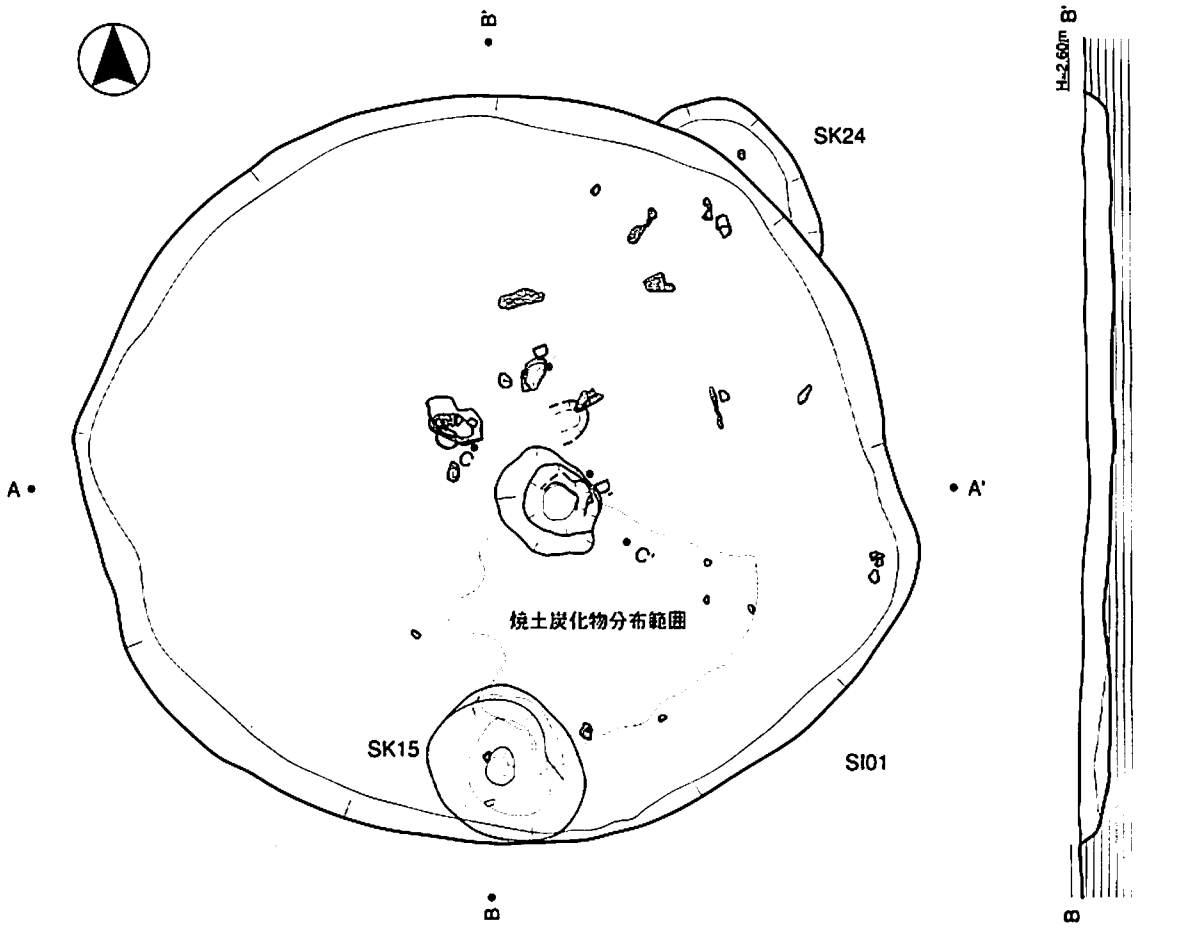


Fig.44　3区遺構配置図

2) 3区

1・2区に接し地形はさらに高まりを持ち、安定した微高地上にあたる。竪穴式住居跡や土坑等の遺構の数も増加している。しかし、遺構内外の土はシルト質が強いために、判別が難しく検出に難航した。



① 2.5Y4/2暗灰黄色土　しまりあり。弱粘性。細かいマンガン粒を全体的に含む。鉄分を部分的に含む。少量の炭化物を含む。本層より土器が多く出土している。
② 5Y3/1オリーブ黒色粘質土　しまりあり。粘性あり。鉄分・マンガン粒・炭化物多く含む。(Mn>Fe)

① 2.5Y7/2灰黄色粘土　しまりあり。粘性強い。炉内の灰土か。炭化物が大半を占め全体的には黒色を呈する。焼土は粒状に含む。
② 2.5Y7/2灰黄色粘土　①層と同質の土。炉内の灰土と考えられる。①層とは異なり焼土で構成され、全体的に赤色を呈する。炭化物を少量含む。
③ 2.5Y7/2灰黄色粘土　①・②層と同様。炭化物・焼土はほとんどなく、灰土で構成される層。

① 2.5Y4/4オリーブ褐色粘土　よくしまる。粘性強い。鉄分を少量含む。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土　よくしまる。粘性強い。鉄分を少量含む。炭化物・焼土多く含む。

0　1m

Fig.45　3区SI01、SK15・24実測図

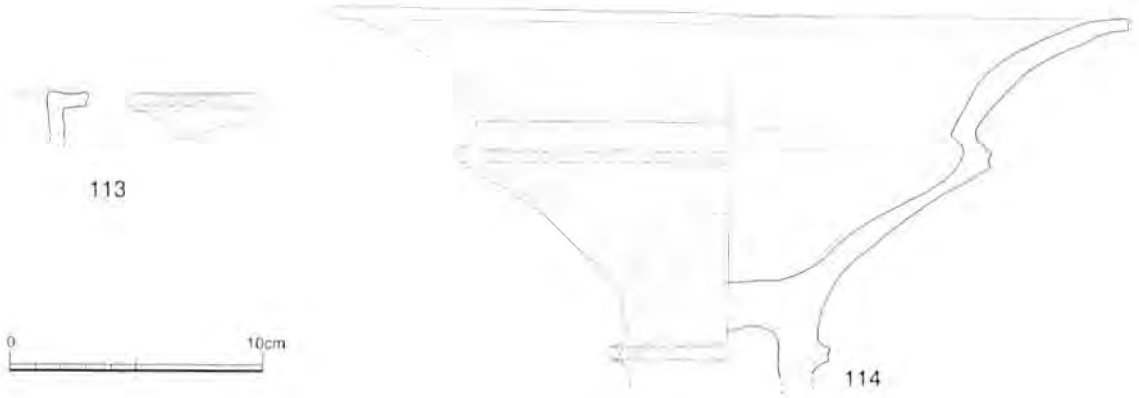


Fig.46　3区SI01出土遺物実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI01	主軸方向	A-A':W=0° B-B':N=-1°
時期	弥生時代後期	炉	中央部 1.1×0.96×0.11m
切り合い関係	SK24を切る	土坑	未検出
規模・深度	4.30×3.90m×0.15m	柱穴	柱穴0.2×0.2×0.09m
面積	13.4㎡	備考	

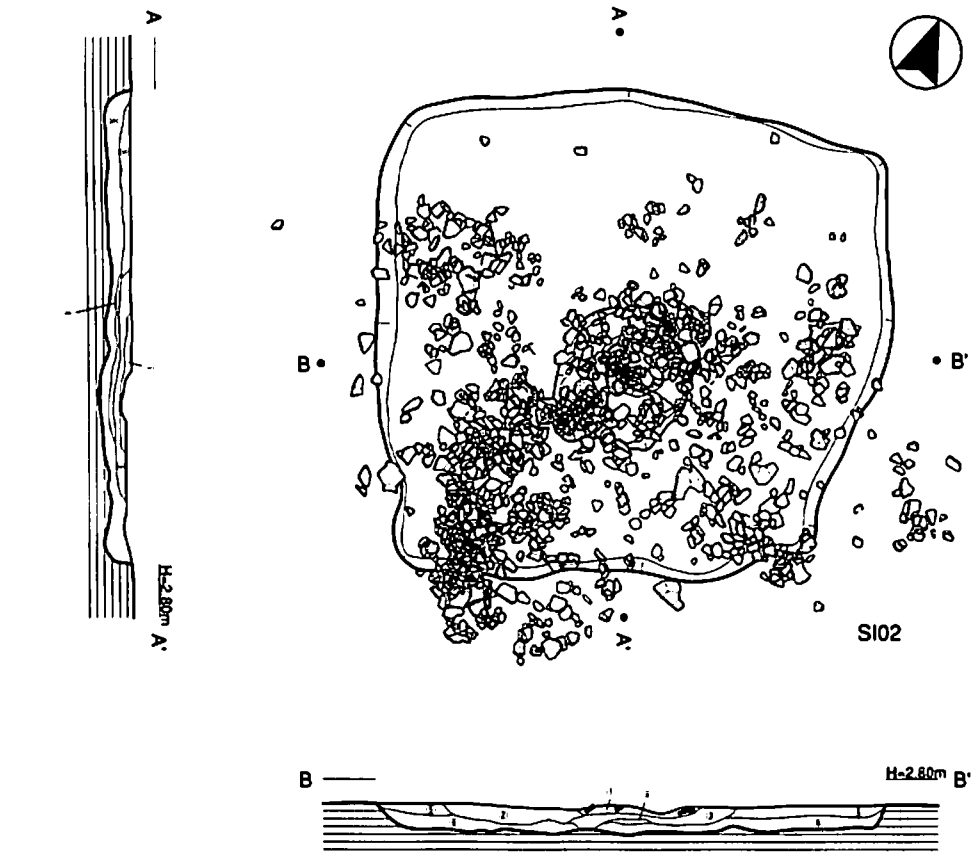
楕円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の北東部に長さ約20cm程度の自然炭化した木片が6点集中して出土している。中央部に位置する炉跡は浅く楕円形に掘り込まれ、炉跡の中心部付近はさらに約1.4cm深く掘り込まれている。炉跡内埋土は炭化物と焼土で占められ、灰土と考えられる。柱穴は炉跡近くに1箇所のみ検出されたが、柱痕は確認できなかった。

113　甕形土器の口縁部である。逆L字を呈し、端部に刻み目を施す。

114　高杯形土器の杯部である。深い杯部から直線的に上方へのび、胴部中位で強く屈曲した後、複合的に外反して開く。口縁端部はナデにより角張る。胴部中位および杯部と脚部の接合面に刻み目突帯が巡る。内外器面に刷毛目後ナデを施す。

遺構名	竪穴式住居跡SI02	主軸方向	A-A':N=-23° B-B': W=24°
時期	弥生時代後期	炉	中央部 1.50×1.48×0.04m
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	2.72×2.51m×0.23m	柱穴	未検出
面積	6.13㎡	備考	

隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡全面に渡って大量の土器の出土が認められ、特に中央部から南西部にかけては密集して分布している。中央部に位置する炉跡は楕円形を呈し、浅く掘り込まれている。また床面は土層断面観察から粘質土を張り床としていたことが考えられる。



① 2.5Y4/2暗灰黄色粘土　よくしまる。粘性あり。乾燥するとボロボロになる。鉄分・マンガンを少量含む。炭化物・土器粒を多く含む。土器出土。
② 2.5Y4/2暗黄灰色粘質土　しまりあり。粘性あり。砂・マンガン・鉄分を部分的に含む。炭化物・土器粒など含。基本的には③層と類似しているが③層よりやや明るい。
③ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　しまりあり、粘性あり。砂を所々に含むため砂質感がある。鉄分・マンガンを上層より少量含む。炭化物含。
④ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　土質は③層と同一層であると考えられるが、炭化物・焼土を多く含み層を形成している為分層する。(③層の亜層)
⑤ 2.5Y5/2暗灰黄色土　しまりあり。弱粘性。一部に炭化物等少量含む。マンガン・鉄分含。
⑥ 2.5Y5/1黄灰色土　しまりあり。弱粘性。部分的に鉄分・マンガンを少量含む。砂を少量含みザラつく。

Fig.47　3区SI02実測図

115　甕形土器である。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は屈曲して直線的に開き、端部は四角に成形される。外器面に明瞭に刷毛目が確認される。

116　甕形土器である。口縁部は短く直線的に開き、端部成形は角張る。内外器面には刷毛目をよく残す。

117　甕形土器である。胴部最大径を上位に持つ。口縁部は緩やかに上方へ直線的に開き、端部で僅かに屈曲する。そのため、端部は丸くおさまる。

118　甕形土器である。口縁部は胴部との接合部で強く屈曲して外に向かい直線的に開き、ナデによりまるくおさめられた口縁端部に至る。端部は丸い。

119　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲して直線的に開き、端部はナデにより四角におさまる。内・外器面共に明瞭に刷毛目を残す。

120　甕形土器である。薄く仕上げられた口縁部は「く」の字に屈曲して直線的に開く。端部は四角に成形される。内・外器面に上方へ掻きあげた刷毛目が観察される。

121　甕形土器の台部である。台部は短く直線的に開き、端部成形は四角くおさめられ低い。

122　複合口縁壺形土器の口縁部である。大きく外反して開き、屈曲してほぼ直立する。口縁端部はやや肥厚する。口縁部の内器面には横方向の刷毛目が観察される。

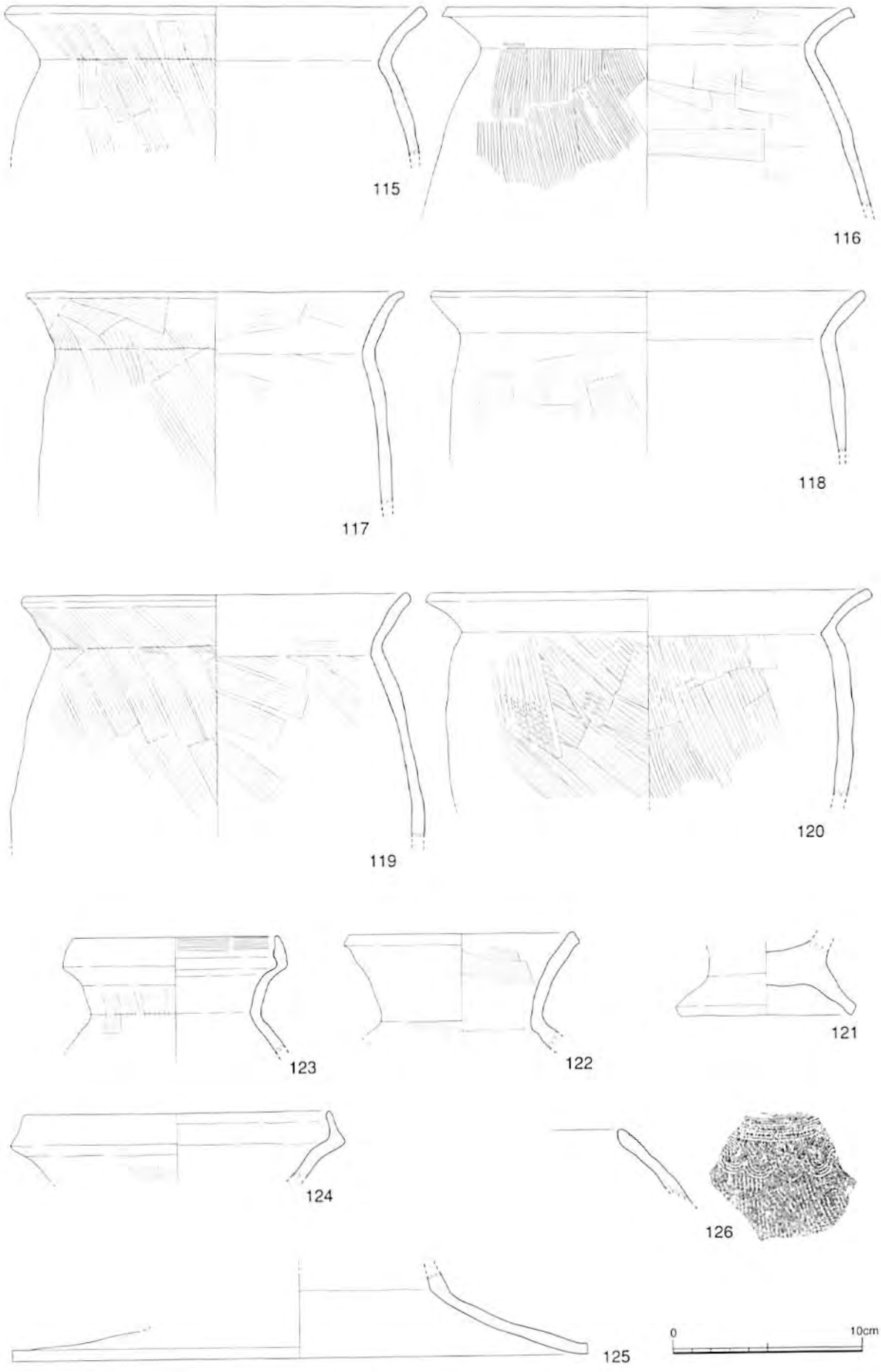


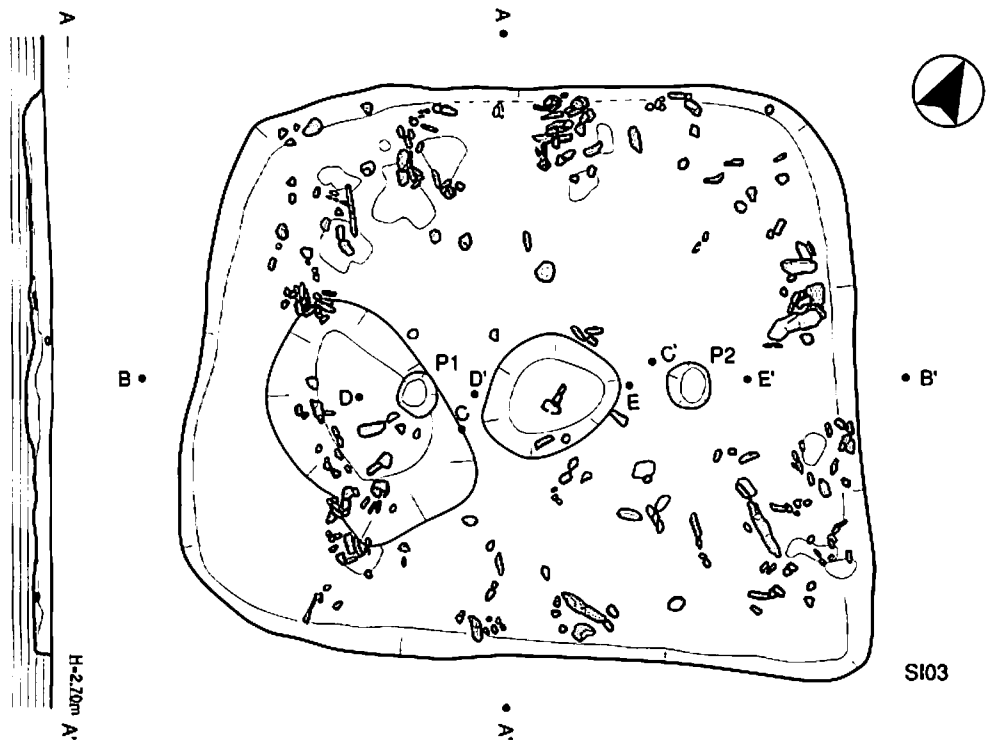
Fig.48　3区SI02出土遺物実測図

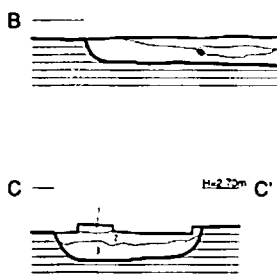
123　壺形土器の口縁部である。頸部で屈曲し直線的に開いて口縁に至る。端部はナデにより角張る。器面調整は明瞭ではない。

124　複合口縁壺形土器の口縁部である。大きく外反し、強く屈曲して内傾する。口縁端部は薄く仕上げられる。

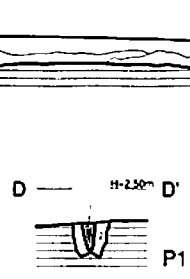
125　高杯形土器の裾部である。脚部接合面上方の屈曲後より強く折れ外に向かい直線的に大きく広がる。端部は角張る。

126　壺形土器の口縁部である。端部は丸くおさまりナデが施されている。口縁端部直下より多くの細かな横位沈線が巡り、その下位に10重からなる櫛描波状文が施されている。

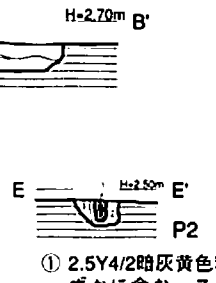




① 10YR4/2灰黄褐色粘質土　鉄分をわずかに柱状に含む。スミの塊・焼土粒（焼土塊もある）含。粘質は弱くしまっている。
② 5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分を柱状に含む。焼土粒・スミ粒・スミの塊含。①層より粘質はある。
③ 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　鉄分を柱状に含む。粘性強い。スミ粒をごく僅かに含む。



① 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘質は強い。鉄分・スミ粒含。柱根と考えられる。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分・スミ粒・土器粒・礫含。粘質強い。①層の方が粘質強い。



① 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分をわずかに含む。スミ粒・土器粒含。柱根。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　スミの塊・鉄分含。
③ 2.5Y5/2暗灰黄色混砂粘質土　鉄分を柱状にわずかに含む。スミの塊・スミ粒。部分的に砂含。

0　1m

Fig.49　3区SI03実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI03	主軸方向	A-A':N=28° B-B':W=28°
時期	弥生時代後期	炉	中央部0.72×0.62×0.17m
切り合い関係	無	土坑	1.30×0.72×0.13m
規模・深度	3.49×2.96m×0.14m	柱穴	P10.22×0.21×0.17m P20.27×0.27×0.13m
面積	10.08㎡	備考	

隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。大量の炭化材が出土しており、その大半は住居壁から中心に向かって倒れていたことが木目から読み取れた。住居跡の中央部に位置する炉跡は擂り鉢状を呈する浅い掘り込みである。柱穴は炉跡を挟むように2基確認され、共に柱痕が認められ、主柱穴と考えられる。土坑はP1と切りあって検出され、長楕円形を呈し浅い掘り込みをもつ。貯蔵穴と考えられる。また、炭化材や焼土の検出状況と図化に耐えうる遺物がないことから、住居跡廃絶後に焼却された可能性が考えられる。

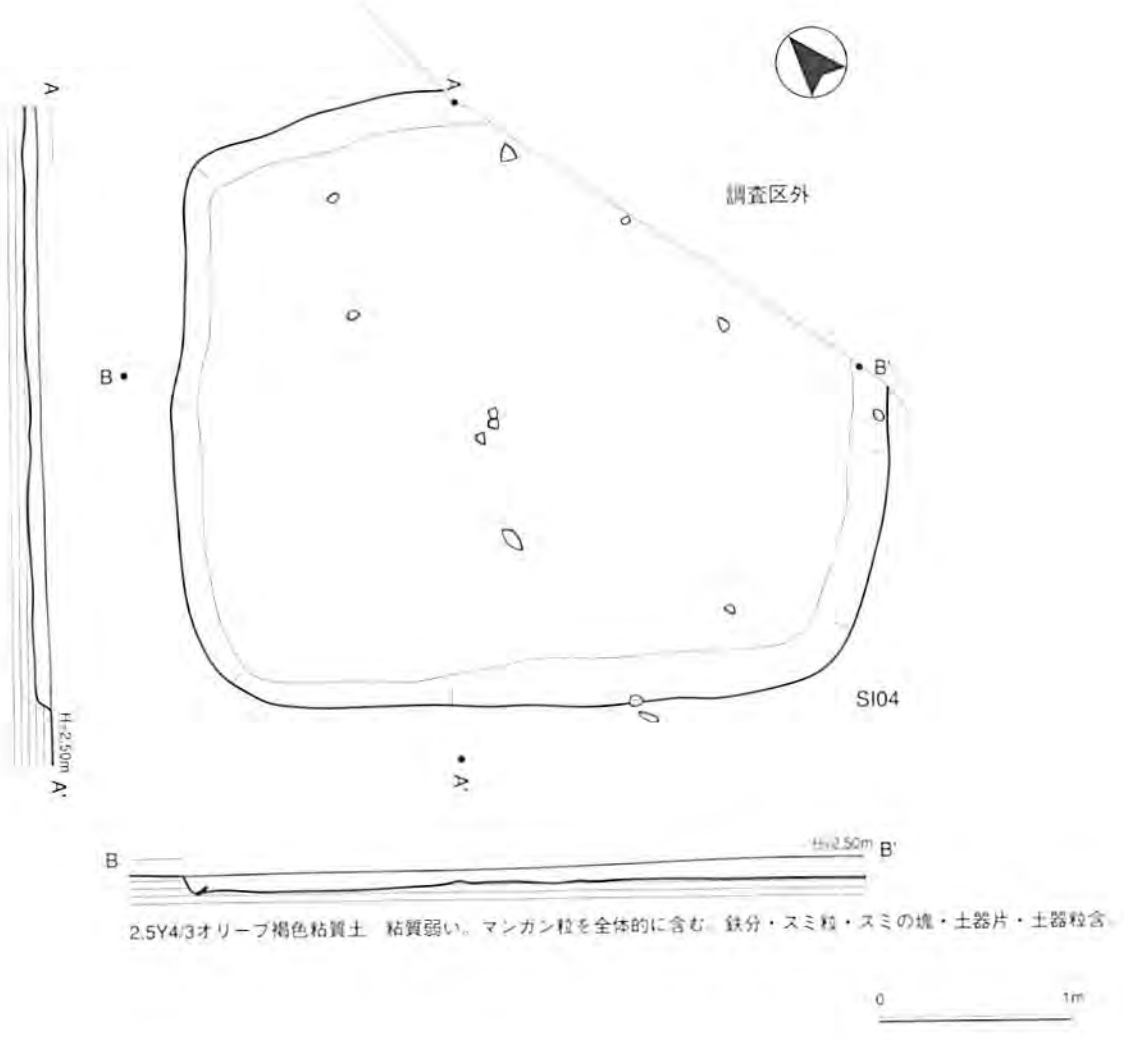
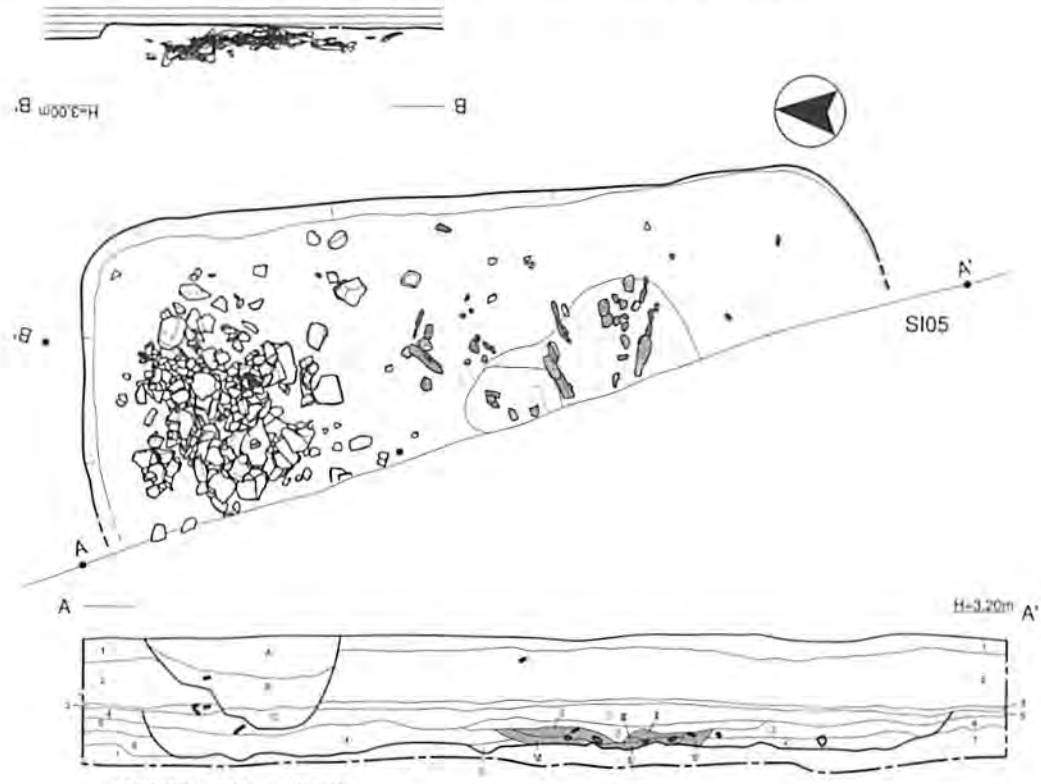


Fig.50　3区SI04実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI04	主軸方向	A-A':W=47° B-B':N=49°
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	3.73×3.22m×0.08m	柱穴	未検出
面積	11.15㎡（推定）	備考	

隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の東部は調査区外にあたり、全体の約2/3を完掘している。住居跡の埋土は単層であり、炭や炭粒を含む。附帯施設の検出には至らなかった。



A 2.5Y5/2暗灰黄色土　鉄分含。
B 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　鉄分を柱状に含む。部分的にマンガン粒含。
C 10YR4/2灰黄褐色粘質土　粘質強い。鉄分含。マンガン粒を全体的に含む。
① 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　土器片・マンガン粒・鉄分含。粘性強い。床面と考えられる。
② 5Y4/1灰色粘質土　鉄分を柱状に含む。スミの塊・スミ粒含。焼土粒をごく僅か含む。粘質強い。
③ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘質弱い。スミの塊・スミ粒含。鉄分を僅かに含む。
④ 5Y3/2オリーブ黒色混砂粘質土　鉄分を柱状に含む。スミ粒・土器粒を僅かに含む。軽石含。
⑤ 5Y4/2灰オリーブ混砂粘質土　スミ粒含。砂を含むが粘質強い。
Ⅰ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘質強い。スミ粒・焼土粒・鉄分含。ごく僅かだが砂を部分的に含む。②層とは同色だが焼土の含有量が違う。
Ⅱ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土層　スミ塊・焼土塊含。灰だし部と考えられる。粘性強い。
Ⅲ 2.5Y3/1黒褐色粘質土　部分的に砂を含む。焼土粒・スミ粒含。灰を掻きだした土の一部と考えられる。
Ⅳ 10YR4/1褐灰色粘質土　スミの塊含。灰を含んだ土のようで黒っぽい。灰だし部と考えられる。
Ⅴ 2.5Y3/2黒褐色粘質土　鉄分を柱状に含む。スミの塊・スミ粒・焼土粒含。灰を含んだ土で灰だし部と考えられる。
Ⅵ 10YR4/2灰黄褐色粘質土　全体的に土が赤化している為燃焼面と考えられる。スミの塊・焼土粒含。炉の基底部。

基本土層
1 2.5Y5/4黄褐色土　マンガン粒（2～3mm程度）・土器粒・スミ粒含。
2 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分・土器片含。マンガン粒を全体的に含む。部分的にマンガン粒の強い部分がある。粘質弱い。
3 5Y4/2灰オリーブ色粘質土　鉄分を全体的に含み鉄分の層と考えられる。2層より粘質強い。炭化物をごく僅か含む。
4 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分を柱状にわずかに含む。マンガン粒含。粘質はそれほど強くない。
5 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　鉄分含。マンガン粒僅かに含む。4層より粘質強い。
6 5Y4/1灰色混砂粘質土　鉄分を僅かに含む。粘質強い。
7 5Y4/2灰オリーブ砂層　部分的に鉄分を含む。

0　1m

Fig.51　3区SI05実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI05	主軸方向	A-A':N=-4°
時期	弥生時代後期	炉	中央部　炉跡0.5×－×0.1m 掻き出し部0.78×－×0.12m
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	0.15m（深度のみ）	柱穴	未検出
面積	6.13㎡（掘削部分）	備考	

遺構の中央から西部分は調査区外にあり全体の約1/3の調査を行った。その結果、隅丸方形を呈する竪穴式住居跡と考えられる。長さ約30cmの炭化材が数点出土しており、木目から中央に向かって倒れていることが確認できる。その炭化材のすぐ側に位置する炉跡は浅い掘り込みをもち、灰の掻き出し部が南に向かって検出された。掻き出し部には炭化物が密に認められた。調査区内での柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。また北隅部に多量の土器がまとまって出土している。

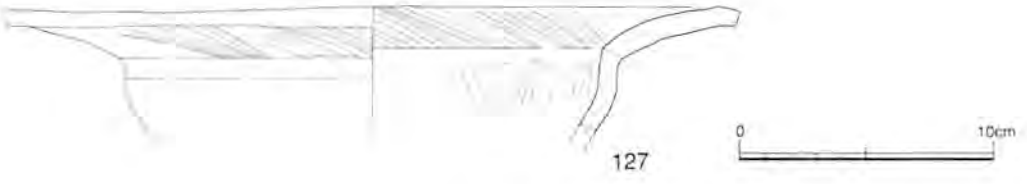


Fig.52　3区SI05実測図

127　高杯形土器の口縁部である。椀状の杯部を持つと推定される。口縁部は屈曲後、僅かに外反しながら大きく開く。端部はナデにより角張る。内外器面共に刷毛目をよく残す。（図がなーい）

128　甕形土器である。口縁部は立ち上がり気味にやや外反し、端部はナデにより角張る。内外器面とも上方へ引き上げた刷毛目を明瞭に残す。

129　甕形土器である。胴部最大径を中位に持つ。口縁部は屈曲して直線的に短く開き、端部は丸くおさまる。内・外器面共に明瞭に刷毛目をのこす。

130　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲して直線的に開き、端部はナデにより角張る。外器面に明瞭に刷毛目が観察される。

131　壺形土器である。頸部で屈曲し、やや外湾して口縁部に至る。端部は丸くおさまる。外器面に刷毛目を残す。

132　壺形土器である。最大径を中位にもち張りが強い。口縁部は頸部で屈曲した後やや外反しながら、四角に成形され下方に向く端部に至る。底部は凸レンズ状を呈す。外器面は肩部付近に刷毛目を残し、中位以下は刷毛目後ナデを施す。

133　壺形土器である。胴部最大径を中位にもち球形をなす。口縁部は短いが強く外反し、端部は四角に成形される。底部形態は欠損のため不明である。内・外器面とも上方へ引き上げた刷毛目を明瞭に残す。

134　鉢形土器である。胴部上位で短く直立した後、頸部屈曲を境に斜め上方へ直線的に伸びる。端部はナデにより角張る。内・外器面共に明瞭に刷毛目を残す。

135　重弧文長頸壺形土器である。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部をもつ。屈曲部上位には9重からなる上向きの重弧文が施され、これを切るように屈曲部上部に3本の横位沈線を巡らす。内器面に刷毛目を施

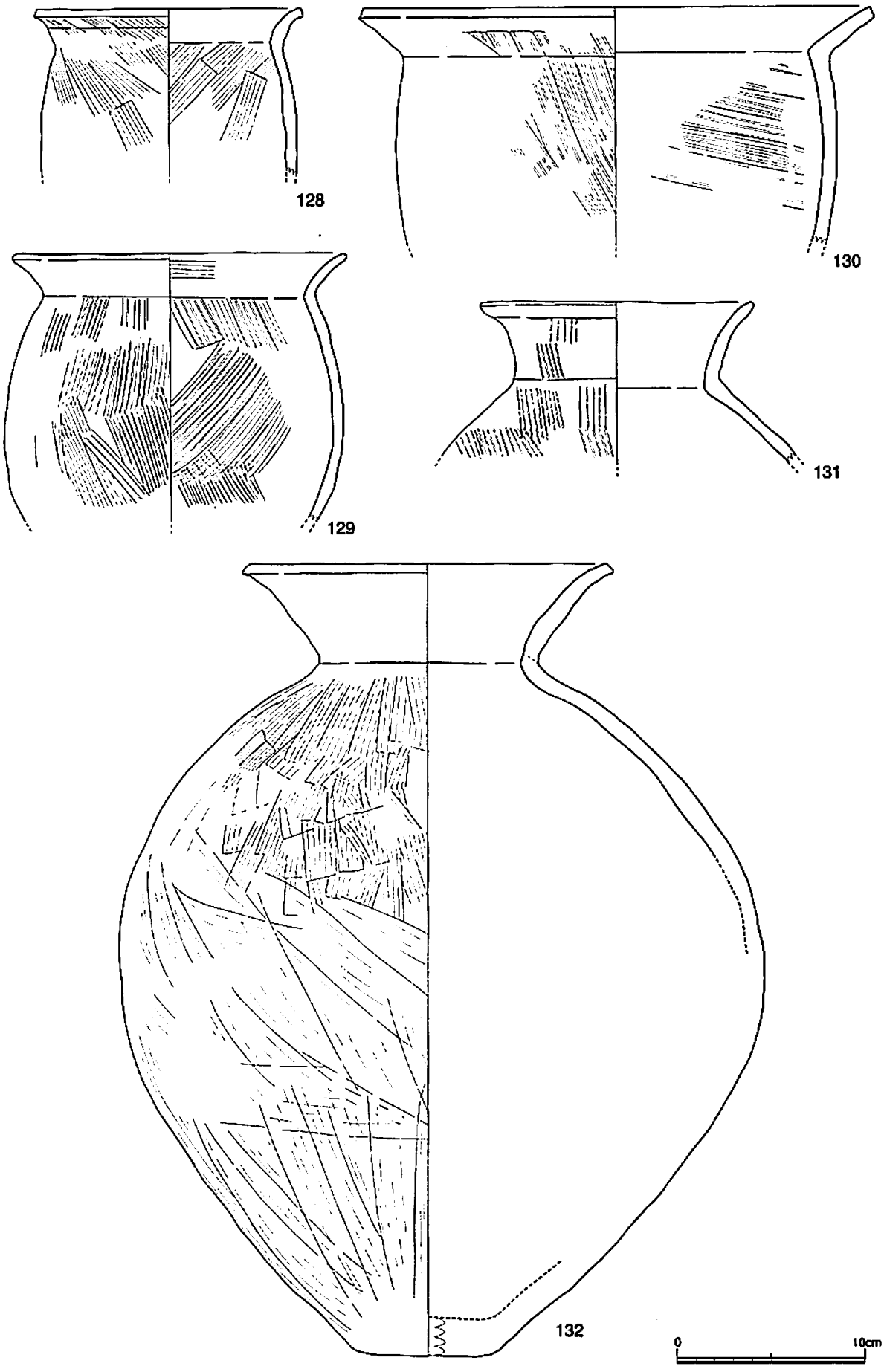


Fig.53　3区SI05出土遺物実測図

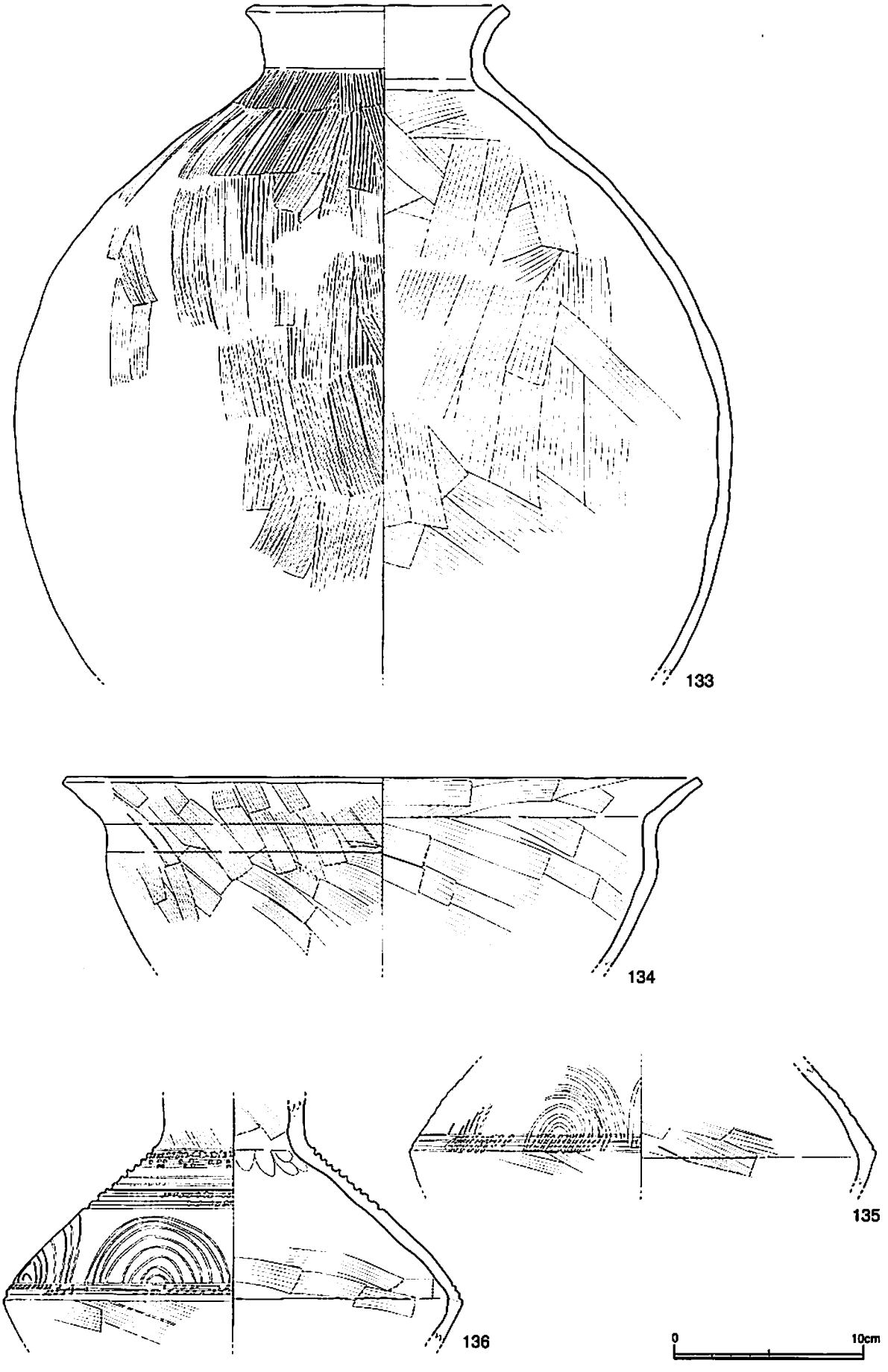


Fig.54　3区SI05出土遺物実測図

す。欠損のため、頸部・底部は不明である。

136　重弧文長頸壺形土器である。胴部中位に鋭い屈曲を呈する。肩部から胴部にかけて多くの階段状の条線が巡り、一部には刻み状の縦位短沈線も施される。その下位には8重からなる上向きの重弧文が施されている。さらに屈曲部には3本の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。屈曲部下位や頸部の外器面には刷毛目が施されている。内器面はナデや刷毛目が施される。底部は欠損のため不明である。

遺構名	竪穴式住居跡SI06	主軸方向	N=-1°　W=1°
時期	弥生時代	炉	未検出
切り合い関係	無	土坑	1.91×1.3×0.3m
規模・深度	5.26×4.46×0.03m	柱穴	未検出
面積	20.79㎡	備考	

長楕円形を呈する竪穴式住居跡である。遺構検出段階で既に床面付近であったために非常に浅く検出された住居跡である。西側に位置する土坑は約20cm掘り込んだあと、さらに2段の掘り下げが行われている。また土層断面観察から下層ほど炭化物の粒が大きくなることが確認されている。貯蔵穴と考えられる。

137　甕形土器である。逆L字の口縁部をもち逆円錐形の器形を呈する。器面調整はナデを施す。底部は欠損のため不明。

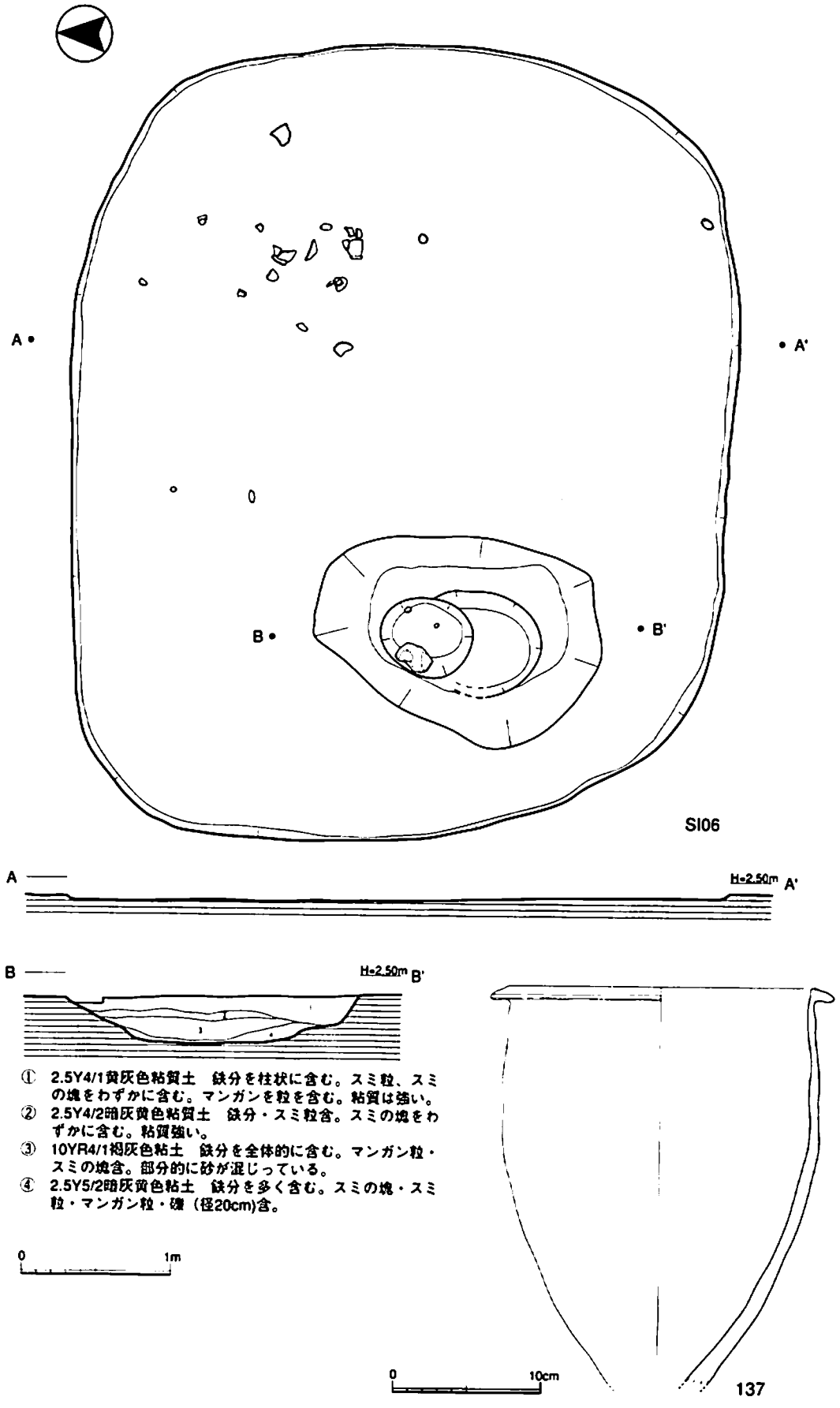
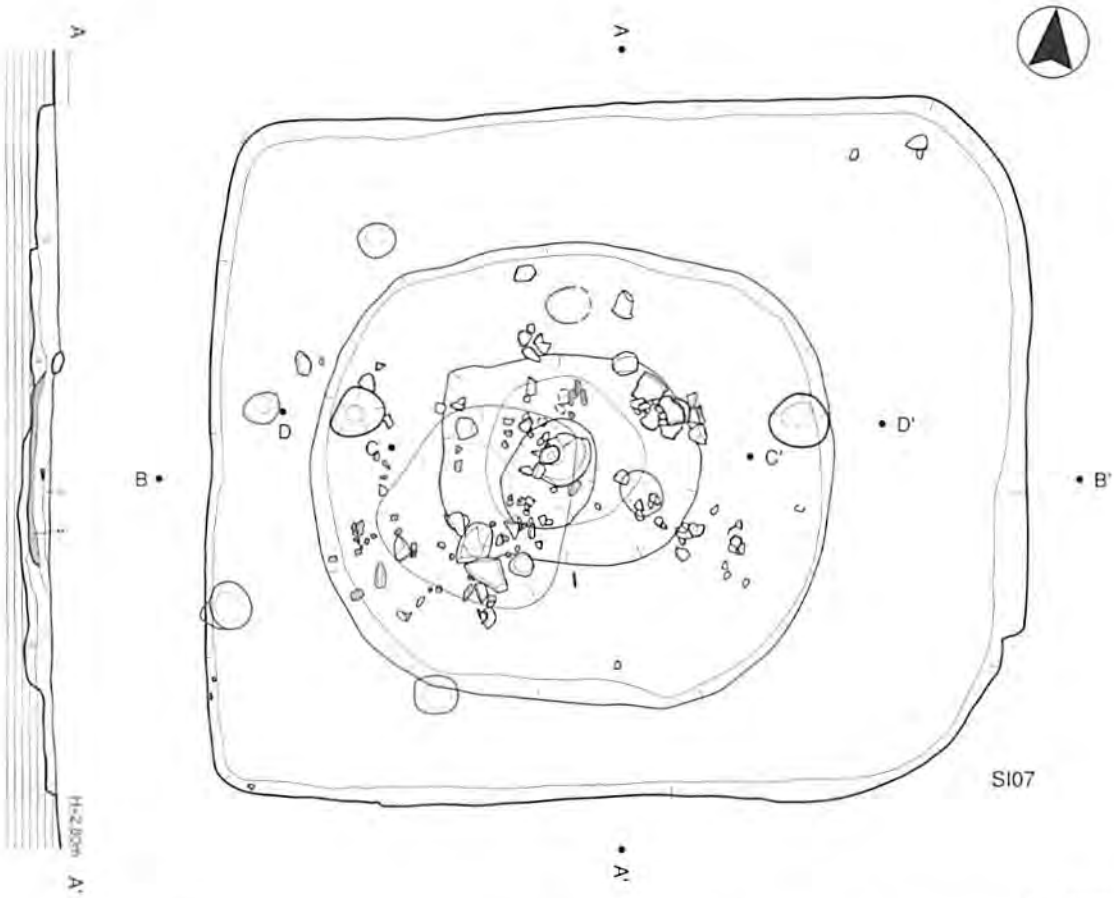
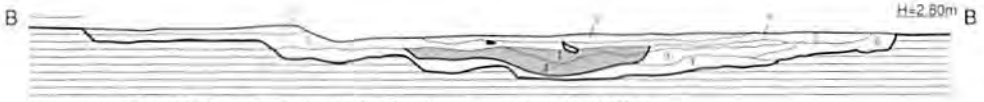
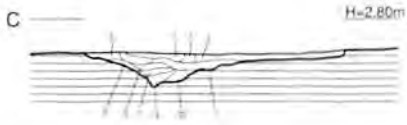


Fig.55　3区SI06実測図





① 2.5Y4/1黄灰色粘質土　マンガン粒・鉄分を全体的に含む。スミ粒含。粘質弱い。
② 10YR4/2灰黄褐色粘質土　スミ粒・土器粒・鉄分含。マンガン粒を全体的に含む。粘質弱い。
③ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分を柱状に含む。マンガン粒を多量に含む。部分的にマンガン粒が密な所あり。土器片・スミの塊・スミ粒・焼土粒含。粘質弱い。
④ 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分・スミ粒・焼土粒含。マンガン粒をわずかに含む。粘質弱い。
⑤ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　粘質弱い。スミの塊・焼土塊を多く含む。鉄分・マンガン粒を僅かに含む。炭化物の層。
⑥ 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　鉄分をごく僅か含む。マンガン粒・スミ粒含。粘質弱い。
⑦ 10YR4/2灰黄褐色粘質土　マンガン粒・鉄含。スミの塊を1粒（径2ｃｍ）含。
⑧ 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分を柱状に含む。スミの塊・スミ粒含。粘質非常に強い。
Ⅰ 2.5Y3/2黒褐色粘質土　鉄分を柱状に僅か含。スミの塊・焼土の塊を多量に含む。土器片含。粘質強い。炉の埋土。スミの層。
Ⅱ 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土　炉の埋土。鉄分・スミ粒・土器粒含。土器片あり。粘質弱い。Ⅰ層より炭化物の量少ない。



① 炭化物の塊を含み、焼土の粒を僅かに含む。炉の燃焼面にのっているだけの土層と考えられる。
② 2.5Y4/1黄灰色粘質土　灰だし部でスミの塊・焼土塊を多く含む。灰を含んでいるため黒っぽい。
③ 7.5YR3/1黒褐色粘質土　焼土塊を多量に含み、燃焼面と考えられる。スミ粒含。
④ 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　炭化物の層で、炭化物を最も多く含んでいる。炉の灰だし部と考えられる。焼土粒含。
⑤ 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土　炭化物の塊・焼土塊含。鉄分含。炉の埋土。
⑥ 2.5Y3/2黒褐色粘質土　灰を含んで黒くなった土で灰の掻きだし部と考えられる。鉄分を部分的に含む。焼土の粒をわずかに含む。粘質強い。
⑦ 10YR3/1黒褐色粘質土　鉄分・焼土粒を僅かに含む。灰を含んでいるため黒っぽい。粘質強い。
⑧ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　炭化物の塊・焼土粒含。灰が混じっているため黒っぽい部分がある。灰出し部と考えられる。粘質強い。
⑨ 5Y5/1灰色粘質土　スミ粒・焼土粒含。粘質強い。炉の基底部と考えられる。
⑩ 5Y4/2灰オリーブ粘質土　鉄分・焼土粒含。スミの塊をごく僅かに含む。

① 10YR4/1褐灰色粘質土　柱痕と考えられる。スミ粒・焼土粒・鉄分含。
② 10YR3/2黒褐色粘質土　炭化物の層である。スミの塊・灰・鉄分・焼土粒含。
Ⅰ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　鉄分・マンガン粒含。焼土粒を僅かに含む。

① 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　鉄分・スミ粒含。スミの塊を僅かに含む。
② 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分を僅かに含む。焼土粒・スミ粒含。①層より粘質強い。部分的に僅かに砂含。

0　1m

Fig.56　3区SI07実測図

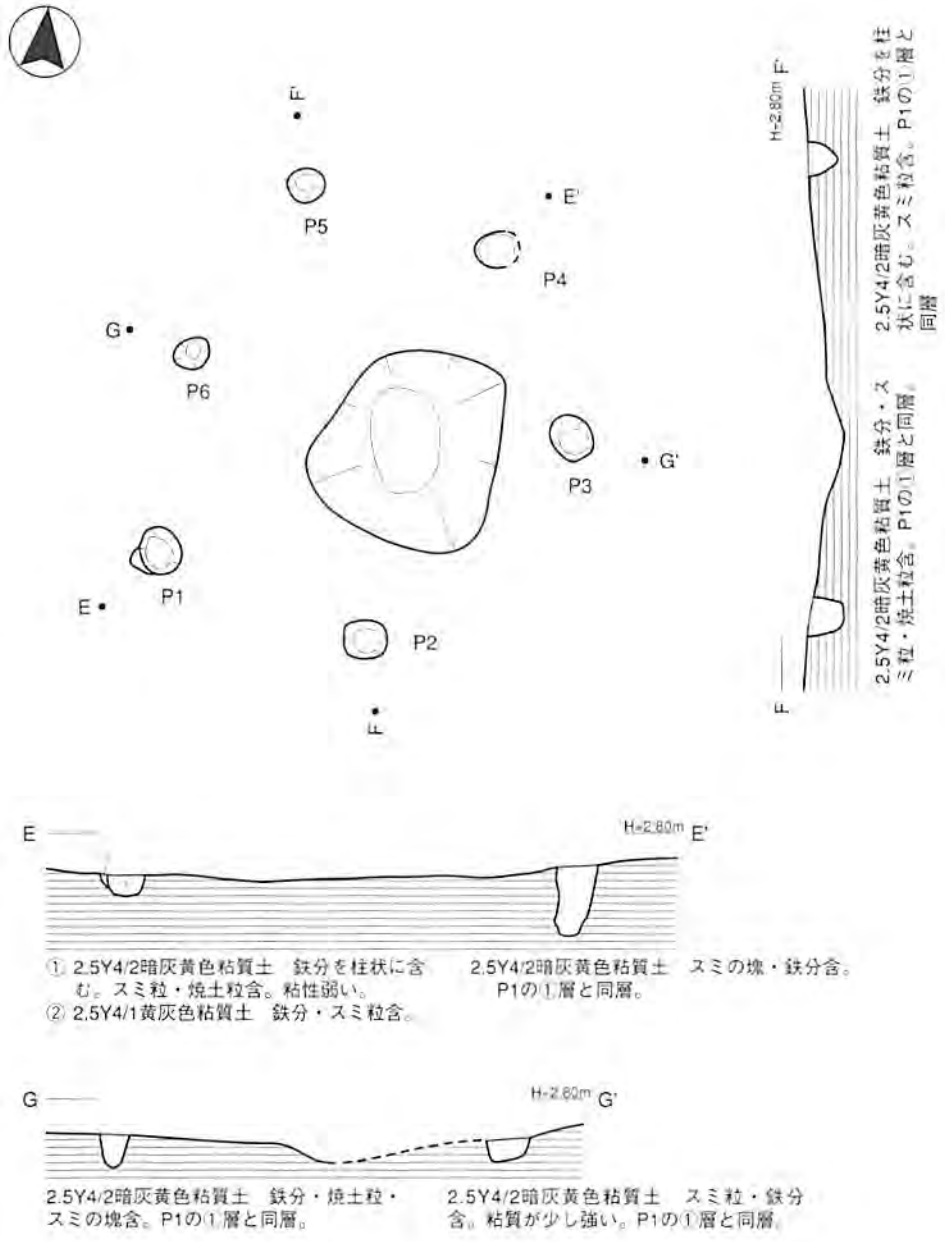


Fig.57　3区SI07実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI07	主軸方向	A-A':N=-6° B-B':W=6°
時期	弥生時代後期	炉	中央部
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	3.62×4.31m	柱穴	主柱穴2基、支柱穴6基
面積	15.08㎡	備考	

調査区東側で検出した隅丸方形の形態を示す竪穴式住居跡である。西側隅はほぼ直角なコーナーを有するが、東側は緩やかな隅丸を呈している。住居土層は自然堆積による状況を示している。炉は住居跡ほぼ中央部より検出されている。住居内の炉周辺でわずかに落ち込みを確認したが、用途並びに性格は確認できていない。主柱穴はD-D'の土層図で示しているが浅い掘りこみを2基確認している。Fig.57では柱穴及び炉の関係性を見るため床面下で確認した図面を提示している。やや西に偏った状況ではあるが、本住居跡に伴なう支柱穴であろう。

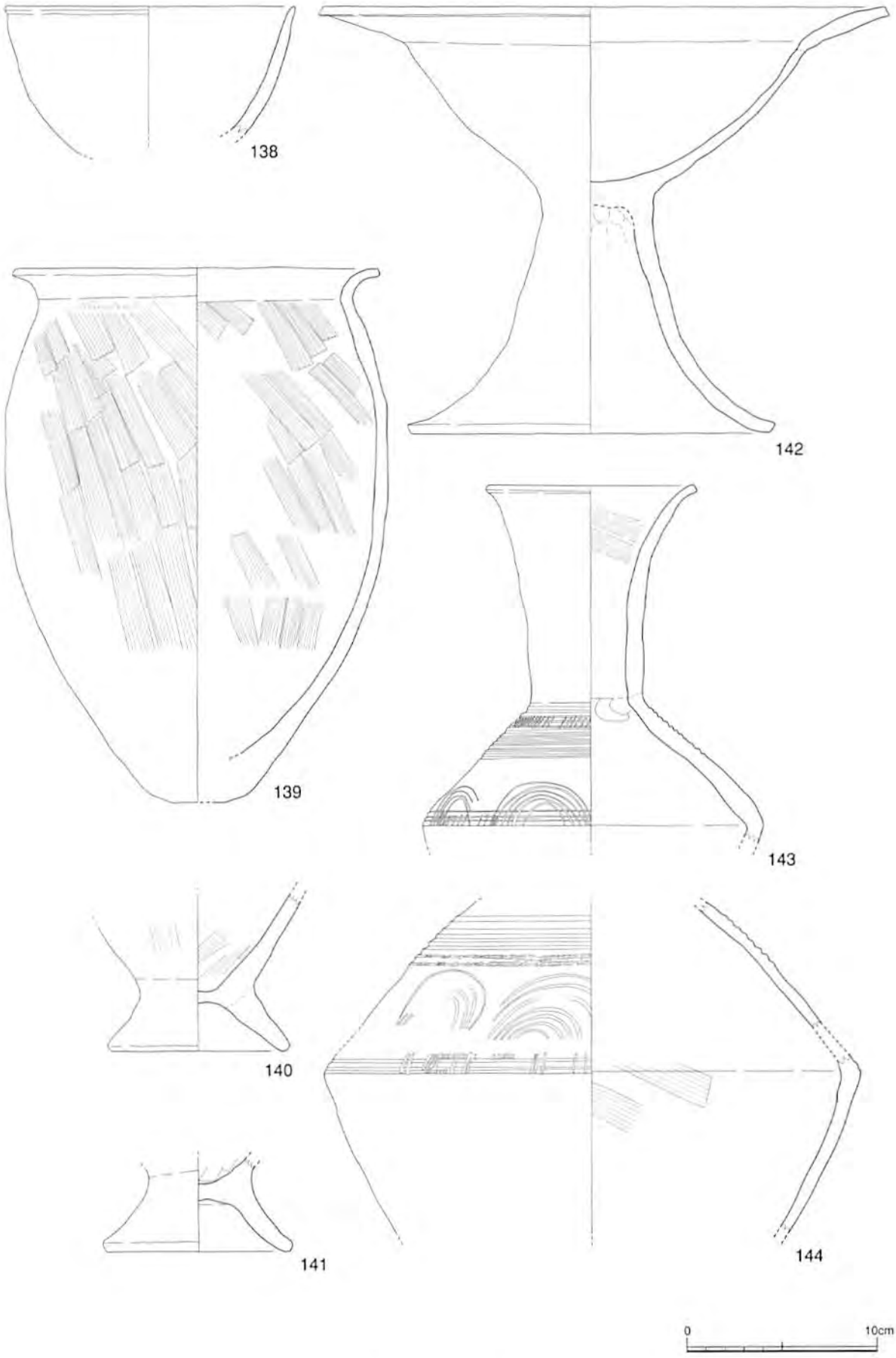


Fig.58　3区SI07出土遺物実測図

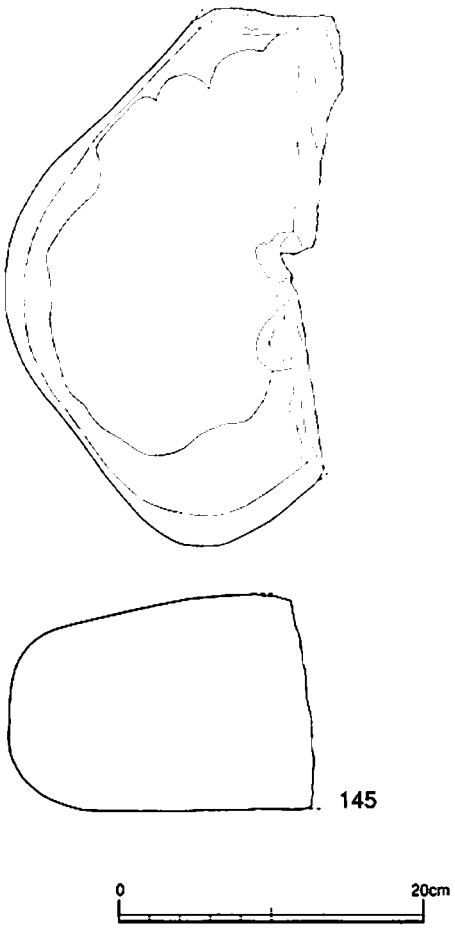


Fig.59　3区SI07出土遺物実測図

138　鉢形土器である。底部は欠損しているが、緩やかに立ち上がる胴部はやや外反しながら口縁部に至り、端部は内器面をやや押え丸くおさめる。口縁部には1/3周ほど緩やかなふくらみを持つ部位が認められる。

139　甕形土器である。胴部最大径を中位よりやや上に持ち口縁部は内器面に明瞭な稜を有し屈曲する。端部はやや丸みを帯びながらも四角に成形される。底部は凸レンズ状を呈する。口縁部内器面は横ナデが施される。

140　甕形土器の脚台部である。直線的に開き、端部はナデにより四角く成形され低い。底部は薄く仕上げている。

141　甕形土器の脚台部である。やや外反して開き、端部成形は四角におさまって低い。

142　高杯形土器である。杯部は深く椀状を呈する。複合的に開く口縁部は肥厚して斜め上方へやや外反して開き、端部は四角くおさまる。脚部はわずかに内反しながら下方に向かい、裾部で大きく広がる。裾端部は角張る。全体的に薄く仕上げられ、器面には焼成時の黒斑が外器面や口縁部の内器面に観察される。

143　重弧文長頸壺形土器である。頸部はゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部に向かって大きく外反する。端部は四角におさまる。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部を持つ。肩部から胴部にかけて多くの横位沈線が巡り、横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている箇所もある。その下位には6重からなる上向きの重弧文が巡り、その後屈曲部に3条の横位沈線が施されている。内器面には頸部と胴部の接合部を指で押さえた痕跡が認められる。屈曲部以下は欠損する。

144　重弧文壺形土器である。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部を持つ。肩部から胴部にかけて多くの横位沈線が巡り、下方の横位沈線上には刻み状の縦位短沈線が施されている。その下位には7重からなる上向きの重弧文が巡る。さらに屈曲部には3条の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。磨耗が激しい。

145　砂岩製磨石である。作業面は表面に固定され全体的に磨痕が認められる。使用によるものかは分からないが半分に割れている。

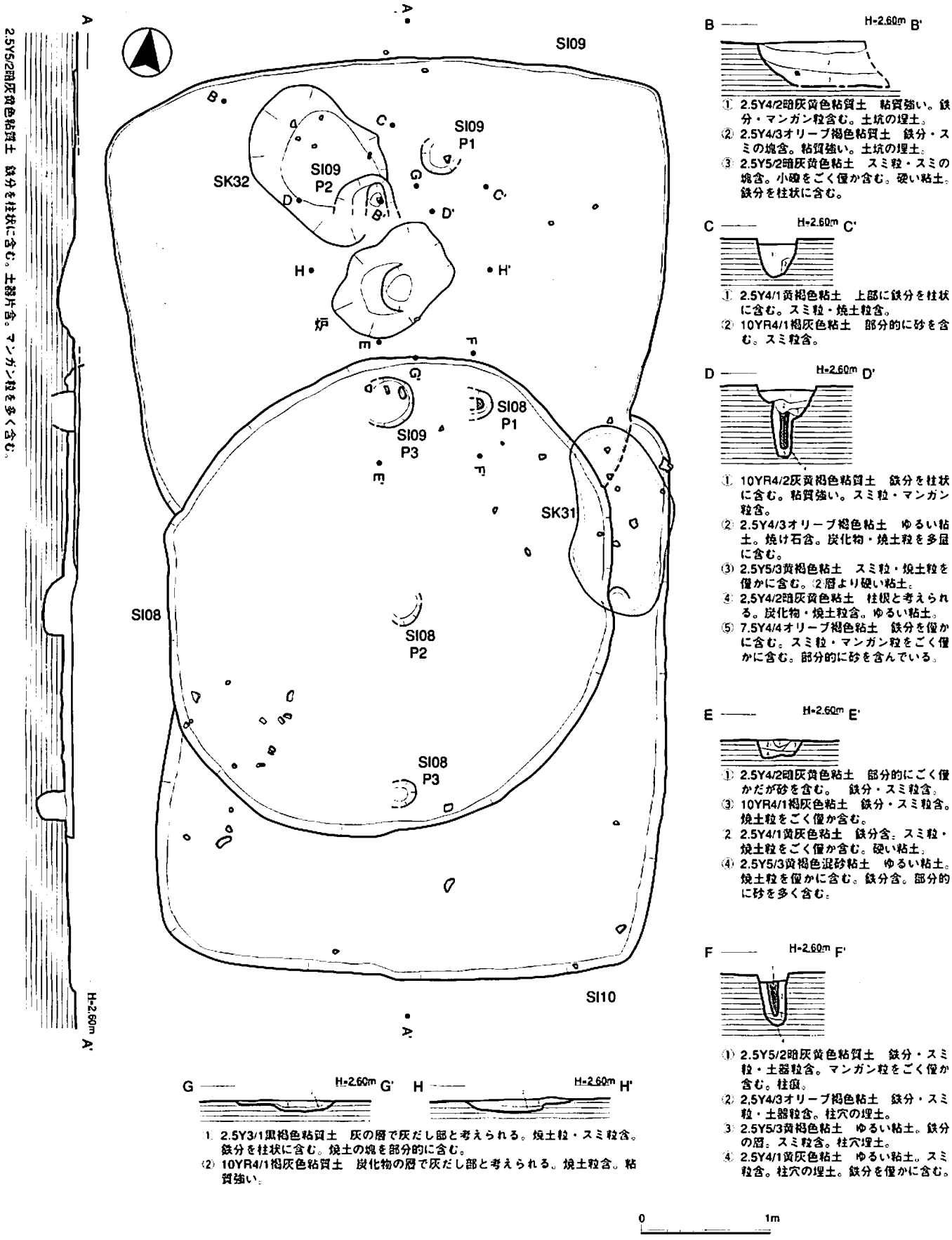


Fig.60　3区SI08・09・10、SK31・32実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI08	主軸方向	
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SI09・10を切る	土坑	未検出
規模・深度	3.64×3.50m×0.08m	柱穴	P1 0.24×0.24×0.4m （柱痕 0.09×0.09×0.27m） P2 0.4×0.3×0.21m（推定） P3 0.23×0.2×0.23m（推定）
面積	10.30㎡	備考	

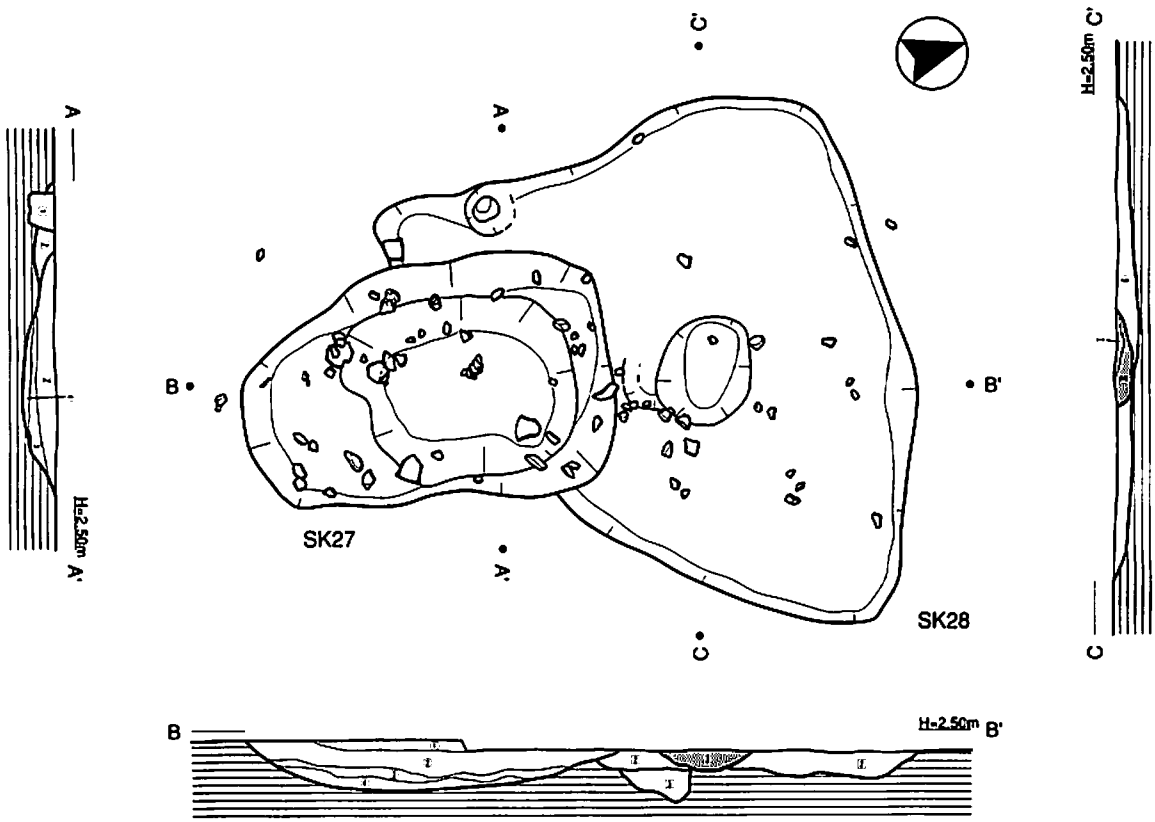
SI09・10を切って検出された円形を呈する竪穴式住居跡である。3軒の竪穴式住居跡が切り合い関係にあるため、調査は困難を極めた。柱穴は北隅・中央・南隅に3基検出され、うちP1からは柱痕が確認された。

遺構名	竪穴式住居跡SI09	主軸方向	A-A'=N-14°-E
時期	弥生時代後期	炉	中央部 0.97×0.67×0.09m
切り合い関係	SI08に切られSI09を切る	土坑	北部 1.36×0.83×0.31m
規模・深度	4.27×3.85m×0.03m	柱穴	P1 0.3×0.3×0.28（推定） P2 0.5×0.45×0.2m（推定） P3 0.45×0.35×0.55m
面積	16.4㎡（残存部のみ）	備考	

残存率約2/3の隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の北に位置する炉跡は長楕円形で浅く掘り込まれており、燃焼面と灰の掻き出し部が一部重複する状態で確認された。炉跡北部に位置する土坑は地山である砂層の直上に硬い粘土を張っており、防湿機能を備えた貯蔵穴と考えられる。また炉跡を挟んで3基の柱穴が検出された。P2・P3からは柱痕が確認されることから、主柱穴と考えられる。

遺構名	竪穴式住居跡SI10	主軸方向	A-A'=N-14°-E
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SI08・9に切られる	土坑	北西隅部1.43×0.76×0.06m
規模・深度	4.30×3.43m×0.05m	柱穴	未検出
面積	㎡	備考	

全体の約3/7が検出された隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の北西隅部で確認された土坑は長楕円形で浅い掘り込みをもち、貯蔵穴と考えられる。また住居跡の大半がSI08に切られているため、炉跡や柱穴などの付帯施設については不明である。



① 10YR4/1褐灰色粘質土　よくしまっている。鉄分を柱状に含む。スミの塊・スミ粒・土器粒含。礫・土器片・マンガン粒を僅かに含む。
② 10YR3/1黒褐色粘質土　炭化物の塊・焼けた小礫・土器片を多量に含む。炭化物の層。鉄分を柱状に僅かに含む。土器粒・焼土粒含。粘質強い。
③ 2.5Y4/2オリーブ褐色粘土　土器片・土器粒含。鉄分を柱状に含む。スミ粒を含むがスミの塊は含まない。部分的に砂が僅かに混じっている。
④ 10YR4/2灰黄褐色粘土　鉄分を柱状に僅かに含む。部分的にマンガン粒を含む。小礫をごく僅かに含む。焼土塊含。焼土の層。
⑤ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分・土器粒・スミ粒・焼土粒含。粘質強い。砂をごく僅かに含む。
⑥ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　鉄分を柱状に含む。スミ粒・土器粒含。粘質弱い。
⑦ 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土　鉄分・スミ粒・焼土粒含。
Ⅰ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　鉄分・スミ粒・土器粒・小礫（焼け石）含。炉の埋土。
Ⅱ 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土　スミの塊・鉄分・焼土塊含。粘質強い。炉の埋土。

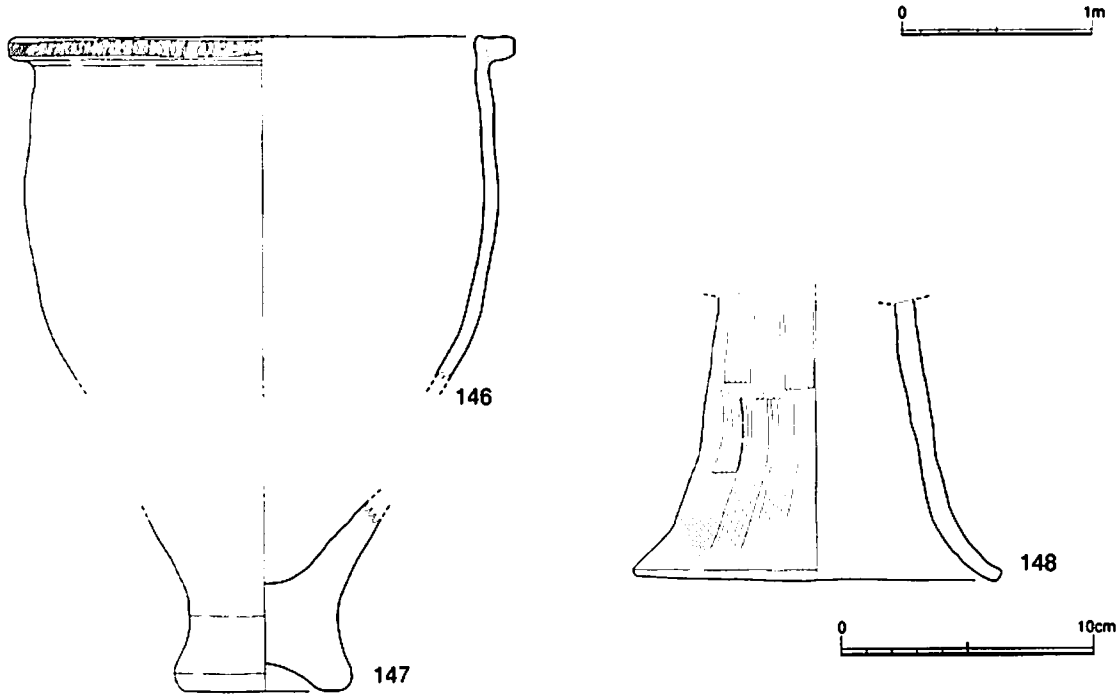


Fig.61　3区SK27・28実測図

長楕円形の土坑が重なって検出されたが、調査段階では一つの土坑として認識した。ここでは南側をSK27、北側をSK28として報告する。SK28 は多量の炭化物の層に覆われており、最下層は焼土を含む粘土を貼っている。またSK27では中央部に炉跡と推定される円形の掘り込みが確認された。SK28は炭化物と焼土の層で構成されている。竪穴住居跡が削平され、炉跡部分のみが確認されたとも考えられるが詳細は不明である。埋土中からは弥生時代中期の脚台付の甕片が出土している。

146　甕形土器である。口縁部は逆L字を呈し、端部に刻み目を施す。胴部は逆円錐形を呈す。内外器面にナデを施す。底部形態は欠損のため不明。

147　甕形土器の脚台部である。くびれて分厚く上げ底である。磨耗のため調整は不明である。

148　高杯形土器の脚部である。下方に向かい緩やかに外反し、裾部でさらに外反する。裾端部はナデにより角張る。外器面に刷毛目を残す。

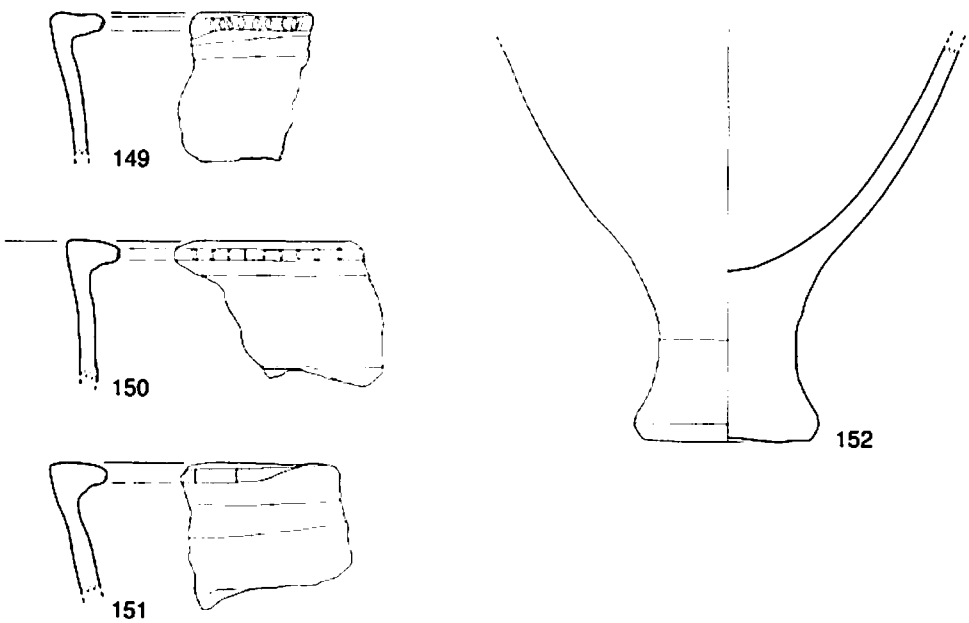


Fig.62　3区SK29出土遺物実測図

149～151　甕形土器の口縁部である。口縁部は断面三角形を呈し、口縁端部に刻み目を有する。口縁部つけ根から離れて胴部に1条の浅い沈線を施す。

152　甕形土器の脚台部である。胴部からくびれて分厚く僅かに上げ底である。磨耗のため調整は不明である。

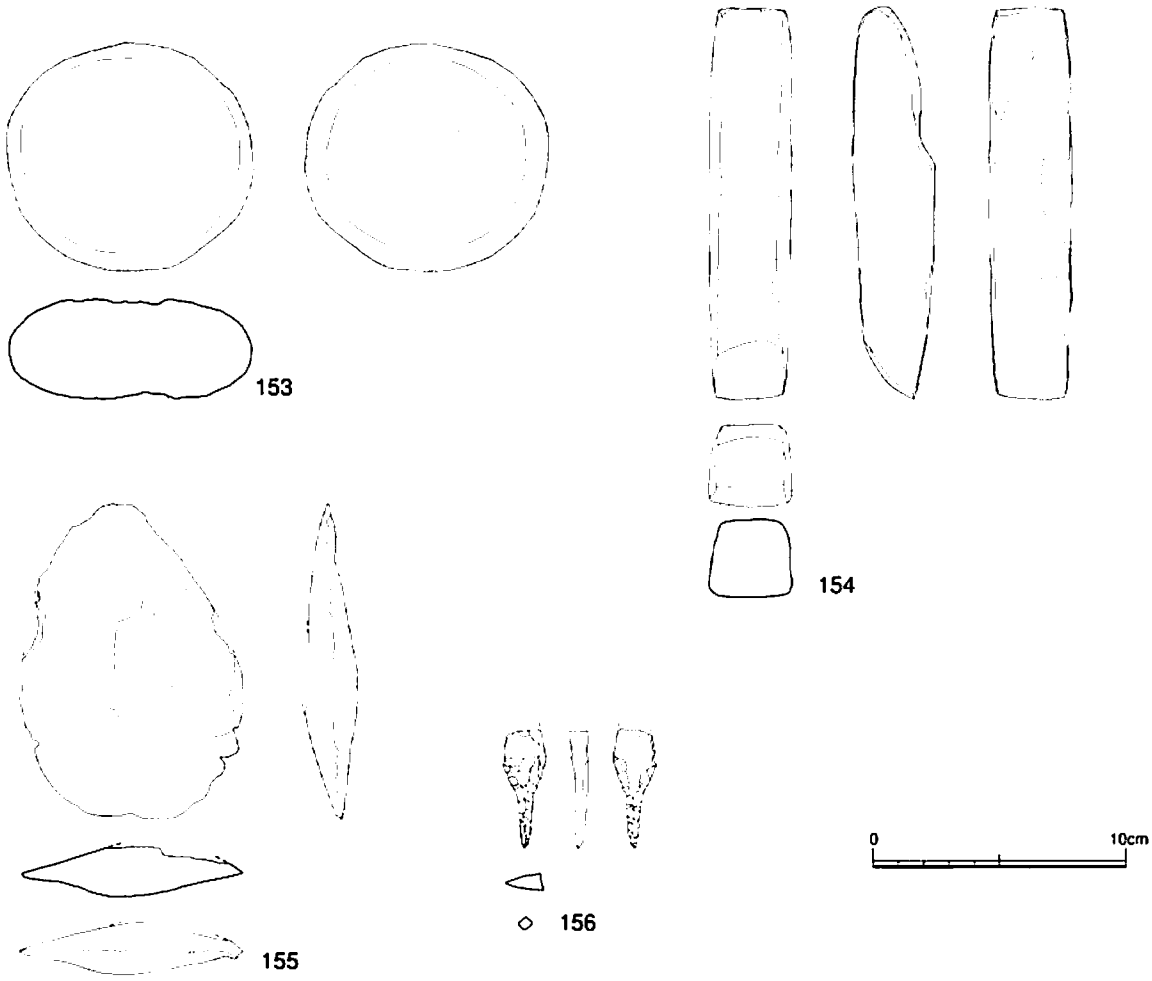


Fig.63　3区包含層出土遺物実測図

包含層

153　砂岩製敲石である。平面形態は円形を呈し、敲打痕が表裏面中央部と側面のほぼ全面に認められる。表裏面中央部は使用頻度が高く、顕著に窪んでいる。

154　粘板岩製柱状片刃石斧である。石器製作に伴う磨痕を残し、刃部には使用痕が認められる。両刃であるが、器体の高さ（側面幅）が5.8cmを測り、器体の幅に対する比率が1.3倍となることから柱状片刃石斧として報告する。刃部の形成は直線的ではなく側面観は大きなカーブを描く自然面を利用した石斧である。そのため刃部は薄く鋭利である。基部となる部分に横方向からの打力が入り一部剥離または、潰れている。刃部は使用に伴なう刃こぼれ等は無い。

155　安山岩製打製石斧。安山岩より剥ぎ取った分厚い剥片を素材とし縁辺部をそのまま刃部として使用している。基部は裏面からの加撃により、両側端に扶りが入る。

156　安山岩製石錐である。全面に細かな調整を繰り返して入れ錐部を作成している。上部は折ったものか使用中に折れたものかは不明である。

Fig.64　4区遺構実測図

3）4区

当遺跡で最初に調査に着手した調査区である。水田床土直下から検出される遺構は、水田の影響からか鉄分及びマンガン粒の集積が強く、検出に慣れるまで時間がかかった。土壌は3区と同様に安定し3区より更に砂を多く含む。遺構は今回調査した本遺跡中、最も規模の大きな住居が検出されている。

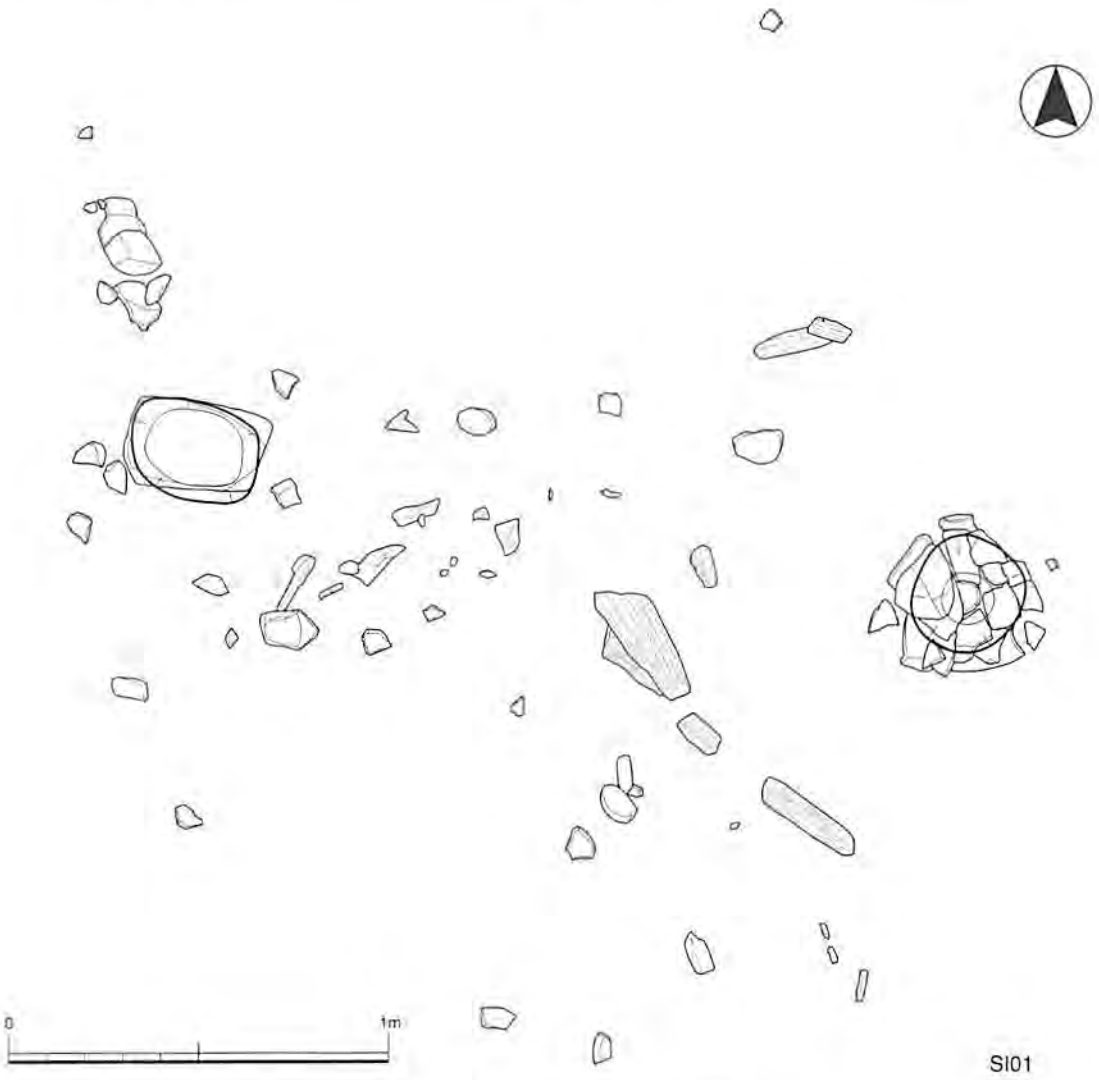


Fig.65　4区SI01遺物出土状況

遺構名	竪穴式住居跡SI01	主軸方向	不明
時期	弥生時代後期	炉	不明
切り合い関係	無	土坑	不明
規模・深度	不明	柱穴	2基
面積	不明	備考	

掘り込みは既に削平によって残存していないが、多くの遺物・炭化物と2基の柱穴が確認されたことから、竪穴式住居跡と考えられる。特に、P1直上に台石159、P2直上に甕型土器1個体が土圧で潰れた状態で出土していることから、柱材を抜き取った後の住居跡廃絶に関する祭祀が行われていた可能性が推定される。

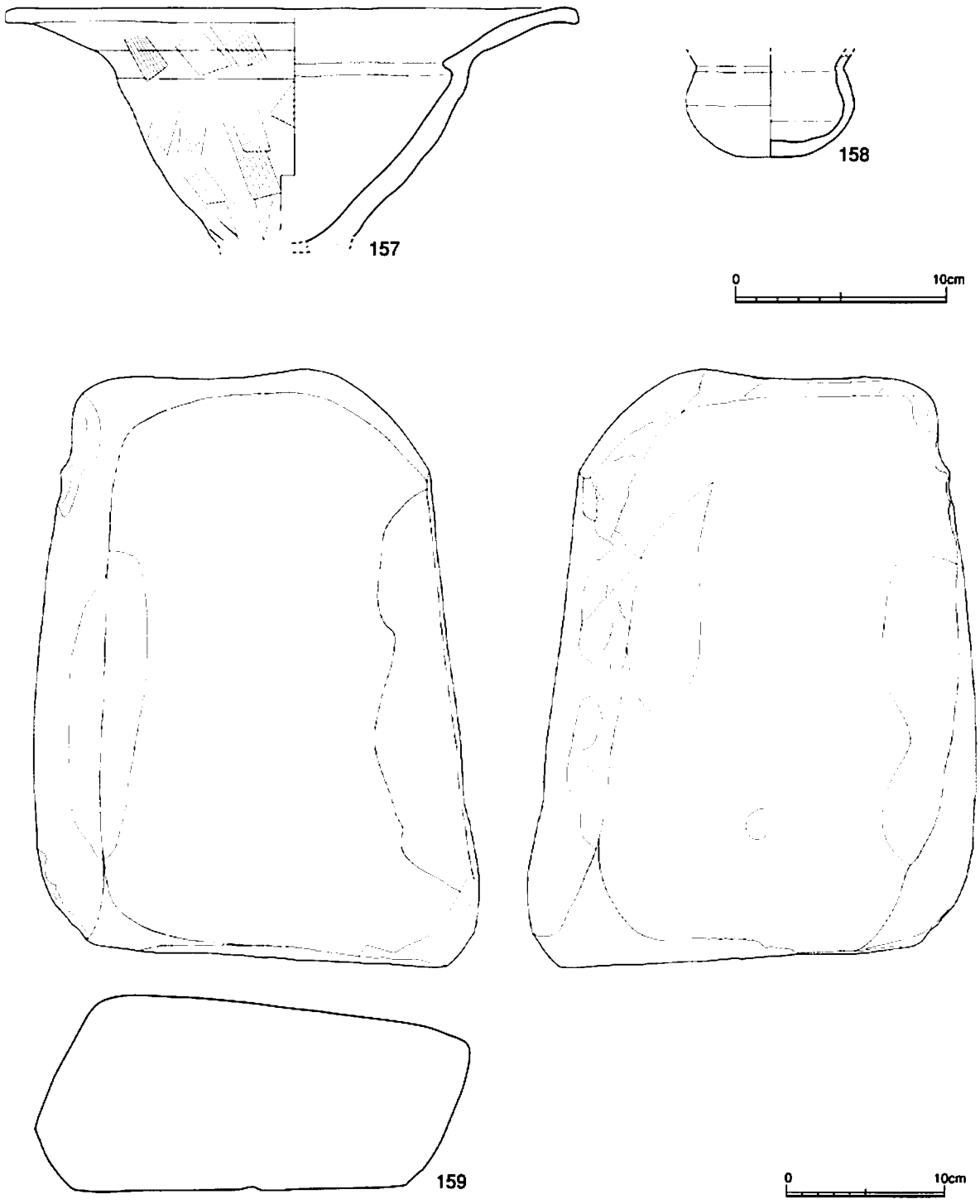
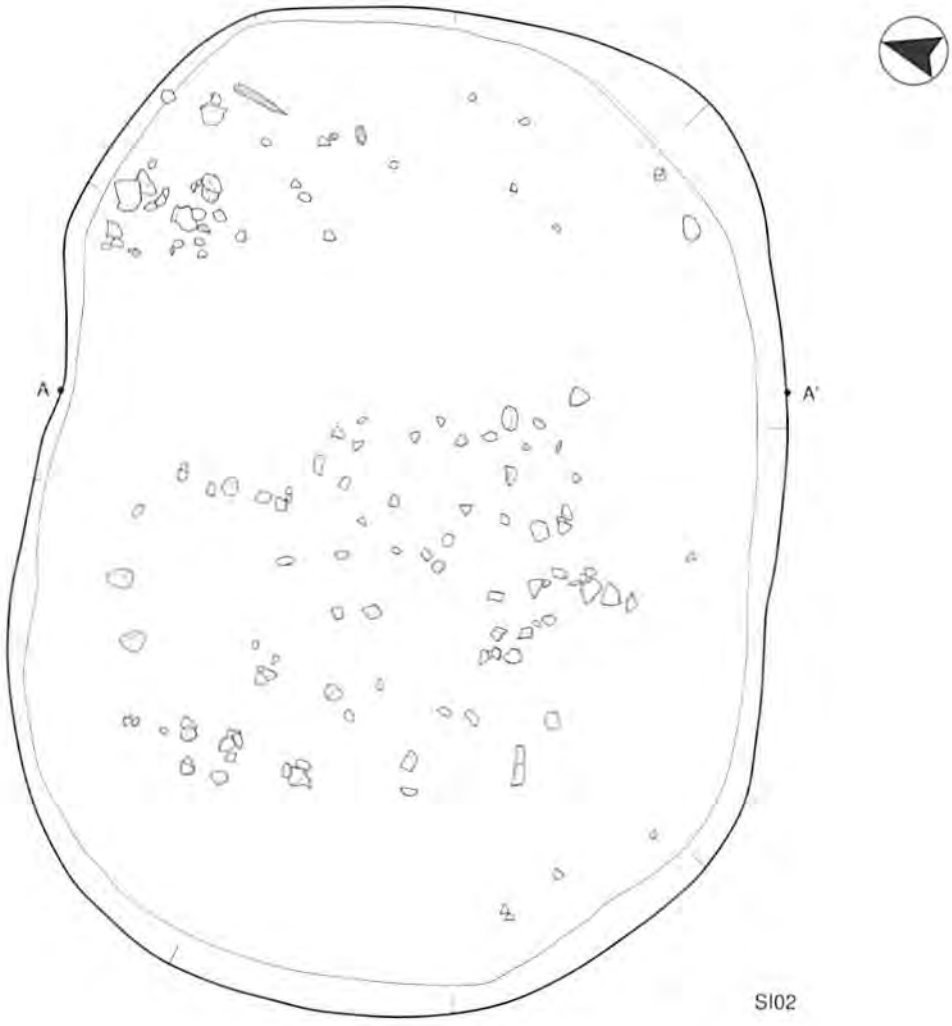


Fig.66　4区SI01出土遺物実測図

157　高杯形土器の杯部である。深い杯部から上方へ直線的に伸び、胴部中位で複合的に強く屈曲した後，外反して開く。口縁端部はナデにより角張る。杯部と脚部の接合部分が剥離している。

158　小型壺形土器である。平底を呈する。胴部最大径を中位に持ち頸部で屈曲した後、口縁部は斜め上方へ直線的に伸びる。

159　砂岩製石皿である。表面は全体的に磨痕などが認められ、特に2箇所で使用の痕跡が著しい。裏面にも2箇所の使用痕跡が認められる。



基本土層
5 暗灰褐色粘質土　硬くしまっており、マンガン粒（径3～5mm）を多く含む。
6 明橙色粘質土　硬くしまっており、マンガン粒（径2～3mm）・遺物を多く含む。

SI02
① 暗黄橙色粘質土　やや粘土にちかく橙色が薄く見られる。
② 明橙色粘質土　橙色が強く水平に堆積が見られる。
③ 灰色粘質土　やや砂が混入している。
④ 暗灰色粘質土　粘性が強い。
⑤ 灰色粘質土　カーボンを粒状に多く含む。
⑥ 灰色粘土　やや粘性が強くカーボンを含んでいない。

Fig.67　4区SI02実測図

0　1m

遺構名	竪穴式住居跡SI02	主軸方向	A-A'＝N-16°-W
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	5.5m×4.2m×0.12m	柱穴	未検出
面積	21.6㎡	備考	

長楕円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡のほぼ中央におよそ1.05m×0.47mの焼土が集中して認められたが、明確な掘り込み等が検出出来なかった為、炉跡としての検出には至らなかった。最終的に掘り方まで掘下げ柱穴等を確認したが、主柱穴は確認できなかった。

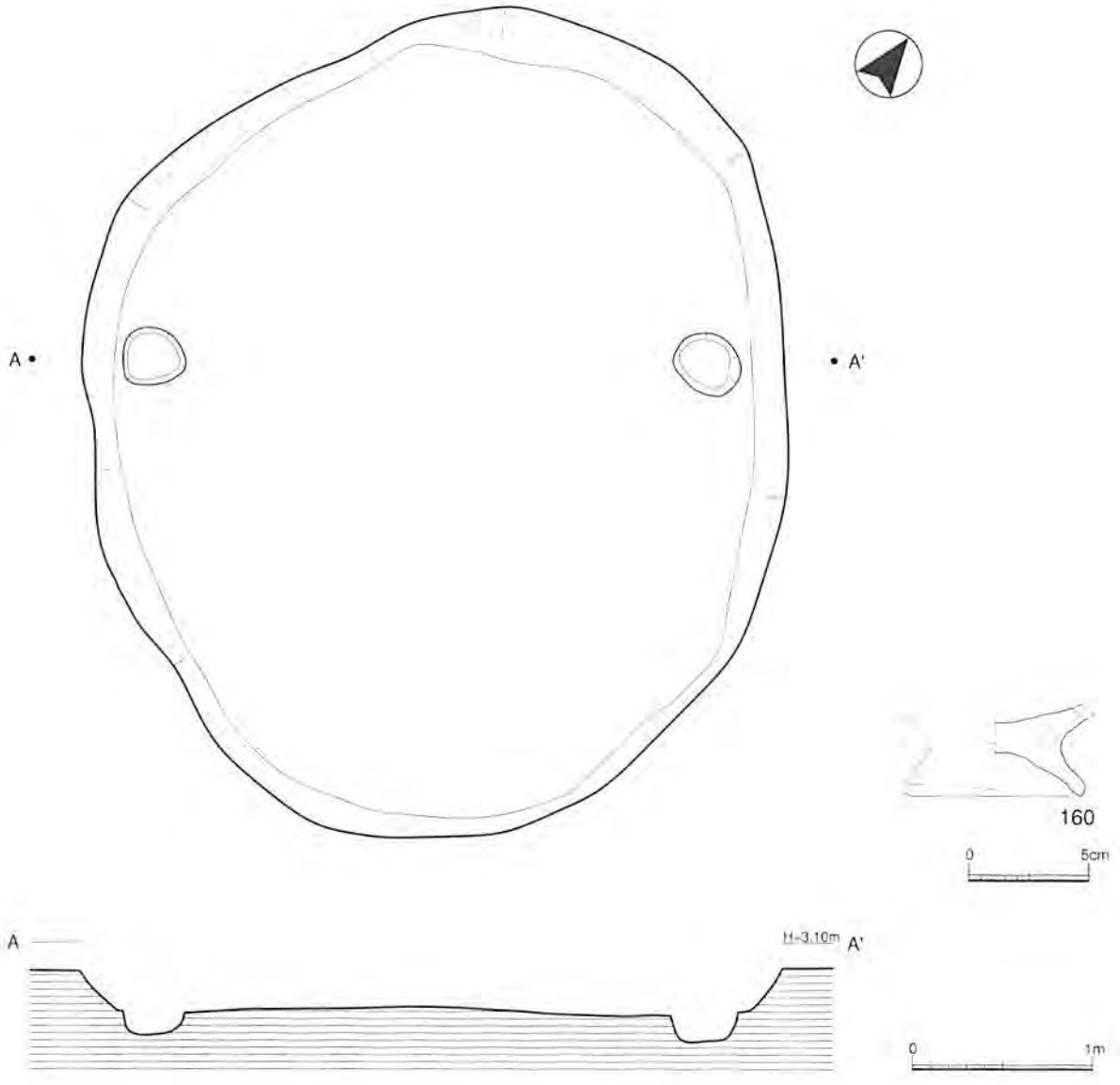
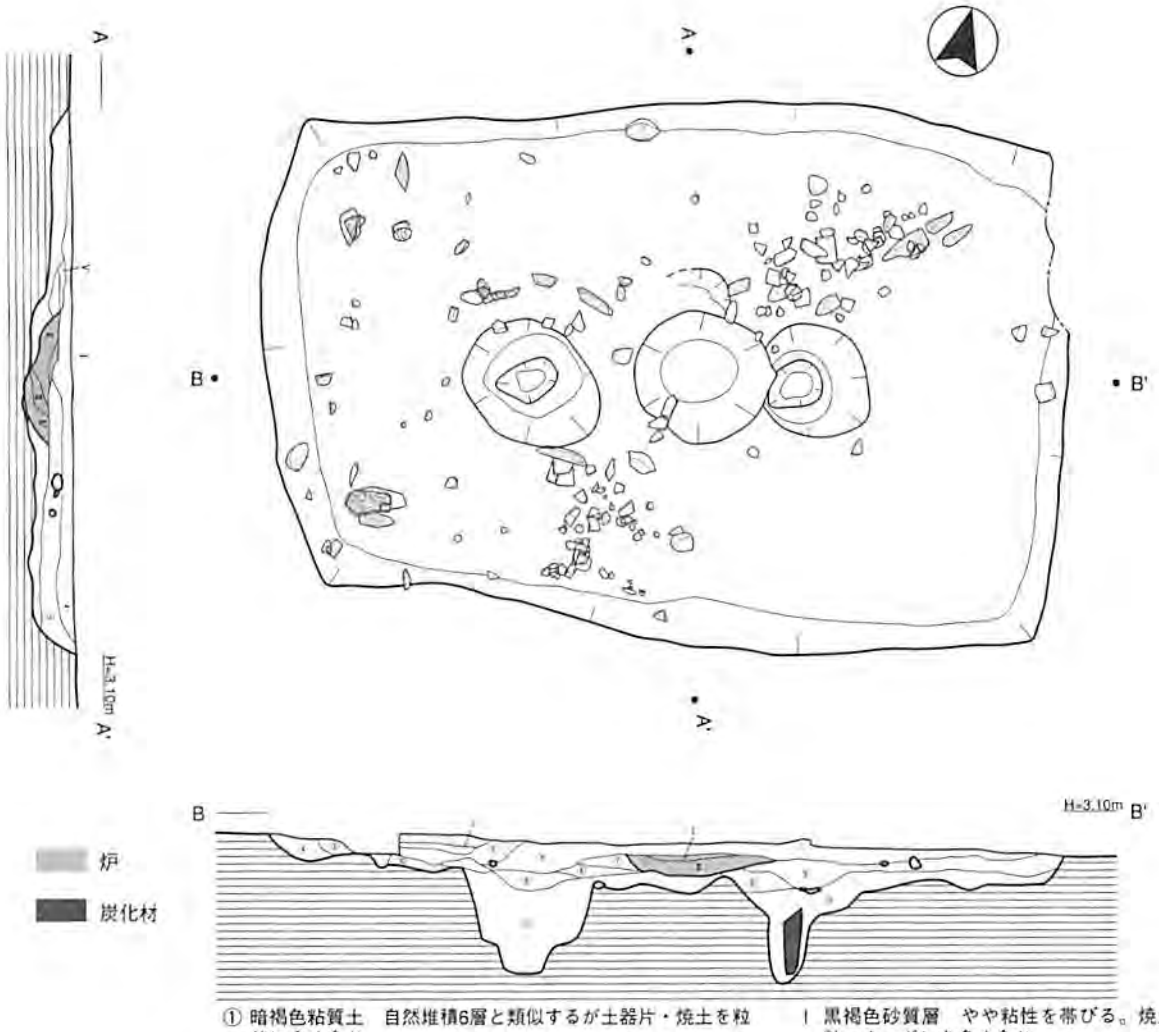


Fig.68　4区SI03実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI03	主軸方向	—
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	4.5m×3.9m×0.2m	柱穴	P1　0.35m×0.3m×0.14m P2　0.37m×0.35m×0.15m
面積	17.55㎡	備考	

円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の壁面沿いの東西隅に2基の柱穴が確認された。柱痕は認められず浅めの掘り方のみが確認された。また炉跡や土坑などの付帯施設は検出できなかった。

160　甕形土器の脚台部である。直線的に開き、端部はナデにより四角く成形されて低い。脚台部は薄く仕上げている。外器面接合部に指ナデの痕跡を明瞭に残す。



① 暗褐色粘質土　自然堆積6層と類似するが土器片・焼土を粒状に多く含む。
② 暗褐色粘質土　①と同じだがカーボンをより多く含む。
③ 暗褐色砂質土　①・②と類似。焼土塊含。弥生後期土器含。
④ 暗褐色粘質土　③層よりカーボンを多く含む。
⑤ 暗褐色粘質土
⑥ 暗灰色砂質層
⑦ 黒灰色砂層
⑧ 暗褐色粘質土
⑨ 暗灰色粘土層
⑩ 暗灰色砂層
⑪ 黒褐色石質土

Ⅰ 黒褐色砂質層　やや粘性を帯びる。焼土粒・カーボンを多く含む。
Ⅱ 黒褐色粘質土　粘性強い。カーボンをブロック状に含む。炉内の張粘土か。
Ⅲ 黒褐色砂層　やや粘土が混入しているが、ほぼ砂質（掘り方時の掘り込みか）
Ⅳ 黒褐色砂層　砂層が黒化している層。掘り方の最下面。
Ⅴ 赤化焼土　強く焼きしまており硬化している。
Ⅵ 炉床　掘り込み、焼土が粒状に入る。やや粘質。

Fig.69　4区SI04実測図

0　1m

遺構名	竪穴式住居跡SI04	主軸方向	A-A=N-17°-W
時期	弥生時代後期	炉	中央にて検出
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	2.68m×4.32m×0.74m	柱穴	炉を挟んで2箇所に検出
面積	約11.57㎡	備考	

長方形を呈する竪穴式住居跡である。多くの土器と炭化材が出土している。炭化材の木目の方向から住居跡中央部に向かって倒れたであろうことが推定される。また、住居跡中央に位置する炉跡は浅く掘り込まれており、粘質土を張ることで地山からの湿気を防ぐ構造であったことが窺える。長期にわたり使用されていたためか地山は黒化し、炉床面は強く焼き締まって硬化している。さらに炉跡を挟んで検出された2基の柱穴の一方からは炭化材が検出され、これらは主柱穴であったと考えられる。

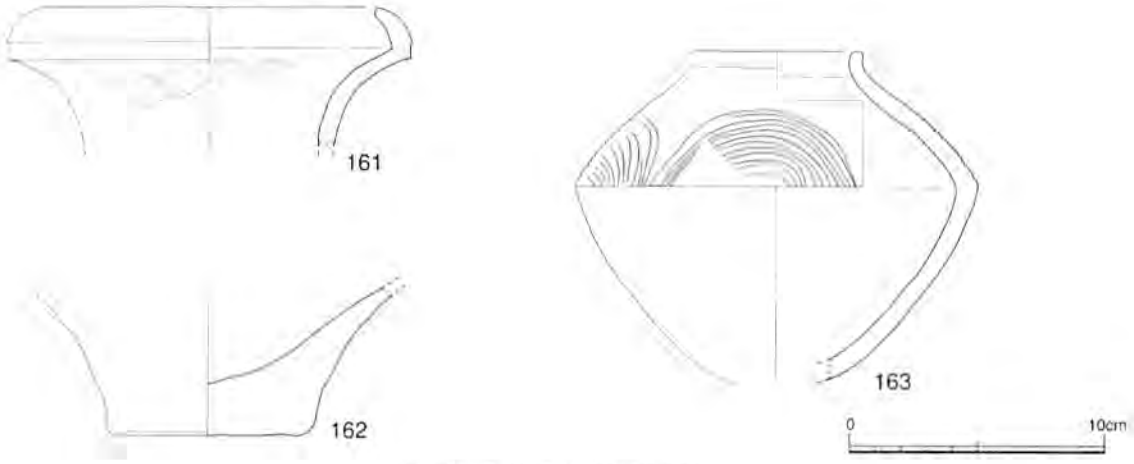


Fig.70　4区SI04出土遺物実測図

161　複合口縁壺形土器の口縁部である。大きく外反し、粘土貼り付け後に複合的に強く屈曲して内傾する。口縁端部はやや肥厚する。

162　壺形土器の底部である。底部はほぼ垂直で平底をなす。

163　重弧文短頸壺形土器である。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部を持つ。屈曲部から直線的に口縁部に向かい、直立するように屈曲して丸くおさめられ端部に至る。一部欠損しているが尖り気味の底部であったことが推定される。屈曲部には稜が認められ、その稜上に10重からなる重弧文が施される。内・外器面共にナデが施される。

遺構名	竪穴式住居跡SI05	主軸方向	A-A'＝N-23°-E
時期	弥生時代後期	炉	中央　0.97m×0.95m×0.07m
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	6.35m×5.0m×0.27m	柱穴	中央　0.55m×0.35m×0.52m
面積	31.75㎡	備考	

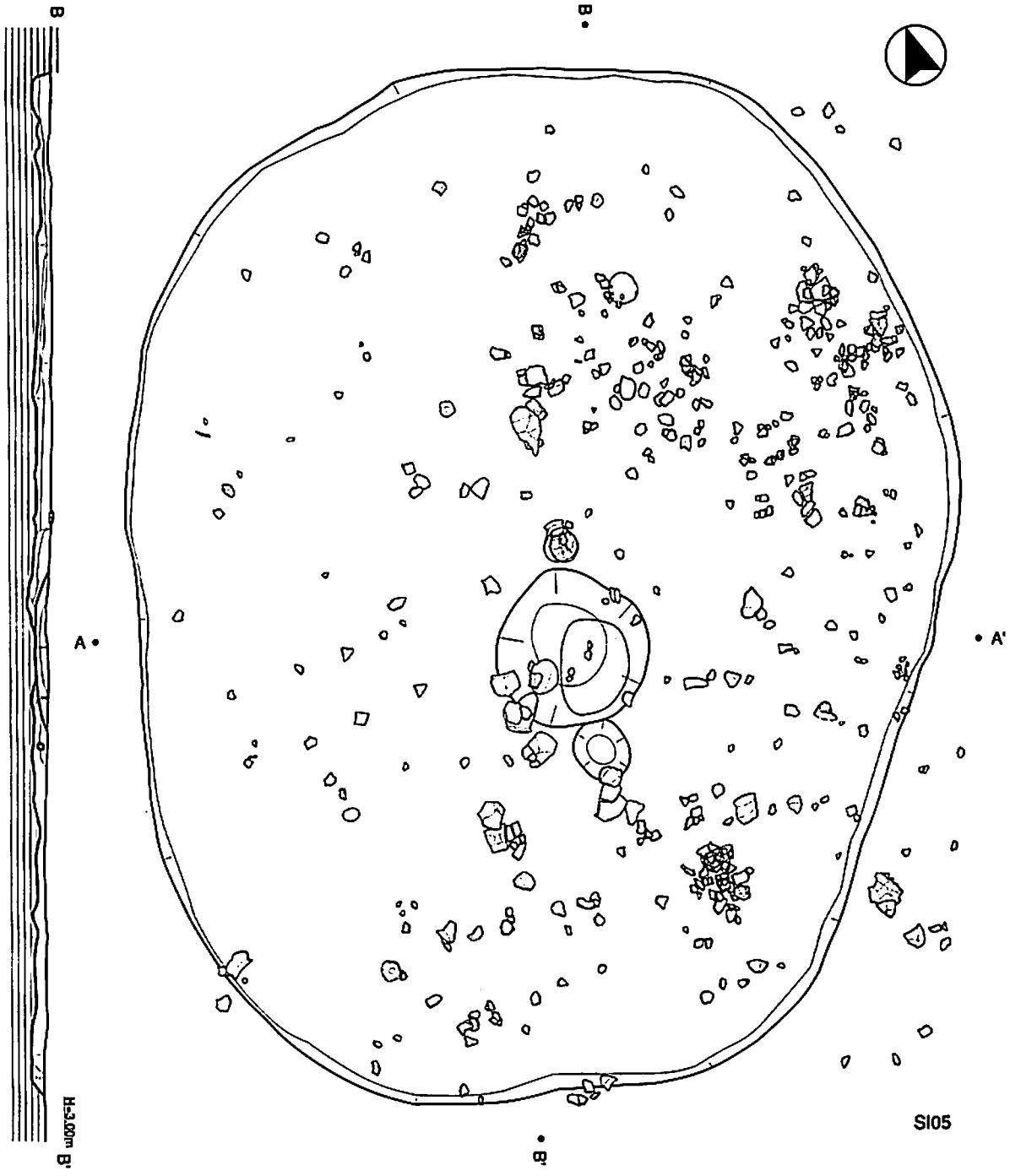
長楕円形を呈する竪穴式住居跡である。遺構検出時より多量の土器が認められ、床面からはほぼ完形の甕型土器の出土もみられる。土層断面観察の結果、最下層に粘土層が認められることから、本住居跡は貼床をしていたことが分かった。また住居跡中央に位置する炉跡も浅く掘り込まれており、粘質土によって貼床を行っている。さらに、柱穴からは径0.13m、検出面からの深さ0.27mを測る柱痕跡が認められた。

164　甕形土器である。頸部は「く」の字に屈曲して僅かに外反し口縁部に至る。端部は横ナデ等の成形により四角におさまる。内・外器面に明瞭に刷毛目が観察される。

165　甕形土器である。胴部から立ち上がる口縁部は頸部を境に緩やかに上方へ開きやや丸みを帯び端部に至る。端部は四角で外面に当たる面に一条の沈線が施される。

166　甕形土器の脚台部である。直線的に伸びる胴底部に付属する脚台部は、直線的に開き端部はナデにより丸く低脚である。脚台部は内・外器面とも横ナデが施されている。胴上部はおそらく165の部位と接続するものと思われる。

167　小型の甕形土器である。胴部最大径を中位にもつ。口縁部は頸部に明瞭に稜を残し「く」の字に屈曲した後、外反して丸くおさめられ端部に至る。脚台部はやや外反して開く。端部成形は四角くなる。内・外器面ともに調整をよく残す。



① 茶褐色粘質土　住居内埋土。土器片多く含む。
② 茶褐色粘土　住居内埋土。遺物含まない。
③ 灰色粘土　張床の一部か。
④ 黄褐色粘土　張り床の一部か。

Ⅰ 暗黒褐色粘質土　基本土層6層の土が焼土化して黒化した土のようである。焼土をブロック状に少量含む。
Ⅱ 赤化色粘質土（焼土）　11層と張り床と思われる層。

0　1m

Fig.71　4区SI05実測図

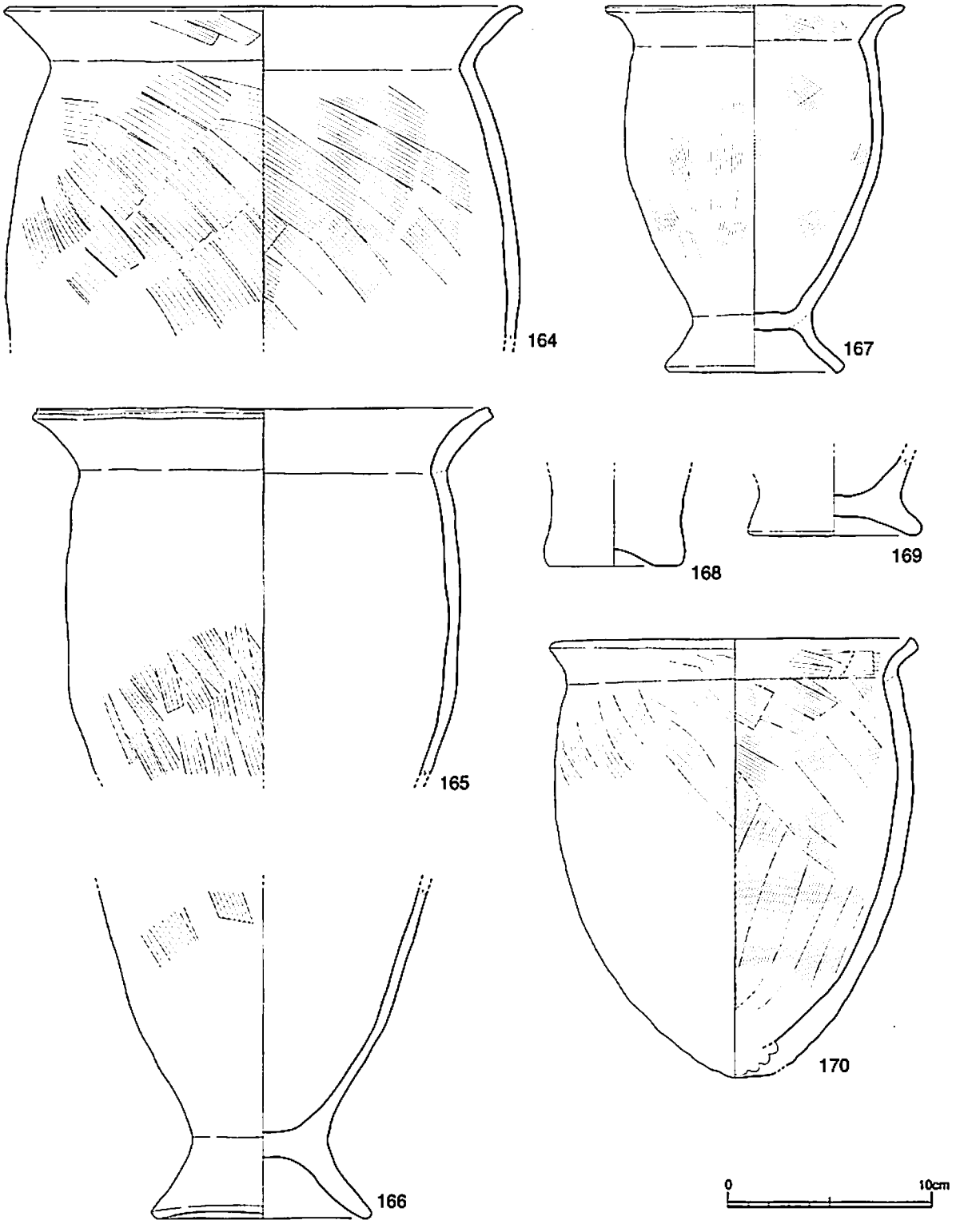


Fig.72　4区SI05出土遺物実測図

168　甕形土器の脚台部である。底部は厚くやや上げ底を呈する。

169　甕形土器の脚台部である。直線的に開き、端部はナデにより丸く非常に低い。

170　甕形土器である。胴部最大径をやや上位にもち、尖り気味の底部に至る。口縁部は屈曲の後、短く直線的に開き端部成形は角張る。内器面に刷毛目を明瞭に残す。受熱による劣化が著しい。

171　甕形土器である。胴部最大径を中位にもち、丸底を呈する。口縁部は屈曲後、やや外反して短く開く。端部はナデにより角張る。器面調整は内・外器面に刷毛目をよく残す。また内・外器面に煤が付着している。

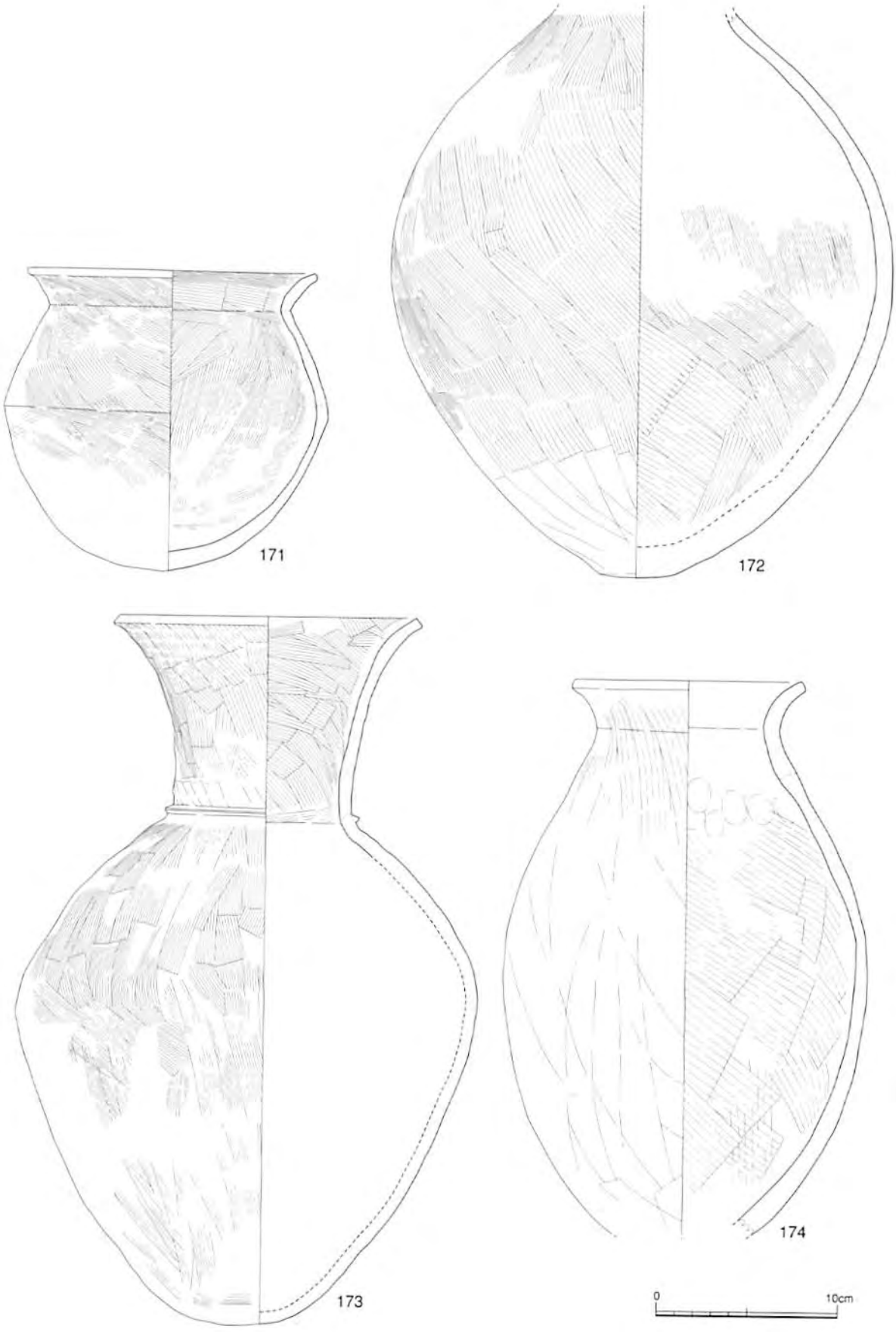


Fig.73　4区SI05出土遺物実測図

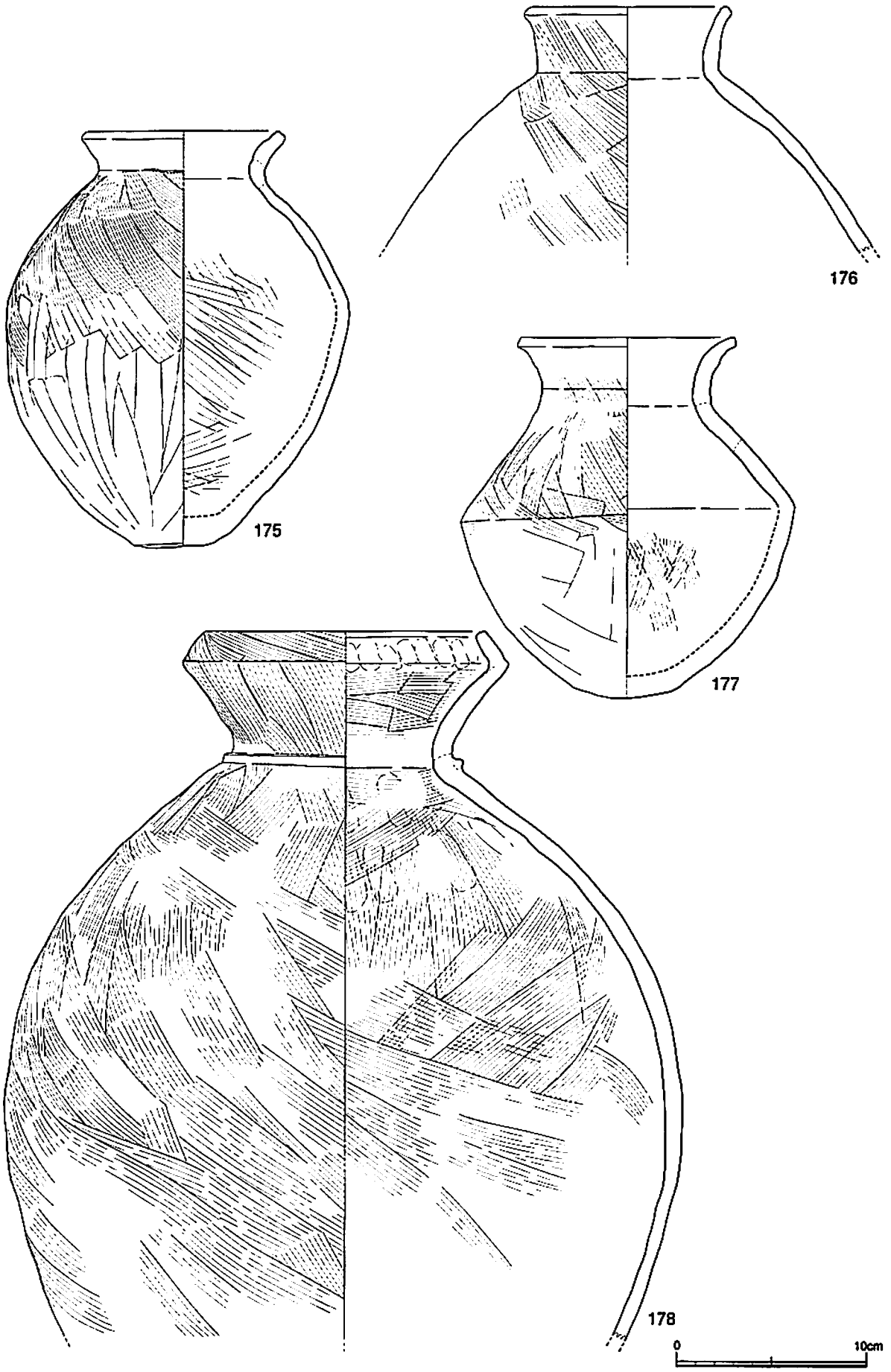


Fig.74　4区SI05出土遺物実測図

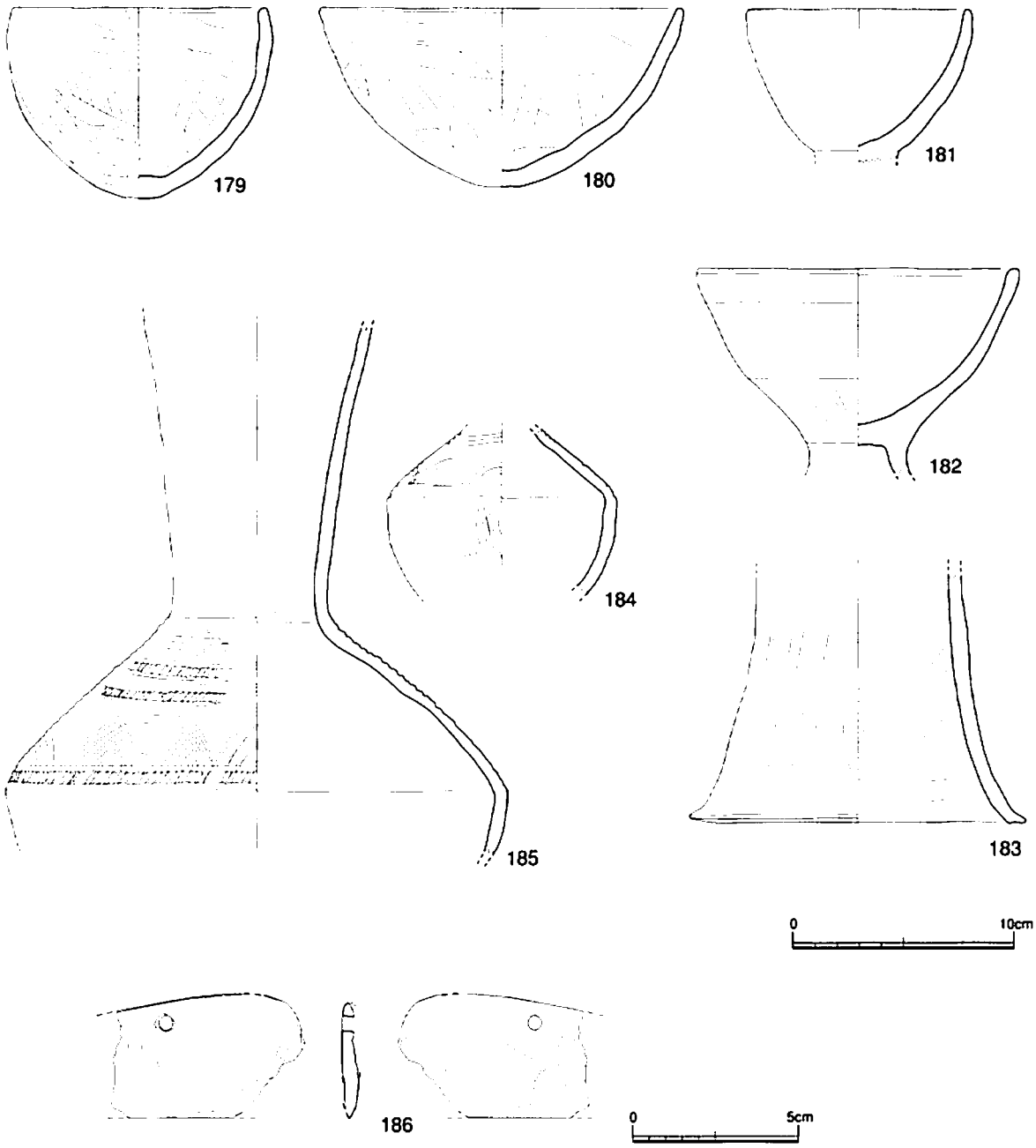


Fig.75　4区SI05出土遺物実測図

172　壺形土器である。胴部最大径は中位にあり胴部は丸みを帯びる。底部は凸レンズ状を呈す。外器面の底部周辺には工具によるナデが認められ、胴部には刷毛目が明瞭に観察される。口縁部は欠損のため不明。

173　広口口縁壺形土器である。胴部最大径を上位に持ち、やや内反しながら凸レンズ状の底部に至る。口縁部は直線的に斜め上方へ伸び、端部付近で外反する。端部は角張る。胴部と頸部の接合面に断面台形状の突帯が1条巡る。外器面は刷毛目が施される。外器面の一部にベンガラによるものと思われる顔料が残る。

174　壺形土器である。胴部最大径を中位に持ち、楕円形に近い形状を呈する。口縁部は緩やかに外反して上方へ短く開く。胴部下半に煤が確認される。内･外器面とも上方へ引き上げた刷毛目が観察される。底部形態は欠損のため不明である。

175　壺形土器である。胴部最大径を中位よりやや上に持ち、丸みを帯びる胴部を呈する。口縁部は屈曲後にやや外反し短く開く。端部はナデにより四角に成形される。底部は凸レンズ状を呈する。胴部下半に削り後ナデが観察される。

176　壺形土器である。口縁部は屈曲して斜め上方へ直線的に伸び、四角く成形された端部に至る。外器面に刷毛目をよく残す。肩部以下を欠損する。

177　壺形土器である。最大径は中位にあり屈曲した胴部を有する。口縁部は僅かに外反して角張った端部に至る。胴部上半は直線的で屈曲部以下はやや丸みを帯びる。丸底を呈する。

178　複合口縁壺形土器である。口縁部は大きく外反して開き、強く屈曲し内傾する。頸部には断面三角形の突帯が1条巡る。口縁部内器面は横方向の刷毛目と指ナデが認められる。底部は欠損のため不明。

179　鉢形土器である。丸底を呈し、胴部中位まで直線的に開いた後、直立するように屈曲して丸く成形された端部に至る。内・外器面に刷毛目が観察されるが、磨耗して一部不明である。

180　鉢形土器である。丸底を呈し、やや内湾する胴部がそのまま口縁部に至る。端部成形は丸くおさまる。内･外器面には明瞭な刷毛目が認められる。

181　台付鉢形土器である。底部からやや内反しつつ口縁部に至り、端部は丸くおさめる。脚台部との接合面が僅かに残る。高杯の可能性もあるが、ここでは台杯の鉢型土器として図示する。器面調整は磨耗のため不明。

182　台付鉢形土器である。底部から直線的に口縁部に至り、端部は丸くおさめる。磨耗のため調整は不明である。脚台部以下は欠損のため不明である。本資料も高杯である可能性はあるが、台付き鉢型土器として図示し報告することとする。

183　高杯型土器の脚台部である。杯部との接点付近でも幅の広い状態で筒型を呈している。底部付近で短く外反し安定感を与える形状を成している。底端部には一条の沈線が巡る。内・外気面ともに刷毛目が残る。

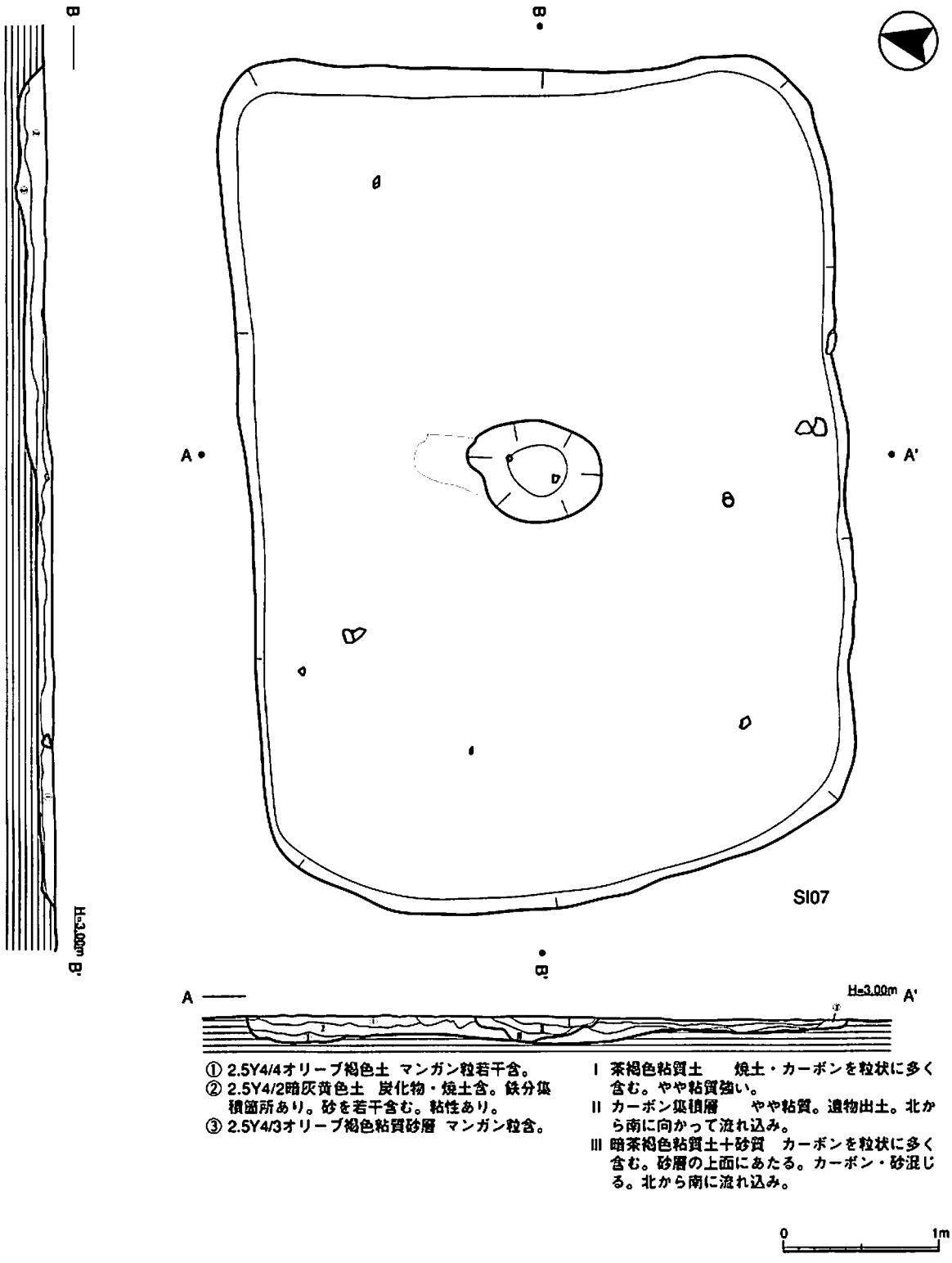
184　小型の重弧文形土器である。胴部中位に緩い屈曲部を有し、肩部には3条の横位沈線が巡り、その下位には3重からなる沈線によりの上向きの重弧文が浅く施される。また屈曲部とその直上に2条の横位沈線が施されている。全体的に磨耗が激しく調整は観察し難い。頸部と底部は欠損のため不明である。

185　重弧文長頸壺形土器である。頸部はゆるやかに開きながら立ち上がり口縁部に向かって僅かに外反する。胴部中位にやや緩い屈曲部を有し、頸部との接合面である肩部から胴部にかけて横位沈線が巡り、その横位沈線上に刻み条の縦位短沈線が施される。その下位には7重からなる上向きの重弧文が巡る。また屈曲部には3条の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施される。内･外器面ともに横ナデが施される。

186　粘板岩製の石庖丁である。背部は直線的でその両端が丸みをもって半円形の刃部に至ると推定される。表裏面から穿たれた紐孔を1つ持つ。刃部は両刃である。床面直上より出土している。

遺構名	竪穴式住居跡SI07	主軸方向	A-A'=N-77°-E
時期	弥生時代後期	炉	中央　0.85m×0.65m×0.15m
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	5.4m×3.9m×0.09m	柱穴	未検出
面積	21.06㎡	備考	

隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡のほぼ中央に位置する炉跡は、擂り鉢状を呈しており焼土と炭化物で構成されている。現地表面からの断面観察により炉跡が検出面上より掘り込まれていることから、既に住居跡の大半が削平を受けていたことが推定される。主柱穴等の住居内施設は確認できなかった。



① 2.5Y4/4オリーブ褐色土 マンガン粒若干含。
② 2.5Y4/2暗灰黄色土 炭化物・焼土含。鉄分集積箇所あり。砂を若干含む。粘性あり。
③ 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質砂層 マンガン粒含。

I 茶褐色粘質土 焼土・カーボンを粒状に多く含む。やや粘質強い。
II カーボン集積層 やや粘質。遺物出土。北から南に向かって流れ込み。
III 暗茶褐色粘質土+砂質 カーボンを粒状に多く含む。砂層の上面にあたる。カーボン・砂混じる。北から南に流れ込み。

0 1m

Fig.76 4区SI07実測図

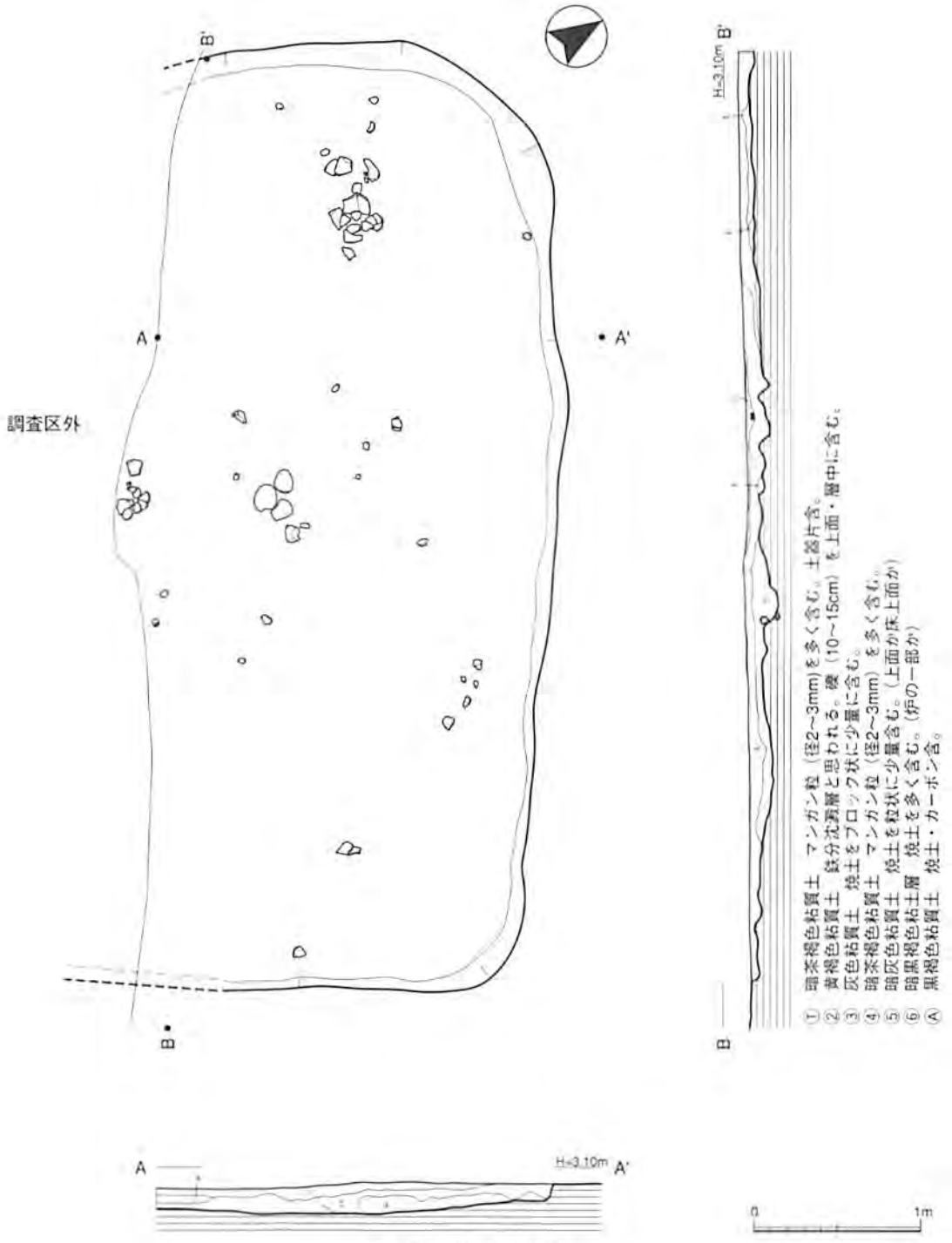
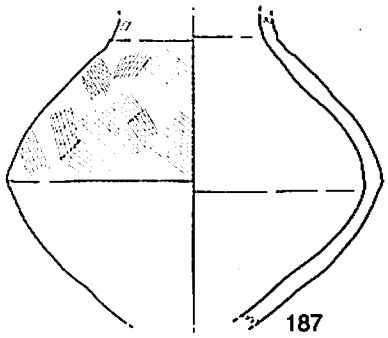
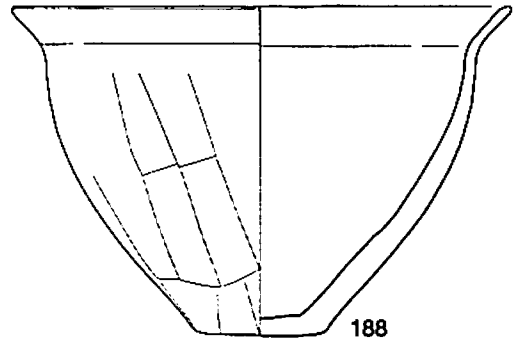


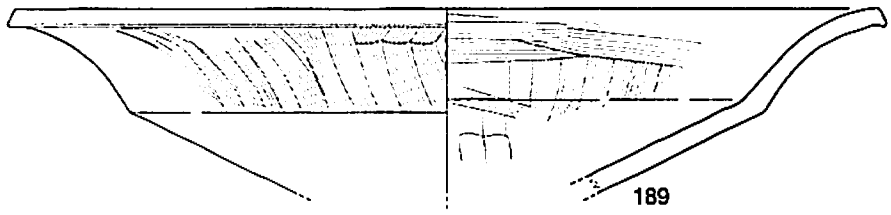
Fig.77　4区SI08実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI08	主軸方向	B-B'＝N-56°-N
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	5.65m×2.45m(検出部)×0.1m	柱穴	未検出
面積	不明	備考	

遺構のおよそ1/2が検出された隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。土層断面観察より⑤層直上が床面として想定され、貼床を行っていたようである。また炉跡や柱穴などの付帯施設は認められなかった。







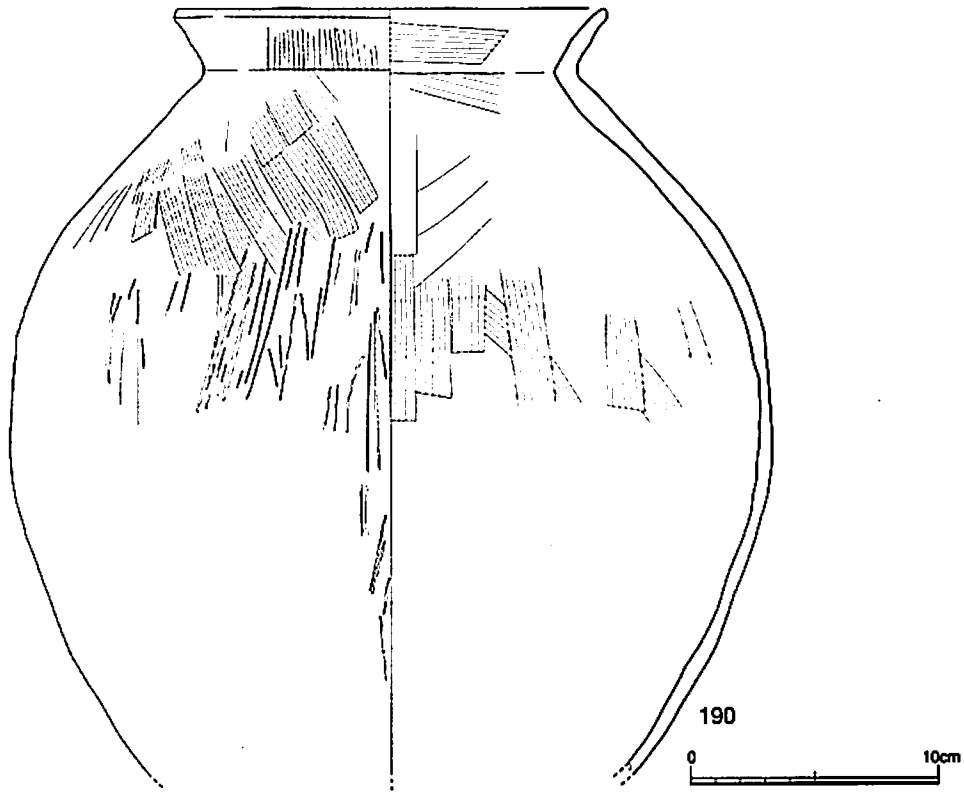


Fig.78　4区SI08出土遺物実測図

187　壺形土器である。最大径は中位にあり屈曲した胴部を有する。胴部上半および下半はやや丸みを帯びる。頸部、底部は欠損のため不明である。

188　鉢形土器である。最大径を上位にもち、口縁部は緩やかに屈曲して直線的に伸びる。胴部上位で頸部直下付近では胴部にやや丸みを帯びる。端部は丸くおさまり薄く仕上げられている。底部は凸レンズ状を呈する。器面調整はいずれも磨耗により不明である。

189　高杯形土器の杯部である。浅い杯部が胴部中位で屈曲した後、複合的に口縁部に向かい外反しながら大きく開く。口縁端部は四角に成形されてやや下方に向く。内･外器面に刷毛目を有する。

190　壺形土器である。胴部最大径を上位にもち、張りは強い。口縁部は屈曲した後、直線的に短く開く。端部は四角く成形される。底部形態は欠損のため不明である。

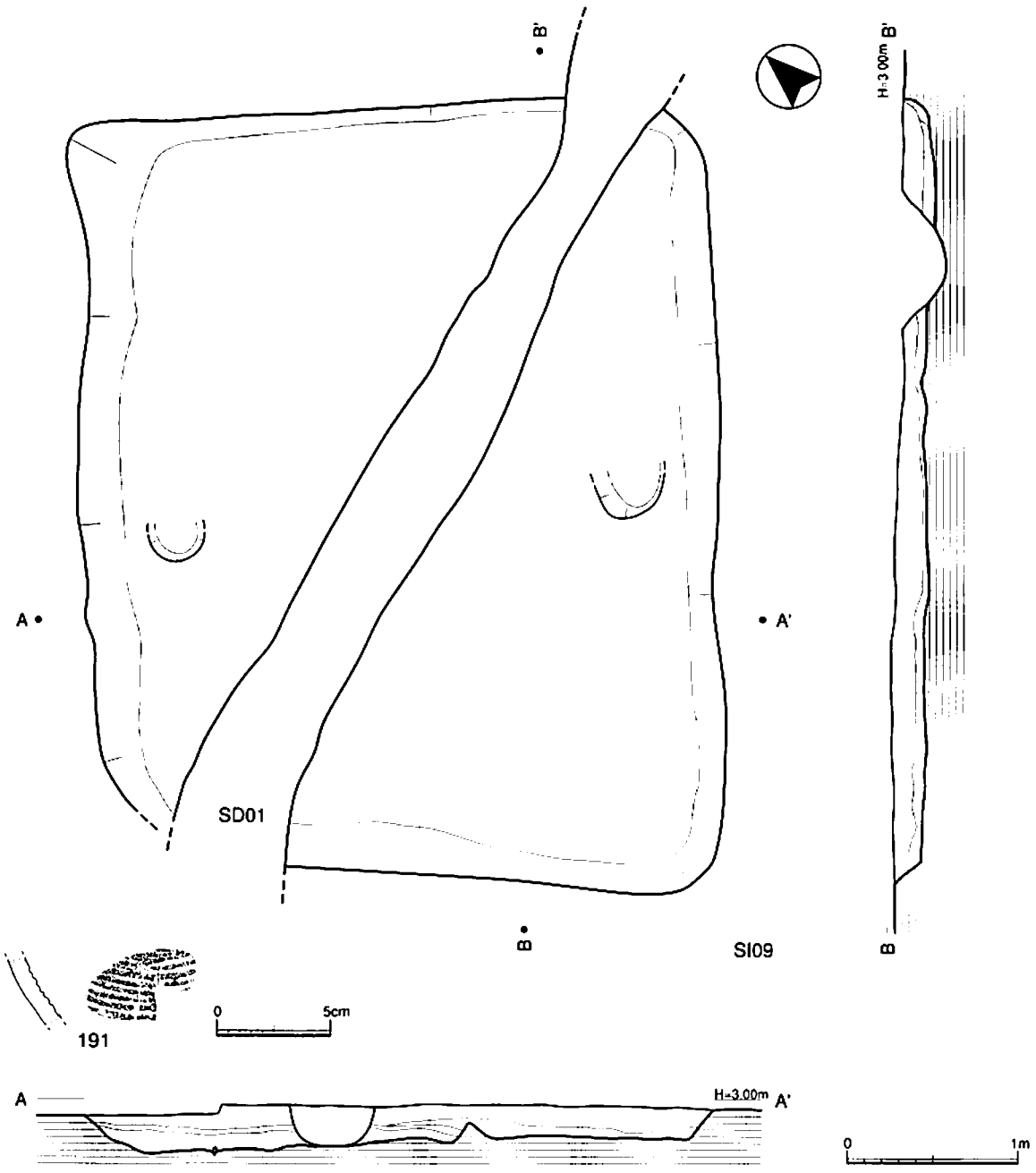


Fig.79　4区SI09実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI09	主軸方向	B-B'=N-48°-E
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SD01に切られている	土坑	未検出
規模・深度	4.45m×3.8m×0.25m	柱穴	P1　0.4m×0.35m×0.2m P2　0.42m×0.4m×0.2m
面積	16.91㎡	備考	

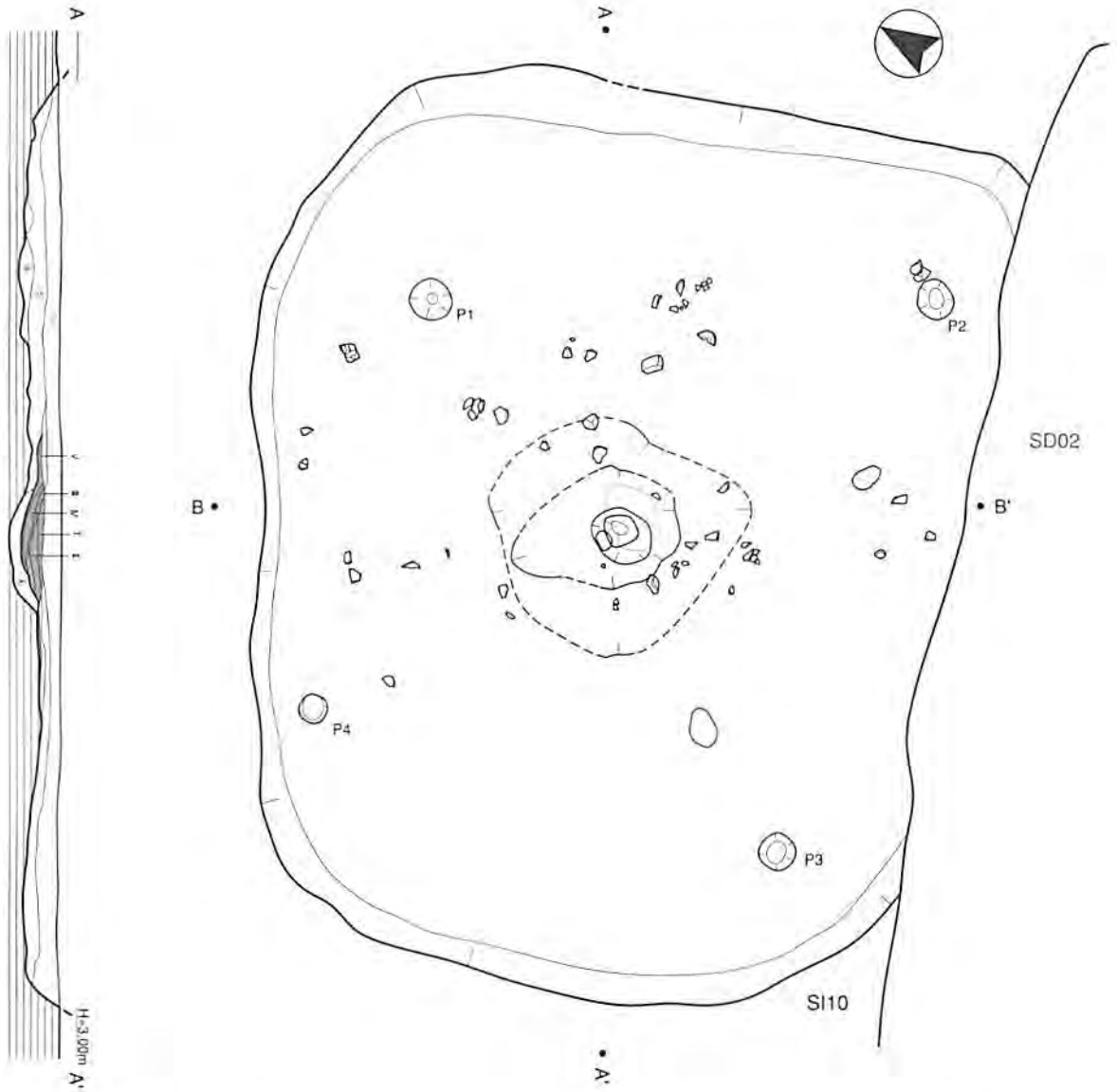
隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。調査区を東西に縦断している溝SD01によって本住居跡は対角線上に分断されている。そのため炉跡は消失した可能性が考えられる。また、柱穴が2基検出されているが、柱痕跡は認められなかった。

191　重弧文壺形土器の肩部片である。現状で7条からなる横位沈線が認められる。

遺構名	竪穴式住居跡SI10	主軸方向	A-A'=N-58°-E
時期	弥生時代後期	炉	1.3m×1.35m
切り合い関係	SD02に切られる	土坑	未検出
規模・深度	5.25m×3.90m×0.23m	柱穴	P1　0.27m×0.15m P2　0.2m×0.2m P3　0.16m×0.23m P4　0.22×0.3m
面積	20.47㎡	備考	

全体のおよそ3/4が検出、調査された隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡中央に炉跡が認められ、四隅に柱穴が検出された。炉跡は中央に有りやや不定形を呈している。中央が擂鉢状に窪み両サイドにかけて浅くなる。4層上面から炉が掘り込まれていることから本層直上が床面と想定できる。また柱穴からは明確な柱痕跡は見つからなかった。

192　重弧文壺形土器の肩部片である。多くの階段状の条線が巡り下方の条線上には刻み状の縦位短沈線が施されている。さらにその下位には上向きの重弧文が認められる。内器面の一部には横ナデや刷毛目が施される。



① 明黄褐色粘質土　マンガン粒（径2～3mm)をまんべんなく含む。基本土層6の土に準じるようである。
② 黄褐色粘質土　カーボン粒を少量含む。
③ 灰色粘質土
④ 灰色粘質土　カーボン粒がまんべんなく含まれ、この上面で床が一面あったようである。
⑤ 暗黄褐色粘質土　床（張）の土か。粘質が強く他の土の混じりは少ない。
⑥ 暗灰褐色粘質土　灰色粘土。床の高さ調整土か。
Ⅰ 茶褐色粘質土　焼土中に粒状にスミ入っている。
Ⅱ 粘土（茶色）　焼土を粒状に少量含む。東側の層で見つからない。
Ⅲ 灰を含む粘土　焼土（2mm程度）を粒状に含む。
Ⅳ 明茶褐色粘質土　2層の灰の間にある。
Ⅴ 灰を含む粘土　焼土がブロックで含まれる（火を強く受けたと思われる）。

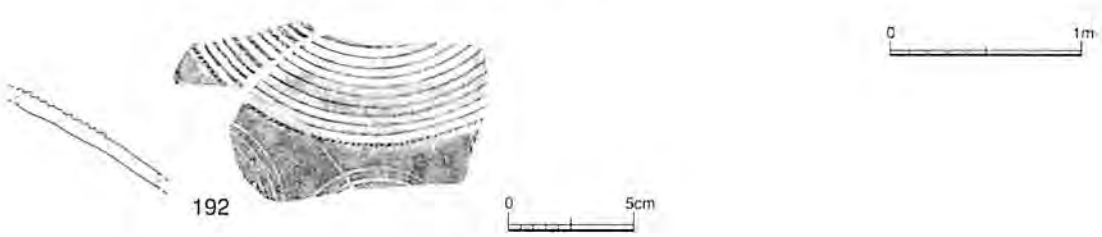
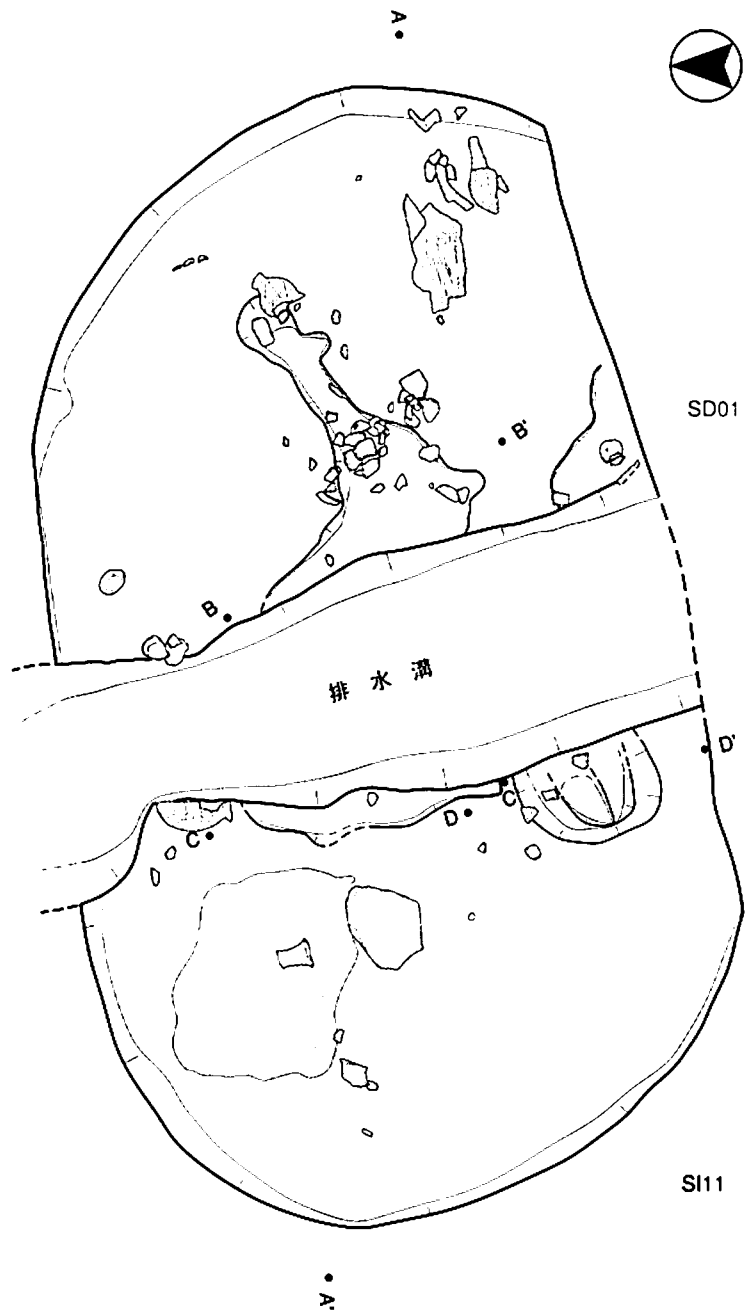
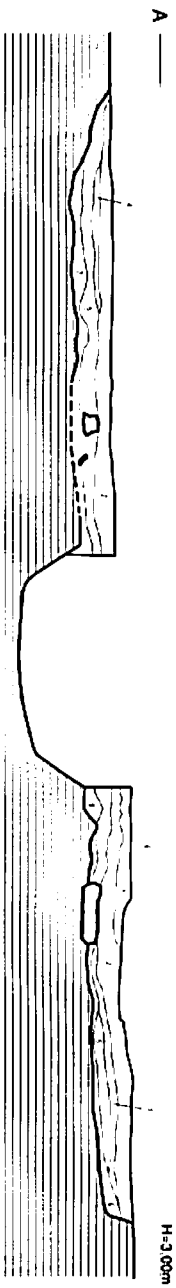


Fig.80　4区SI10実測図





① 7.5Y6/1灰色土　非常に固くしまる。(検出層のため水分の抜けている状態。) 粘性は認められない。直径2mm以下の鉄分・マンガンを多く含む。
② 10YR5/1灰色土　固くしまる。弱粘性。灰色を基調とするが乾燥時には、黄褐色もしくは灰白色を呈する。①層同様鉄分・マンガン含。大量の炭化材・炭化物の出土箇所あり。
③ 10Y5/1灰色土　基本的な性格は②層と変わらないが、鉄分が帯状に堆積しており褐色が全体を覆っている。
④ 10Y7/1灰白色砂質土　しまりあり。弱粘性。灰白色を基調とするが、鉄分等を多く含む為全体に斑味を呈する。本遺構埋没時に堆積した層と考えられ当遺構の縁つかの遺構埋土からも出土確認。
⑤ 2.5Y7/1灰白色粘質土　しまりあり。粘性あり。乾燥時には黄灰色 (2.5Y4/1)を呈す。地点によりスミを多少含むことがある。
⑥ 2.5Y4/1黄灰色土　しまりあり。弱粘性。砂質の強い層だが粘性もある。地点によって粘質。本層も床面であるとの想定を行っている。
⑦ 2.5Y8/1灰白色粘質土　よくしまる。粘性非常に強い。⑤層より色調明るい。SI11生活面と想定される層。層直上でほぼ完形の亜符の出土。
⑧ N5/0オリーブ灰色粘質土　しまりあり。粘性あり。多量の炭化物を含み、SI11に付帯する炉の埋土か。

① 灰色粘質土　しまりあり。粘性あり。乾燥時非常に固くしまる。炭化物含。
② 明灰色粘質土　しまりあり。粘性あり。炭化物、焼土を多く含む。
③ 白灰色土　しまりあり。弱粘性。炭化物少量含む。地点により、砂質の強い箇所・粘質の強い箇所が認められるが基本的には同一。

① 灰色土　固くしまる。粘性あり。砂粒・炭化物含。
② 灰色砂質土　しまりあり。粘性あり。砂粒を多く含むため砂質感が強い。炭化物・焼土粒含。
③ 明灰色砂質土　しまりあり、弱粘性。上層より砂質感が強い。炭化物を僅かに含む。

① 灰白色粘質土　粘性強い。しまりあり、炭化物多く含む。
② 暗灰白色粘質土　粘性あり、しまりあり。砂若干含む。炭化物少量含む。
③ 暗灰白色砂質土　しまりあり。粘性弱い。
④ 青灰色粘質土　粘性強い。しまりあり。本遺構の張り床面と考えられる。
⑤ 淡青灰色砂質土　弱粘性。しまり弱い。本層以下は砂層。

0　1m

Fig.81　4区SI11実測図

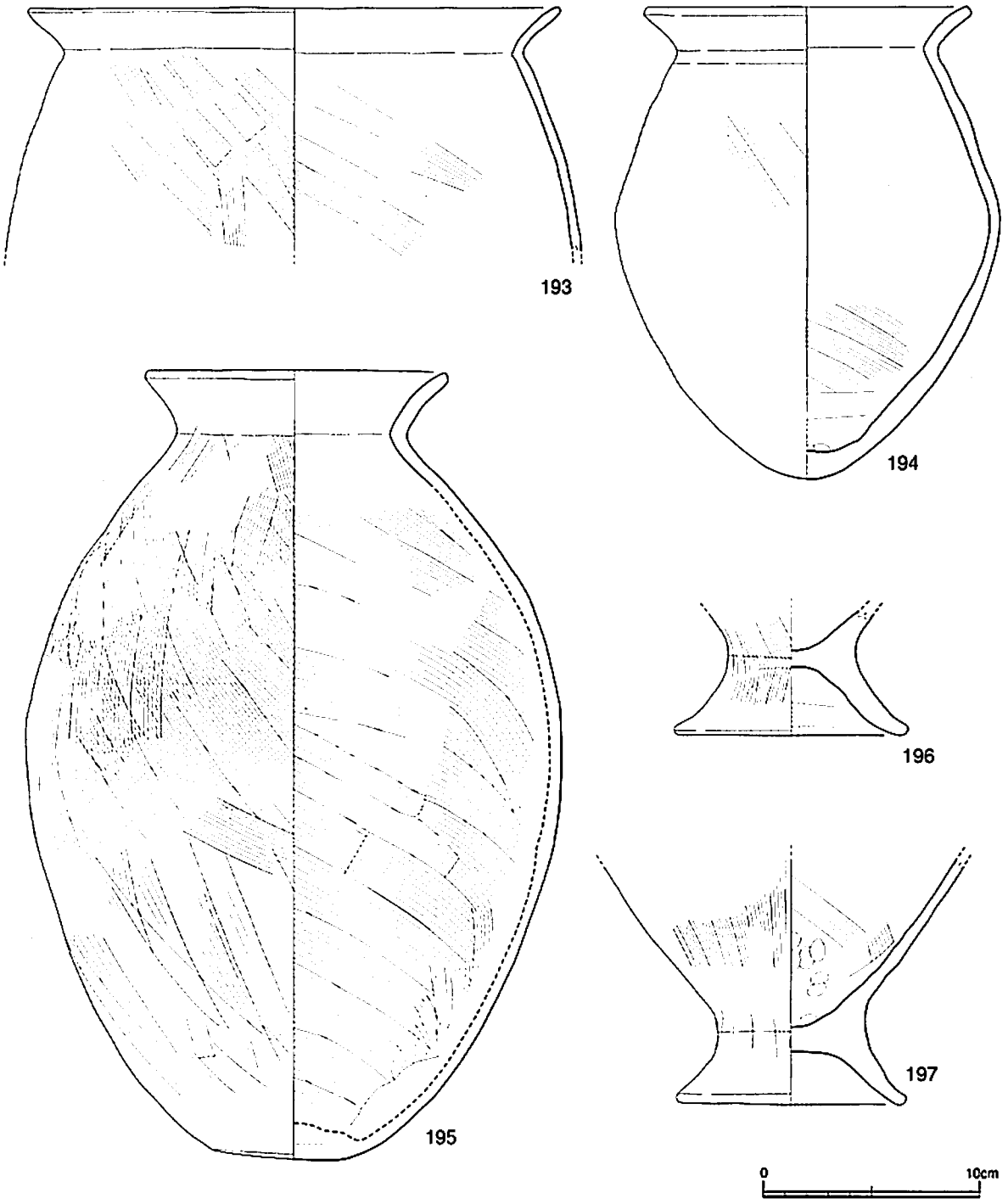


Fig82　4区SI11出土遺物実測図

全体のおよそ4/5が調査された楕円形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡全体に焼土や炭化物が広く認められる。このことから炉跡が存在していたことが推定される。しかし明確な炉跡が検出されていない為、本住居跡中央を横断している近世流路に削平されていることが考えられる。また中央部に位置する土坑は深さ0.45mを測り、地山である砂層に粘質土で貼床をしていることから貯蔵穴と推定される。そしてB・Cにも炭化物や焼土を含む落ち込みが確認された。また、トーン部分は本遺構内でも特に炭化物が集中している範囲を表している。遺物では頻繁な使用によって、円形の窪みをもつ台石が出土している。このように明確な使用痕のある礫石器を持つ住居跡が本遺跡内には数軒認められる。

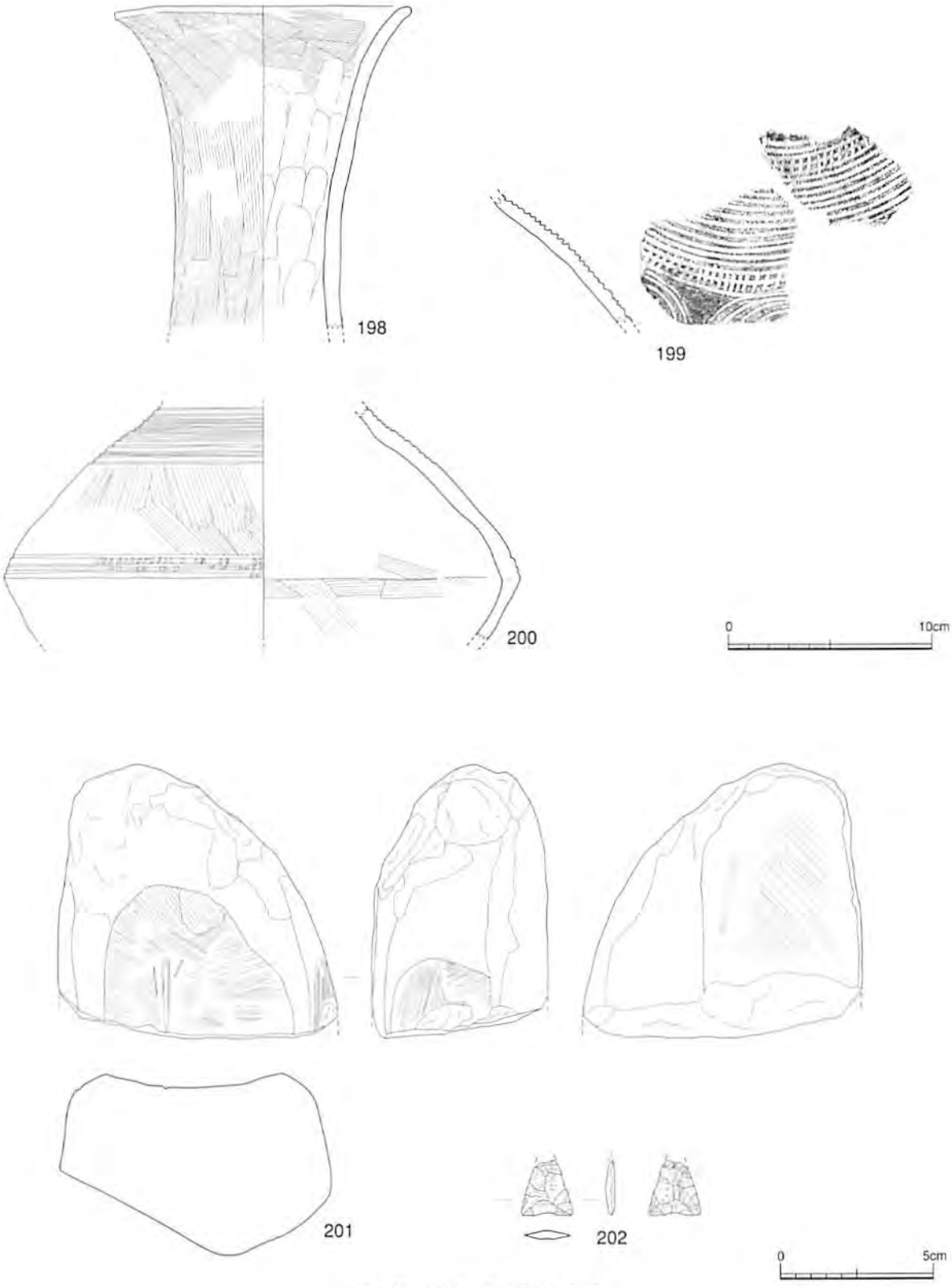


Fig.83　4区SI11出土遺物実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI11	主軸方向	A-A'=N-88°-W
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	排水溝に切られる	土坑	排水溝に切られている為、詳細不明
規模・深度	6.0m×3.23m×0.2m	柱穴	未検出
面積		備考	

193　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲して僅かに外反して開き、端部はナデによって緩やかな四角におさまる。全体的に薄く仕上げている。内･外器面共に明瞭な刷毛目が観察される。

195　壺形土器である。口縁部は屈曲後やや外反して開き、端部はナデにより四角におさまる。最大径を中位に持ち楕円形の胴部を呈する。凸レンズ状の底部を呈し、内･外器面に明瞭に刷毛目を残す。

196　甕形土器の脚台部である。緩やかに外反して開き、端部はナデにより四角におさまり低い。

197　甕形土器の脚台部である。やや外反して開き、端部成形は四角におさまって低い。脚台部は薄く仕上げている。胴部の立ちがる角度から193の口縁部片との接合が想定される。

198　長頸壺形土器の頸部である。ゆるやかに開きながら立ち上がり、口縁部に向かって外反する。端部はナデにより四角になる。外器面に刷毛目、内器面にナデ痕を明瞭に残す。

199　重弧文長頸壺形土器の肩部片である。数条の階段状の条線が巡り、上方と下方の条線上には刻み状の縦位短沈線が施されている。さらにその下位には上向きの重弧文が認められる。内器面にはナデが施される。

200　文壺形土器の胴部である。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部を持つ。肩部から胴部にかけて多くの横位沈線が施されている。その下位には下向きの重弧文が巡ると推定されるが磨耗が著しく確認は難しい。屈曲部には3条の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。屈曲部以下の外器面、内器面にはナデが施される。重弧文が施される土器群と器形や調整の手法は同様であるが、本来重弧文の施文が施される面に、わずかに刷毛面が残されるのみで文様は認められない。198の頸部との接合が想定される。

201　リソイダイト製の砥石である。磨痕を3面持ち、特に表面が窪んでいることから使用頻度が高かったと考えられる。表面に少量のベンガラの付着が認められる。また、全面に渡って熱を受け黒く変色していることから鋳型一部の可能性が考えられる。

202　安山岩製の打製石鏃である。二等辺三角形を呈し平基式である。先端部を欠損する。

遺構名	竪穴式住居跡SI06	主軸方向	A-A'＝N-24.5-W
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SI12を切る	土坑	未検出
規模・深度	4.1m×4.1m	柱穴	未検出
面積		備考	

隅丸方形の平面形を呈している住居跡である。調査の結果、遺構中からは主柱穴及び付帯施設等の検出はできなかった。また、西側の壁面は直線では確認できなかったため、大きく削平を受けていた住居跡であると思われる。

遺構名	竪穴式住居跡SI12	主軸方向	N-65°-E
時期	弥生時代後期	炉	0.9m×0.7m
切り合い関係	SI06に切られる	土坑	未検出
規模・深度	5m×3.95m	柱穴	未検出
面積	不明	備考	

SI06に切られているために、全体の3/5ほどが検出、調査された楕円形プランを呈する竪穴住居跡である。中央部に認められる落ち込みは0.85m×0.7m×0.17mを測り、土層断面から炉の可能性が考えられるが、明確に認定は出来なかった。

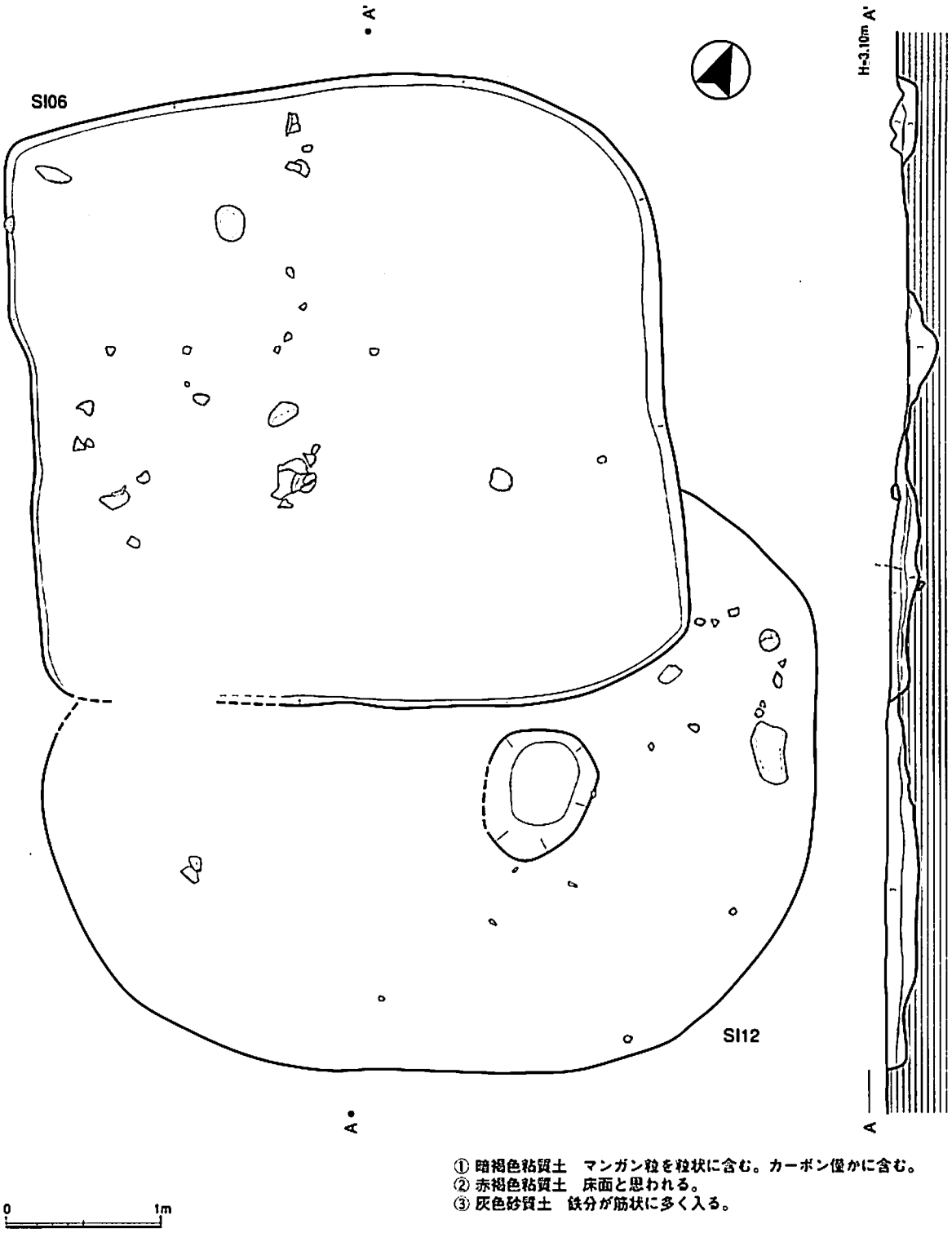


Fig.84　4区SI06・12実測図

203　鉢形土器である。丸底を呈して直立気味に立ち上がり、頸部で僅かに屈曲し斜め上方へ向かい口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。口縁部に2箇所の透孔を穿つ。

204　鉢形土器である。平底を呈し直線的に斜め上方へ立ち上がり、直立し丸くおさめられた口縁端部に至る。底部と胴部の接合面が断面から観察できる。

205　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲して僅かに外反し開き、端部でやや屈曲する。口縁端部はナデにより角張る。内器面に明瞭に刷毛目が観察される。

206　鉢形の手捏ね土器である。内・外器面共にナデが施される。脚台部周辺のみの出土である。

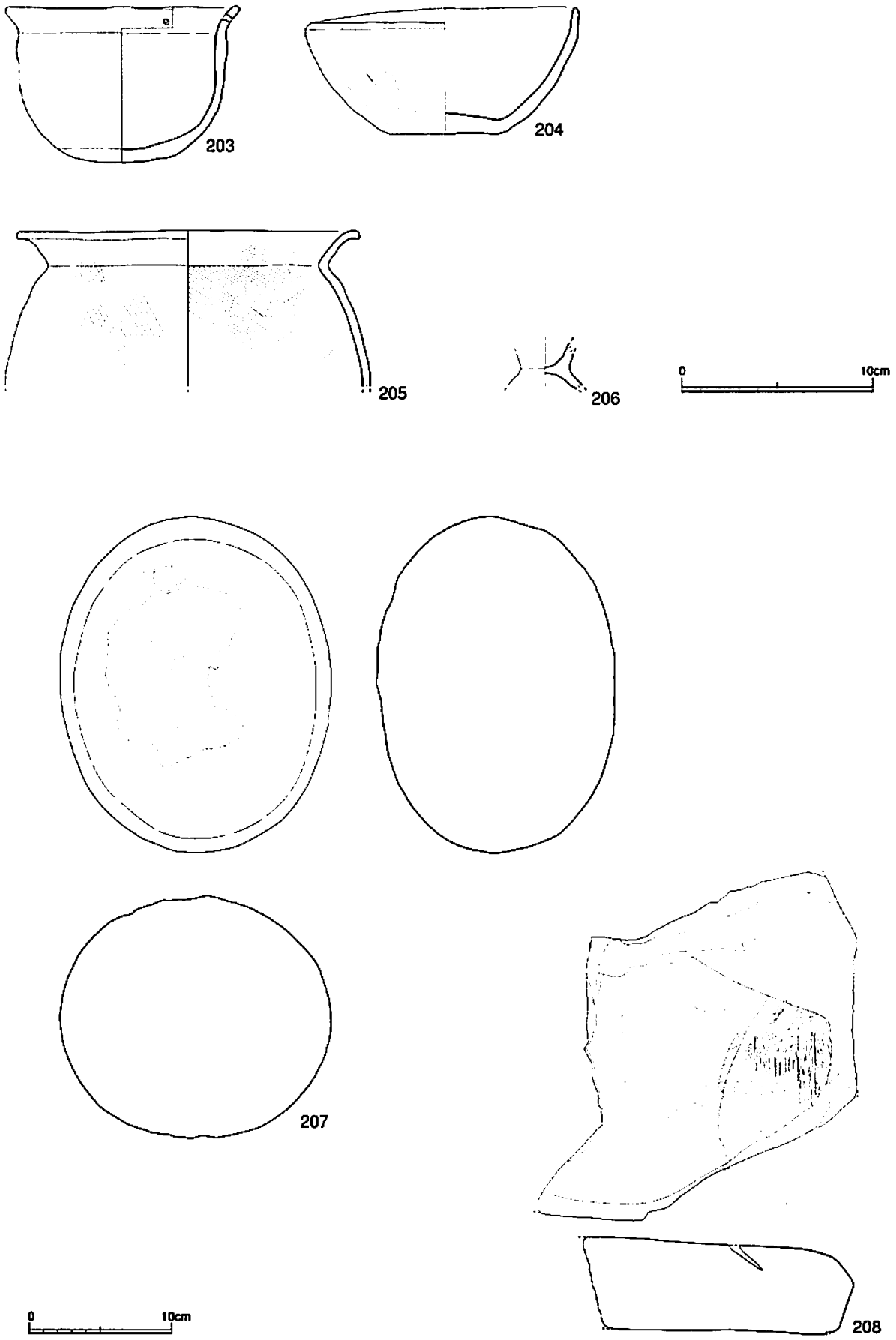
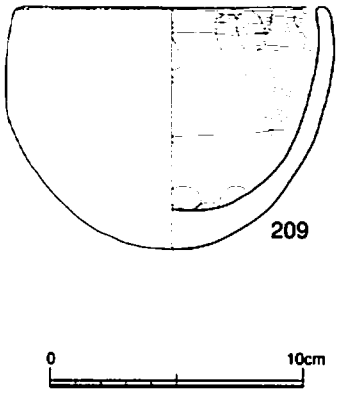


Fig.85　4区SI106出土遺物実測図



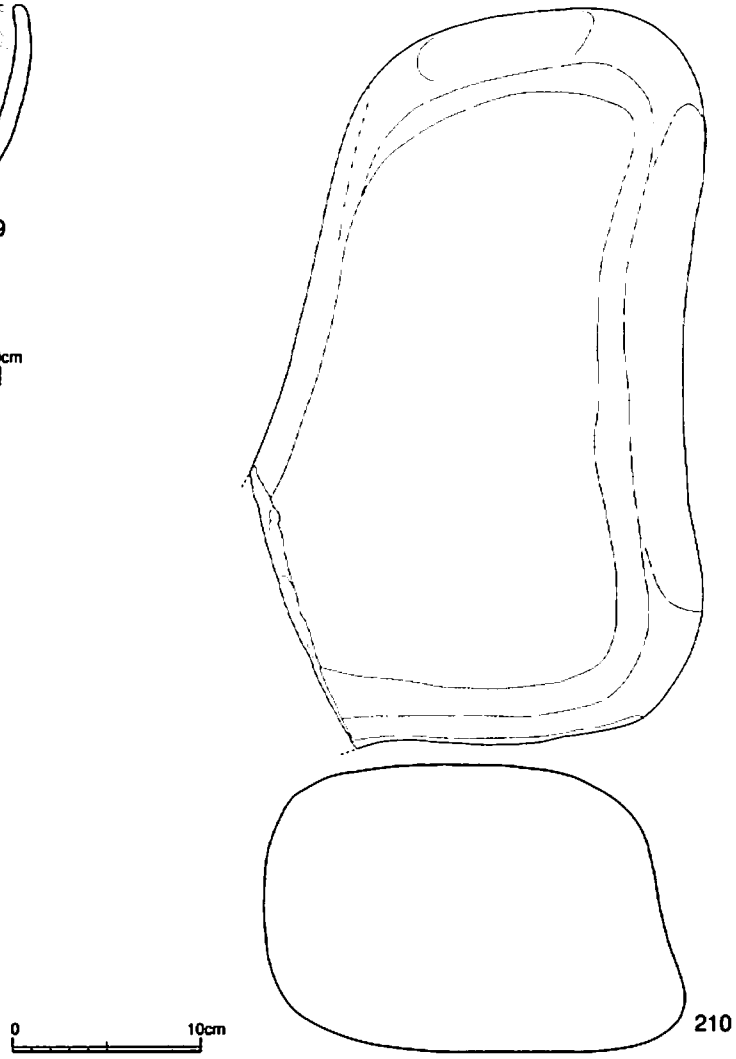


Fig.86　4区SI12出土遺物実測図

207　砂岩製の敲石である。表面中央部にのみ敲打痕が認められることから、作業面を一面に固定して使用していたことが想定される。

208　砂岩製の敲石である。角礫を素材として使用によるものであろうか、大きく欠損している。作業面を表面の一面に固定して敲打痕や擦痕が認められる。

209　丸底を呈する鉢形土器である。胴部が直立気味に口縁部に至り、端部は四角に成形される。口縁部付近に煤の付着が観察される。

210　砂岩製の石皿である。図示した面にのみ使用痕が認められる。使用痕跡部は鉄分の沈着により茶褐色に変色している。

包含層出土遺物

211　壺形土器の頸部片である。屈曲部に断面三角形の突帯が1条めぐる。内・外器面に刷毛目をよく残す。

212　甕形土器である。屈曲した口縁部はやや内湾しながら丸く成形された口縁端部に至る。最大径を中位に持ちやや丸みを持つ胴部を呈す。器壁は薄く仕上げ、底部は欠損している。

213　長頸壺形土器の頸部である。ゆるやかに開きながら立ち上がり口縁部に向かって僅かに外反する。端部はナデにより四角に成形される。器面調整は磨耗のため明瞭ではない。

214　壺形土器である。最大径は中位にあり屈曲した胴部を有する。口縁部は短く外反して角張った端部に

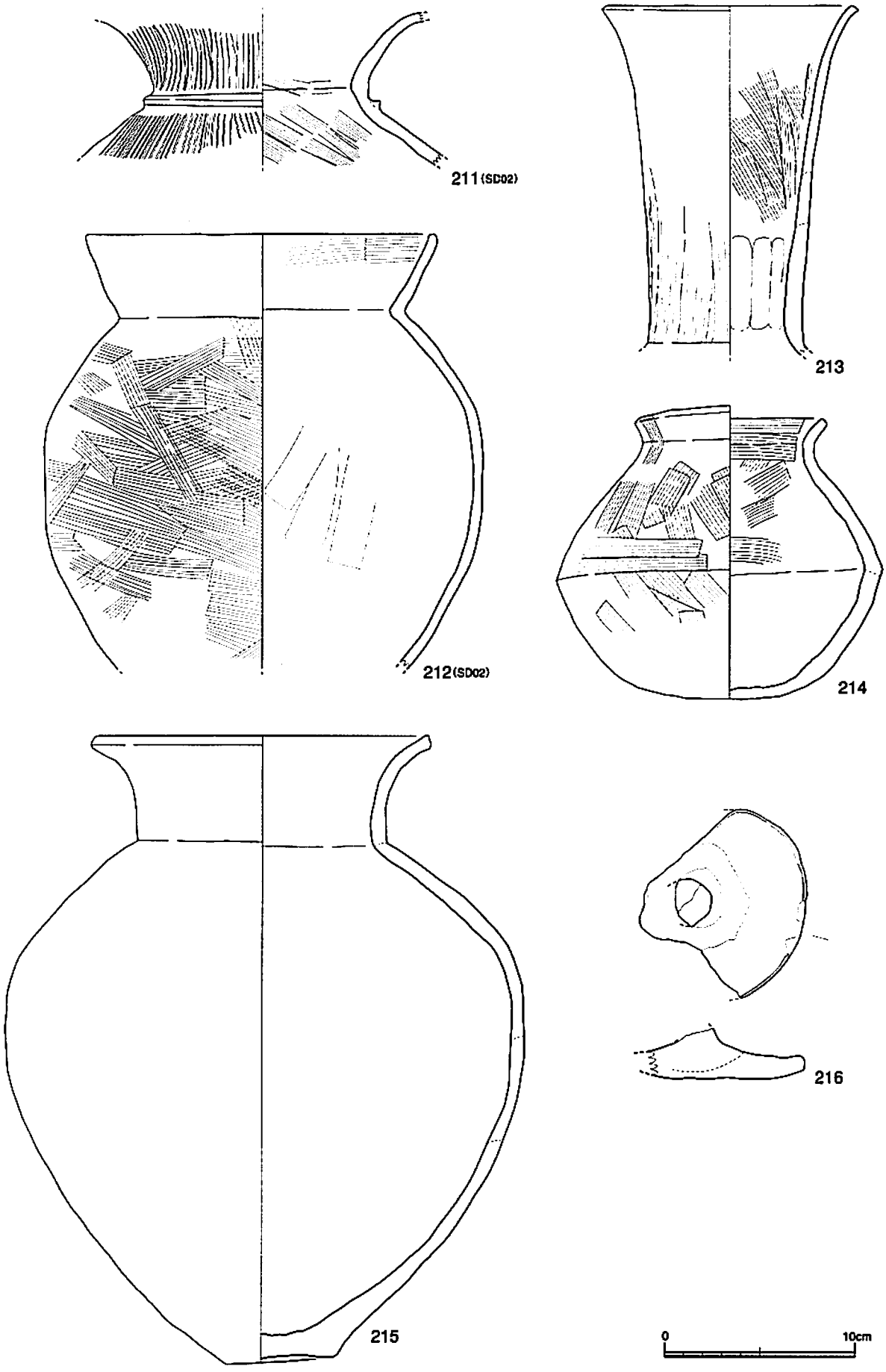


Fig.87　4区SD02・包含層出土遺物実測図

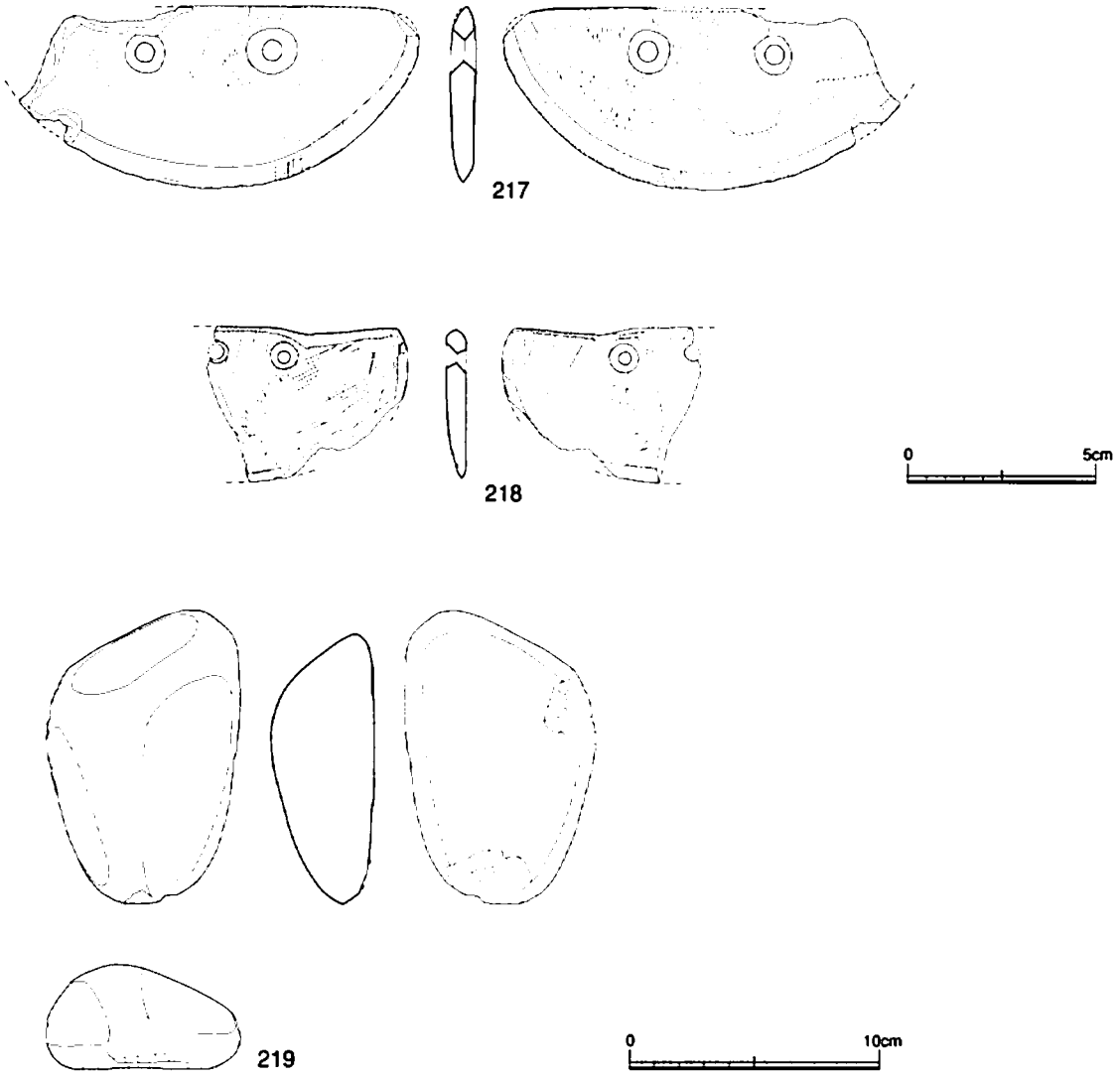


Fig.88　4区包含層出土遺物実測図

至る。胴部上半は直線的で屈曲部以下はやや丸みを帯びる。平底気味の丸底を呈する。

215　壺形土器である。胴部最大径を上位にもつ。頸部から直立気味に口縁部に至り、端部で大きく外反する。端部成形は四角におさまる。底部は上げ底気味の平底である。内・外器面に煤が付着している。

216　用途不明の土製品である。円盤形を呈し、中央に上方へ向かって伸びる部位を持つが、この部位は欠損により上方部分は不明である。内外器面はナデが施される。胎土は本遺跡の大半の出土土器と同一であることから本遺跡周辺で作られたと考えられる。

217　粘板岩製の石庖丁である。背部は直線的でその両端が丸みをもって半円形の刃部に至る。表裏面から穿たれた紐孔を2つ持つ。刃部は両刃である。

218　粘板岩製の石庖丁である。直線的な背部を持ち、その両端が丸みをもって半円形の刃部に至る。表裏面から穿たれた紐孔が1つ確認される。刃部は片刃である。

219　砂岩製の磨石である。作業面は全面に渡り、平坦面は擦痕、端部は敲打痕が認められる。磨石・敲石の両方の機能を持った石器である。

4）5区

4区とほぼ同様の地形上に立地する。4区との境に圃場整備時に水路が作られその影響からか多くの撹乱が入る。遺構は竪穴式住居跡が重複した状態で検出された。また、7区に繋がる溝も検出されている。4区との間に排水路を挟み向かい合う調査区である。竪穴式住居跡及び土坑、溝状遺構を検出している。

Fig.89　5区遺構配置図

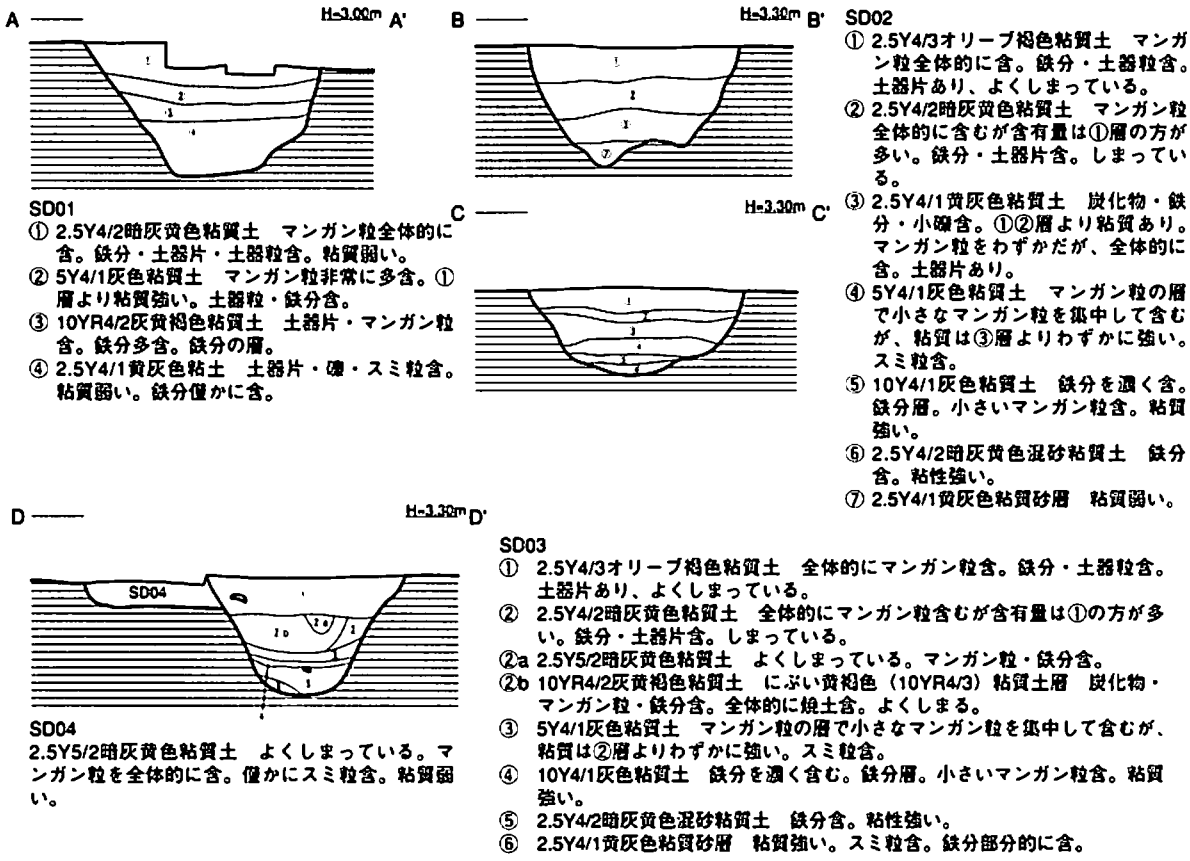


Fig.90　5区SD01～04実測図

SD01

調査区北端で東西方向に検出された溝状遺構である。幅約0.95m、検出面からの深さはおよそ0.5mを測る。土層は両側から流れ込んだレンズ状堆積を成すことから、自然堆積によって埋没したものと考えられる。溝底面において、いずれかに向け傾斜する変化は確認できなかった。また、現在の排水路を挟んで4区S011と同一遺構であることが考えられる。

SD02

調査区中央を北西一南東方向に検出された溝状遺構である。幅約1.2～0.8m、検出面からの深さはおよそ0.45～0.35mを測る。土層観察の結果、レンズ状堆積からほぼ水平堆積であることから自然に時間をかけて埋没したことが窺える。溝底面はほぼ水平で本調査区内での明確な比高差は認められなかった。また、本遺構は道路を挟んで7区SD01と同一遺構と考えられる。

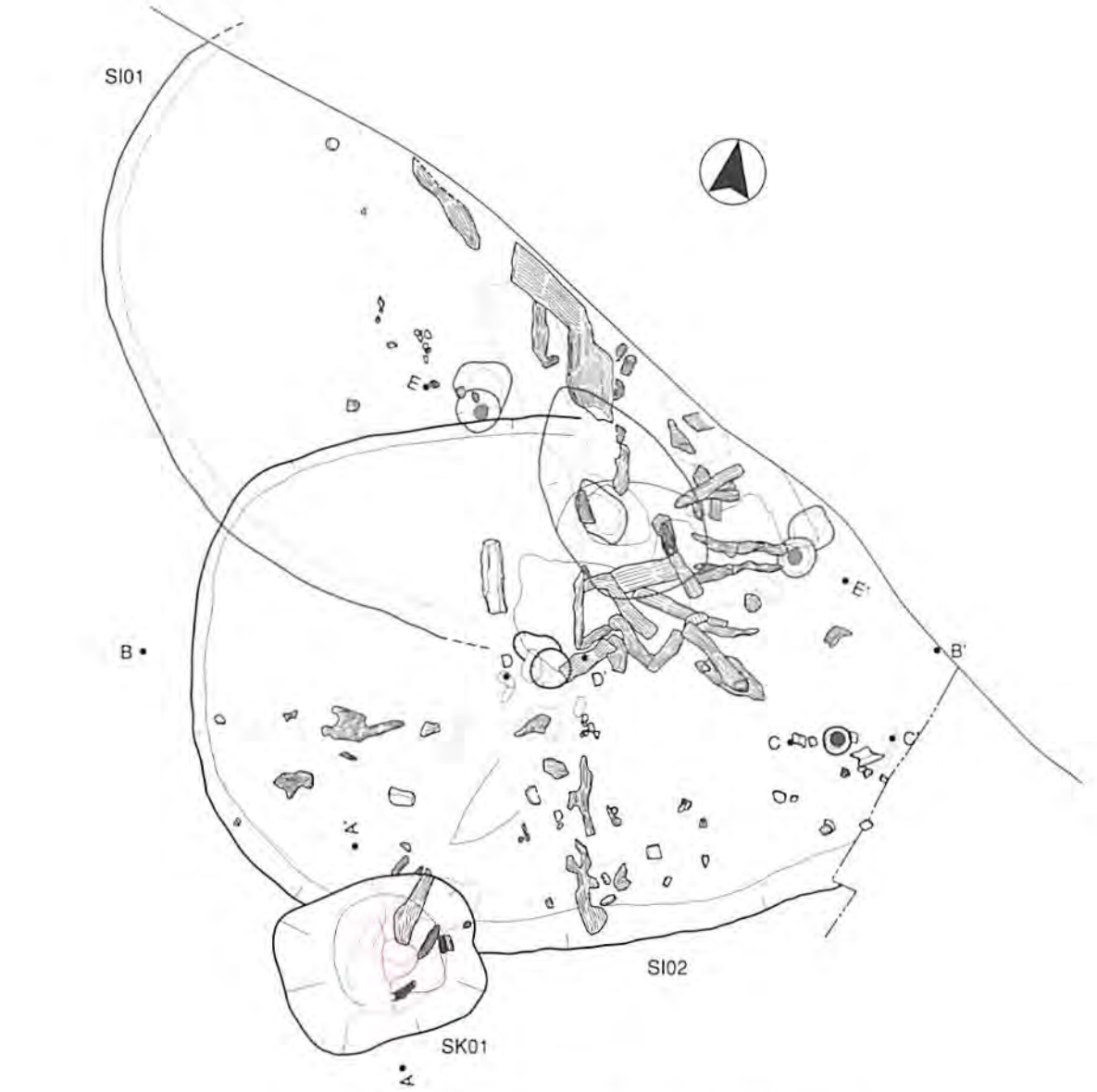
SD03

調査区南側に於いて東西方向に検出された溝状遺構である。幅1～0.7m、検出面からの深さはおよそ0.6～0.5mを測り、断面形態はU字形を呈する。土層の堆積土は粘性の強い粘質土で構成されており、⑤層中よりSD04と平行して確認された。また、10区[1]SD027 と同一遺構と考えられる。

SD04

大半をSD03に切られているために検出面からの深さがおよそ約10cmである以外、規模については不明であった。SD03と同様、方向軸が同一でSD02以東へは延びていかないことから、本遺構を掘り直した結果がSD03であることが想定される。

1　「熊本県文化財調査報告書第234集「西片百田遺跡・西片園田遺跡」　熊本県教育委員会　2005」　県道工事により調査を実施した範囲で、当報告書中、5区に隣接する調査区である。



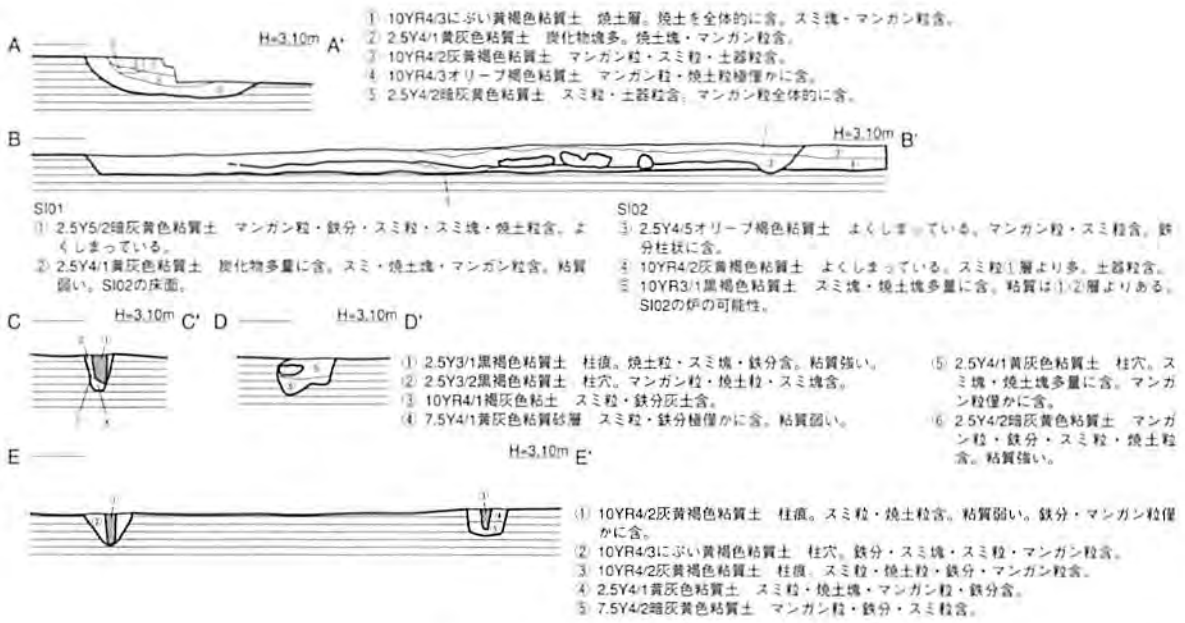


Fig.91　5区SD01・02、SK01実測図

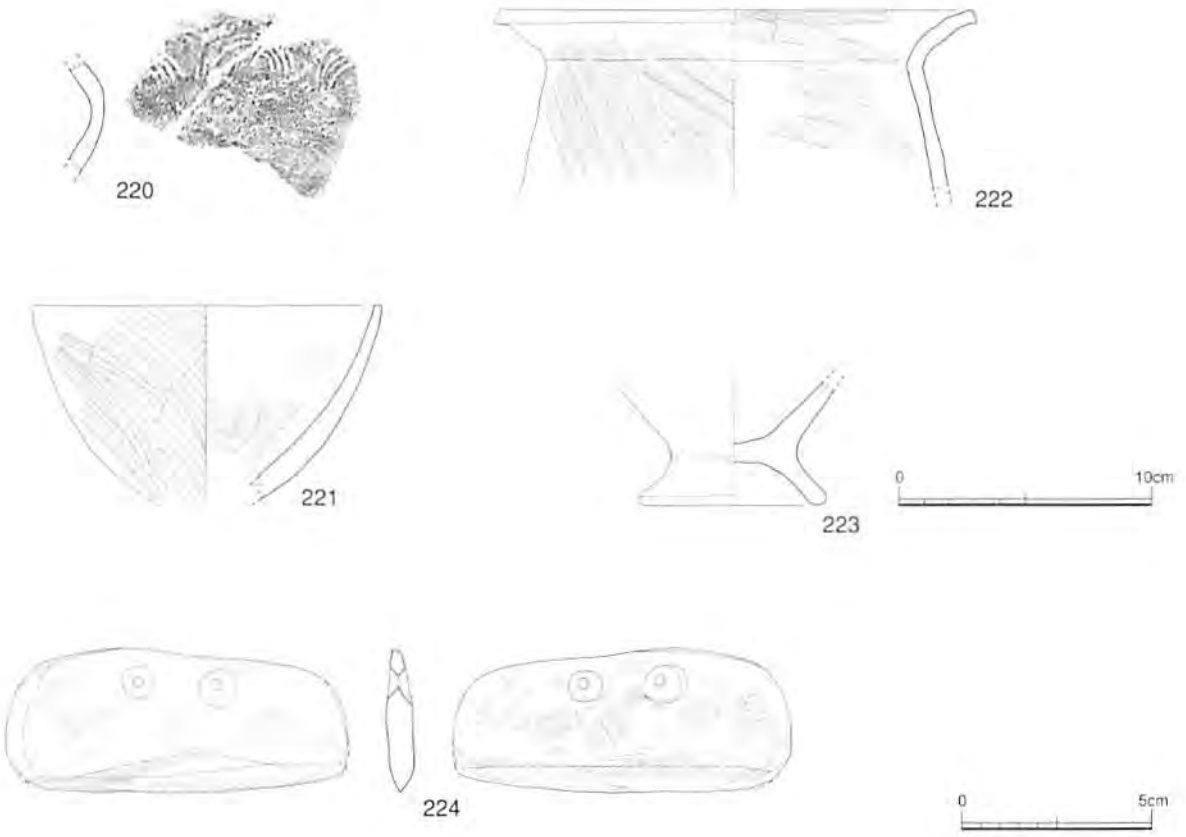


Fig.92　5区SI01・02出土遺物実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI01	主軸方向	B-B'　N-79°-E
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SI02と重複	土坑	未検出
規模・深度		柱穴	未検出
面積		備考	

圃場整備後に4区との間に掘削された水路によって遺構の約半分は残っていなかった。SI02との遺構の重複によって遺構のプランは未確定であったが、現地での調査では遺構のラインが見られたことから、2軒からなる竪穴式住居跡と想定している。

遺構名	竪穴式住居跡SI02	主軸方向	B-B'　N-79°-E
時期	弥生時代後期	炉	未検出
切り合い関係	SI01と重複	土坑	未検出
規模・深度	不明	柱穴	未検出
面積	不明	備考	

SI01と重複し検出された遺構である。プランの大半が調査区外に位置し全体形は不明であった。炉及び柱穴は未検出である。

SI01及びSI02とも、調査段階では別の遺構として捉え図化しているが改めて遺物及び炭化材の出土状況等を検討すると、規格は少し大きくもあるが1つの遺構として捉えられるものと思われる。2つの遺構に跨り広く検出されている焼失住居の炭化材と思われる柱材の分布の中に別の住居としてラインが引けない事などがある。また、出土遺物も弥生時代後期のものを主体としたもので時期差はない。よって、ここでは、調査段階での遺構検出の所見を優先させ図面を掲載しているが、整理段階での所見は先にあげた観察により1軒として捉えて記したい。

SI01

220　重弧文壺形土器の胴部片である。磨耗が著しいため詳細は不明であるが、4重の重弧文が施されている。屈曲部での沈線は見られない。

SI02

221　鉢形土器である。やや内傾しながらそのまま角張った口縁部に至る。外器面に刷毛目をよく残し、内器面に刷毛目後ナデが認められる。底部形態は欠損のため不明。

222　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲して僅かに外反し開き、端部は角張る。内・外器面共に明瞭に刷毛目が観察される。胴部中程以下を欠損する。

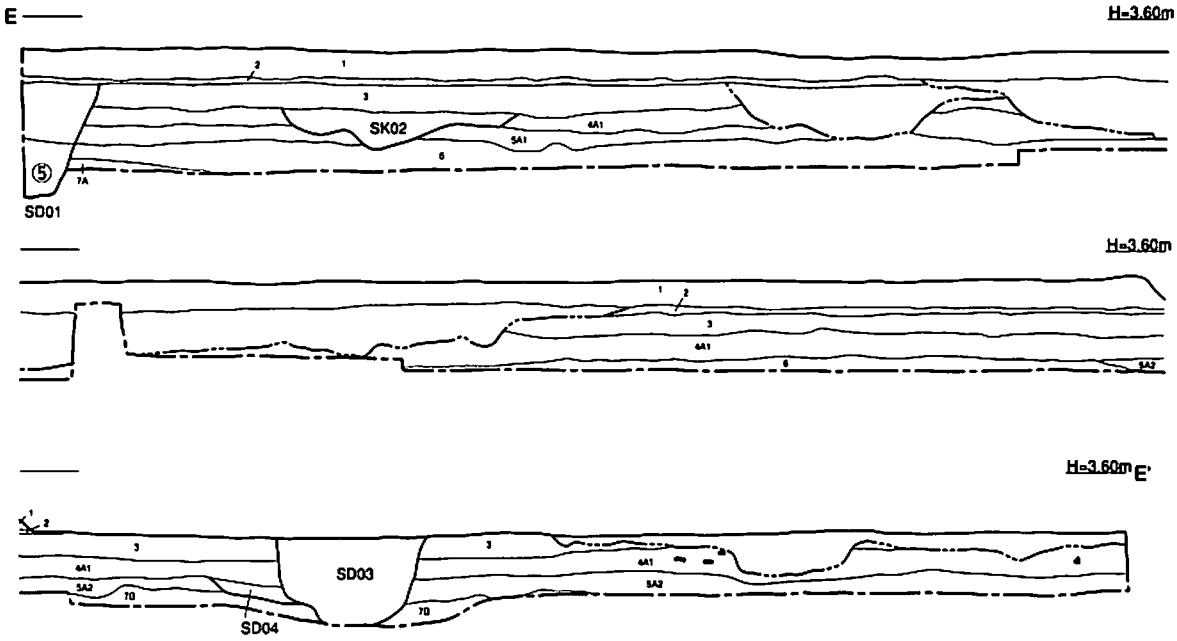
223　甕形土器の脚台部である。直線的に開き、端部成形は丸くおさめられて低い。器面調整はナデが施される。外器面底部に煤が付着している。

224　粘板岩製の石庖丁である。背部は直線的でその両端が丸みをもって直線的な刃部に至る。表・裏面から穿たれた紐孔を2つ持つ。刃部は両刃である。

SK01

長径1.12m×短径0.9m×深さ0.18mを測り平面形が隅丸方形を呈し、SI02の上から掘り込まれた遺構である。⑤層の堆積後に長径0.6m×短径0.45m×深さ0.14mに焼土が詰まっている掘り方が見られる。

本遺構は他の竪穴式住居跡内の炉と焼土や土層の堆積状況に類似しているため本来は、竪穴住居跡が削平され、炉部分のみが残ったものとも考えられる。埋土は主に粘土塊と炭粒で占められており、土器片がわずかに認められた。



1　耕作土
2　耕作土
3　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　マンガン粒を全体的に含。鉄分含。粘質非常に弱い。
4A1 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　鉄分・マンガン・土器片含。粘質弱い。
4A2 2.5Y3/2黒褐色粘質土　マンガン粒非常に多く含。鉄分・スミ粒含。粘質弱い。
5A1 2.5Y4/1黄灰色粘質土　マンガン粒・鉄分含。粘質やや強い。
5A2 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　マンガン粒・鉄分・土器粒含。粘質弱い。
6　2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　マンガン粒を非常に多く含。マンガン粒の粒が小さい。鉄分含。粘質やや強い。
7A　5Y4/1灰色粘土　鉄分含。マンガン粒僅かに含。硬い粘土。部分的に砂含。
7B　5Y4/1灰色粘質砂層　全体的に鉄分含。粘質弱い。

SD04
10YR4/1褐灰色粘質土　砂っぽい。粘質弱い。マンガン粒・鉄分含。
SD01
⑤　2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土　よくしまっている。マンガン粒・鉄分・土器片・土器粒含。

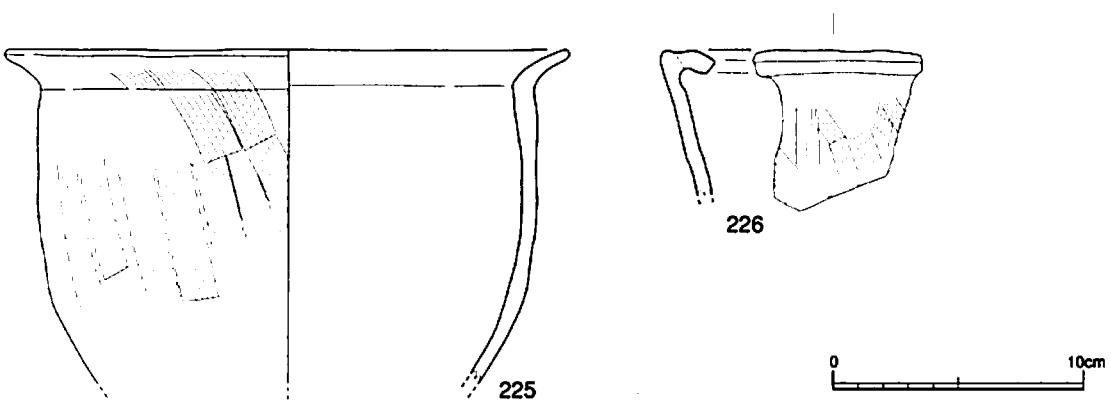


Fig.93　5区土層断面図、包含層出土遺物実測図

遺物包含層

225　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲した後僅かに外反して短く開く。口縁部へ至る屈曲部でやや肥厚する。底端部はナデにより四角におさまる。外器面には明瞭に刷毛目が観察される。

226　甕形土器の口縁部である。逆L字を呈す。外器面に刷毛目後ナデ、内器面にナデ調整を施す。

5）6区

地形は4区までよりさらに一段高くなり、本遺跡中最高所に当たる。土壌も粘質土が安定はしているが、圃場整備時の削平により遺構の残りは良好ではない。表土剥ぎ後に設計変更があり、当初予定していた範囲の約1/3の面積の調査をおこなった。溝・竪穴式住居跡が検出されている。

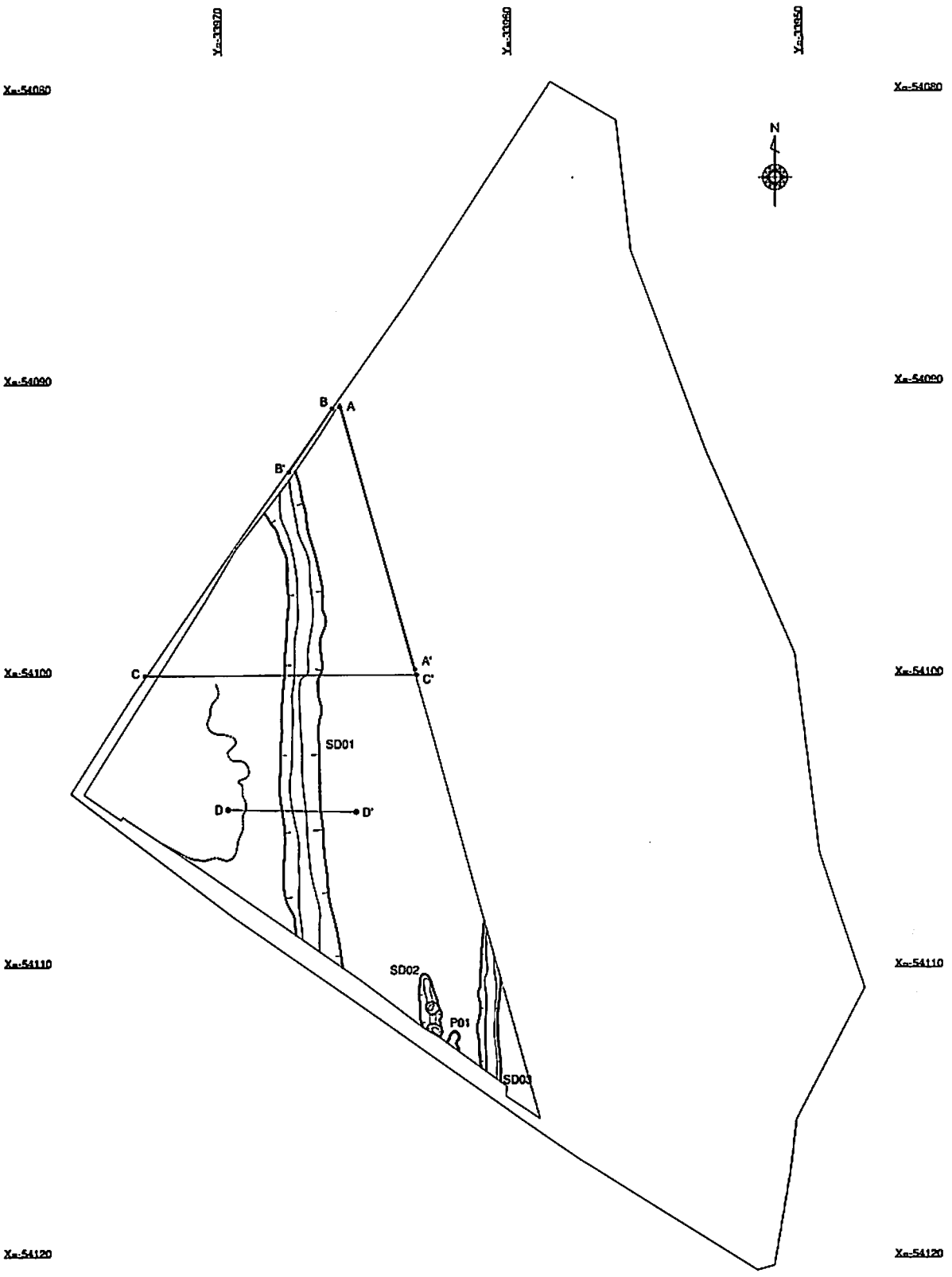


Fig.94　6区3層遺構配置図

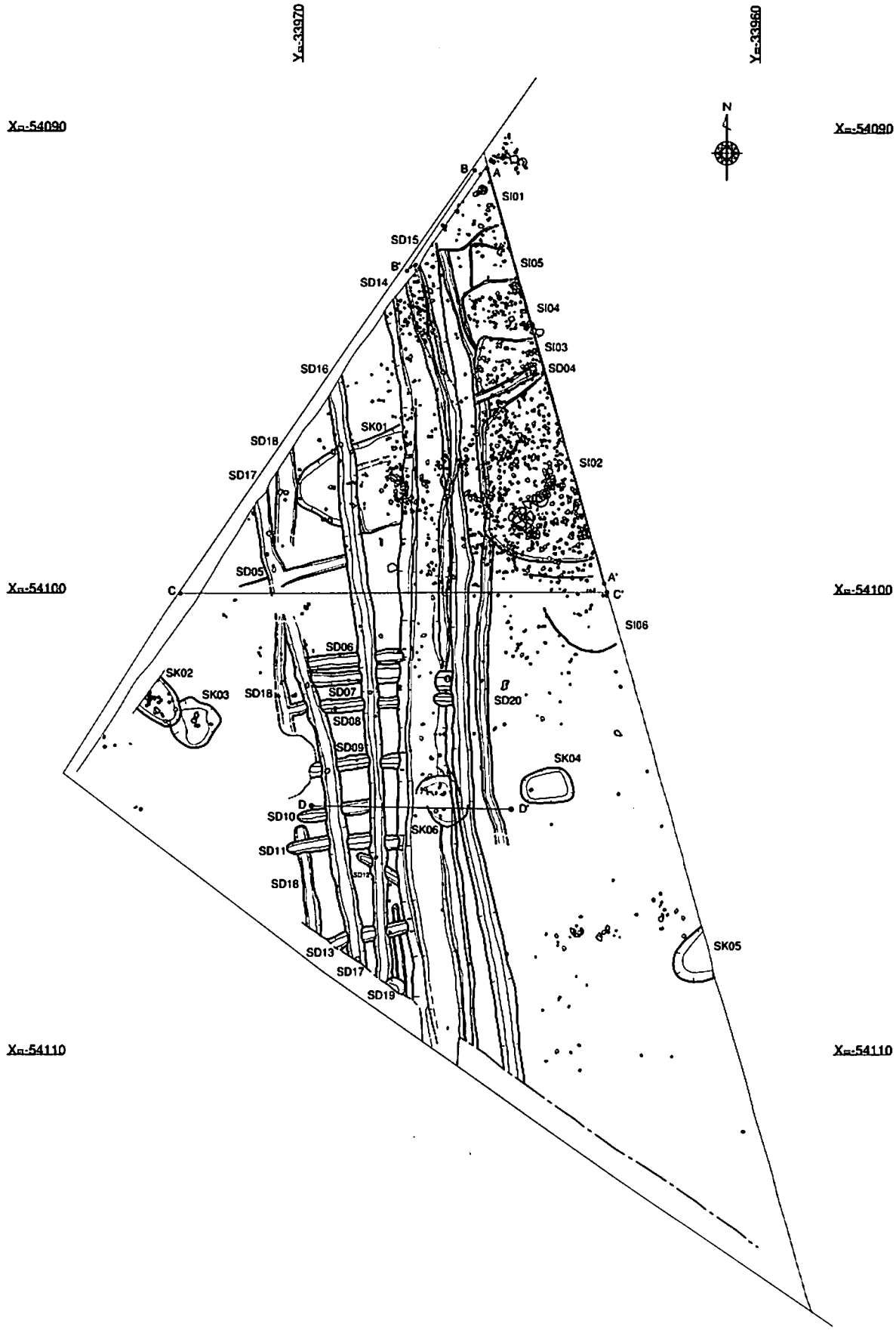
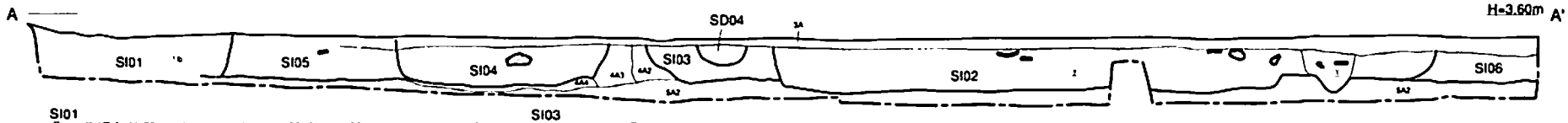


Fig.95　6区4層遺構配置図



SI01
①a 黄褐色粘質土（2.5Y5/3） 土器片・土器粒・マンガン粒含。マンガン粒は3A1層より小さい。粘質非常に弱い。
①b 黄褐色粘質土（2.5Y5/3） 焼土塊・土器片含。マンガン粒全体的に含。
② 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 粘質やや強い。マンガン粒含。①aよりマンガン粒の含有量は少ない。

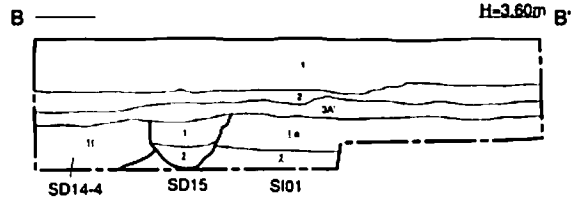
SI02
(1) 2.5Y4/3オリーブ褐色土 土器片・礫・土器粒含。マンガン粒を全体的に含。あまりしまりがない。
(2) 2.5Y5/3黄褐色土 土器片・マンガン粒・焼土塊含。

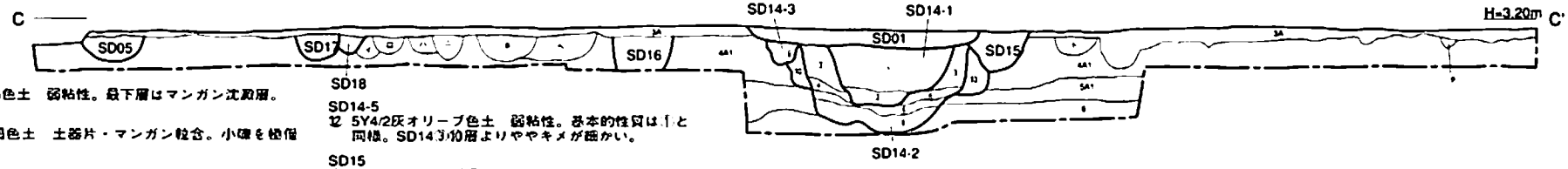
SI03
2.5Y5/2暗灰黄褐色土 土器片・マンガン粒・土器粒含。

SI04
2.5Y5/3黄褐色土 土器片・礫・スミ粒含。マンガン粒全体的に含。

SI05
5Y5/2灰オリーブ色土 土器片・焼土粒含。マンガン粒全体的に含。

SI06
2.5Y5/2暗灰黄色土 土器粒含。マンガン粒全体的に含。





SD01
2.5Y5/3黄褐色土 弱粘性。最下層はマンガン沈殿層。

SD04
2.5Y5/4黄褐色土 土器片・マンガン粒含。小礫を極僅かに含。

SD05
2.5Y4/2暗灰黄色土層 マンガン粒を含む。しまっている。鉄分を含む。土器粒を含む。

SD14-1
① 5Y4/2灰オリーブ色土 弱粘性。マンガン粒・鉄分含。掘削後は黄身を呈するが、すぐに酸化して暗色を呈する。SD14③よりやや暗い。
② 2.5Y4/2暗灰黄色土 弱粘性。マンガン粒・鉄分・土器含。焼土ブロック状に含。本層に所どころに焼土が認められる。

SD14-2
③ 5Y4/2灰オリーブ色土 弱酸性。マンガン粒・鉄分・土器含。削ってすぐは黄色を呈するが、すぐに酸化して暗色化する。
④ 2.5Y4/2暗灰黄色土 SD01層よりやや粘性高い（弱粘性）。マンガン粒・鉄分・土器含。ややシルト質。
⑤ 2.5Y3/2黒褐色粘質土 SD15①b層より粘性高い。鉄分多。全体的に橙色を呈す。
⑥ 5Y3/1オリーブ黒粘土 弱粘性。基本的にはSD01層と同様。酸化後の暗色の度合いがややSD01層より明るい。但しSD14①b層と比べ砂が少量混ざっているようである。
⑦ 5Y3/1オリーブ黒色土 粘性強い。鉄分微量に含。
⑧ 5Y3/1オリーブ黒色土 粘性強い。鉄分少量含。SD14①b層よりやや薄い色調を呈する。

SD14-3
⑨ 2.5Y4/3オリーブ褐色土 弱粘性。マンガン粒・鉄分・土器含。

SD14-4
⑩ 5Y3/1灰オリーブ色土 弱粘性。基本的にはSD14③層と同様。酸化後の暗色の度合いがやや①より明るい。
⑪ 10YR4/2灰黄褐色粘質土 土器片・小礫含。

SD14-5
⑫ 5Y4/2灰オリーブ色土 弱粘性。基本的性質は①と同様。SD14③⑩層よりややキメが細かい。

SD15
① 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 鉄分筋状に含。マンガン粒含。マンガン粒は3A1層より小さい。小礫極僅かに含。粘性弱い。
② 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 マンガン筋状に含。若干粘質あり。

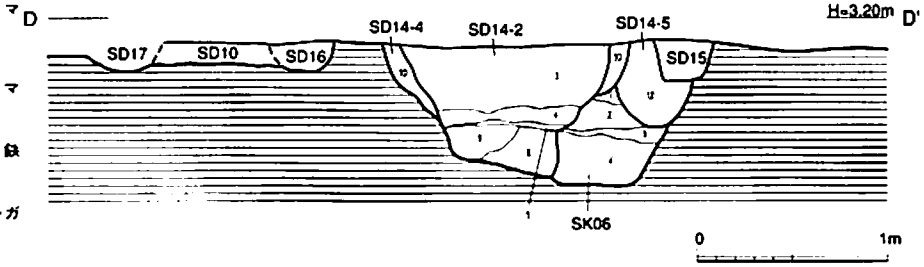
SD16
2.5Y4/3オリーブ褐色土層 土器片を含む。よくしまっている。マンガン粒を含む。鉄分を含む。粘質は弱い。

SD17
2.5Y5/2暗灰黄色土層 よくしまっている。マンガン粒も含む。鉄分を含む。粘性は弱い。

SD18
2.5Y4/3オリーブ褐色土層 S008より粘性はあるが、弱い。マンガン粒を含む。鉄分を含む。

SK06
① 5Y4/2灰オリーブ色土 弱粘性。基本的にはSD14③と同様。
② 2.5Y4/2暗灰黄色土 弱粘性。SD14④に類似するが、シルト質がSD14④層より強い。
③ 2.5Y4/3オリーブ褐色土 粘性あり。シルト質強い。鉄分多。
④ 5Y3/1オリーブ黒粘土 粘性強い。

イ 10YR4/3にぶい黄褐色土 マンガン粒・土器粒・鉄分含。粘性弱い。
ロ 2.5Y4/3黄褐色土 マンガン粒・土器粒・鉄分含。粘性弱い。
ハ 2.5Y5/3黄褐色土 鉄分・マンガン粒含。粘性弱い。
ニ 2.5Y5/2暗灰黄色土 マンガン粒・鉄分含。粘性弱い。
ホ 2.5Y5/3黄褐色土 鉄分・マンガン粒・土器粒含。粘性弱い。
ヘ 2.5Y4/4オリーブ褐色土 土器片・マンガン粒・鉄分含。
ト 2.5Y5/3黄褐色土 鉄分・マンガン粒・土器粒含。
チ 2.5Y5/3黄褐色土 鉄分・マンガン粒含。



基本層序
1 5Y5/2灰オリーブ色土 床土。部分的に土器粒混じる。極僅かにスミ粒含。部分的に鉄分含。
2 2.5Y5/3黄褐色土 土器片・鉄分含。極僅かにマンガン粒含。
3A 床土
3A1 2.5Y5/2暗灰黄色土 全体的にマンガン粒（0.5cm程度）含。土器片・土器粒含。
3A2 10YR5/2にぶい黄褐色土 全体的にマンガン粒含。土器片・土器粒・鉄分含。
4A1 2.5Y4/4オリーブ褐色粘質土 全体的にマンガン粒含。炭化物含。粘性非常に弱い。部分的に土器片含。
4A2 2.5Y4/4オリーブ褐色土 マンガン粒・鉄分含。
4A3 10YR4/4褐色土 非常に小さいマンガン含。
4A4 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土 土器粒・マンガン粒含。粘性非常に弱い。
5A1 2.5Y5/2灰黄色土 マンガン粒・鉄分含。粘性弱い。
5A2 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土 マンガン粒含。粘性弱い。
6 5Y5/2灰オリーブ色粘質土 SD14⑨層より粘性強い。上部にマンガン粒含。

Fig.96 6区土層断面図

SD01　調査区を南北に縦断しており幅約1.5m、検出面からの深さはおよそ0.6mを測る溝状の遺構である。圃場整備以前の遺構と思われ、埋土の状況から比較的新しい時期の遺構と思われる。

SD02　調査区南端に僅かに確認された幅約0.7m、検出面からの深さ0.15m程度の溝状遺構である。溝底面には直径0.4m、底面からの深さ0.5m程度の窪みが数箇所に確認された。本遺構もSD01同様、埋土の状況等から圃場整備以前の比較的新しい時期の遺構と思われる。

SD03　調査区南端を南北に伸びる幅0.7m、検出面からの深さ0.8mの溝状遺構である。本遺構も同様に圃場整備以前の時期と思われる遺構であった。

P01

調査区南端で検出された柱穴である。圃場整備以前の比較的新しい遺構である。

SD5～13　調査区を東西に走る幾条にも及ぶ溝状遺構である。平均幅約0.3m、深度は検出面から約0.13mから0.2m程であった。本来、浅い掘りこみでしかなかった遺構であるためか、圃場整備による削平でさらに薄くしか検出できなかった。埋土中からは激しくローリングを受けた土師器片が出土している。しかし、遺物は器形まで分かるものがなく、図示できるものはなかった。

SD14　調査区中央を南北に縦断している溝状遺構である。検出段階では平均幅約1.2m、検出面からの深さ約0.42mであった。土層断面観察より、少なくとも4条以上の溝状遺構が複雑に切り合いながら本遺構を形成していることが明らかになった。遺物出土は少なく、いずれも小片で著しく磨耗している。方向軸の近似した溝状遺構を幾度にも渡って掘り返し、長期間使用していたことが想定される。7区のSD03と埋土及び土層の形成等、方向性の一致などから同一遺構である。

SD15　SD14と並走するように調査区を南北に縦断する溝状遺構である。規模は平均幅0.40m、検出面からの深さ0.30mである。調査区北側でSD14を切る。

SD16　調査区を南北に縦断している断面形態がU字形を呈する溝状遺構である。規模は平均幅0.36m、検出面からの深さ0.20mを測る。

SD17　調査区を南北に縦断している断面形態がU字形を呈する溝状遺構である。平均幅0.4m、検出面からの深さ0.14mを測る。

SD18　調査区を南北に縦断している断面形態はU字形を呈する溝状遺構である。平均幅0.44m、検出面からの深さ0.60mを測る。

SI01～06（Fig.97）

調査区北東で検出された竪穴住居跡群であろう。遺構検出は埋土の状態が周囲の土壌と同化しているためか、プランの確認に非常に手間取った。遺構と認定するにあたり調査時に疑問に感じまた、戸惑ったのは、通年を通しての水田の作用による土壌の流動性が高かったこと、埋土と自然堆積土の違いが明確化できなかったことが主要な要因であると思われる。また、同様の遺構の切り合いが激しすぎたことがさらに追い討ちをかけたものであった。しかし、調査の進行に合わせて、調査区断面による土層の断面確認や任意に設定した土層断面などの観察等から遺構の存在は窺われるものの、遺構埋土と地山に明確な差異が認められないこと、炉跡や柱穴などの付帯施設が調査区内において未検出であったこと、床面レベルがほぼ一様であること等から、遺跡が形成されていた当時自然地形による落ちであるとも考えられる。それを指すものとして出土遺物の数が多い割には、接合関係がほとんどなく、住居内出土を示す出土状況が観察されないなども指摘できる。そのため、調査段階では6軒の住居跡として判断したが、遺構の切りあいや遺物の帰属については曖昧であると言わざるを得ない。参考資料として、各遺構の法量を列挙する。

Fig.97　6区遺構検出状況

SK01
SI02
SD05
X=-54100
SI06

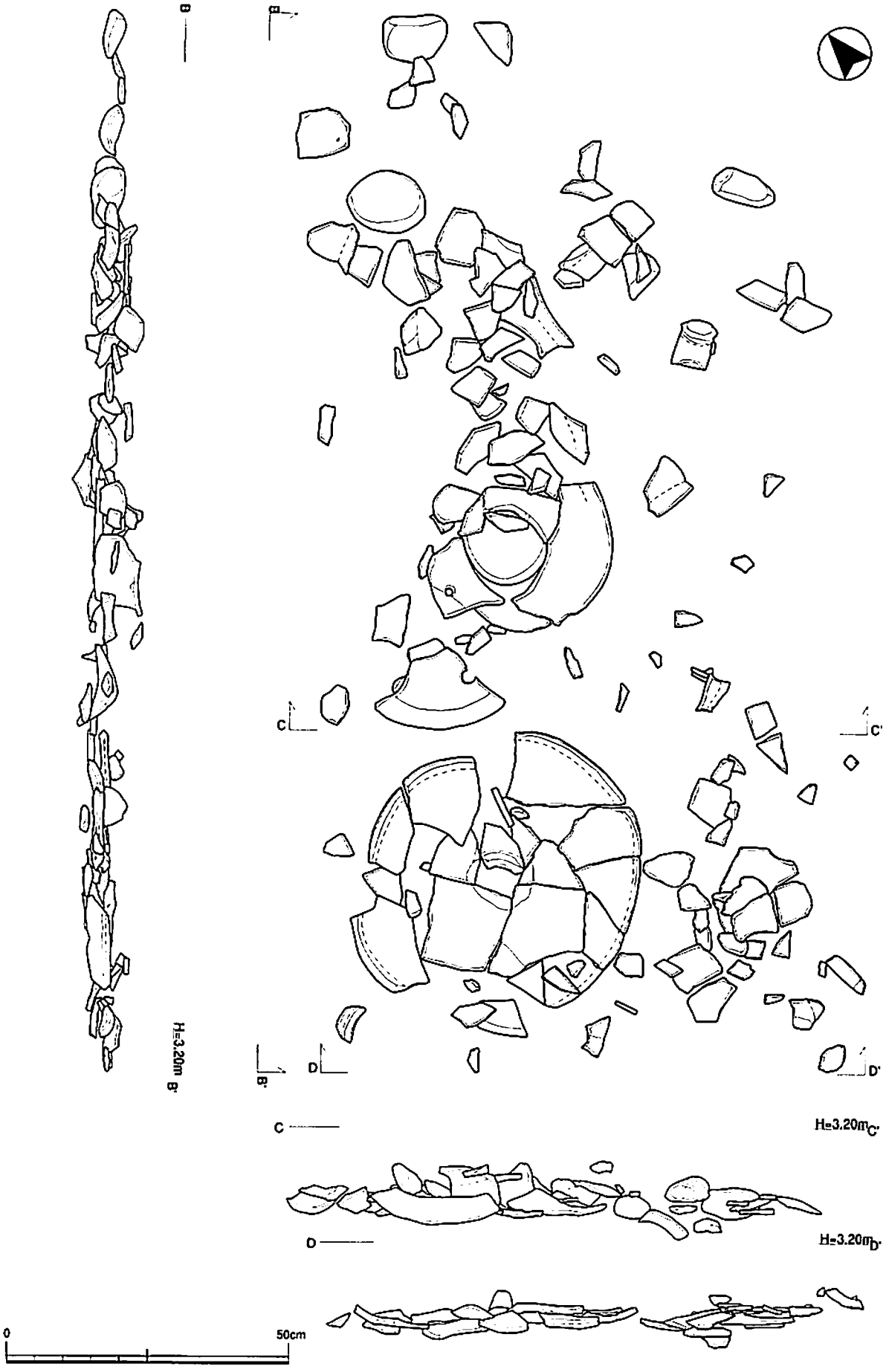
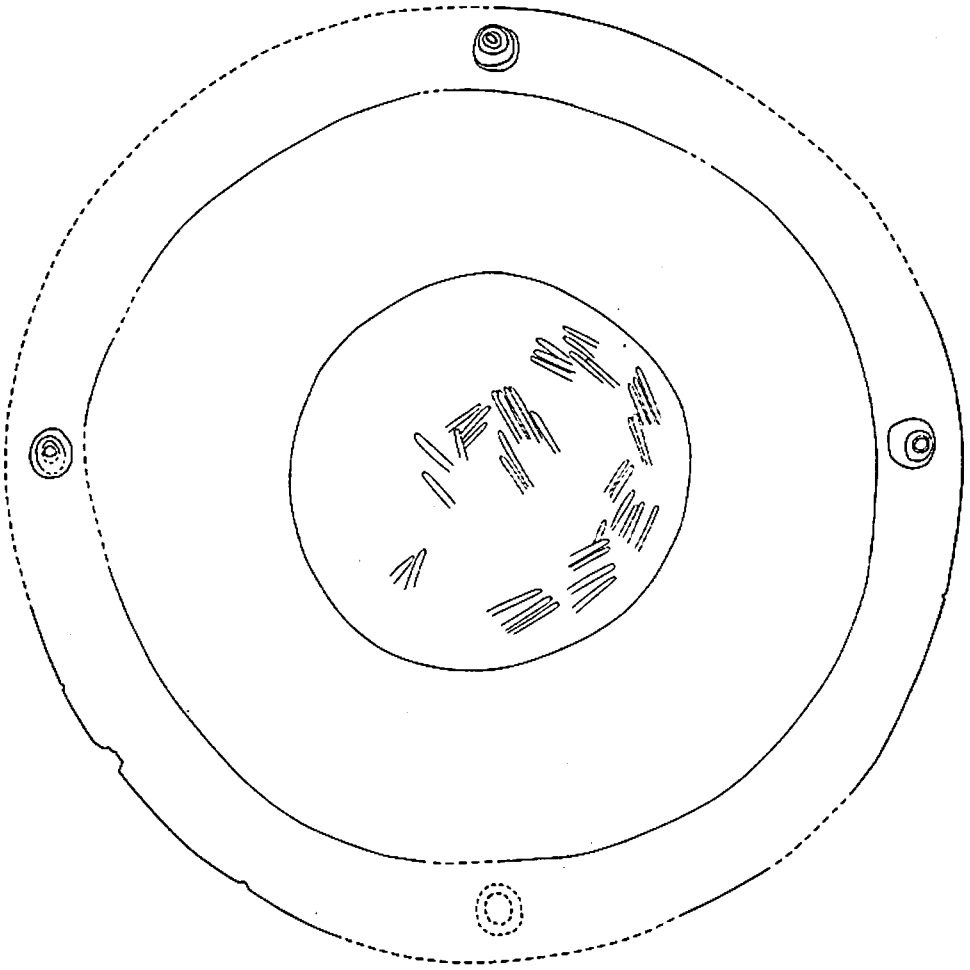
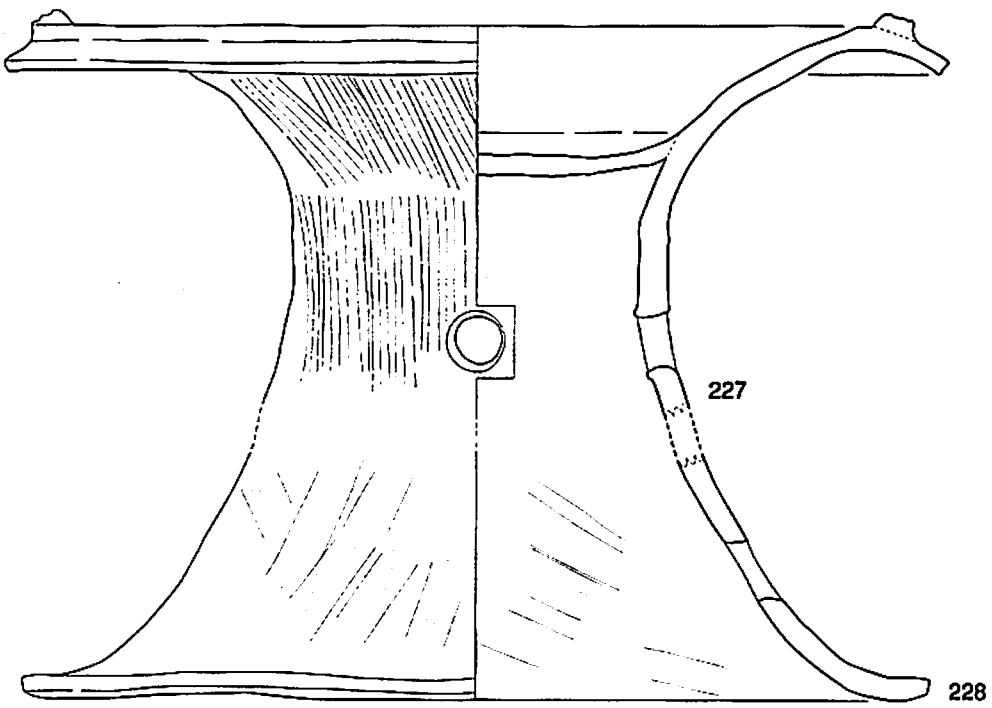


Fig.98 №227・228・229遺物出土状況





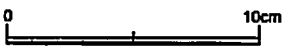


Fig.99　6区№227・228実測図

Fig.100　6区No229実測図

SI01　住居形態、規模は不明。検出面からの深さは8cmである。付帯施設は未検出である。

SI05　隅丸方形の住居跡と思われる。規模は不明。検出面からの深さは約4cmである。

SI04　隅丸方形を呈する住居跡と思われる。規模は不明。検出面からの深さは約12cmである。付帯施設は未検出。

SI03　隅丸方形を呈する住居跡と思われる。規模は不明。検出面からの深さは約1cmである。付帯施設は未検出。

SI02　隅丸方形を呈する住居跡である。一辺はおよそ2.7m、検出面からの深さは14cmである。付帯施設は未検出。遺構想定範囲内からは高杯（229）、器台（227・228）を含む遺物が多数出土している。付帯施設は未検出。

SI06　詳細は不明。検出面からの深さは7cmである。付帯設備等も不明。

No227、228、229遺物出土状況（Fig.99、100）

SD02範囲想定内から高杯（229）、器台（227･228）が出土している。高杯杯部は伏せた状態で土圧により潰れ、脚部は東側に杯部接合部より剥離し落ち潰れていた。また、東側に器台が同じく潰れた状態で出土している。遺物の出土レベルは同一であるため、同時期に置かれ、埋まったものと思われる。

227　器台形土器である。最も細い胴部中位から大きく外反しながら立ち上がり、口縁部でさらに外反して口縁端部は斜め下方を向き端部は四角く成形される。内面に用途は不明であるが、上下の空間を仕切る仕切り板がある。口縁部上面に円形浮文が4箇所施される。また、胴部中位に残存部位では1個の透孔を穿つ。外器面は刷毛目後にナデ調整が施され、刷毛目をよく残す。内器面は丁寧なナデが施されている。

228　器台形土器の脚部である。外反しながら下方へ向かい、さらに裾部で大きく外反し広がる。端部は角張る。透孔を1つ穿つ。内・外器面は刷毛目後ナデが施される。306と同一個体と考えられる。

229　高杯形土器である。杯部は均一な器壁により形作られる。杯部中央部でわずかに窪み、緩やかに外反しながら口縁端部へ至る。端部ではヘラ状の工具により明瞭な稜が施されるほど成形が行われている。脚部は筒型形状を成し幅が広く底部に向かう。脚部の中ほどには3個の透孔を穿つ。裾部は欠損のため不明。杯部内器面の中程に断面三角形の突帯を1条巡らす。また、杯部と脚部の接合面に断面三角形の突帯を施す。杯部は肌理の細かな土と丁寧な器面調整とに相まって滑らかな表情をしている。

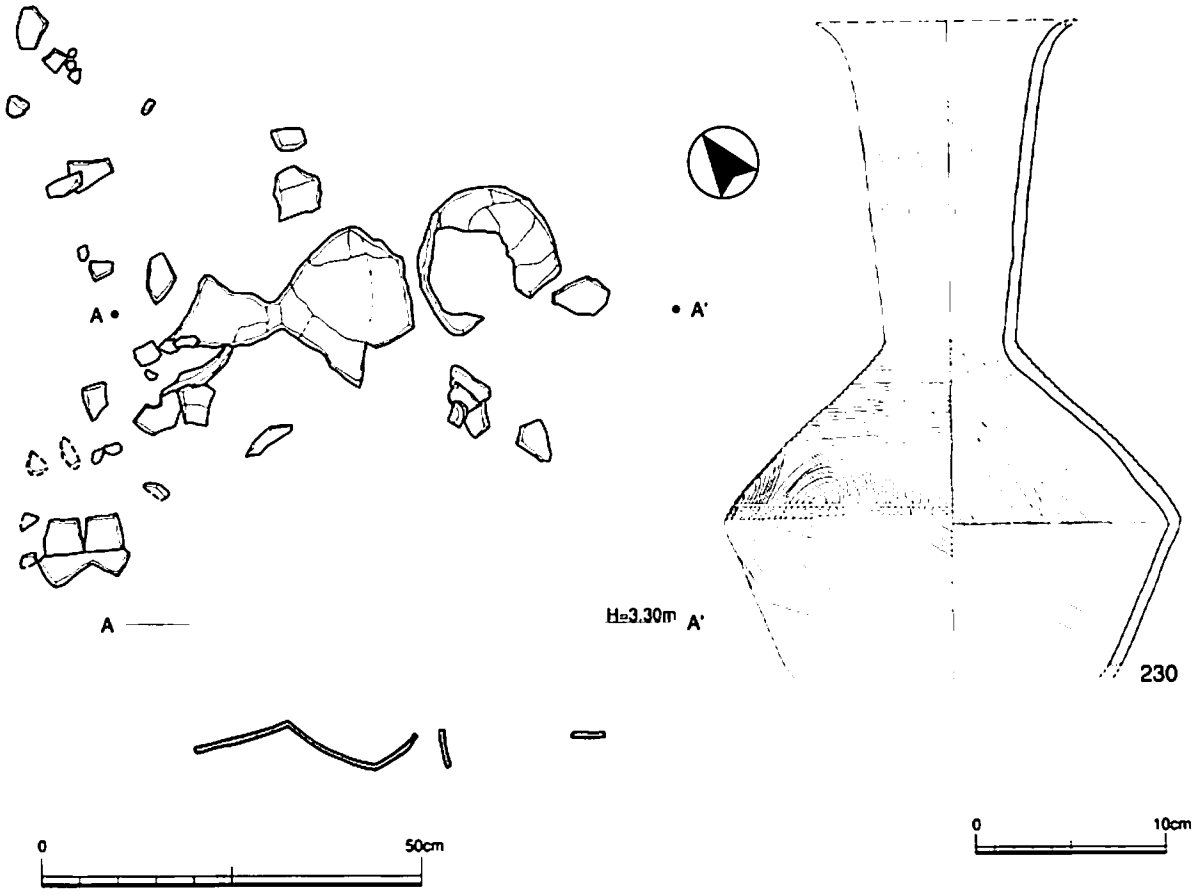


Fig.101　6区No.230出土状況及び実測図

No.230（Fig.101）重弧文長頸壺型土器出土状況

調査区北端に於いて、水田床土直下から出土した重弧文長頸壺形土器である。表土剥ぎ後の設計変更により本調査を実施しない位置からの出土であったが、床土直下ですでに露出していたため、位置をおさえ取上げた資料である。平面による出土状況を記録して取り上げた。

土器は、水平に近い状況で出土し上面半分を削平により失われている。当調査区の遺構及び遺物の出土状況と同じく、圃場整備時に激しい削平を受けているため、遺構底面に限りなく近い位置からの出土遺物と思われる。

230　重弧文長頸壺形土器である。頸部はゆるやかに開きながら立ち上がり口縁部に向かって僅かに外反する。口縁端部は欠損しているが、おそらくやや丸みを帯びる形状を成すと思われる。胴部中位に直角よりやや広い屈曲部を有し、肩部から胴部にかけて23条からなる細かな横位沈線が施される。その下位には9重からなる重弧文が巡る。また屈曲部には3条の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施され、屈曲部以下には刷毛目がわずかに認められる。底部を欠損する。

遺物包含層

231　甕形土器である。口縁部は「く」の字に屈曲後やや外反して開く。端部は丸くおさまり下方に向く。内・外器面共に刷毛目、ナデが施される。欠損のため底部形態は不明である。

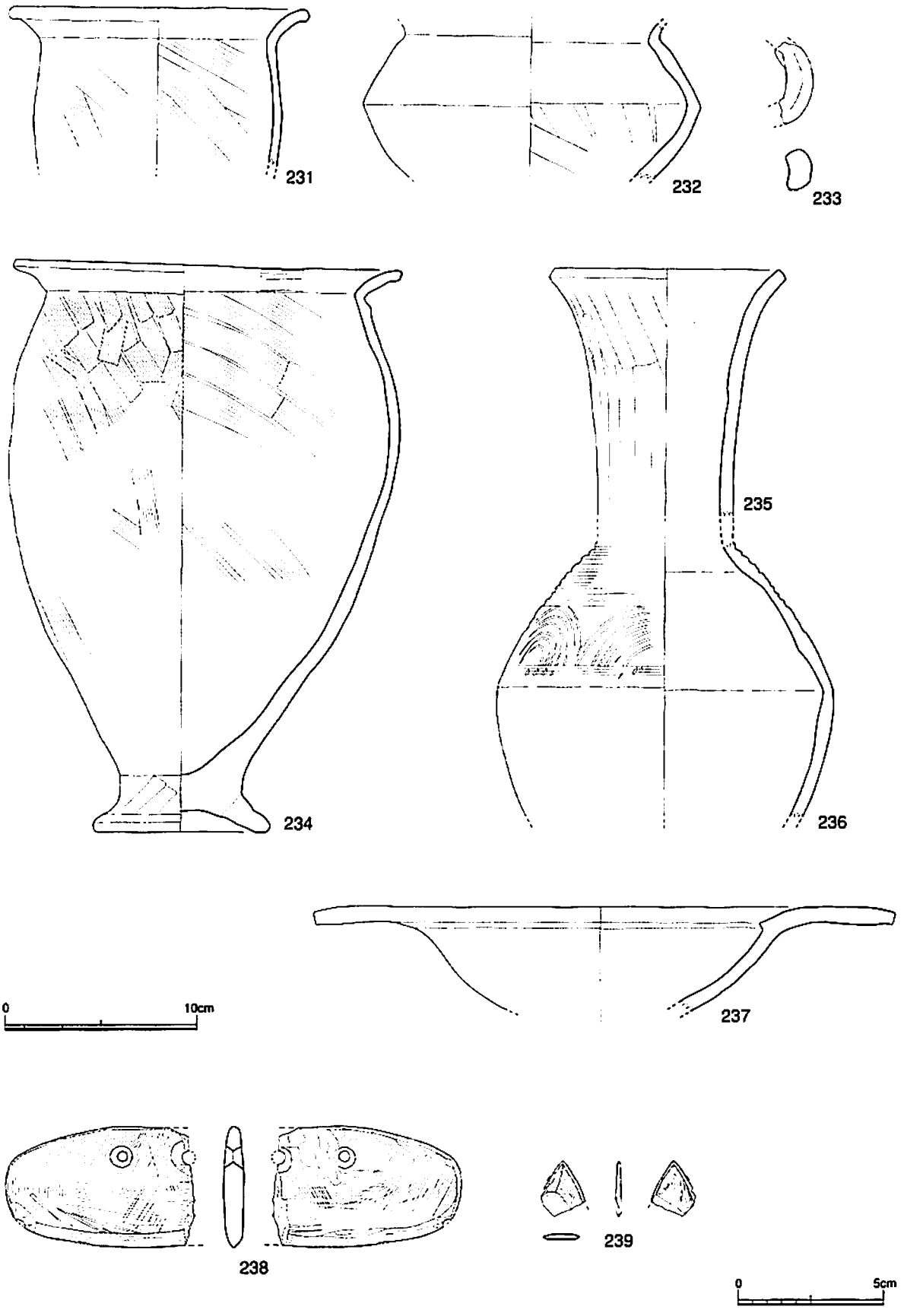


Fig.102　6区包含層出土遺物実測図

232　鉢形土器である。屈曲した胴部をもつ。口縁部・底部の形態は欠損のため不明。内器面に刷毛目が認められる。

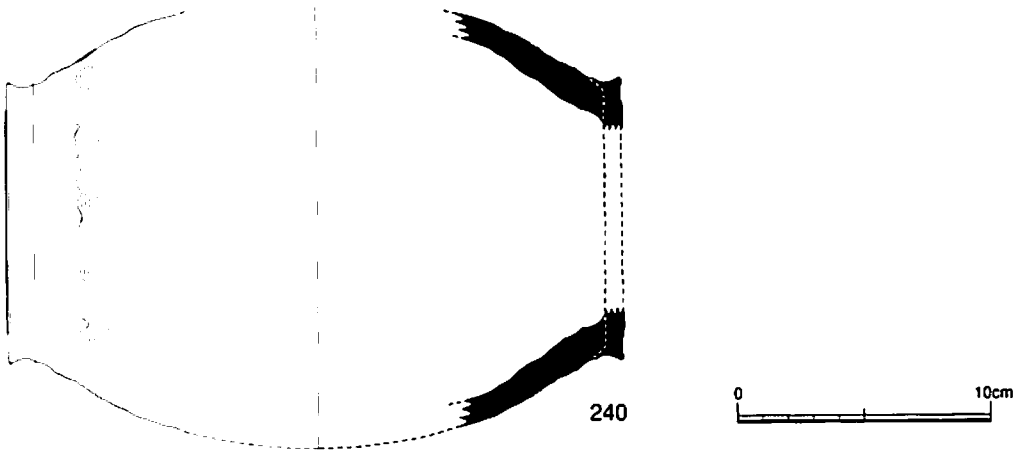


Fig.103　6区包含層出土遺物実測図

233　不明土製品である。断面形態は不定形な楕円であり、一部にナデ整形による内湾した部位を持つ。平面形は円形に伸びる棒状であり両端を欠損している。胎土は他の土器と同じく明赤褐色を呈しているため、同時代の土器群と同じ時期の所産と思われる。

234　甕形土器である。口縁部は屈曲して外反しながら開き、端部は四角に成形される。胴部最大径は上位にあり、そのまま直線的に底部に至る。脚部は直線的に開き、端部成形は丸くおさめられ太く低い。内･外器面に刷毛目後ナデが施される。外器面に煤が付着している。

235　長頸壺形土器の頸部である。ゆるやかに開きながら立ち上がり口縁に向かって僅かに外反する。端部はナデにより四角に成形される。器面調整は磨耗のため明瞭ではない。

236　重弧文長頸壺形土器の胴部である。胴部中位に緩い屈曲を持ち明確な稜は確認できない。肩部に9条からなる沈線が巡り、その下位に7重の上向きの重弧文が施される。屈曲部には2本の横位沈線上に刻み状の縦位短沈線が施されている。235の頸部と同一個体である可能性が高い。

237　高杯形土器である。浅い杯部が胴部中位で屈曲した後、口縁部は複合的に外湾しながら大きく開く。口縁端部はナデにより角張る。脚部は不明。

238　粘板岩製の石庖丁である。背部は直線的でその両端が丸みをもって直線的な刃部に至る。表･裏面から穿たれた紐孔を2つ持つ。刃部は両刃である。

239　安山岩製の磨製石鏃である。両面とも直線的になるまで磨き込まれ両サイドに両刃となる刃部を有する。基部側は欠損しており先端部のみの出土である。

240　樽型瓶である。

西片百田遺跡6区の遺構検出のための清掃中に表土近くの土から出土。出土部位は、樽胴部の端部から胴部の一部である。一方のみの出土であったため実測図は反転復原し図示している。よって製作時の上下については不明。しかし、粘土受けの部分が厚く丁寧な貼付けであるため、製作時には底部（面）にあたっていた部位と思われる。器壁は厚く胴部中央に向かいわずかに薄くなる。外器面は7条からなる波状文が1列見て取れる。内器面は横ナデによる痕跡が明瞭に残る。

同時に出土した部位に穿孔部の一部が出土しているが、本実測図に使用した部位とは接合できないため、穿孔部は図示していない。反転復原値であるが、最大幅約24.5cm、端部高約5.5cmである。頸部は残っていないため不明。色調は内外器面とも、灰白色である。

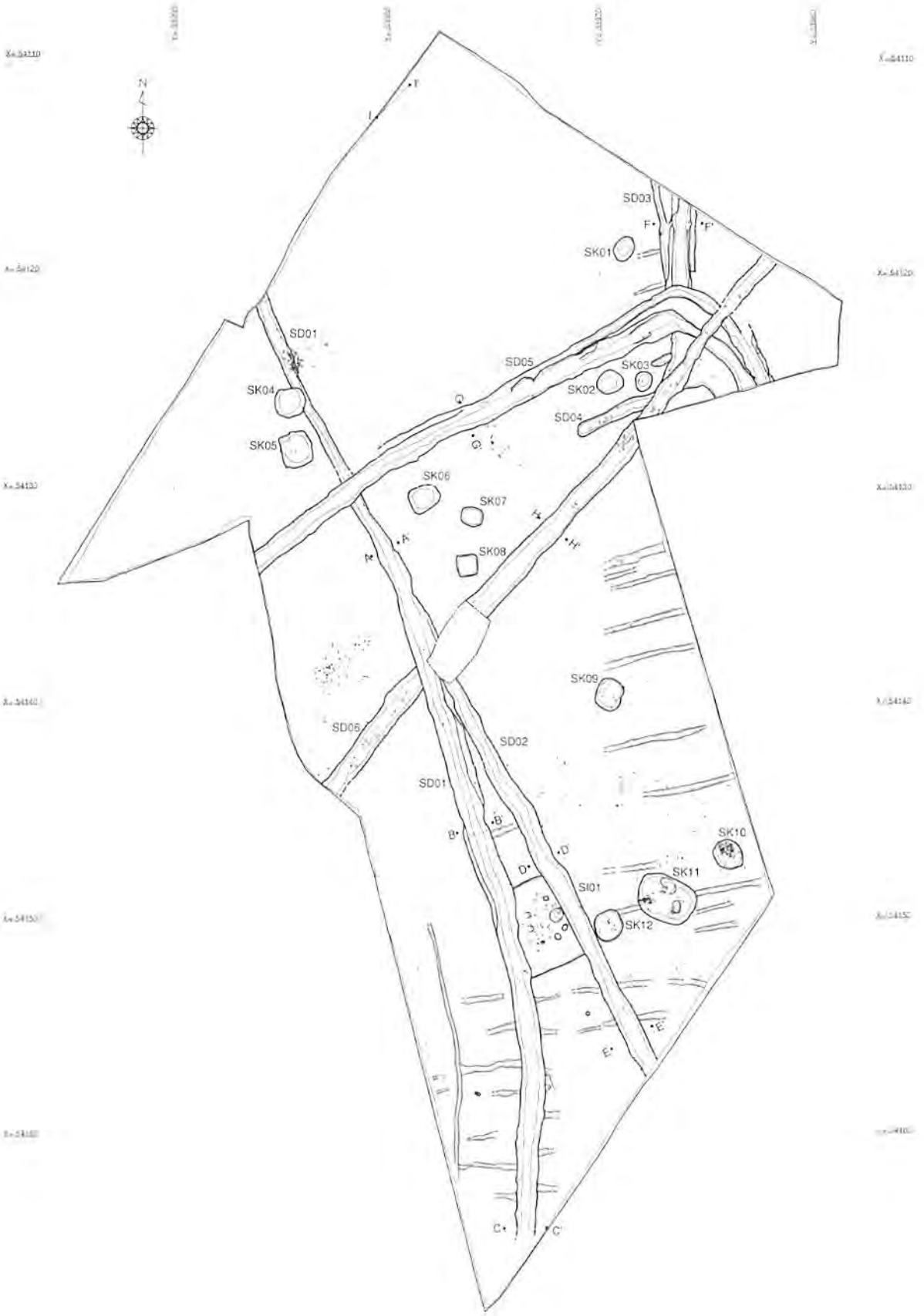
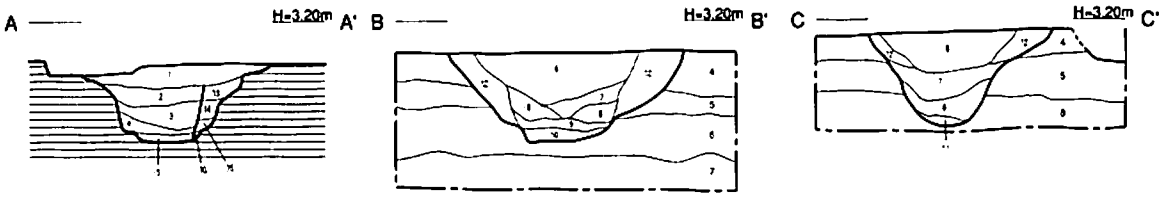


Fig.104　7区遺構配置図

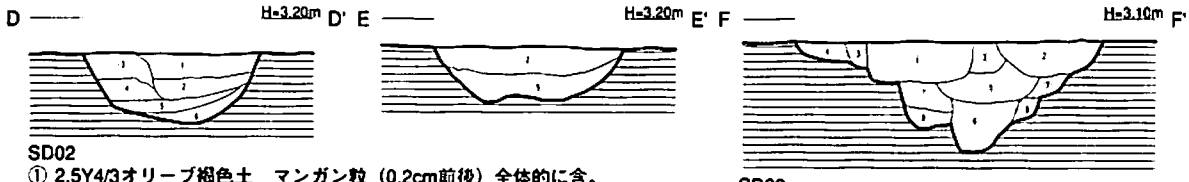
6）7区

6区と同じ土壌を形成している地形上に位置している。6区とは排水路を挟んで溝状遺構が連続して確認され、本調査区で多数の遺構と切り合う。調査区南側では南北を主軸とする溝状遺構と東西に広がる浅い小溝状遺構群が多数確認された。また土師器が良好な一括資料として出土している土坑も確認されている。



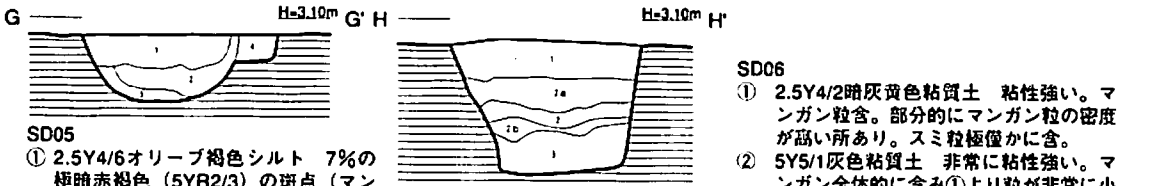
SD01
① 2.5Y4/3オリーブ褐色土　マンガン粒含。僅かに土器粒含。
② 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　僅かにマンガン粒含。粘質弱い。
③ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　マンガン粒含。粒の大きさは①・②より小さい。
④ 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘性強い。極僅かにマンガン粒含。
⑤ 10YR4/1褐灰色粘土　極僅かにマンガン粒含。粒は小さい。
⑥ 2.5Y4/2暗灰黄色土　弱粘性。鉄分・マンガン多含。
⑦ 2.5Y5/3黄褐色土　弱粘性。鉄分・マンガン多含。①よりやや暗い。
⑧ 2.5Y3/1黒褐色粘質土　粘性あり。マンガン多含。灰色粘土をランダムに含。
⑨ 2.5Y3/2黒褐色粘質土　弱粘性。砂質。鉄分・マンガン多含。
⑩ 2.5Y3/1黒褐色粘土　粘性強い。
⑪ 7.5Y4/1灰色砂質土　弱粘性。砂質強い。
⑫ 2.5Y4/3オリーブ褐色土　弱粘性。鉄分・マンガン多含。

SD02
⑬ 10YR4/3にぶい黄褐色粘質土　全体的にマンガン粒含。粘性弱い。
⑭ 2.5Y5/1黄灰色粘質土　マンガン粒少量含。粒の大きさは③より大きい。
⑮ 2.5Y4/1黄灰色粘質土　粘性強い。マンガン粒含、粒は非常に小さい。
⑯ 5Y4/1灰色粘土　マンガン粒含。粒は小さい。



SD02
① 2.5Y4/3オリーブ褐色土　マンガン粒（0.2cm前後）全体的に含。
② 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土　粘性弱い。マンガン粒全体に含むが、部分的に集中している部分もある。土器粒含。
③ 2.5Y5/3黄褐色土　マンガン粒全体的に含。①よりマンガンを含む密度は高い。
④ 5Y5/1灰色粘質土　マンガン粒含。粒は小さく密度は高い。粘質弱い。
⑤ 10Y5/1灰色粘質土　部分的に目の細かい砂を含む所あり。スミ粒含。マンガン粒少量含。粘性強い。
⑥ 2.5Y5/3黄褐色粘質土　マンガン粒を極僅かに部分的に含。粘質強い（粘土に近い）。⑤層よりも強い。

SD03
① 7.5YR3/4暗褐色粘質土　小土器片含。
② 7.5YR4/0褐色粘質土
③ 10YR3/4暗褐色粘質土
④ 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土
⑤ 10YR3/4暗褐色粘質土
⑥ 10YR5/3にぶい黄褐色粘質土
⑦ 10YR4/2灰黄褐色粘質土　粘性強い。小砂粒混じる。
⑧ 10YR4/3にぶい黄褐砂質土　僅かに灰黄褐色粘土含。



SD05
① 2.5Y4/6オリーブ褐色シルト　7%の極暗赤褐色（5YR2/3）の斑点（マンガン粒）含。
② 10YR4/3にぶい黄褐色シルト　7～10%のマンガン斑含。
③ 10YR4/4褐色のブロック状の土含、15%の極暗赤褐色（5YR2/3）の斑のある粘質土層
④ 10YR5/4にぶい黄褐色シルト層　7%の極暗赤褐（5YR2/3）の斑（マンガン）含。

SD06
① 2.5Y4/2暗灰黄色粘質土　粘性強い。マンガン粒含。部分的にマンガン粒の密度が高い所あり。スミ粒極僅かに含。
② 5Y5/1灰色粘質土　非常に粘性強い。マンガン全体的に含み①より粒が非常に小さい。スミ塊・土器片・土器粒含。
②a 5Y5/1灰色粘質土　②より粘性弱い。マンガン粒・スミ粒含。①より粒が小さい。
②b 2.5Y4/2暗褐色粘質土　上層より粘質強い。非常に小さいマンガン粒含。スミ粒含。
③ 2.5Y4/1黄灰色粘土　スミ粒含。層上部に鉄分・マンガン粒僅かに含。

0　1m

Fig.105　7区SD01～06実測図

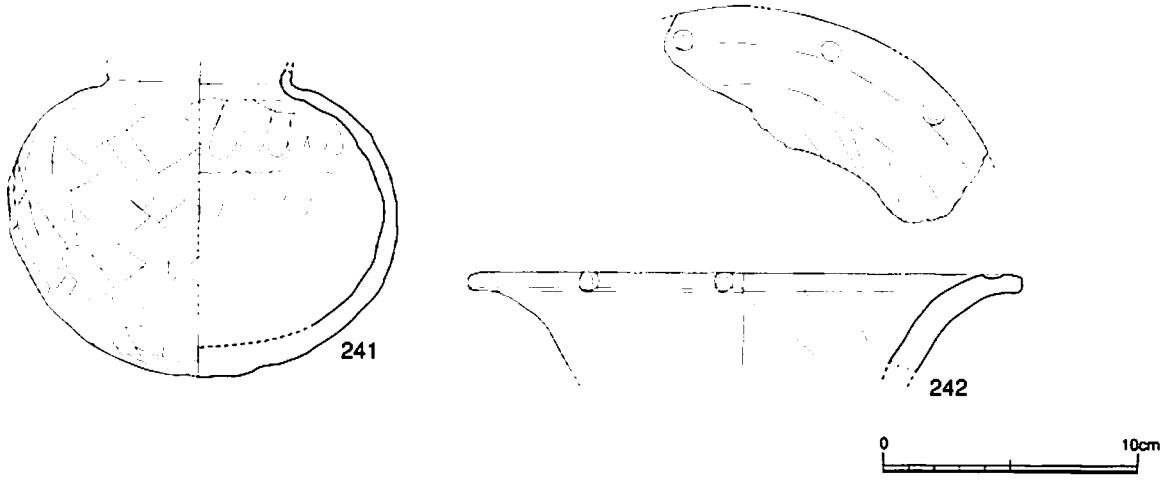


Fig.106　7区SD06出土遺物実測図

SD01

SD05と直交して調査区を南北に走るU字形の溝状遺構である。幅1.2～0.9m、検出面からの深さはおよそ0.2～0.7mを測る。調査区中央でSD02と合流するが、A-A'の断面土層断面よりSD02より新しい時期の遺構であることが推定される。本遺構は北に向かって緩やかに傾斜している。また、数回に渡って掘りなおしが行われていたことが窺える。さらに粘土の堆積層が確認されることから、長期間水が溜まっていた可能性が推測される。古墳時代の遺物片が著しく磨耗した状態で僅かに出土している。5区SD02と同一遺構であると考えられる。

SD02

SD01と切りあって検出された幅1.0～0.8m、検出面からの深さ約0.4mのU字形を呈する溝状遺構である。底面は比較的平坦である。A-A'の断面よりSD01に切られる遺構であることが推定される。

SD03

調査区東端を南北に走る幅約1.5m、検出面からの深度0.5mほどの溝状遺構である。見かけ上は一条の溝であるが、断面観察より実際は数条もの溝の複合体である。これは近似した軸の溝を幾度も掘りなおした結果であると考えられる。6区につながる。

SD04

幅約0.5m、検出面からの深さおよそ0.1mの溝状遺構である。SD05と平行するように調査区東端を北から西に直角に屈曲するが西へはあまり延びずに完結している。検出作業および断面観察からSD05とほぼ同一の時期の所産と考えられる。

SD05

大別すると幅約1.0～0.7m、検出面からの深さ0.3mほどの溝と、幅約0.95～0.45m、検出面からの深度およそ0.2mの溝が調査区の東端を北上した後、西へほぼ直角に屈曲して、見かけ上一条の溝に収束している。土層断面よりいずれも数条の溝からなっていると考えられる。これは方向軸が近似した溝を幾度も掘り換えながら存続した結果と考えられる。また、埋土中に焼土の集中範囲が確認されている。

SD06

調査区を北東一南西方向に走る幅1.3～1.0m、検出面からの深度はおよそ0.7mのU字形を呈する溝状遺構である。本調査区内の溝遺構の中では遺物の出土量は多く、炭化物も数点確認されている。しかしいずれも

最底面からの出土ではない。

調査区全体で確認された小溝状遺構群

調査区全面に渡って東西方向を方向軸とした幅25～40cm、検出面からの深さ2～4cm程度の浅い小溝状遺構群が検出された。後世の削平のために大半は消失しており遺構の残存状況は非常に悪く、その痕跡を留めるのみである。また、幾つかの小溝の底面からは幅4cm、深さ1cmほどの長方形の掘り込みが小溝状遺構群に直行して確認されており、耕作痕や工具痕と考えられる。

241　小型の壺形土器である。胴部は張りが強く丸みを帯び底部は丸底を呈する。外器面は磨耗のため調整は明瞭ではない。底部から胴部中位にかけて黒斑が認められる。内器面はナデが施される。

242　壺形土器の口縁部である。大きく外反しているため上面に平坦面を有する。端部成形は角張る。口縁部上面および端部に竹管文が6個認められる。内器面に刷毛目やナデが施される。

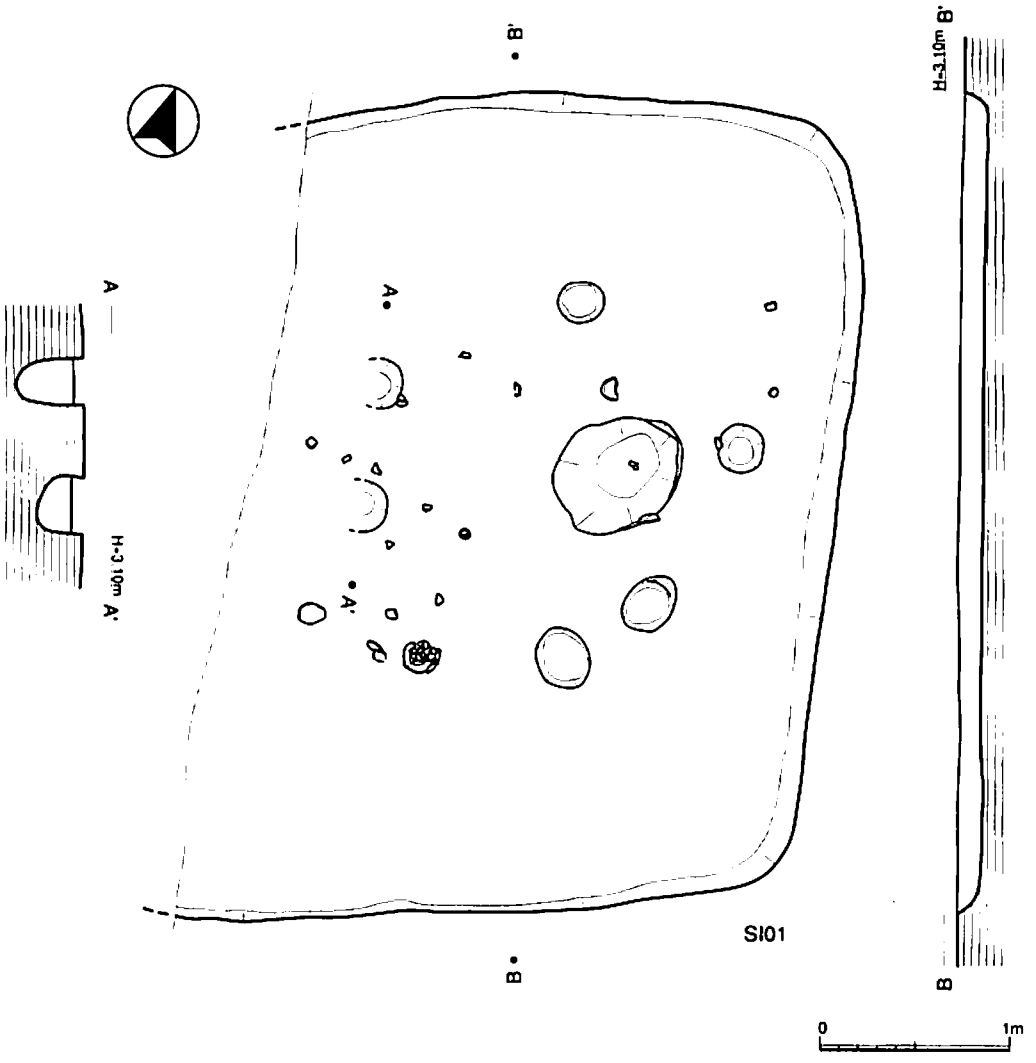


Fig.107　7区SI01実測図

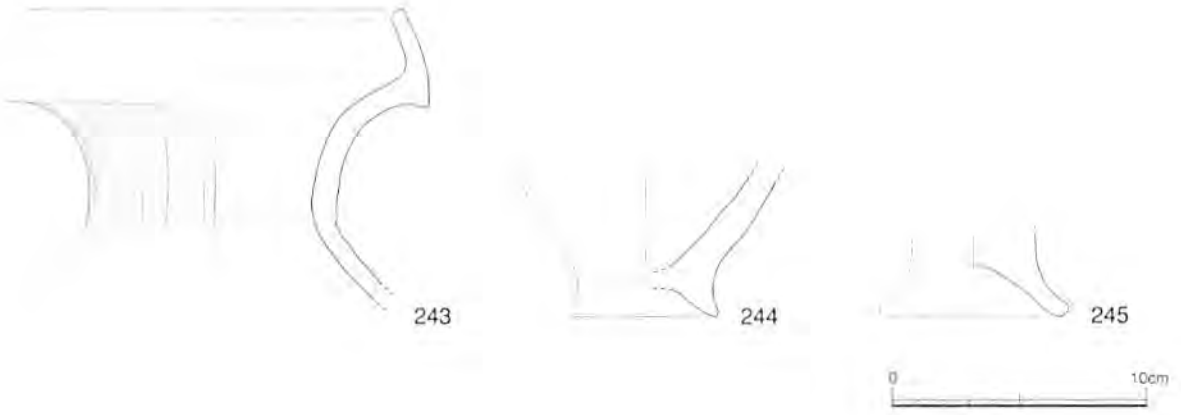


Fig.108　7区SI01出土遺物実測図

遺構名	竪穴式住居跡SI01	主軸方向	—
時期	弥生時代後期	炉	中央部0.7×0.6×0.06m
切り合い関係	無	土坑	未検出
規模・深度	不明	柱穴	炉跡周辺6基
面積	不明	備考	

SD01・02に切られているため全体の1/2程のみ検出された、隅丸方形の竪穴式住居跡である。中央部に位置する炉跡は浅い擂鉢状を呈する。また、炉跡を囲むように柱穴が6基確認されるが、いずれも主柱穴とは考えがたい。後世の削平が激しく遺構の残存状態は悪い。

243　複合口縁壺形土器の口縁部である。大きく外反した後、強く屈曲して僅かに内傾して伸びる。端部成形は四角におさまる。頸部に1条の沈線を施す。外器面は横ナデや刷毛目など器面調整痕を明瞭に残す。

244　甕形土器の脚台部である。やや外反して開き端部は四角く成形される。非常に低い。外器面の接合部に指頭圧痕が認められる。

245　甕形土器の脚台部である。やや外反して開き、端部成形は四角におさまって低い。

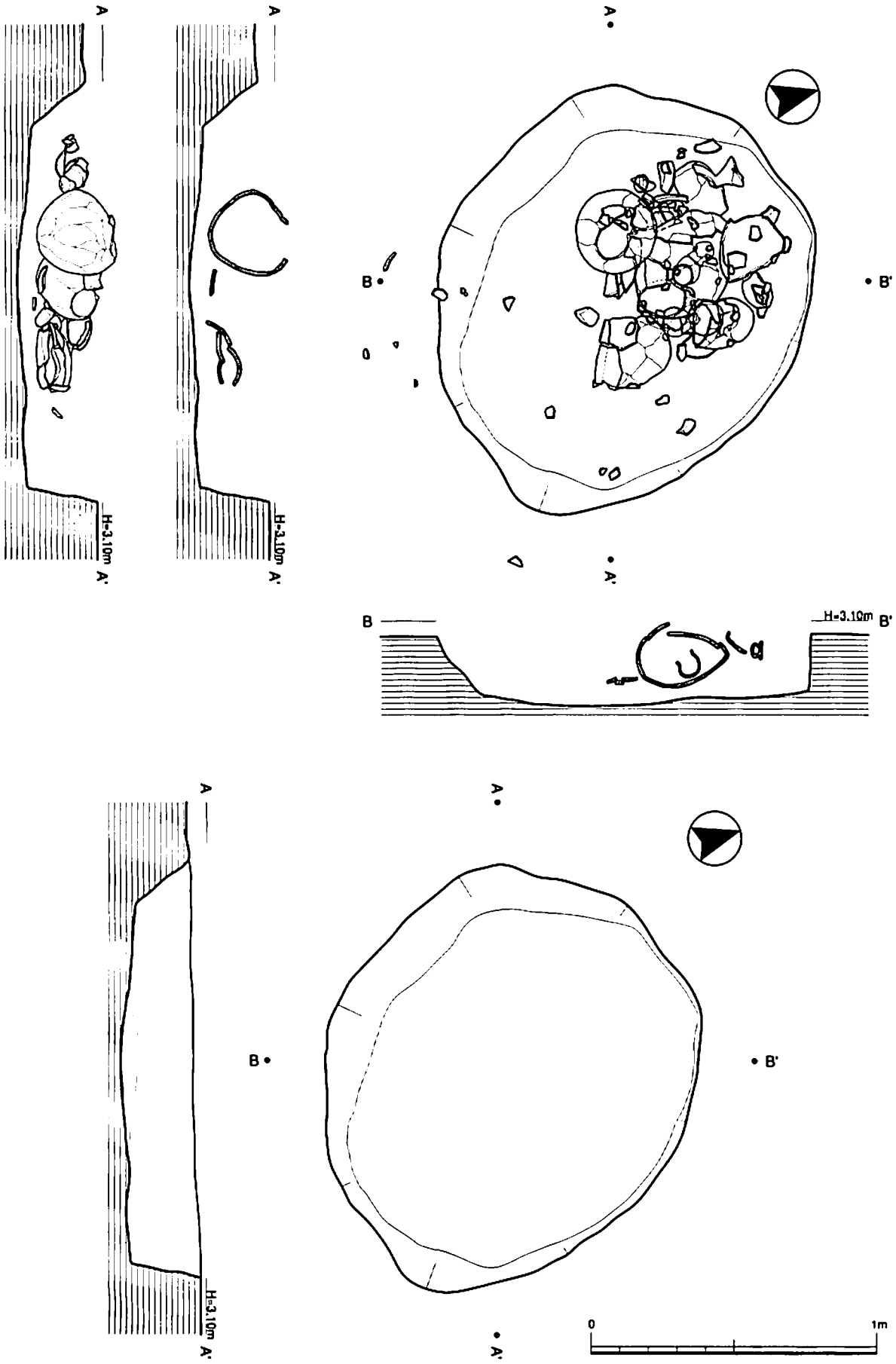


Fig.109　7区SK10実測図

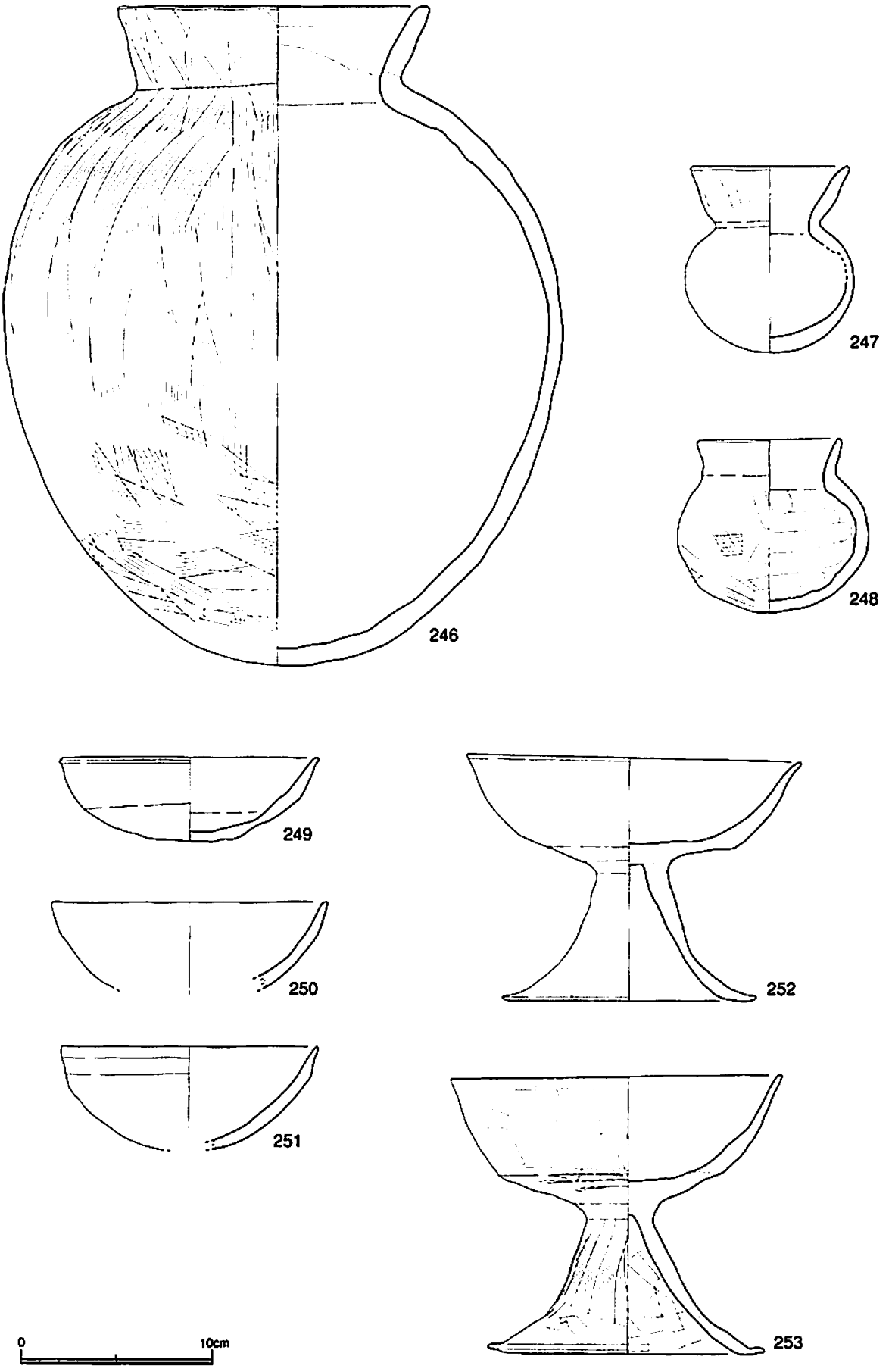


Fig.110　7区SK10出土遺物実測図

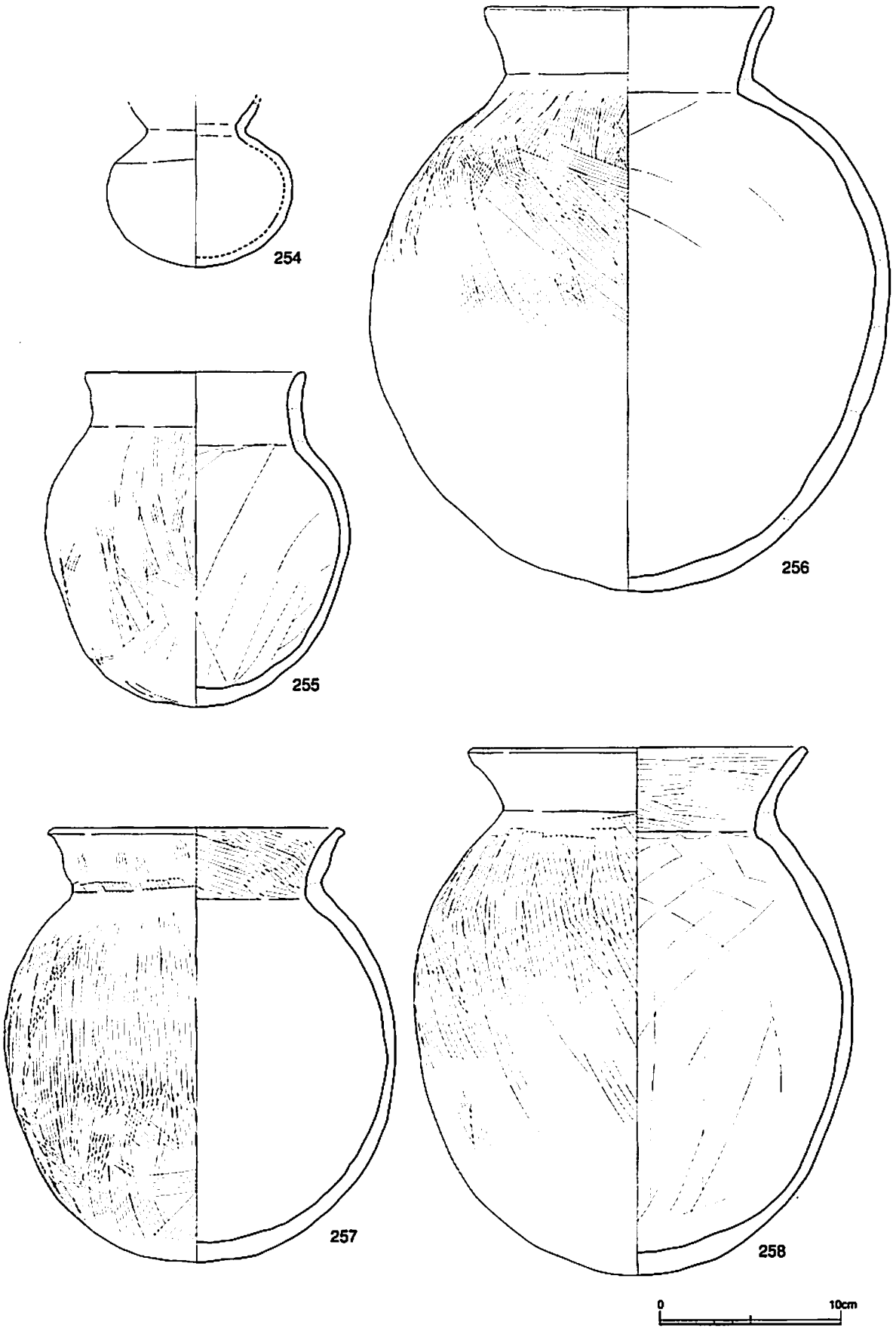


Fig.111　7区SK10出土遺物実測図

SK10

長径1.4m×短径1.15m、検出面からの深さは0.25mの長楕円形の土坑である。壁面はほぼ垂直で水平に掘り込まれている。遺構埋土は単層であり、底面には炭化物の集中範囲が僅かに確認された。土坑内からは古墳時代初頭の土器が都合13個体出土した。

246　甕形土器である。胴部最大径を上位に持ち、口縁部は屈曲後直線的に短く伸びて四角に成形され端部に至る。胴部は最大径を中よりやや上位に有するが球形を呈し、底部は丸底である。器面調整は磨耗のために明瞭には認められない。外器面の底部から胴部下半にかけて、使用により付着した煤が認められる。

247　小型丸底壺形土器である。口縁部は屈曲して内反気味に立ち上がり端部付近でやや外反する。端部成形は丸くおさまる。丸底を呈し胴部は丸みを帯びる。外器面の口縁端部付近は刷毛目後ナデが施され、内器面の胴部は粗い工具ナデが認められる。

248　小型丸底壺形土器である。口縁部は屈曲して斜め上方へ直線的に短くのび、丸く成形された端部に至る。丸底を呈し、胴部は丸みを帯びる。外器面は刷毛目が施され、内器面の胴部には指ナデが施されている。

249　鉢形土器である。平底を呈し、やや内湾しながら立ち上がる。口縁部は外方へ若干屈曲して丸くおさまり端部に至る。内･外器面にナデが施され外器面に煤の付着が認められる。

250　鉢形土器である。やや内傾しながらそのまま丸く成形された端部に至る。底部形態は欠損により不明。

251　鉢形土器である。丸底を呈し、胴部中位までやや内傾して開いた後、直立するように僅かに屈曲し丸く成形された端部に至る。口縁部の外器面は強いナデのためやや薄くなる。

252　高杯形土器である。杯部は浅く平底を呈し、内湾気味に立ち上がり口縁部付近でやや外反する。脚部は外反しながら下方へ向かい、裾部付近でさらに外湾する。内外器面にナデが施される。

253　高杯形土器である。杯部はやや深く、やや内湾気味に立ち上がり口縁部付近で僅かに外反する。端部は丸くおさまる。脚部は内反気味に下方へ向かい、裾部付近で大きく内反して開く。さらに裾端部において短く屈曲する。裾端部は四角に成形され、器面の刷毛目及び削りなど明瞭に観察される。

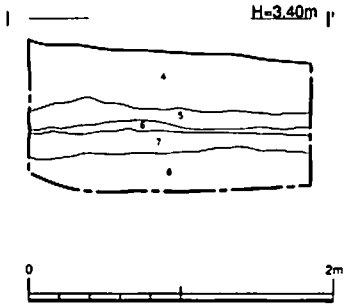
254　小型丸底壺形土器である。口縁部は屈曲して内湾気味に立ち上がり端部付近でやや外反すると推定される。底部は丸底を呈し胴部は丸みを帯びる。器面調整は磨耗が著しく不明である。

255　甕形土器である。口縁部は上方へ直線的に開き、端部は丸くおさまる。屈曲部の締まりは弱い。胴部はやや球形を成し底部は丸底を呈する。外器面は刷毛目が認められ内器面には削りが施される。外器面の胴部下半に煤が確認される。

256　甕形土器である。口縁部は屈曲して直線的に立ち上がり、やや内湾しながら開く。口縁端部は丸くおさまる。胴部は最大径を中位に持ち球形を成し底部は丸底を呈す。外器面は刷毛目とナデが施され内器面には削りが認められる。外器面最大径付近に赤彩の痕跡が認められ、胴部下半には使用時の煤が付着している。

257　甕形土器である。口縁部は内湾して立ち上がり端部で僅かに外反する。端部成形は四角く下方に向く。球形の胴部を呈し底部は丸底である。外器面は口縁部周辺で刷毛目後ナデ、胴部は刷毛目が施される。内器面は口縁部周辺で刷毛目、胴部は削り後ナデが施される。胴部下半には煤が確認される。

258　甕形土器である。口縁部は屈曲後やや外反して四角に成形された端部に至る。胴部は球形を成し、底部は丸底を呈す。外器面には刷毛目が明瞭に残り内器面には削り後ナデ調整が施される。胴部外器面には使用に伴う煤が認められる。



4　5Y4/3暗オリーブ色土　弱粘性。鉄分・マンガン多含。
5　5Y5/3灰オリーブ色土　4層よりしまりは弱いが粘性高まる。鉄分・マンガン多含。
6　5Y5/3灰オリーブ色土　粘性あり。全体的に茶色を呈す。
7　5Y4/1灰色砂質土　弱粘性。細かいマンガンを多く含む為全体的に茶色を呈す。
8　5Y5/3灰オリーブ色土　弱粘性。SD02⑥層よりはマンガン凝固が弱い。基本的に5・6層間に存し漸移層の様相を呈す。
9　10YR4/4褐色粘質土　マンガンを多量に含。しまりあり、粘性あり。
10　2.5Y5/1黄灰色粘質土　直上層より更に粘性が強くなる。しまりあり。マンガン量4<5<9<10（層）
11　2.5Y5/3黄褐色シルト　粘性・しまり共に強い。やや砂質感あり。
12　10Y6/1灰色シルト質土　11層よりしまり・粘質共に強い。若干の砂粒含。2区調査区土層B-B'の10層より本層がシルト感強い。

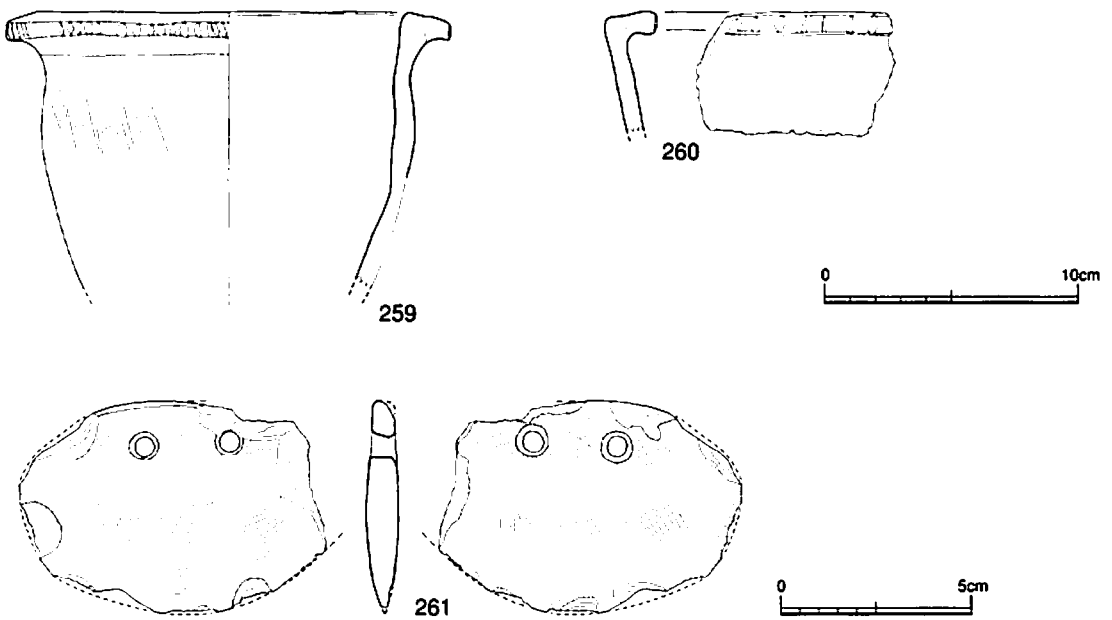


Fig.112　7区土層断面図、包含層出土遺物実測図

包含層

259　甕形土器である。口縁部は逆L字を呈し、端部に刻み目を施す。口縁部直下は横ナデによりやや窪む。逆円錐形の器形を成すと推定される。

260　甕形土器の口縁部である。逆L字を呈し、端部に刻み目を施す。

261　粘板岩製の石庖丁である。背部は直線的で、その両端が丸みをもって半円形の刃部に至る。表・裏面から穿たれた紐孔を2つ持つ。刃部は両刃である。

遺物観察表

Tab.2　土器観察表

1区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
2	弥生土器	台付鉢		包含	一括	(6.8)	(5.75)	9.2	にぶい褐7.5YR5/4	褐7.5YR4/4

2区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
3	弥生土器	鉢	E-2	SI01	No.69	31.4	(6.5)	22.0	橙5YR6/6 橙7.5YR6/6	橙5YR6/6 浅黄橙7.5YR8/4
4	弥生土器	甕		SI01	No.69	15.0	7.3	33.2	灰白10YR8/2 淡橙5YR8/4	灰白2.5Y8/1 灰白2.5Y7/1
6	弥生土器	甕		SI02	No.30	19.9	—	20.5～	にぶい橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6
7	土師器	甕		SI02	No.139	(24.0)	—	11.4～	にぶい褐10YR7/2 にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4
8	土師器	甕		SI02	No.26	(18.4)	—	12.2～	にぶい黄褐10YR5/3	にぶい橙7.5YR7/4
9	弥生土器	台付甕		SI02	No.30	26.0	12.0	41.4	橙5YR6/6	橙5YR6/6
10	弥生土器	台付甕 （脚台部）		SI02	一括	—	11.2	15.6～	にぶい橙7.5YR6/4	黄灰2.5Y5/1
11	弥生土器	台付鉢		SI02	No.37	13.0	-	9.5～	にぶい橙7.5YR6/5	にぶい橙7.5YR6/4
12	土師器	小型甕		SI02	一括	14.6	-	10.5～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3 橙7.5YR7/6
13	弥生土器	小型甕		SI02	No.118	—	7.45	17.7～	にぶい黄橙10YR7/4 橙5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/3
14	弥生土器	鉢		SI02	一括	28.6	7.4	23.7	にぶい橙7.5YR7/5	にぶい橙7.5YR6/4
15	弥生土器	壺		SI02	No.90・91・一括	14.4	—	9.7～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
16	弥生土器	壺		SI02	No.22	—	4.15	16.5～	にぶい黄橙10YR7/2 褐灰10YR5/1	灰黄褐10YR6/2
17	弥生土器	壺		SI02	No.109	12.7	4.4	35.1	灰黄2.5Y7/2	にぶい黄橙10YR7/4
18	土師器	高杯（杯部）		SI02	No.2・6・15	47.7	-	3.5～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
19	土師器	高杯		SI02	No.42・21	32.7	(18.5)	22.5	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
20	弥生土器	高杯（杯部）		SI02	No.19	22.2	-	8.0～	灰白10YR8/2 浅黄橙7.5YR8/4	灰白10YR8/2 浅黄橙7.5YR8/4
21		高杯（脚部）		SI02	No.38・65・104、一括	—	10.8	8.0～	灰黄2.5Y6/1	灰黄2.5Y6/1
22	土師器	高杯（脚部）		SI02	No.43	11.1	—	12.1～	にぶい黄橙10YR7/3 橙7/5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/3
23	土師器	鉢		SI02	No.139	17.1	-	5.8	にぶい黄橙10YR6/3	橙5YR6/6
24	弥生土器	長頸壺		SI02	No.42	10.8	-	14.2～	にぶい赤褐5YR5/4	にぶい赤褐2.5YR5/4
25	重弧文土器	短頸壺		SI02	No.87	—	—	4.15～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
26	重弧文土器	壺		SI02	No.34	—	—	10.7～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/4
27	重弧文土器	壺		SI02	No.1	—	—	14.5～	灰白2.5Y8/1	灰白2.5Y7/1
28	重弧文土器	壺		SI02	No.152	—	—	3.6～	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄2.5Y6/3
29	重弧文土器	壺		SI02	No.97	—	—	4.6～	にぶい赤褐5YR4/3	にぶい赤褐5YR4/3
30	重弧文土器	壺		SI02	一括	—	—	3.2～	明赤褐5YR5/6	赤褐5YR4/6
31	重弧文土器	壺		SI02	No.11	—	—	6.6～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/2
32	重弧文土器	壺		SI02	No.146	—	—	5.9～	にぶい黄2.5Y6/3	暗灰黄2.5Y5/2
33	重弧文土器	壺		SI02	No.27	—	—	3.7～	にぶい赤褐5YR5/4	黒2.5Y2/1
34	重弧文土器	壺		SI02	一括	—	—	5.4～	にぶい黄橙10YR7/4	灰黄2.5Y7/2
37	弥生土器	鉢		SI03	No.13	(13.6)	3.8	8.6	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい褐7.5YR5/4
38	弥生土器	台付甕		SI03	一括	—	8.1	10.0～	にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄褐10YR4/3
39	弥生土器	台付甕		SI03	No.16・18・一括	(19.1)	—	23.0～	にぶい橙7.5YR7/4 明赤褐2.5YR5/6	にぶい橙7.5YR7/4
42		台付甕		SI04	No.75	-	3.9	12.5～	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3

胎土	調整	備考	報番
赤褐色粒	外面は刷毛目。内面は指頭圧痕。脚台部は調整不明。器面が全体的に調整不明瞭。	（外面）煤。内外面ともに摩耗している。	1

胎土	調整	備考	報番
長石	口縁は摩耗の為調整不明。外面は工具ナデ。内面上部は工具ナデ、下部はヘラ削り。	摩耗のため調整不明瞭。（内外面）煤付着。	3
長石・茶褐色粒	内外面ともに摩耗の為調整不明。	摩耗の為調整不明瞭。赤色顔料かは不明。（外面胴部）黒斑	4
長石・輝石・角閃石	口縁端部は刷毛目後ナデ。外面・口縁内面は刷毛目。内面はヘラ削り。		6
石英・長石	口縁端部はナデ。外面は刷毛目。外面頸部はナデ。口縁内面は刷毛目。内面は刷毛目後ナデ。	（外面口縁～胴部）煤付着。（口縁内面）煤付着	7
輝石多量・長石・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。内外面ともに刷毛目だが摩耗の為不明瞭。	全体に摩耗している	8
長石	口縁・脚部は摩耗の為調整不明。内外面ともに刷毛目。	全体的に摩耗。（内外面頸部～胴部）煤付着	9
長石多量・輝石	外面は刷毛目後ナデ。内面はナデ。外面脚台部との接合部分は横ナデ。脚台部は横ナデ。		10
石英・長石	口縁はナデ。外面は刷毛目。内面は刷毛目後ナデ。内底面はナデ。外面脚部接合部分はナデ。脚部内面はナデ。	（外面）黒斑あり	11
長石	口縁はナデ。外面は刷毛目。内面は刷毛目後ナデ、ナデ。	内面全体は焼きむら？	12
石英・長石	内外面ともに刷毛目。内底面はナデ。脚部はナデ。	（外面の胴部）一部煤付着	13
長石	口縁は摩耗の為調整不明。外面上部は刷毛目、下部はヘラ削り。内面は刷毛目。内底面は摩耗の為調整不明。	（内外面）煤付着	14
石英・長石	口縁端部はナデ。外面・口縁内面は刷毛目。内面頸部はナデ。内面はヘラ削り。	（内面口縁～上面）煤付着。（外面口縁端部～胴部）煤付着。（口縁）沈線。	15
石英・輝石多量、長石・赤色酸化粒	内外面ともに刷毛目。		16
長石	口縁はナデ。外面は刷毛目。外面胴部下部は工具ナデ。外底面はナデ。内面は調整観察不能。	内面調整不明瞭。（外面）黒斑か。（外面胴部～底部）煤付着	17
石英・長石・雲母	内外面ともに横ナデ。		18
石英・長石多量・雲母	杯部・脚部内面はナデ。杯部・脚部外面は刷毛目。	穿孔8箇所確認。（杯部内面）一部黒斑あり。（脚部外面）一部煤付着	19
長石	口縁・杯部内面はナデ。外面は刷毛目。	（内面）煤か黒斑。(外面）煤付着か。貼付突帯。杯部と脚部が剥離痕	20
長石多量	外面は刷毛目。内面は刷毛目後ナデ。端部はナデ。	全体に器面摩耗	21
長石多量・石英・角閃石・雲母・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面・脚端部はナデ。	杯部が剥離している	22
長石（大粒含む）・輝石	口縁外面はナデ、内面は横ナデ。内外面ともに刷毛目後ナデ。	全体に器面摩耗	23
石英・長石・角閃石	口縁端部はナデ。内外面頸部上部は刷毛目。外面頸部下部は刷毛目後ナデ。内面頸部下部はナデ（指頭痕）。		24
石英、長石・角閃石・雲母	内面はナデ。	沈線	25
石英・長石	外面は刷毛目。内面胴部上部はヘラ削り、下部は刷毛目。		26
長石・雲母・赤褐色粒	外面は刷毛目後ナデ。内面は工具ナデ（ナデ？）。	（外面）直線文。（内外面）黒斑あり。	27
石英・長石・雲母	外面は刷毛目。内面はナデ。	（外面）直線文	28
石英・長石	内面はヘラ削り。	（外面）刻み目、重弧文、直線文	29
石英・長石	内面は刷毛目、ナデ。	（外面）重弧文	30
石英、長石・雲母	内面はナデ。	（外面）重弧文。（外面胴部）黒斑？	31
石英・長石・角閃石・雲母	外面はナデ。内面胴部上部はナデ、下部は刷毛目。	（外面）刻み目、重弧文、直線文	32
石英・長石	外面はナデ調整。内面は刷毛目調整。		33
石英・長石・角閃石・雲母	外面は刷毛目。内面はナデ。	（外面）直線文、刻み目	34
石英・長石・角閃石	口縁内面は指頭圧痕。内外面ともにナデ。	（胴部外面）煤付着	37
長石	内外面ともに刷毛目。脚部はナデ。		38
長石多量	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。内底面はナデ。外面脚部との接合部分はナデ。		39
石英・長石・雲母・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。外面は刷毛目。内面はナデ。内底面は指ナデ。脚部はナデ。	（外面頸部～脚部）黒斑？	42

2区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
43	弥生土器	鉢		SI04	No.51	13.5	-	8.8	灰黄2.5Y6/2	にぶい黄橙10YR6/4
44	弥生土器	甕		SI04	No.18・60	(18.4)	-	16.2～	赤褐5YR4/6	褐灰7.5YR5/1
45	弥生土器	甕		SI04	No.22	(22.0)	-	14.8～	明赤褐5YR5/6	にぶい赤褐5YR5/4
46	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI04	No.50・118	-	8.7	12.0～	明赤褐5YR5/6	黒褐7.5YR3/1
47	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI04	No.2・26・44・64・95・一括	-	(8.9)	13.6～	にぶい橙7.5YR7/3	灰黄褐10YR6/2
48		高杯（脚部）		SI04	No.42・64・69・81・92	-	(22.0)	16.0～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
49	弥生土器	高杯（脚部）		SI04	No.30	-	(23.5)	11.0～	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2
50	重弧文土器	長頸壺		SI04	No.69	10.4	-	14.5～	にぶい黄橙10YR6/4	橙7.5YR6/6
51	弥生土器	短頸壺		SI04	No.27	-	4.3	13.4～	にぶい黄橙10YR7/2	灰黄褐10YR6/2
52	重弧文土器	壺		SI04	No.24	-	-	24.3～	にぶい赤褐5YR5/4 赤褐5YR4/6	にぶい褐7.5YR5/4 にぶい橙7.5YR6/4
53	重弧文土器	壺		SI04	No.111	-	-	6.7～	にぶい黄橙10YR6/4	黒褐7.5YR3/1
54		壺		SI04	No.55	—	5.8	38.3～	明褐7.5YR5/6	にぶい橙7.5YR6/4
58		甕		SI05	No.18・20・23・24・25・28・30・42	25.0	-	17.8～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
60	弥生土器	甕		SI06	No.174・177・172	(21.4)	-	16.0～	にぶい黄橙10YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
61		甕		SI06	No.127・131	(18.0)	-	14.2～	橙4YR6/6	橙5YR7/6
62	弥生土器	甕		SI06	No.31・35・38	(18.8)	-	10.7～	橙5YR6/6	にぶい赤褐5YR5/4
63	弥生土器	台付甕		SI06	No.171	-	8.6	12.5～	明赤褐2.5YR5/6	橙5YR6/8
64	弥生土器	台付甕		SI06	No.40・171	12.2	9.0	27.8	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR7/4
65	弥生土器	複合口縁壺		SI06	No.161	9.9	-	6.0～	橙2.5YR6/8	橙2.5YR6/8
66	弥生土器	長頸壺		SI06	No.5	(15.2)	-	16.5～	明赤褐2,5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6
67	弥生土器	丸底形土器		SI06	No.95	—	(10.5)	4.9～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
68	重弧文土器	壺		SI06	No.136	—	—	6.2～	明黄褐10YR7/6	浅黄2.5Y7/3
69	重弧文土器	壺		SI06	No.37・43	—	—	5.7～	にぶい黄橙10YR7/3	灰白10YR8/2
70	重弧文土器	壺		SI06	一括	—	—	7.3～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄2.5Y6/3
71	重弧文土器	壺		SI06	No.160	—	—	6.5～	明赤褐5YR5/6	黒7.5YR2/1
73	弥生土器	ジョッキ型土器		SX01	No.198	-	(15.5)	7.9～	にぶい褐7.5YR5/4	灰黄褐10YR5/2
74		台付甕		SX01	No.169・265・170、No.264	21.6	8.9	29.7	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y6/2
75	弥生土器	甕		SX01	No.7・48・57	22.6	—	25.4～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
76	土師器	甕		SX01	No.31・81・148・178・18・92	21.1	—	13.0～	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙5YR6/4
77	弥生土器	台付甕（脚台部）		SX01	No.157	—	10.5	12.6～	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/4
78	弥生土器	台付甕（脚台部）		SX01	No.23	—	(8.7)	11.0～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
79	弥生土器	台付甕（脚台部）		SX01	No.262・263	-	11.3	12.9～	橙5YR7/6	褐灰7.5YR4/1
80	弥生土器	台付甕（脚台部）		SX01	No.257	-	10.4	5.9～	にぶい橙7.5YR7/3	灰褐7.5YR6/2
81	弥生土器	台付甕（脚台部）		SX01	No.7・14・9・117	—	11.9	13.1～	明赤褐5YR5/6	褐7.5YR4/4
82	弥生土器	複合口縁壺		SX01	No.138	(14.4)	-	7.95～	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR7/4
83	弥生土器	複合口縁壺		SX01	No.127	(18.4)	-	11.5～	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR7/3
84		壺		SX01	No.104・265・228	—	6.8	33.2～	明赤褐5YR5/6	にぶい黄橙10YR6/4
85		鉢		SX01	No.263・262	-	-	15.2～	にぶい褐7.5YR5/3	にぶい褐7.5YR6/3
86	弥生土器	甕		SX01	No.3・5・121	18.8	—	25.6～	灰黄褐10YRY6/2	灰黄褐10YR5/2
87	重弧文土器	壺		SX01	No.30	推定 (13.0)	—	9.0～	にぶい黄橙10YR6/4	褐灰10YR5/1
88	重弧文土器	壺		SX01	No.64	—	—	10.5～	浅黄2.5Y7/4	浅黄2.5Y7/4
89	重弧文土器	壺		SX01	No.61	—	—	6.0～	にぶい黄橙10YR7/3	灰白2.5Y8/2
90		高杯（杯部）		SX01	No.57	(34.8)	—	5.7～	褐7.5YR4/4	褐7.5YR4/4
91		高杯（杯部）		SX01	No.70	(24.4)	—	5.4～	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR6/3
92		鉢		SX01	No.263	30.9	4.5	18.0	浅黄2.5Y7/3、 黒7.5Y2/1	浅黄2.5Y7/3

胎土	調整	備考	報番
長石・雲母	口縁はナデ。外面は刷毛目。外底面はヘラ削り。内面はナデ。内底面は指頭圧痕。器面が全体的に摩耗している。	摩耗著しく調整不明瞭。（外面）煤か黒斑	43
石英・長石・雲母	口縁は横ナデ。外面は摩耗の為調整不明。内面はナデ。	外面摩耗の為調整不明	44
石英・長石	摩耗の為調整不明。		45
長石・雲母	内外面ともにナデ。		46
石英多量・長石	外面は刷毛目後ナデ。内面はナデ。内底面は指ナデ。脚台部外面は横ナデ。内面はナデ。		47
長石・雲母・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面は指ナデ、刷毛目。脚端部はナデ。	穿孔6ヵ所、 杯部と脚部が剥離している	48
赤褐色粒	外面は工具ナデ。内面はヘラ削り。脚端部はナデ。器面全体が摩耗している。	（脚部外面）煤付着？	49
長石・雲母	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。頸部内外面ナデ。	（外面）直線文。口縁部と胴部の接合面が剥離	50
長石	外面胴部上部は摩耗の為調整不明、下部は刷毛目だが摩耗の為不明瞭。内面は刷毛目。	外面摩耗の為調整不明。（外面胴部）黒斑？	51
長石・赤褐色粒	頸部外面はヘラ磨き（刷毛目？）。外面胴部上面はヘラ磨きか工具ナデ、下部は工具ナデか刷毛目。頸部内面は指頭圧痕。内面は刷毛目（工具ナデ？）	（外面）直線文、重弧文、刻み目。（内外面胴部））煤？黒斑？	52
長石・雲母	外面は刷毛目。内面胴部上部ナデ、下部は刷毛目。	（外面）直線文、重弧文、	53
石英・長石・雲母	外面は刷毛目。外底面はナデ。内面は刷毛目後ナデ。	（胴部外面）黒斑	54
石英・長石・角閃石・雲母	口縁は横ナデ。内外面ともに刷毛目。	（外面胴部）黒斑	58
長石・角閃石・雲母	口縁端部はナデ。内外面胴部上部は刷毛目後ナデ。外面下部はヘラ削り、内面下部は刷毛目。		60
石英・長石	口縁端部はナデ、内面口縁は横ナデ。内外面ともに刷毛目。		61
長石・赤色酸化粒	口縁はナデ。外面は刷毛目後ナデ。内面は刷毛目。		62
長石多量・石英	外面は摩耗の為調整不明。内面は刷毛目、内底面はナデ。脚部はナデ。	（外面胴部）煤付着	63
石英・長石・雲母	口縁・外面は刷毛目後ナデ。内面はナデ。脚部はナデ。	焼き歪み、脚部貼付。（外面口縁～胴部）煤付着	64
石英・長石・雲母	内外面ともに横ナデ。		65
長石・雲母・赤色酸化粒	摩耗の為調整不明。		66
石英・長石	内外面ともにナデ調整。	底部と杯部貼付	67
長石多量・石英	内外面ともにナデ調整。	（外面）直線文、刻み目、重弧文、	68
石英・長石	内外面ともにナデ調整。	（外面）直線文、刻み目	69
石英・雲母・赤色酸化粒	外面はナデ調整。内面は刷毛目調整。	（外面）直線文、重弧文	70
石英・長石・　雲母	内面はナデ調整	（外面）直線文、刻み目、重弧文	71
石英・長石	外面は刷毛目。外底面はナデ。内面はナデ。内底面は横ナデ。	（外面）黒斑有り	73
石英・長石・雲母	口縁・脚部はナデ。内外面ともに刷毛目。	（胴部外面）煤付着	74
石英・雲母	口縁端部はナデ。内外面ともに刷毛目。	（外面胴部）煤付着	75
石英・長石多量、輝石・雲母・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。外面はナデ。内面はヘラ削り、ナデ。	（内外面）全体的に摩耗	76
(長石、雲母、輝石）多量	外面は刷毛目後ナデ。内面は刷毛目。脚台部はナデ。		77
長石・輝石・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面はナデ。脚台部外面は刷毛目、内面はナデ。脚台部との接合部分はナデ。		79
長石（大粒多量）・石英・輝石	外面は刷毛目。内面はナデ。脚台部外面は指頭圧痕、指頭圧痕後ナデ。内面はナデ。脚端部は横ナデ。		78
長石（大粒多量）・石英・赤色酸化粒	外面は横ナデ。内面はナデ。脚台部外面は横ナデ、内面はナデ。脚端部は横ナデ。		80
長石・雲母・赤色酸化粒	内外面ともにナデ。脚台部外面は指ナデ。内面・脚端部はナデ。		81
長石多量・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面は指ナデ、ナデ。		82
石英・長石・雲母	外面は刷毛目。口縁内面は横ナデ。頸部は刷毛目、ナデ。		83
石英多量・長石・輝石	外面は刷毛目。内面は刷毛目、ナデ。		84
石英・長石・赤色酸化粒	内外面ともに刷毛目。	（内外面）全体的に摩耗	85
石英・長石	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。		86
石英・長石	内外面ともにナデ調整。	（外面）重弧文、直線文。（口縁外面端部）黒斑？	87
長石	外面はナデ。内面胴部上部は刷毛目痕跡、下部はナデ。	（外面）直線文、重弧文、刻み目	88
石英・長石	外面はナデ調整。内面屈曲部上部は刷毛目痕跡、下部はナデ。	（外面）重弧文、刻み目	89
石英・長石・雲母	外面はナデ。内面はヘラ磨き。		90
石英・長石・雲母	内外面ともにナデ。	（口縁上部）煤付着？	91
石英・長石・輝石	口縁は横ナデ。外面胴部上部はヘラ削り、下部は刷毛目。内面はナデ。		92

2区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
94		甕		包含	№33・37・44	(21.0)	-	15.9～	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4
95	弥生土器	台付甕	E-1		№35	18.3	8.0	28.4	浅黄橙10YR8/4	浅黄橙10YR8/3
96	弥生土器	小型鉢		包含	№11	11.7	3.9	6.7	橙2.5Y6/8 橙5YR6/6	橙2.5Y6/8
97	弥生土器	鉢			№258	21.6	-	14.5～	橙5YR6/6	橙5YR6/6
98	弥生土器	台付甕（脚台部）	D-9		№8	-	7.4	7.5～	浅黄橙10YR8/3 橙7.5YR7/6	灰褐7.5YR4/2
99	弥生土器	台付甕（脚台部）	D-7		一括	-	4.75	4.0～	橙5YR6/6	にぶい黄褐10YR5/3
100	弥生土器	壺		包含	№8・10	23.8	-	9.7～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
101	重弧文土器	短頸壺	E-6		№23	(10.3)	—	12.9～	にぶい黄橙10YR7/3	灰黄2.5Y6/2
102		高杯（脚部）		包含	№80	-	(16.4)	13.8～	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3
103		高杯（脚部）		包含	№6	-	15.8	13.9～	にぶい黄褐10YR6/3	にぶい黄褐10YR7/4
104		高杯（脚部）		包含	№107	-	(13.4)	17.9～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
105	重弧文土器	壺	E-6		№7	—	—	5.5～	橙5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/3
106	重弧文土器	壺		包含	一括	—	—	5.5～	黒褐7.5YR3/2	灰褐7.5YR4/2
107	重弧文土器	壺	E-6		一括	—	—	5.3～	褐7.5YR4/6	褐7.5YR4/6
108	弥生土器	壺		包含	№92	-	-	8.6～	褐灰10YR4/1 にぶい褐7.5YR5/3	褐灰10YR4/1

3区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
113	弥生土器	甕		SI01	一括	—	—	1.8～	暗灰黄2.5Y5/2	暗灰黄2.5Y5/2
114	弥生土器	高杯（杯部）		SI01	№1・一括	31.4	—	14.3～	赤褐2.5YR4/6	赤褐2.5YR4/6
115	弥生土器	甕		SI02	№101	(22.0)	—	7.9～	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6
116	弥生土器	甕		SI02	№8・126・162・101	(21.4)		10.6～	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6
117		甕		SI02	№66・90・101・116・117・120	(20.0)	—	11.1～	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6
118	弥生土器	甕		SI02	№75	(22.8)	—	8.6～	にぶい黄褐 5YR5/4	にぶい黄褐 5YR5/4
119	弥生土器	甕		SI02	№75・165・162	(20.6)		12.9～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/4
120		甕		SI02	№153	(23.2)		11.0～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/6
121	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI02	№73	—	9.5	4.0～	明赤褐2.5YR5/6	にぶい黄橙10YR6/3
122	弥生土器	複合口縁壺		SI02	№72	(11.2)	—	6.2～	にぶい赤褐5YR4/3	にぶい赤褐5YR4/3
123	弥生土器	壺		SI02	№147・152	(12.2)	—	6.2～	明赤褐5YR5/6	赤褐5YR4/6
124	弥生土器	複合口縁壺		SI02	№72	(16.2)	—	3.6～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
125		高杯（脚部）		SI02	№14	—	30.7	4.5～	赤褐2.5YR4/6、 にぶい橙7.5YR6/4	にぶい赤褐5YR5/4
126	弥生土器	壺型土器		SI02	№20	—	—	4.1～	にぶい橙7.5YR6/4	赤褐7.5YR5/6
127	弥生土器	高杯（杯部）		SI05	№39・43・76・82・120・122・167・168・177	(29.2)	—	5.0～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
128	弥生土器	甕		SI05	№55・80・163	(14.1)	—	8.9～	明赤褐5YR5/6	にぶい黄橙10YR6/3
129		甕		SI05	№42・80・83・87・121	(17.4)	—	14.2～	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6
130		甕		SI05	№35・70・72・131・159・一括	(27.0)	—	12.6～	褐7.5YR4/4	にぶい褐7.5YR5/4
131	弥生土器	壺		SI05	№17・64・71・73・78・82・158・173・174	(14.4)	—	8.6～	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
132	土師器	壺		SI05	№180・58・53・158・185	(19.0)	(8.0)	42.0	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙10YR8/4
133		壺		SI05	№51・82・104	13.4	—	35.4～	にぶい赤褐5YR4/4	黒褐7.5YR3/1
134		鉢		SI05	№28・34	(33.7)	—	10.0～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい橙7.5YR6/4
135	重弧文土器	壺		SI05	№85175	—	—	6.5～	にぶい褐7.5YR5/4	褐灰10YR4/1
136	重弧文土器	壺		SI05	№73・89・131・133・137	—	—	13.1～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4、 黒褐10YR3/1
137	弥生土器	甕	G-12	SK27・28 SI06	№4・12・一括	(22.8)		26.5～	にぶい橙5YR7/4	にぶい黄橙10YR6/4

胎土	調整	備考	報番
石英・長石・雲母・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。内外面ともに刷毛目。	頸部と胴部接合面の剥離	94
雲母・赤色酸化粒	口縁外面は横ナデ。口縁内面はナデ。内外面は刷毛目。内底面・脚部はナデ。	焼き歪み。（外面）煤付着	95
長石	外面は刷毛目。外底面はナデ。内面は摩耗の為調整不明。	（内面）煤付着	96
長石・赤褐色粒	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。外底面はナデ。内底面はヘラ削り。	（内面）煤付着	97
石英・長石・角閃石・雲母	外面は刷毛目。内面・脚台部はナデ。		98
長石多量・石英・雲母	外面は調整不明。内底面・脚台部はナデ。		99
長石多量・石英(大粒）・雲母	外面は横ナデ。内面は刷毛目後横ナデ。内面頸部は横ナデ、ナデ。	（外面）直線文5条	100
石英（小粒）多量・長石・雲母・赤色酸化粒	口縁・内面はナデ。外面胴部上部はヘラ磨き、下部は刷毛目後ナデだが一部ヘラ磨き。外底面はナデ。	（口縁端部外面～胴部上面）黒斑あり	101
長石・雲母・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面はヘラ削り。脚端部はナデ。	穿孔3ヵ所。杯部と脚部が剥離	102
(石英・長石）大粒・輝石・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面は指ナデ、刷毛目後ナデ。脚端部はナデ。		103
長石・角閃石・雲母	外面は刷毛目。内面・脚端部はナデ。脚端部はナデ。	杯部と脚部が剥離	104
石英・長石	内面はナデ。	（外面）直線文、刻み目	105
石英多量	内外面ともにナデ。	3条の直線文	106
石英・長石	内面屈曲部上部は刷毛目、下部はナデ調整。	（外面）重弧文、刻み目	107
石英・長石・輝石・雲母	外面は刷毛目、ヘラ削り。内面はナデ。	（外面）直線文	108

胎土	調整	備考	報番
長石・雲母	内外面ともにナデ。	刻目突帯	113
長石・角閃石・雲母・赤色酸化粒	口縁端部はナデ。外面は刷毛目後ナデ。内面屈曲部上部は刷毛目後ナデ、下部はナデ。	刻目突帯。突帯貼付。杯部・脚部貼付？	114
長石・雲母	口縁・内面はナデ。外面は刷毛目後ナデ。		115
石英・長石	口縁外面は横ナデ。内外面ともに刷毛目。		116
長石・角閃石・雲母	口縁端部はナデ。内外面ともに刷毛目。		117
長石・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。外面は刷毛目。内面はナデ。		118
長石多量・石英・角閃石	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。	（外面）一部煤付着	119
石英・長石・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。内外面ともに刷毛目。		120
長石・雲母	内面はナデ。脚台部外面はナデ、内面は刷毛目後ナデ。	脚部は貼付？	121
長石・雲母	口縁はナデ。頸部外面は刷毛目。頸部内面はナデ、指ナデ。		122
長石・雲母	口縁外面はナデ。外面は刷毛目。口縁内面は刷毛目、内面はナデ。		123
長石・雲母・赤色酸化粒	口縁・内面はナデ。外面は刷毛目。	口縁端部貼付	124
雲母多量・石英・長石	内外面ともにナデ。脚端部は横ナデ。		125
長石・雲母	外面は刷毛目。内面はナデ。	（外面）煤付着。（外面）直線文、櫛描波状文	126
長石多量・雲母	口縁端部はナデ。外面屈曲部より上部は刷毛目、下部はナデ。内面は刷毛目。	口縁部と杯部の接合痕	127
長石・雲母	口縁端部はナデ。外面頸部は刷毛目後ナデ。外器面は刷毛目。内面は刷毛目。	（内外面）煤付着	128
石英・長石	口縁外面は横ナデ。外器面は刷毛目。内面は刷毛目。		129
石英・長石・雲母・赤色酸化粒	口縁端部はナデ。内外面ともに刷毛目。	（外面）黒斑あり	130
長石・雲母・赤色酸化粒	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。		131
長石	口縁はナデ。胴部外面上部は刷毛目、下部は工具ナデ。外底面はナデ。内面は観察不能。	内面、底面に煤付着	132
石英・長石・雲母	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目。		133
石英・長石・雲母	口縁端部はナデ。内外面ともに刷毛目。		134
石英・長石	内外面ともに刷毛目。	（外面）重弧文、直線文	135
長石・雲母	頸部外面はナデ、刷毛目後ナデ。内面は刷毛目、指ナデ。胴部外面は刷毛目。内面胴部上部はナデ、下部は刷毛目。	口縁部と頸部の接合痕跡。（頸部外面）黒斑？胴部の接合痕跡。（外面）直線文、刻目、重弧文	136
石英・長石・輝石	内外面ともにナデ。		137

3区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
138		鉢		SI07	№18・35	15.2	—	7.7～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
139		甕	E-13	SI07	№4・一括	(19.0)	3.0	27.8	にぶい黄橙10YR7/4、明赤褐5YR5/8	にぶい黄橙10YR7/2
140	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI07	№8	—	9.5	8.3～	明褐7.5YR5/6	明褐7.5YR5/6
141	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI07	一括	—	9.9	5.0～	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4
142	土師器	高杯		SI07	炉内出土	(29.6)	(18.9)	22.2	橙2.5YR6/6、明赤褐2.5YR5/6	橙2.5YR6/8、明赤褐2.5YR5/8
143	重弧文土器	長頸壺		SI07	№3・11・21・22・37	(10.9)	—	18.7～	にぶい橙7.5YR7/4	橙7.5YR6/6、黒褐7.5YR3/1
144	重弧文土器	壺		SI07	№14・17・31・32	—	—	17.0～	褐7.5YR4/3	褐7.5YR4/3
146	弥生土器	甕		SK27・28	№28・33・34	(19.9)	—	13.5～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR7/3
147		台付甕（脚台部）		SK27・28	№33	—	7.0	7.6～	橙2.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/2
148	土師器	高杯（脚部）		SK27・28	№6・10・39	—	14.6	11.2～	にぶい橙7.5YR7/3	にぶい橙7.5YR7/4
149	弥生土器	甕		SK29	№23	—	—	5.7～	にぶい黄褐10YR4/3	灰黄褐10YR4/2
150	弥生土器	甕		SK29	№11	—	—	5.6～	浅黄橙7.5YR8/3	にぶい橙7.5YR7/4
151	弥生土器	甕		SK29	№1	—	—	5.2～	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR7/4
152	弥生土器	台付甕（脚台部）		SK29	No.?・一括	—	(7.3)	15.6～	にぶい黄橙10YR6/3	黒褐7.5YR3/1

4区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
157		高杯（杯部）	N-18	SI01	№15、5層№259	27.5	-	11.1～	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6
158		小型壺		SI01		-	2.9	4.9～	にぶい橙7.5YR7/4	にぶい橙7.5YR7/4
160	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI03	P1	-	7.5	3.7～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
161	弥生土器	複合口縁壺		SI04	№12	(13.2)	-	5.5～	にぶい橙7.5YR6/4	橙7.5YR6/6
162		壺（底部）	H-17	SI04		-	(8.2)	5.8～	浅黄2.5Y7/3	黄灰2.5Y6/1
163	重弧文土器	短頸壺		SI04	№1・1780	(6.8)	-	12.9～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/4
164		甕		SI05	№1811・1875・1879・1881	(25.2)	-	16.4～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/4
165		甕		SI05	№1863	(22.5)	-	18.0～	明褐7.5YR5/6	にぶい黄橙10YR6/3
166	弥生土器	台付甕		SI05	№1817・1865	-	10.85	16.2～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄褐10YR5/3
167	弥生土器	台付小型甕		SI05		(14.7)	8.8	18.0	明赤褐5YR5/6	赤褐5YR4/6
168	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI05	№3	-	7.0	4.5～	明赤褐5YR5/6	—
169	弥生土器	台付甕（脚台部）		SI05	№1836	-	8.5	3.95～	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/3
170	弥生土器	甕		SI05	№1861・1862・1866	17.4	-	21.6	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3 橙7.5YR6/6
171	土師器	甕		SI05	№1800	16.0	-	16.5	にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/4
172	弥生土器	壺		SI05	№1799、Ⅳ　№1651	-	4.1	31.0～	明赤褐5YR5/6 橙7.5YR6/6	明赤褐5YR5/6 橙7.5YR6/6
173		広口口縁壺		SI05	№1867・1876	(16.4)	-	38.8	橙2.5YR6/6、橙5YR6/6	橙2.5YR6/6 橙5YR6/6 （赤彩部）赤7.5R4/8
174	弥生土器	壺		SI05	№1866・1865・1861	(12.4)	-	30.3～	にぶい橙7.5YR7/4 にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄橙10YR6/4	にぶい黄橙10YR7/3 にぶい黄橙10YR7/4 にぶい橙7.5YR7/4
175		壺		SI05	№1808	10.2	4.3	21.9	にぶい黄橙10YR7/4	浅黄橙10YR8/4 にぶい黄橙10YR7/3
176		壺		SI05	№1801・1805・1890	(10.2)	-	13.0～	橙5YR6/6	にぶい褐7.5YR5/3
177	土師器	壺		SI05	№1860	(11.4)	-	19.0	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/2
178		複合口縁壺		SI05	№1809	15.0	-	37.3～	橙2.5YR6/8	明赤褐2.5YR5/6
179		鉢	H-17	SI05	5号住埋土内一括	(11.6)	-	8.6	橙7.5YR7/6	橙2.5YR6/6、明赤褐2.5YR5/6
180	弥生土器	鉢		SI05	№1878	16.45	-	8.0～	橙7.5YR6/6	にぶい黄橙10YR7/4

胎土	調整	備考	報番
石英・長石	内外面ともにナデ。		138
長石多量・石英・雲母	口縁外面はナデ。頸部外面は刷毛目後ナデ。内外面胴部上部は刷毛目、下部はナデ。口縁内面は横ナデ。	（胴部外面）一部煤付着	139
石英・長石・雲母	内外面ともに刷毛目。脚台部外面はナデ。内面はナデ、刷毛目痕跡。	脚部貼付	140
石英・長石・雲母	内面はヘラ状工具ナデ。脚台部内外面ともにナデ。		141
長石多量・赤色酸化粒	器面が全体的に摩耗の為調整不明。脚部内面の杯部との接合部分に指頭圧痕。	（外面）黒斑あり。（内面）煤が黒斑	142
石英・長石	口縁・外面はナデ。頸部内面は刷毛目、ナデ、指押さえ痕。内面はナデ。	頸部と胴部の接合痕跡。（胴部外面）部分的に煤付着？（外面）直線文、刻目、重弧文	143
石英・長石・雲母	外面は刷毛目。内面はナデ、胴部屈曲部は刷毛目。	3個体の破片を図面上で復元。（外面）直線文、刻目、重弧文	144
長石	内外面ともにナデ。	刻目突帯	146
長石・雲母・赤色酸化粒	内面はナデ。脚台部外面は横ナデ、内面はナデ。		147
長石	外面は刷毛目。内面はナデ。		148
石英・雲母	口縁端部・外面は横ナデ。内面はナデ。	（口縁部外面）刻目突帯。（胴部）沈線1条	149
長石・角閃石・雲母	口縁端部は横ナデ。内外面ともにナデ。	（口縁部外面）刻目突帯。（胴部）沈線1条	150
石英・長石・角閃石・雲母	内外面ともにナデ。	（口縁部外面）刻目突帯。（胴部）沈線1条	151
石英多量・長石・角閃石・輝石・赤色酸化粒	外面は刷毛目。脚台部外面は横ナデ。内面・脚台部内面はナデ。		152

胎土	調整	備考	報番
石英・長石多量	口縁部は横ナデ。外面は刷毛目後ナデ。内面は横ナデ。	杯部と脚部の接合部分が剥離	157
長石・雲母・赤色酸化粒	内外器面は横ナデ。内外底面はナデ。	口縁と頸部の接合部分剥離？	158
長石多量・石英・雲母・赤色酸化粒	内外面ともにナデ。脚台部外面は指ナデ、ナデ。脚台部内面はヘラ状工具ナデ。	（脚部内外底面）黒斑あり	160
石英・角閃石・雲母・赤色酸化粒	口縁部は横ナデ。内外面ともに刷毛目。		161
石英・長石	内外面ともにナデ。		162
石英・長石・角閃石	口縁部はナデ。外面上部と内面はナデ。外面下部は工具によるナデ。	（外面底部）黒斑あり。（外面）重弧文12本	163
石英・長石・雲母	口縁外面は横ナデ、内面はナデ。内外器面は刷毛目。	（外面）煤付着	164
石英・長石	口縁外面は横ナデ。外面棒部上面はナデ、下面は刷毛目後ナデ。内面はナデ。	（胴部外面）煤付着。（口縁部外面）黒斑あり	165
石英・長石・雲母	外面は刷毛目後ナデ。内面はナデ。脚部は横ナデ。		166
石英・長石・赤色酸化粒	外面口縁から頸部ははナデ。外器面は刷毛目後ナデ。外面脚部貼付部分はナデ。内面は刷毛目後ナデ。脚端部は横ナデ。脚部内面はナデ。	（外面口縁部～脚部）黒斑あり	167
石英・長石	外面は工具によるナデ。脚端部は横ナデ。内面はナデ。		168
石英・長石	外面は横ナデ。内面は工具によるナデ。		169
長石	内外面ともに刷毛目。	受熱による劣化が激しい。（内外面）煤付着	170
長石	口縁端部はナデ。外面は刷毛目。内面胴部上部は刷毛目。下部は刷毛目後ナデ。	（内外面）煤付着。歪みがひどく最大頸部を実測。	171
長石・赤褐色粒	外面は刷毛目。外面胴部下部から底部は工具ナデ。内面は胴部上部はナデ、下部は刷毛目。内底面はナデ。	（外面）煤付着	172
長石・雲母	口縁端部はナデ。外面は刷毛目だが、頸部の突帯貼付部分は工具ナデ。内面頸部は刷毛目。内面胴部は器種形により調整不明。	（外面）黒斑あり。赤彩？頸部に貼付突帯	173
長石・赤褐色粒	口縁はナデ。頸部外面は刷毛目後ナデ。胴部上部は刷毛目。胴部中から下部は工具ナデ？のようなヘラ削り。胴部上部の口縁部接合部分は指頭圧痕。胴部内面は刷毛目だが摩耗している。	（外面）煤付着	174
長石・角閃石・茶褐色粒	口縁はナデ。外面胴部上部はは刷毛目、下部は工具ナデ？のようなヘラ削り。内面は刷毛目。	（外面）黒斑	175
石英・長石	口縁端部は横ナデ。外面は刷毛目後ナデ。頸部内面は横ナデ。内面はナデ。	（口縁端部～胴部外面）黒斑あり？	176
長石	口縁はナデ。外面胴部上部は刷毛目、下部はヘラ削り後ナデだが摩耗している。内面は刷毛目。	（外面）黒斑	177
長石・赤褐色粒	口縁端部はナデ。外面は刷毛目。内面胴部上部は刷毛目。下部は刷毛目後ナデ。内面胴部上面は刷毛目、下部はナデ。	（外面）黒斑あり	178
長石	口縁端部と内面はナデ。外面は刷毛目。	（外面）黒斑	179
石英・長石・雲母	口縁はナデ。内外面ともに刷毛目後ナデ。外面底部はナデ。	（外面）黒斑あり	180

4区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
181	土師器	台付鉢		SI05	№1855	(10.0)	-	6.8～	にぶい黄橙10YR7/2、にぶい黄橙10YR7/3	にぶい黄橙10YR7/2、にぶい橙7.5YR7/4
182	弥生土器	台付鉢		SI05	№1824	(14.6)	-	9.3～	明赤褐5YR5/6	褐7.5YR4/4
183	弥生土器	高杯（脚部）		SI05	№1867・1877	—	15.2	11.2～	明赤褐5YR5/6	橙5YR6/6
184	重弧文土器	小型壺		SI05	№1840・1877	-	-	7.5～	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6
185	重弧文土器	長頸壺		SI05		-	-	24.3～	にぶい黄橙10YR7/2 にぶい橙5YR7/4	明赤褐5YR5/6 にぶい黄褐10YR7/3
187		壺		SI08	№25・一括	-	-	12.4～	明赤褐5YR5/6	にぶい黄橙10YR6/3
188		鉢		SI08	№4	(20.2)	5.1	13.2	にぶい黄橙10YR7/2	にぶい黄橙10YR7/3
189		高杯		SI08	№22	(35.0)	-	7.4～	橙5YR6/8	橙5YR6/8
190		壺		SI08	№5	17.4	-	30.7～	明赤褐5YR5/8	明赤褐5YR5/8
191	重弧文土器	壺		SI09	一括	-	-	3.0～	にぶい橙7.5YR6/4	灰褐7.5YR4/2
192	重弧文土器	壺		SI10	№1976・一括	-	-	4.0～	明赤褐5YR5/6 明赤褐10YR3/1	褐灰7.5YR4/1
193		甕		SI11	№91・92・102	(24.9)	-	11.3～	にぶい黄橙10YR6/4	明赤褐5YR5/8
194		甕		SI11	№97・98・99・100・101	(15.2)	-	21.8	にぶい黄橙10YR6/3	にぶい黄橙10YR6/3
195	弥生土器	壺		SI11	№76	13.9	6.4	36.5	橙7.5YR6/6 にぶい黄橙10YR7/4	にぶい黄橙10YR7/4 にぶい黄橙10YR6/4
196		台付甕（脚台部）		SI11	№107	-	10.4	5.6～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
197		台付甕（脚台部）		SI11	№87	-	10.6	11.4～	橙5YR6/6	にぶい橙7.5YR5/3
198	弥生土器	長頸壺		SI11	№75	14.6	-	15.8～	橙2.5YR6/6	橙2.5YR6/6
199	重弧文土器	壺		SI11	№56	-	-	6.3～	明赤褐5YR5/6	黒5YR1.7/1
200	重弧文土器	長頸壺		SI11	№111・113	-	-	11.5～	にぶい黄橙10YR7/3	浅黄2.5Y7/3
203		鉢		SI06	№3・12・14	12.1		8.1	にぶい褐7.5YR5/3	黄灰2.5Y6/1
204		鉢		SI06	№7・9・1043・1462・1764	14.2	6.5	6.6	にぶい赤褐5YR5/4	明赤褐5YR5/6
205	弥生土器	甕		SI06	№9	(18.0)	-	8.15～	にぶい橙7.5YR6/4 明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
206	手捏ね土器	鉢		SI06	№18	-	-	2.5～	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6
209		鉢		SI12	№1	12.3	-	9.5	橙5YR7/6、にぶい橙7.5YR7/4	橙5YR6/6
211		壺		SD02	№1167	-	-	8.0～	灰黄褐10YR4/2	灰黄褐10YR4/2
212		甕		SD02	V層A甕	18.6	-	22.9～	にぶい赤褐5YR4/4	にぶい赤褐5YR4/4
213	弥生土器	長頸壺			№1496	12.8	-	18.4～	にぶい橙7.5YR6/4 橙7.5YR6/6	橙5YR6/6、灰褐7.5YR5/2
214	土師器	壺			№1157	9.6	-	15.4	にぶい橙5YR6/4	にぶい橙5YR6/4
215	土師器	壺		包含	1層№10・13・14・39	17.6	5.7	33.1	にぶい橙7.5YR7/4	浅黄橙7.5YR8/4
216	土製品	不明	H-18		V層上№148	直径(11.6)	-	2.7～	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6

5区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
220	重弧文土器	壺		SI01	№5	—	—	4.6～	橙5YR6/8	橙5YR6/8
221		鉢		SI02	№37	(13.85)	—	7.7～	橙7.5YR6/6	明褐7.5YR5/6
222	弥生土器	甕		SI02	№6	(18.9)	—	7.1～	灰黄2.5Y7/2	赤褐5YR4/6
223	弥生土器	台付甕		SI02	№35	—	7.5	4.9～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR5/4
225		甕	E-21		一括	(22.4)	—	13.3～	赤褐5YR4/8	赤褐5YR4/8
226	弥生土器	甕			一括	—	—	5.8～	にぶい赤褐5YR4/4	橙5YR6/8

胎土	調整	備考	報番
長石	内外面ともにナデ。	（外面）黒斑	181
長石多量・赤色酸化粒	内外面ともにナデ。脚台部はヘラ状工具によるナデ後ナデ。	脚台部貼付	182
長石多量・石英	内外面ともに刷毛目後ナデ。脚端部は横ナデ。		183
石英・長石・雲母	外面下部はヘラ磨き。内面はナデ。	（外面）直線文3条、重弧文3～4本、直線文2条	184
長石・石英・雲母	頸部外面はナデ。頸部内面はナデ、頸部と胴部接合部分に指頭圧痕。外面は横ナデ。内面はナデだが摩耗している。	（外面）直線文、刻み目、重弧文	185
石英多量・長石・雲母	外面頸部は刷毛目後横ナデ、胴部上部は刷毛目、下部はナデ。内面はナデ。	（胴部）一部黒斑あり？	187
角閃石・輝石	口縁は横ナデ。内外器面は工具によるナデ。内外底面はナデ。		188
石英・長石・雲母	口縁端部はナデ。外面杯部屈曲部より上は刷毛目、下はナデ。内面は刷毛目。		189
石英・長石・角閃石	口縁端部はナデ。内外面ともに刷毛目。	（外面）煤付着	190
石英・長石・雲母	内面はナデ。	（外面）直線文7条確認	191
石英・長石・雲母	外面はナデ。内面はナデ、刷毛目	（外面）直線文、刻み目、重弧文	192
石英・長石・赤色酸化粒	口縁外面は横ナデ。、内面はナデ。内外器面ともに刷毛目後ナデ。	（胴部外面）一部煤付着	193
石英・長石・雲母	口縁部は横ナデ。外面は刷毛目（摩滅あり）。内面は刷毛目。内面底部は指頭圧痕あり。	（底部外面）黒斑あり	194
長石・雲母・赤褐色粒	口縁は摩耗の為調整不明。内外面ともに刷毛目。内底面はナデ。	（内外面）煤付着	195
石英・長石・雲母	外面は刷毛目。内面はナデ。脚台部外面は横ナデ。脚台部内面はナデ、刷毛目。		196
石英・長石・雲母	内外面ともに刷毛目。内底面は指頭圧痕。脚台部貼付部は横ナデ。脚台部外面は刷毛目。脚端部・内面は横ナデ。	（内面）黒斑あり	197
長石・角閃石・雲母	口縁端部は横ナデ。外面は刷毛目。内面上部は刷毛目、下部はナデ。	（内面口縁部）黒斑あり	198
石英・長石・雲母	内面はナデ。	（外面）直線文20条確認、刻み目、重弧文4本確認	199
石英・長石・雲母・赤色酸化粒	外面胴部上部は刷毛目、下部はナデ。内面胴部上部はナデ。下部は刷毛目後ナデ。	（外面）直線文12条確認、刻み目、直線文3条	200
長石・雲母	口縁は横ナデ。内外面ともにナデ。	（口縁）2箇所穿孔あり、焼成前に付けた思われる。	203
石英・長石・赤色酸化粒	口縁・内面はナデ。外面と外底面は刷毛目後ナデ。	杯部と底部貼付か。（底部外面）黒斑あり	204
長石多量・石英	口縁外面は横ナデ。外面は刷毛目後ナデ。口縁内面はナデ。内面は刷毛目。		205
長石・雲母・赤色酸化粒	内面は横ナデ。外面はナデ。	（外面）一部黒斑あり？	206
長石・赤褐色粒	口縁内面はナデ。外面は摩耗の為調整不明。内面は工具ナデのようだが摩耗の為不明瞭。内底面は指頭圧痕。	（外面）煤付着	209
長石多量・石英	内外面ともに刷毛目。	貼付突帯	211
石英・長石・雲母	口縁外面は横ナデ、内面は刷毛目。外器面は刷毛目。頸部内面は横ナデ、胴部上部はナデ、下部はヘラ削り。	口縁部と頸部の接合痕跡	212
石英・長石・赤褐色粒	外面頸部上部は摩耗の為調整不明、下部は刷毛目だが磨きのようでもある。内面頸部上面は刷毛目、下部はナデ。		213
長石・石英	内外面ともに刷毛目。内面胴部から底部は指ナデ。		214
石英・角閃石・雲母・赤褐色粒	口縁・外面ははナデ。ただ内外面ともに摩耗の為調整が不明。	（内外面）煤付着	215
石英・長石・雲母・赤色酸化粒	内外面ともにナデ。側面は横ナデ。		216

胎土	調整	備考	報番
石英・長石	内外面ともにナデ。	（外面）重弧文	220
石英・長石	口縁内面はナデ。外面は刷毛目。内面は刷毛目後ナデ。		221
石英・長石・雲母	口縁外面は横ナデ。外器面は刷毛目後ナデ。内面は刷毛目後ナデ。	（内面）焼きムラ	222
石英・長石	内外面ともにナデ調整。脚部外面はナデ調整。脚台部内面は指ナデ、横ナデ調整。	（底部外面）煤付着	223
石英・長石	口縁は横ナデ。外面は刷毛目。内面は摩耗の為調整不明。		225
長石・雲母	口縁部は横ナデ。内面はナデ。外面は刷毛目後横ナデ。	口縁端部貼付	226

6区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
227	弥生土器	器台			№442	37.35	-	16.1～	橙7.5YR6/6	橙7.5YR6/6
228	弥生土器	器台			№231	-	35.8～	9.8～	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4
229	弥生土器	高杯		SD14	№410・509・556	47.8	-	26.3～	灰白10YR8/2 浅黄橙10YR8/3	灰白10YR8/2 にぶい黄橙10YR7/2
230	重弧文土器	長頸壺			表採3・一括	-	-	33.6～	褐7.5YR4/4	明赤褐5YR5/6 黒褐10YR3/1
231	弥生土器	甕		包含	№812	15.2	-	8.1～	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6
232		壺			№438・558・597・768	-	-	8.0～	橙5YR6/8	橙7.5YR6/6
233	土製品	不明	J-21		一括	-	-	4.2～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
234	弥生土器	甕			№392	20.1	9.1	29.3	明赤褐5YR5/6	赤褐5YR4/6
235	重弧文土器	長頸壺			№65	(11.6)	-	12.7～	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6
236	重弧文土器	長頸壺			№65・66	-	-	14.2～	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6
237	弥生土器	高杯			№345	30.2	-	5.4～	橙7.5YR6/6	明赤褐5YR5/6
240	須恵器	樽型瓶		包含	№27・99			推定 （17.0）～		

7区　土器観察表

報番	種別	器種	出土地点			法量（cm）			色調	
			グリッド	遺構	取上No.	口径	底径	器高	外面	内面
241		小型壺		SD05	№7	-	-	12.1～	にぶい黄橙10YR7/3 橙5YR6/6	黒褐2.5YR3/1
242	土師器	壺		SD05	一括	(21.8)	-	3.9～	にぶい赤褐5YR5/4	明赤褐5YR5/6
243		複合口縁壺		SI01	№1	14.7	-	11.4～	赤褐5YR4/8	赤褐5YR4/8
244		台付甕（脚台部）		SI01	一括	-	5.9	5.5～	にぶい褐7.5YR5/4	明褐7.5YR5/6
245		台付甕（脚台部）		SI01	№6	-	7.4	3.3～	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐2.5YR5/6
246	土師器	甕		SK10	№23	(16.2)	-	34.2	明赤褐2.5YR5/8	明赤褐5YR5/6
247	土師器	小型壺		SK10	№24	8.0	-	9.6	橙7.5YR6/6	にぶい橙7.5YR7/4
248	土師器	小型壺		SK10	№25	7.3	-	9.0	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR7/4
249	土師器	鉢		SK10	№26・35	13.3	-	4.3	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい橙7.5YR6/4
250		鉢		SK10	№23	(14.5)	-	4.5～	明赤褐5YR5/6	明赤褐5YR5/6
251	土師器	鉢		SK10	№36	13.4		5.3～	赤褐5YR4/6	赤褐5YR4/6
252	土師器	高杯		SK10	№26・29・31	17.5	(13.3)	12.8	にぶい橙7.5YR6/4	橙7.5YR6/6
253	土師器	高杯		SK10	№33	(17.3)	14.4	14.5	明赤褐2.5YR5/6	明赤褐5YR5/6
254		小型壺		SK10	№20	-	-	9.2～	にぶい黄褐10YR5/4 橙5YR6/6	黒10YR2/1 にぶい黄橙10YR7/4
255	土師器	甕	E-7	SK10	№21	12.1	-	18.3	明赤褐2.5YR5/8	明赤褐2.5YR5/8
256	土師器	甕		SK10	№19	(16.0)	-	32.0	橙7.5YR6/6、 にぶい橙7.5YR7/4	にぶい黄橙10YR6/4
257	土師器	甕		SK10	№18	(15.6)	-	23.8	にぶい褐7.5YR5/4	にぶい褐7.5YR5/4
258	土師器	甕		SK10	№32	18.2	-	29.0	橙2.5YR6/8 橙5YR6/8	橙2.5YR6/8 橙5YR6/8
259	弥生土器	甕		包含	№18	(17.6)	-	10.9～	にぶい赤褐5YR5/4	にぶい褐7.5YR6/3
260	弥生土器	甕		包含	№15	-	-	4.7～	灰褐5YR4/2	にぶい橙2.5YR6/4

胎土	調整	備考	報番
石英多量・長石・雲母	口縁はナデ。後で貼り付けた杯部？内面はヘラ磨き痕跡があるが、摩耗の為調整不明瞭。脚部？外面は刷毛目後ナデ。脚部？内面はナデ。	（口縁部上面）黒斑あり。（口縁部上面）4箇所円形浮文あり、3箇所残存。	227
石英多量・長石・雲母	内外面ともに刷毛目後ナデ。脚端部は横ナデ。	（脚部）1箇所穿孔確認。	228
石英・長石・雲母	口縁部はナデ、杯部外面は刷毛目調整。杯部内面は磨き調整。脚部は摩耗の為調整不明。	（脚部）4箇所穿孔あり、3箇所残存。横に等間隔に穿孔してある。	229
長石多量	内外面頸部は刷毛目調整だが摩耗あり。胴部は刷毛目調整。	（胴部外面）直線文、重弧文、直線文。内面頸部を境に還元状態が違う。	230
石英・長石・雲母	口縁部は横ナデ調整。内外面ともに刷毛目調整。	（外面）煤付着	231
石英・長石・雲母	外面部は横ナデ、下部はナデ。頸部内面はナデ。内面は刷毛目後ナデ。	頸部貼付	232
石英・長石・雲母	内外面ともにナデ。	煤付着？	233
石英・長石・角閃石・雲母	外面は横ナデ、刷毛目の地ナデ、ナデ調整。内面は刷毛目後ナデ、ナデ調整。脚部は横ナデ調整。	口縁・脚部貼付。（胴部外面）煤付着	234
石英・長石・角閃石・雲母・赤色酸化粒	外面は刷毛目。内面はナデ。		235
石英・長石・角閃石・雲母・赤色酸化粒	内外面ともにナデだが摩耗の為調整不明瞭。	（外面）直線文、重弧文、刻み目	236
石英・長石・赤色酸化粒	口縁部は横ナデ。内外面ともにナデ。	（杯部口縁）黒斑あり	237
	内外面ともにナデ。	（外面）波状文あり、基本は7本のようだが、6本の箇所あり。	240

胎土	調整	備考	報番
長石・角閃石	胴部外面上部は刷毛目、下部は刷毛目後ナデ。内面はナデ。	（外面）黒斑あり	241
石英・長石・角閃石・雲母	口縁部・外面はナデ。内面は刷毛目。	（口縁部内面・口縁端部）竹管文	242
石英・長石・雲母・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。外面は刷毛目。内面はナデ。	口縁端部貼付。（頸部外面）沈線1条	243
石英・長石	内外面ともにナデ。脚台部外面は指頭圧痕、横ナデ。脚台部内面はナデ。		244
石英・長石	外面は横ナデ。内面はナデ。		245
長石・赤褐色粒	口縁端部はナデだが摩耗の為不明瞭。外面は刷毛目。外底面はナデ。内面は観察不能。	（内外面）煤付着。（外面下部）使用時の煤付着（黒斑とは別）	246
石英・長石・角閃石・輝石・雲母	外面口縁端部は刷毛目後横ナデ。外面口縁は刷毛目後ナデ。外面頸部は指ナデ。胴部外面は横ナデ、外底面はナデ。口縁内面は横ナデ。胴部内面は粗い工具ナデ。		247
石英・長石・角閃石・赤色酸化粒	口縁は横ナデ。外面胴部上部は工具ナデ、下部は刷毛目。内面頸部は指頭圧痕、胴部は指ナデ、内底面は指頭圧痕、指ナデ。		248
角閃石多量・石英・長石・雲母	内外面ともにナデ。	（外面）煤付着	249
石英・長石・雲母	口縁部は横ナデ。内外面ともにナデ。		250
石英・長石・雲母	口縁外面は横ナデ、内外面ともにナデ。		251
長石・石英	杯部内外面ともに横ナデ、内底面はナデ。脚部内外面ともにナデ。		252
長石	杯部は内外面ともにナデ。杯部と脚部接合部分の外面は刷毛目後ナデ、ナデ。脚部外面は刷毛目後ナデ。脚部内面はナデ、工具ナデ。脚端部はナデ。	（杯部外面・脚部内面）黒斑あり	253
長石	内外面ともにナデ調整。内面は観察不可の為調整不明。		254
長石	口縁はナデ。外面は刷毛目。内面はヘラ削り。器面が全体的に摩耗している。	（内外面）煤付着	255
長石	口縁はナデ。胴部外面上部は刷毛目、下部はナデ。内面はヘラ削り後ナデ。	（内外面）煤付着。（外面下部）使用時の煤付着（黒斑とは別）	256
長石	口縁端部はナデ。頸部外面は刷毛目後ナデ。外面胴部は刷毛目、外底面はナデ。内面はヘラ削り後ナデ。	（外面）煤付着	257
長石	口縁外面はナデ。頸部外面は刷毛目後ナデ、外面胴部上面は刷毛目、下部はナデ。口縁内面は刷毛目後ナデ、内面はヘラ削り後ナデ。	（内外面）煤付着	258
長石多量・石英・輝石・雲母	口縁部は横ナデ。外面頸部は横ナデ、胴部は刷毛目後ナデ。内面はナデ。	口縁端部貼付、（口縁端部外面）刻み目	259
石英・長石・雲母	口縁部・外面は横ナデ。内面はナデ。	口縁端部貼付、（口縁端部外面）刻み目	260

Tab.3　石製品観察表

報番	調査区	種別	出土地点			法量（cm）				石材	備考
			グリッド	遺構	注記	全長	全幅	器厚	重量（g）		
1	1区	打製石鏃		SD01		1.9	1.45	0.25	0.2	安山岩	
5	2区	石庖丁		SI01	№66	5.0	8.6～	1.2	61.0	粘板岩	両端は欠損。紐孔の穿孔は認められない。
35	2区	砥石		SI02	一括	6.5	2.3	－	39.4	粘板岩	
36	2区	砥石		SI02	№86	15.3～	8.2	3.9	518.2	リソイダイト	
40	2区	砥石		SI03	一括	15.2～	7.5	2.0	344.7	頁岩	
41	2区	砥石		SI03	一括	14.8～	6.2	2.3	359.9	頁岩	
55	2区	敲き石		SI04	№110	13.8	4.5	4.7	401.9	砂岩	
56	2区	敲石		SI04	№52	12.2	12.9	6.1	1151.6	熔結凝灰岩	
57	2区	砥石		SI04	№53	15.1～	8.5	3.7	668.7	頁岩	
59	2区	砥石		SI05	一括	13.3～	7.3～	6.1	626.3	リソイダイト	
72	2区	敲石		SI06	No.41	14.7～	6.1	4.1	555.2	砂岩	上部は欠損。
93	2区	台石		SX01	床直	38.6～	52.2～	12.6	39900	砂岩	側面に工具状のもので削った痕跡が認められる。
109	2区	打製石斧	G-9		一括	4.8～	5.4	1.2	34.6	安山岩	欠損の為全体の形状は不明。
110	2区	打製石鏃	D-10		一括	4.6	2.8	0.65	8.1	安山岩	
111	2区	石鑿	D･E-7			4.1	3.15	0.7	16.1	リソイダイト	
112	2区	敲石		包含	№18	10.8	12.4	4.4	926.7	砂岩	
145	3区	磨石		SI07	№26	35.2～	22.5～	14.2	15350	砂岩	使用によるものかは不明だが半分に割れている。
153	3区	敲石	G-14		一括	8.9	9.7	3.9	463.6	砂岩	
154	3区	柱状片刃石斧	F-11		一括	15.35	3.3	3.25	302.4	粘板岩	器体中央部付近で折れている為、抉りの有無は不明。
155	3区	打製石斧	F-11		一括	12.4	8.8	2.0	182.5	安山岩	表面に大きな剥離がある。
156	3区	石錐	F-10			4.6	1.7	0.75	4.1	安山岩	上部欠損。
159	4区	石皿		SI01	№16	37.8	28.4	12.4	22650	砂岩	
186	4区	石庖丁		SI05	床直上	3.7～	5.8～	－	13.8	粘板岩	表裏面から穿たれた紐孔1つ確認。
201	4区	砥石		SI11		8.9～	9.2～	5.9	438.4	リソイダイト	表面に少量のベンガラ付着。全面に渡って熱を受け黒く変色していることから鋳型の一部の可能性あり。
202	4区	打製石鏃		SI11		1.8～	1.7	0.3	0.7	安山岩	先端部欠損。
207	4区	敲石		SI06	№19	23.5	19.0	16.9	10000	砂岩	
208	4区	敲石		SI06	№21	24.3～	22.25～	6.85	4650	砂岩	磨石・敲石の両方の機能を持つ。
210	4区	石皿		SI12	№12	38.8～	24.0～	15.1	23800	砂岩	使用痕跡部は鉄分の沈着により茶褐色に変色。
217	4区	石庖丁			№1923	4.8	10.6～	0.7	51.2	粘板岩	表裏面から穿たれた紐孔2つ。
218	4区	石庖丁				4.1～	5.35～	0.55	17.4	粘板岩	表裏面から穿たれた紐孔1つ確認。
219	4区	磨石			№15	11.6	7.75	4.1	449.5	砂岩	磨石・敲石の両方の機能を持つ。
224	5区	石庖丁		SI02	№32	3.8	9.0	0.75	37.1	粘板岩	表裏面から穿たれた紐孔2つ。
238	6区	石庖丁			№793	4.15	5.6～	0.7	31.0	粘板岩	表裏面から穿たれた紐孔2つ。
239	6区	磨製石鏃	J-21		一括	1.9～	1.5～	0.2	0.1	安山岩	
261	7区	石庖丁		包含		5.6	8.1～	0.9	52.8	粘板岩	表裏面から穿たれた紐孔2つ。

第Ⅳ章
自然科学分析

熊本県、西片百田遺跡における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．西片百田遺跡におけるプラント・オパール分析

1．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山、2000）。

2．試料

試料は、Ａ地点（調査区北東壁面）、Ｂ地点（調査区中央付近、住居跡の西側）、Ｃ地点から採取された計27点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）をもとに、次の手順で行った。

1）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

2）試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

3）電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理

4）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

5）沈底法による20μm以下の微粒子除去

6）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

7）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールをおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10−5g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4．分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) A地点

弥生時代後期とされる5層（試料1）から10層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、5層（試料1～3）およびその下位の6層（試料4）からイネが検出された。このうち、5層（試料1～3）では密度が1,500～2,200個/gと比較的低い値であり、6層（試料4）でも800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水によって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられるが、ここでの原因は現時点では不明である。

2) B地点

弥生時代後期とされる5層（試料1）から10層（試料8）までの層準について分析を行った。その結果、6層（試料4）からイネが検出された。密度は800個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) C地点

試料1～試料11について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

(2) 堆積環境の推定

イネ以外の分類群では、ススキ属型やタケ亜科などが検出されたが、いずれも少量である。なお、定量は行わなかったが、下位層準を中心にブナ科（シイ属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）などの照葉樹起源の植物珪酸体（顕微鏡写真参照）が検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

以上のことから、調査区周辺は河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられ、弥生時代後期には調査区の一部で稲作が開始されていたと推定される。また、当時の遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科、イスノキ属などの照葉樹林が分布していたと推定される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、A地点では弥生時代後期とされる5層とその下位の6層、B地点では6層からイネが検出され、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が認められた。

調査区周辺は、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられ、弥生時代後期には調査区の一部で稲作が開始されていたと推定される。また、当時の遺跡周辺にはシイ属やクスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)、p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)ープラント・オパール分析による水田址の探査ー．考古学と自然科学、17、p.73-85.

II．西片百田遺跡における放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	A地点、9層	炭化材	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄、石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No.（Beta-）
No.1	1940±40	-25.8	1930±40	交点：cal AD70 1σ：cal AD40～110 2σ：cal BC10～AD140	150397

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。

暦年代の交点とは、較正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、較正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

表1　熊本県、西片町遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	A地点							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	Oryza sativa (domestic rice)		22	15	15	8				
ヨシ属	Phragmites (reed)							8		
ススキ属型	Miscanthus type		7			8	30	15	15	7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		7	15	8	38			7	

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	Oryza sativa (domestic rice)	0.66	0.44	0.45	0.22				
ヨシ属	Phragmites (reed)						0.48		
ススキ属型	Miscanthus type	0.09			0.09	0.37	0.19	0.19	0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.04	0.07	0.04	0.18			0.04	

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	B地点							
			1	2	3	4	5	6	7	8
イネ	Oryza sativa (domestic rice)					8				
ヨシ属	Phragmites (reed)				7					
ススキ属型	Miscanthus type		38	15	37	15			8	23
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		38	7	22	30	15	15	8	

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	Oryza sativa (domestic rice)				0.22				
ヨシ属	Phragmites (reed)			0.47					
ススキ属型	Miscanthus type	0.47	0.19	0.46	0.19			0.09	0.28
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.18	0.04	0.11	0.14	0.07	0.07	0.04	

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	C地点										
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
イネ	Oryza sativa (domestic rice)												
ヨシ属	Phragmites (reed)		8	15	14	7		8		21	27	21	8
ススキ属型	Miscanthus type		7	8	15	8	30	15	15				7
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		7	21	8	38	7	8	7				15

推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

イネ	Oryza sativa (domestic rice)												
ヨシ属	Phragmites (reed)		0.50	0.95	0.88	0.44		0.48		1.33	1.70	1.33	0.50
ススキ属型	Miscanthus type		0.09	0.10	0.19	0.09	0.37	0.19	0.19				0.09
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		0.04	0.10	0.04	0.18	0.03	0.04	0.04				0.07

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

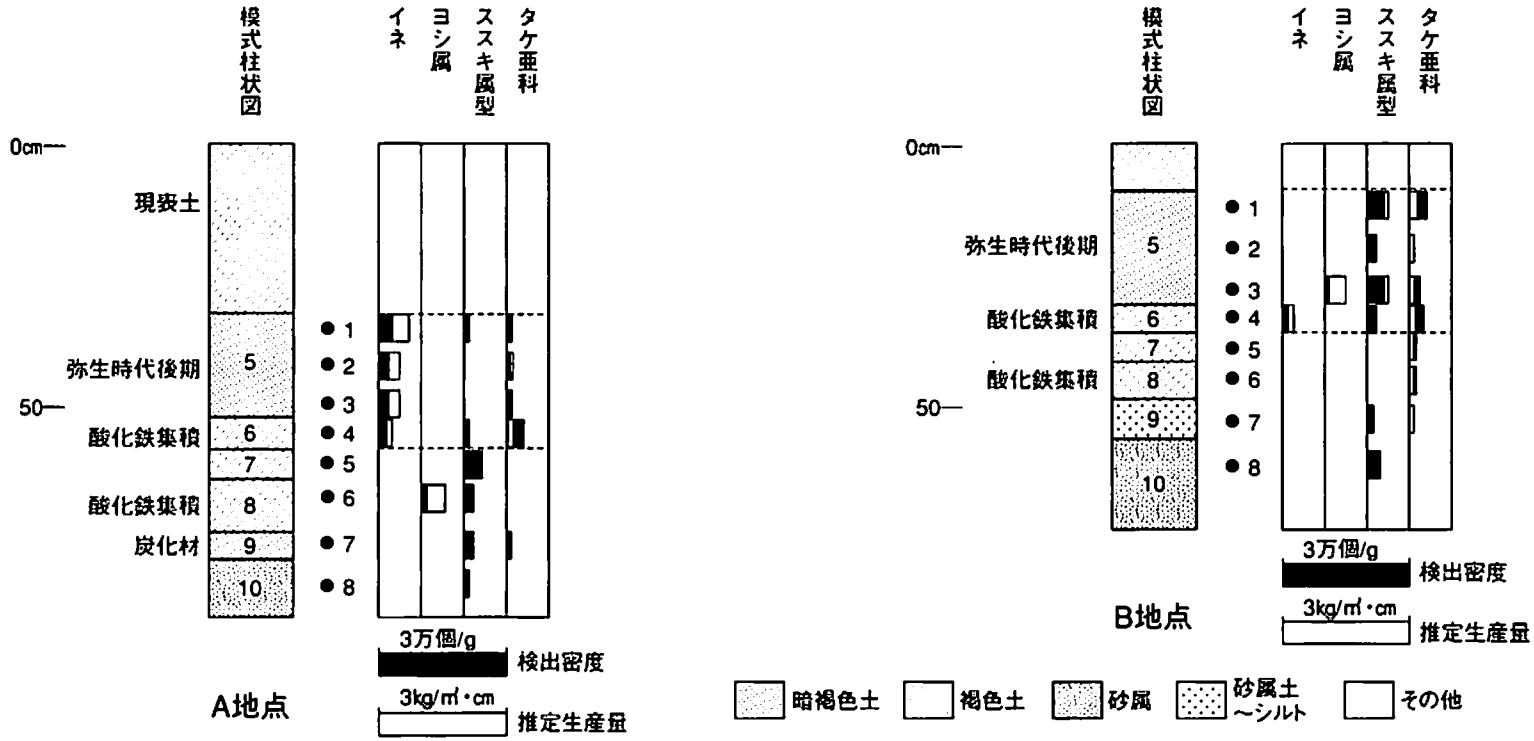
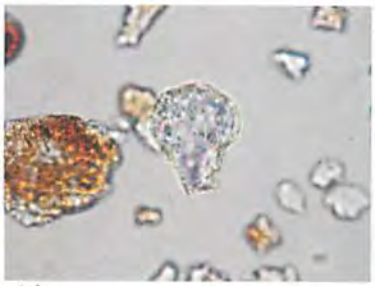
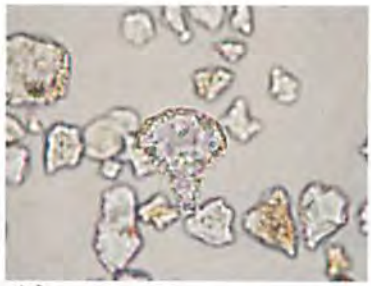
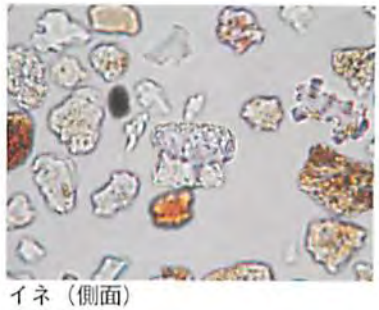


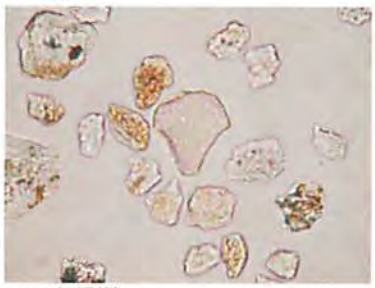
図1　熊本県、西片町遺跡におけるプラント・オパール分析結果

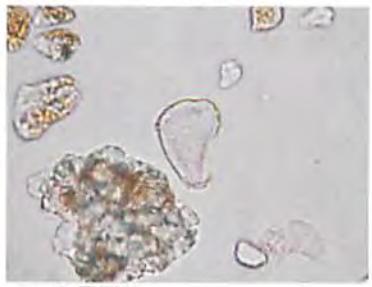
西片百田遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

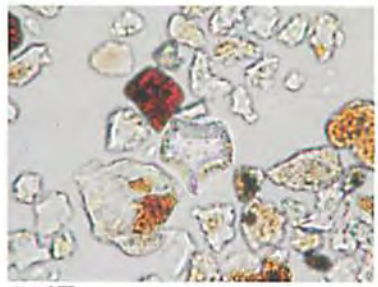

イネ
A地点 1


イネ
A地点 1


イネ（側面）
B地点 4

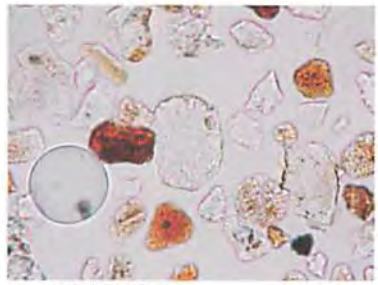

ススキ属型
A地点 5

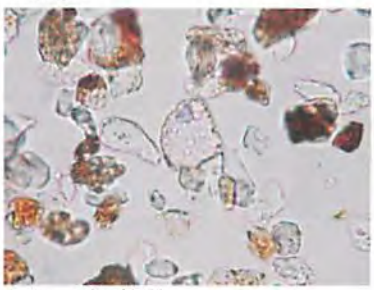

ススキ属型
B地点 8

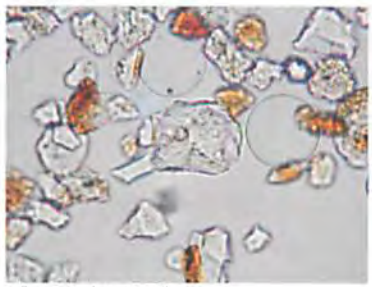

シバ属
A地点 6

メダケ節型
B地点 4

ネザサ節型
B地点 4

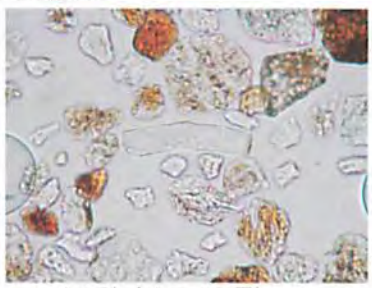

クマザサ属型
B地点 4

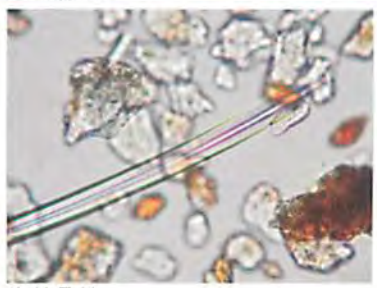

ミヤコザサ節型
B地点 1


ブナ科（シイ属）
A地点 2

クスノキ科
B地点 5

マンサク科（イスノキ属）
A地点 3


マンサク科（イスノキ属）
B地点 6


海綿骨針
B地点 7

50 μm

第V章
まとめ

第V章　まとめ

今回の調査では、主に弥生時代後期初頭の竪穴式住居跡群、古墳時代初頭の土器埋納土坑、時期は不確定ではあるが畠に関連する小溝状遺構群が検出されている。以下、所見を述べることとする。

住居跡について

本事業に伴う調査区からは、弥生時代後期に比定される竪穴式住居跡が2区（8軒）、3区（10軒）、4区（12軒）、5区（2軒）、6区（6軒）、7区（1軒）の合計39軒が検出された。

検出された住居跡の分布を概観すると、2区～5区に住居跡の大半が集中して検出されていることが分かる。また、本遺跡より北に位置する上日置女夫木遺跡[1]からは時期はやや新しくなるが、当遺跡をはるかに上回る住居跡群が検出されており、集落が存在できるだけの微高地が平野上にあったものと考えられる。このことから、弥生後期の集落が2区～5区を中心に立地し、6・7区は集落に隣接する地域であったものと考えられる。

本遺跡で検出された住居跡は、いずれも夏は水田、冬は井草という、年中作付けを行う八代特有の水田による影響と、沖積平野に特徴的な粘質土のために、地山層と遺構埋土の色調・質感の差異が僅かである。そのため、遺構検出は平面プランと適宜設定するトレンチによる土層断面観察の両面から行った。

住居跡の平面形態は、円形、楕円形、隅丸方形の3種類が検出された。長軸・短軸による構成比計測の結果、大半の住居跡が長軸は3.6～5.6m、短軸が3.4～4.2mの間に収まることが分かった。また、住居跡内の付帯施設には、炉跡、土坑、柱穴が挙げられるが、本遺跡では、これら全てが検出された住居跡は少なかった。

炉跡は径平均85cm程度を測り、大半が円形を呈し、浅く擂鉢状に掘り込まれている。埋土は炭化物と焼土で構成され、一部は粘土質の土を最下層に敷くことで地山からの湿気を防ぐ構造を示している。これは地山が砂層など湿気を通しやすい土壌であったことへの適応であることが考えられる。また、灰を掻き出したであろう痕跡が浅い掘り込みになって確認された例も認められた。土坑は様々な大きさを呈し、平面形状にも規格性は認められなかった。埋土についても特筆すべき事象はない。出土遺物も少量であった。住居跡床面からの掘り込みであることから付帯施設として捉え、一部は貯蔵穴であると考えられる。柱穴については、規模は小さく、床面からの深度も深くない。しかし、土層断面観察より、柱穴下層に粘土を敷き、その上に柱材を据えた状態が認められることから、地山が砂層であるような脆弱な地盤に適応した構造をもっていたことが考えられる。床面は明確に硬化した部分の検出は少なかったが、粘質土を敷いて下からの湿気を防いでいた住居跡が数軒認められている。

それぞれ切り合い関係や未検出など不安定な要素はあるが、基本的には炉跡、柱穴・土坑を備えていたようである。なかでも炉跡を住居跡のほぼ中央部に設置し、それを挟むように2本の主柱穴が立ち、貯蔵穴を有する住居跡が一般的であったと考えられる。それらの住居跡は炉跡を住居内に設置することで、湿度が多く土壌が脆弱な地盤であった本遺跡一帯に適応していた形態であったと考えられる。

土器埋納遺構（SK10）（Fig.109）

7区の南東端で検出された長楕円形の土坑である。本土坑内からは古墳時代初頭の土師器が13個体出土した。内訳は甕形土器5点、高杯形土器2点、鉢形土器3点、小型丸底壺形土器3点である。そのうち、甕形土器（246）の内部に小型丸底壺形土器（247・248）が内包された状態で出土している。出土状況から甕形

1　熊本県教育委員会　「島田遺跡　上日置女夫木遺跡　西片百田遺跡」　熊本県文化財調査報告第236集　2006

土器中に意図を持って納められていたものと考えられ、土器埋納土坑と判断した。甕形土器および小型丸底壺形土器は、布留式併行期の所産であり、いずれの土師器も古墳時代初頭に比定される。本遺構は八代地域での当該時期における一括性の高い資料である。

また、7区で当該時期に比定されうる遺構は他に溝状遺構が認められるのみである。本遺構は遺構密度の非常に薄い箇所に位置していることから、集落域とは異なり、何らかの祭祀に関する遺構であると考えられる。

小溝状遺構群について

7区全面に渡って浅い小溝状遺構群（Fig.104）が検出された。これらは後世の削平により残存状況は非常に悪い。しかし、7区を縦断する二つの溝状遺構（SD01・02）と検出面を同一にはするが、二つの溝状遺構（SD01・02）より新しい時期の遺構であることが切り合い関係より把握される。そして検出された小溝状遺構群は無作為に掘削された溝状遺構群ではなく、規格性を伴った溝状遺構群であることが調査時から推察された。

小溝状遺構群は概ね東西方向に軸をもって掘削されているようである。それらは大別すると7区南端で検出された東西軸をもつ一群（A群）と、7区中央で検出された、やや南に軸を移した東西方向の一群（B群）の2群に分けられる。

A群は、幅24～40cm、検出面からの深さ1～4cmの小溝状遺構群であり、近接したものの間隔幅（中心線間隔幅）は殆どが1.5～1.7mの間で平行して検出された。また、7区南西端では、これらの小溝状遺構群に直交するように幅25cm、検出面からの深さ3cm程度の小溝が検出されていた。

B群は、幅25cm～40cm、検出面からの深さ1～4cmの小溝状遺構群であり、近接したものの間隔幅（中心線間隔幅）は1.2～1.9mの間で平行して検出されていた。

これらの2群は掘削軸と間隔幅は異なるが、最小単位は近似した数値を示しており、検出段階での埋土も同様であったことから、これらが同時期に掘削されたものであると考えられる。

また小溝状遺構群の底面は平坦ではなく凹凸を呈し、幾つかの底面からは幅およそ5cm、深さ1cmほどの長方形の掘り込みが小溝状遺構に直行して確認されていることから、工具痕跡であることが予想される。

そして、7区は1～5区までと比べて竪穴式住居跡などの遺構がほとんど確認されていないことや、出土遺物が極端に少ないこと等から、小溝状遺構群と周辺の空間を含めて畠跡[2]などの生産に関する遺構であることが考えられる。

ところで、日本考古学協会では2000年に全国の「はたけ」の資料集成を行い[3]、「はたけ」に対する活発な論議が行われ、多くの資料や考察が提示された。そこで、佐藤甲二氏による畑跡の耕作痕に関する興味深い指摘がある。[4]「耕作痕の特徴とは、耕作土直下層上面に小規模な溝が、一定間隔をもって、同一方向へ平行する溝群である。」とし、以下の特徴を提示されている。

①幅50cm前後の溝が群をなし、等間隔に平行する。その間隔は、50cm前後のものから2m以上のものまでの多岐にわたる。

②深さは、5cm以下の浅いものから、50cm以上の深いものまで認められるが、同一群に関しては、各溝の深さは、ほぼ均一である。

---

2 「畠」と「畑」の表記については、「畑」は主に焼畑を意味し近世以降のもの、「畠」は水田に対する白田（乾いた耕作地）を意味し古代～中世のものに使用することを概念とするが、今回は「畠」で統一して記述する。また、後述する佐藤氏の論文については原文のままの「畑」を使用している。

3 日本考古学協会 「はたけの考古学」 日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集 第一集 2000

4 佐藤甲二 2000 「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題ー仙台市域の調査事例をとおしてー」 「はたけの考古学」 日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集 第一集

③上端・下端とも出入りが激しく、整然としていないものが多い。また、連続せず、断片的なものもある。

④ほぼ直線的に延びるものが多いが、弱い弧状を描くものもある。

⑤東西方向や南北方向をとるものが多く、また、傾斜地の場合、傾斜方向と平行または直行するものが多い。

⑥堆積土は、単一層のものが多く、掘り込み層の小ブロックを多量に含む。また水を湛えた痕跡はない。

⑦底面は、凹凸が顕著なものが多く、内には、鋤先状の工具痕が認められるものもある。

⑧各溝間は平坦で、凸状を呈してない。

⑨一方向の単一群のみの他、複数方向の群からなるものもある。その場合には、直交方向をとるものが多いが、斜行方向、同一方向の複数群のものもある。

⑩複数群の場合、重複関係が明確なものもあるが、多くは、重複関係が不明確である。

⑪同一群の場合、各溝の始まりと終わりは、同一位置をとる場合が多い。

⑫同一群は、その途中で方向を若干変化させるものがある。その際、各溝は一旦途切れ、それをさらに繋ぐ状態のものや、全く位置がずれ、それまでのラインを踏襲しないものが認められる。

⑬出土遺物は極端に少なく、時期決定資料を殆ど含まない。

以上のことを踏まえて、本遺跡で検出された小溝状遺構群を見直してみると、東西方向軸をもった幅30cm前後の溝状遺構が群をなしてほぼ等間隔に平行して直線的に延びている。検出面からの深さはおよそ5cm以下の規模を有している。そして、その底面には凹凸が認められ工具痕と思われる痕跡が認められる。

これらのことから小溝状遺構群は、上述した文献等から畠に関する遺構であることが考えられる。その中でも畝・畝間と耕作痕の可能性も想定されるが、ここでは耕作痕の可能性がより妥当であると考えられる。しかし、後世の削平により検出された小溝状遺構群は全体の僅かな部分であり、全体像を提示するには至らなかった。

また、これらの遺構の時期であるが、小溝状遺構群に確実に伴う遺物は認められていない。しかし、切りあい関係にあるSD01・02から古墳時代初頭の遺物が出土していることから、下限が少なくとも古墳時代初頭である遺構群であるとして報告するに留めざるを得ない。

出土遺物について

本遺跡出土遺物の大半が弥生時代後期に比定される遺物であった。出土した土器の胎土は大きく2つに分類されることが明らかとなった。一方は赤褐色を呈して直径5mm程度の長石を非常に多く含み、それらが器壁に明らかに露出しており、胎土の粗い印象を受ける1群を指す。「以下1類とする」。もう一方は灰白色を呈して非常に肌理細かい胎土を有し、色調・胎土の違いが一見して分かる1群を指す。「以下2類とする」。また2類については多くの細分が可能であった。

出土土器の大半は1類によって製作されているが、2類では壺形土器が多く製作されている。

1類の器壁に認められる長石は、宮原花崗岩[5]であることが肉眼観察より明らかになっている。この宮原花崗岩は八代市北部の龍峰山付近から氷川流域（氷川町）において容易に採取が可能であることから、1類の土器は本遺跡を含む八代平野中において製作されたことが考えられる。そして明らかに胎土の異なる2類については、他地域からの搬入品の可能性が考えられる。これは煮沸具や供膳具等といった極めて損傷および破砕の可能性の高い器群と、貯蔵用もしくは祭祀用としての機能を有する壺形土器との用途・機能差が大き

5 馬場正弘氏（熊本県教育庁文化課）の御教示による。

く関与していることが推察される。

また、検出された竪穴式住居跡の床面[6]からは甕形土器、壺形土器、高杯形土器、鉢形土器などが、それぞれに共伴して出土している。

甕形土器は口縁部が「く」の字に屈曲し、最大径を胴部上位～中位にかけて持つ。脚台は緩やかに外反しながら短く開き、器面調整は口縁部及び脚台部はナデ調整が認められ、胴部を中心として刷毛目調整痕が認められるものが大半を占めている。壺形土器は広口壺形土器、直口壺形土器、長頸壺形土器、短頸壺形土器、複合口縁壺形土器、小型丸底壺形土器など多種多様な器形を有している。口縁部は様々な形態を有しているが、器形については多くが概して長胴化が進み、凸レンズ状の底部を有している。また、重弧文長頸壺形土器は肩部の施文方法から階段状の条線を巡らすものと横位沈線を施すものに分類され、胴部屈曲部形態から直角よりやや広いものと緩い屈曲部をもつものに分類される。高杯形土器は、完形は少ないが、浅い杯部が体部中位で屈曲した後口縁部は外湾しながら大きく開き、脚部は下方に向かって緩やかに外反して裾部は強く外湾するもの（19）、浅い杯部を呈し体部で短く直立して口縁部に至り、屈曲部上位に断面三角形の凸帯が巡るもの（20）、杯部は深く椀状を呈し、口縁部は肥厚して斜め上方へやや外反して開き、脚部はわずかに内反しながら下方に向かい、裾部で大きく外反して広がるもの（142）などが出土している。

壺形土器や高杯形土器等の出土遺物については球磨郡錦町『夏女遺跡[7]』や八代市『下堀切遺跡[8]』、宇土市『古保山打越遺跡[9]』など球磨川流域や熊本県央域の遺跡に類例を求めることが可能である。これらのことから、同一水系である球磨川上流域や下流域との小地域間交流や、他水系である緑川流域や白川流域等とのさらに広い範囲での交流が盛んに行われていた可能性が推察される。

さらに6区からは、あまり類例の認められない器台形土器（Fig.99）や高杯形土器（Fig.100）が共伴して出土した。検出された遺構は多くの切り合い関係にあり、遺構を把握出来なかったため、他の遺物との共伴関係は不明である。高杯形土器の形態は本遺跡内には類例が認められず、胎土も異なることから、他地域の影響を受けて製作されたことが予想される。器台形土器についても口縁部の形態や仕切り板、円形浮文などの特徴を有し、共伴関係にある高杯形土器と胎土も同様である。さらに、他地域においても類例を見出すことが出来なかった。ただ形態的には異なるが、還有明海に分布が認められる所謂「透かしのある器台」[10]との関連を考えなければならないだろう。しかし、高杯形土器の口縁部形態の特徴と、円形浮文を有する遺物の多くが弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定されていることから、これらの遺物は弥生時代終末期から古墳時代初頭の所産であると考えられる。

他の住居跡内出土遺物としては、多くの敲石や磨石、台石等の礫石器が挙げられる。顕著な使用痕が認められることから、本遺跡が形成されていた時期にも植物質食料が重要な食料源であったことが窺える。また、住居跡内の埋土洗浄の結果、幾つものガラス玉[11]が検出されたことも併せて報告しておく。

本遺跡は標高6mほどの八代平野に位置しており、これまで熊本県では標高3m以下の低平地には遺跡は存在しないとの認識が一般的であった[12]立地環境から確認された遺跡である。本遺跡を始め、西片園田遺跡[13]、

6　本報告の遺物は、大半が所謂「床直」として認識したものを中心に図示している。
7　熊本県教育委員会　「夏女遺跡」　熊本県文化財調査報告第128集　1993
8　八代市教育委員会　「下堀切遺跡Ⅰ」　八代市文化財調査報告書第3集　1988
　八代市教育委員会　「下堀切遺跡Ⅱ」　八代市文化財調査報告書第4集　1989
9　熊本県教育委員会　「古保山打越遺跡」　熊本県文化財調査報告第93集　1987
10　石橋新次　2005　「肥前（佐賀県）・筑後地方の弥生時代の様相」　「平成17年度長崎県考古学会秋季大会発表資料」　長崎県考古学会
11　本報告では、図示せず写真での報告のみに留めている。
12　宮崎敬士　2005　「熊本県地域の様相」「平成17年度長崎県考古学会秋季大会発表資料」　長崎県考古学会
13　熊本県教育委員会　「西片百田遺跡・西片園田遺跡」　熊本県文化財調査報告第234集　2005

西片稲村遺跡[14]、上日置女夫木遺跡、島田遺跡[15]等はいずれも八代平野に位置し弥生時代の遺構が確認されており、これまでの県内における弥生時代観に一石を投じたものといえよう。そして、これまで熊本の当概期の編年研究において最も後進地域であった球磨川下流域において、良好な一括資料を続々提示している。

（上髙原　聡）

引用・参考文献

佐藤伸二　1970　「中九州に於ける弥生終末期土器の諸問題」「熊本史学」　第35・36集合併号　熊本史学会

野田拓治　1982　「古式土師器の成立と展開一特に中部九州における編年試案一」　「森貞次郎博士古希記念古文化論集」

石橋新次　1983　「中九州における古式土師器」　「古文化談叢」　第12号　九州古文化研究会

西健一郎　1987　「重弧文長頸壺」　「弥生時代の研究4」　雄山閣

河森一浩　1998　「免田式土器の再検討一様式構造をめぐって」　「肥後考古第11号」　肥後考古学会

原田範昭　1999　「中九州における弥生時代後期土器の編年一熊本平野部の土器にみる社会背景一」「先史学・考古学論究」」　龍田考古学会

佐藤甲二　2000　「畑跡の耕作痕に関する問題点と今後の課題一仙台市城の調査事例をとおして一」「はたけの考古学」　日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料　第一集

宮崎敬士　2001　「所謂免田式土器の再吟味一免田式土器様式研究の前に一」「久保和士君追悼考古論文集」　久保和士君追悼考古論文集刊行会

石橋新次　2005　「肥前（佐賀県）・筑後地方の弥生時代の様相」「平成17年度長崎県考古学会秋季大会発表資料」　長崎県考古学会

宮崎敬士　2005　「熊本県地域の様相」「平成17年度長崎県考古学会秋季大会発表資料」　長崎県考古学会

諸富町教育委員会　「村中角遺跡」　諸富町文化財調査報告書第2集　1985

八代市教育委員会　「下堀切遺跡。」　八代市文化財調査報告書第3集　1988

八代市教育委員会　「下堀切遺跡「」　八代市文化財調査報告書第4集　1989

仙台市教育委員会　「下ノ内浦遺跡」　仙台市文化財調査報告書第178集　1993

佐賀市教育委員会　「下和泉一本椎遺跡「」　佐賀市文化財調査報告書第81集　1997

福岡県教育委員会　「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告一43一」　福岡県教育委員会　1997

財団法人 鳥取県教育文化財団 鳥取県埋蔵文化財センター　「長瀬高浜遺跡ァ・園第6遺跡」　鳥取県教育文化財団調査報告書第61集　1999

太宰府市教育委員会　「太宰府条防跡ェ・一陶磁器分類編一」　2000

奈良文化財研究所　「吉備池廃寺発掘調査報告」　奈良文化財研究所学報第68冊　2003

熊本県教育委員会　「五ツ六横穴群」　熊本県文化財調査報告書第34集　1979

熊本県教育委員会　「立神ドトク遺跡」　熊本県文化財調査報告書第35集　1979

熊本県教育委員会　「上の原遺跡」」　熊本県文化財調査報告書第78集　1985

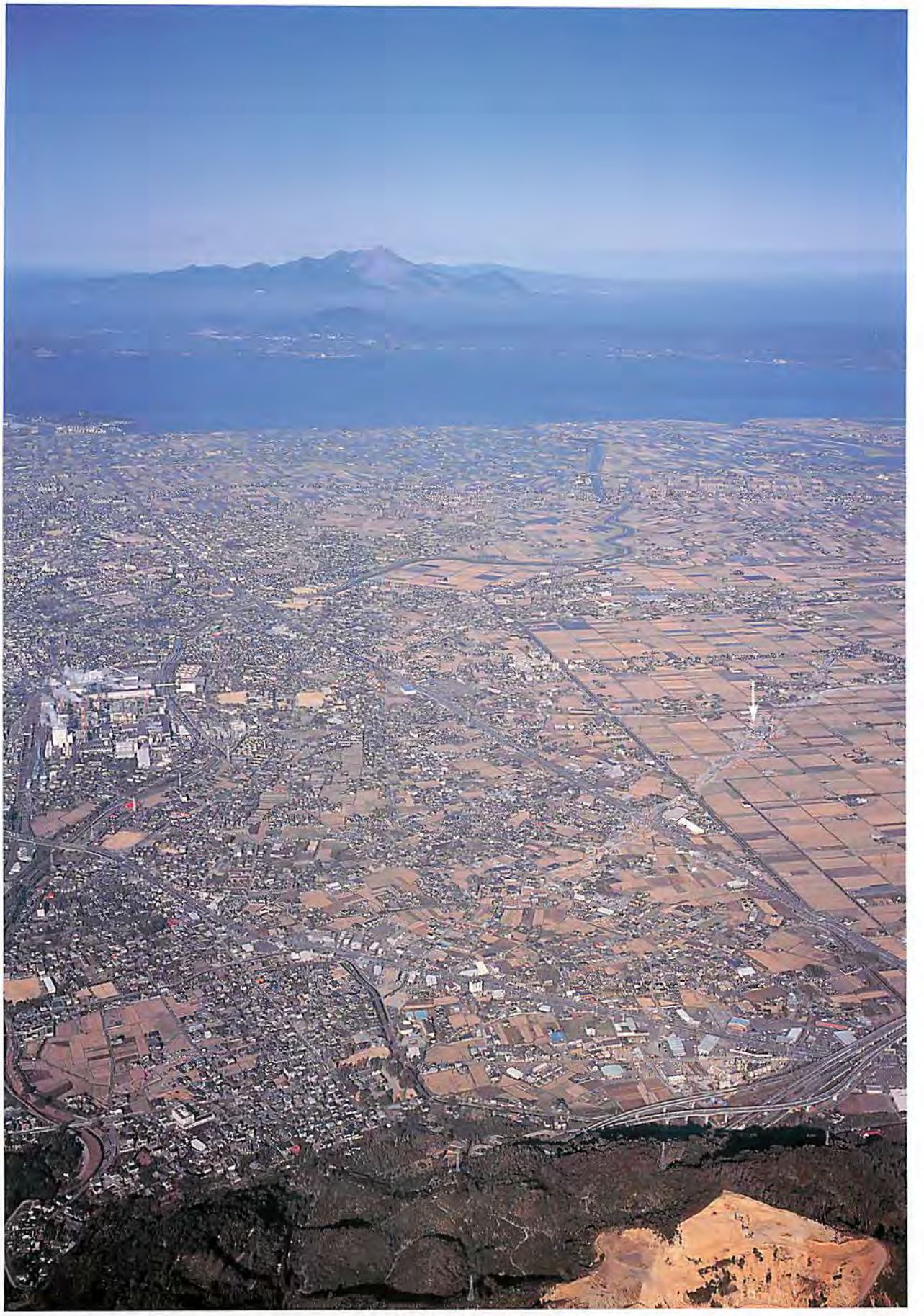
熊本県教育委員会　「下山西遺跡」　熊本県文化財調査報告書第88集　1987

14　熊本県教育委員会　「西片稲村遺跡・中片小路遺跡」　熊本県文化財調査報告第228集　2005

15　平成18年度刊行予定

熊本県教育委員会　「古保山打越遺跡」　熊本県文化財調査報告書第93集　1987
熊本県教育委員会　『上片町水田遺跡』　熊本県文化財調査報告書第109集　1989
熊本県教育委員会　「うてな遺跡」　熊本県文化財調査報告書第121集　1992
熊本県教育委員会　「夏女遺跡」　熊本県文化財調査報告書第128集　1998
熊本県教育委員会　「狩尾遺跡群」　熊本県文化財調査報告書第131集　1999
熊本県教育委員会　『西片町遺跡』　熊本県文化財調査報告書第153集　1996
熊本県教育委員会　「蒲生・上の原遺跡」　熊本県文化財調査報告書第158集　1996
熊本県教育委員会　『柳町遺跡。』　熊本県文化財調査報告書第200集　2001
蓑田田鶴男　1992　「八代市史第1巻」　八代市教育委員会
日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集　第一集　2000　「はたけの考古学」

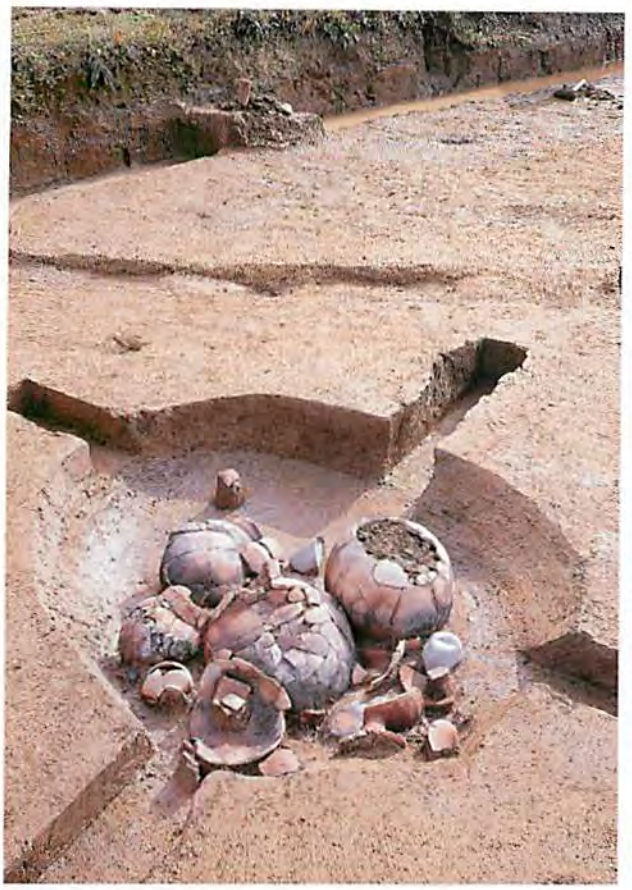
写　真

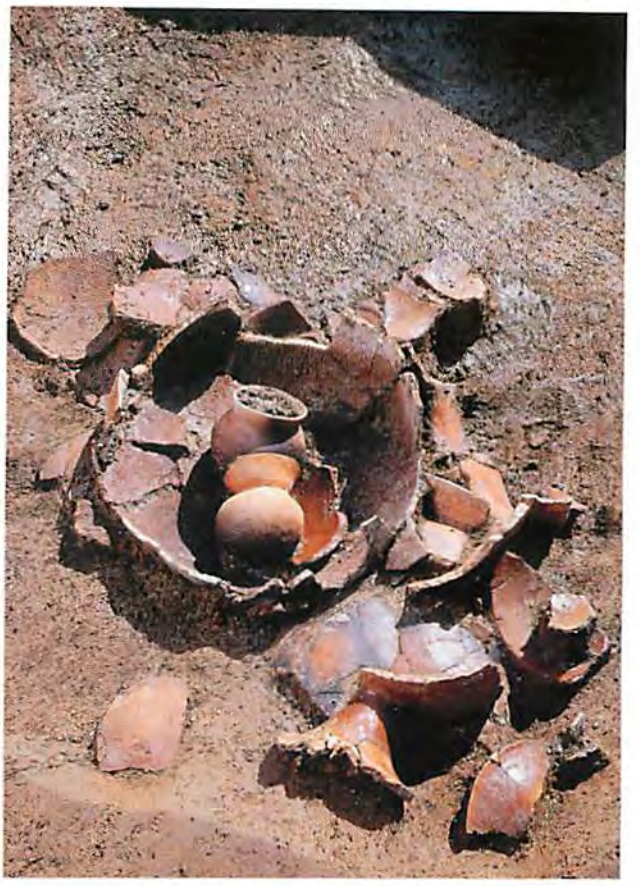


八代平野から有明海、雲仙望む

PL.2

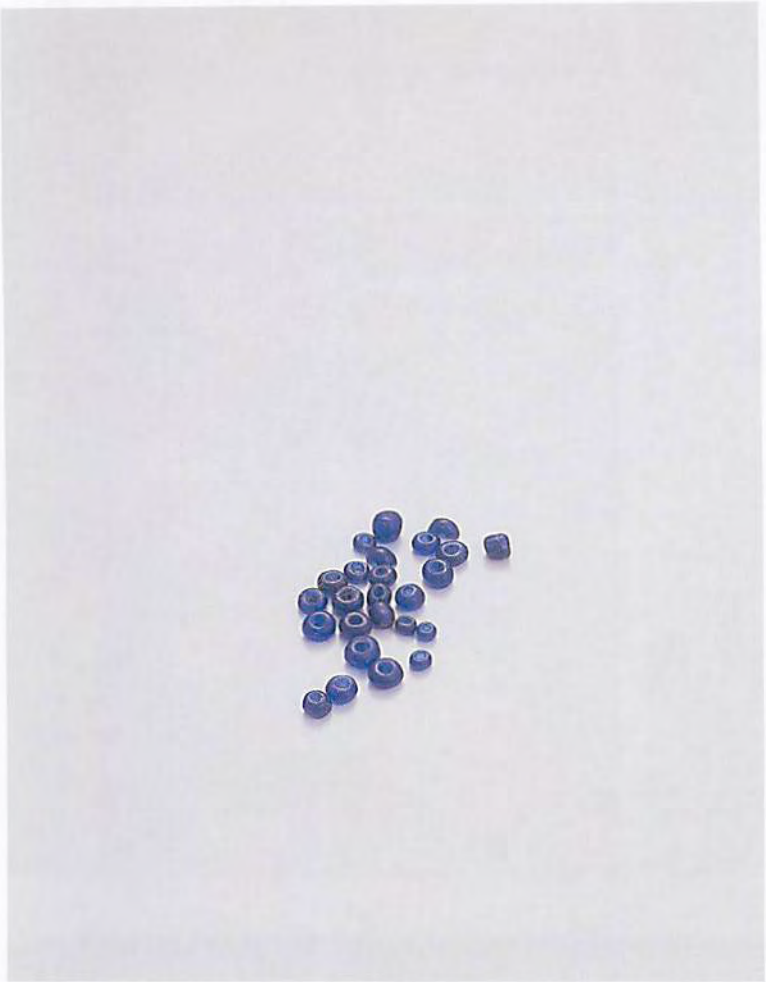
八代平野　新八代駅周辺調査・工事状況





7区SK10　遺物出土状況

PL.4



2区SI02　出土遺物

1区　完掘状況

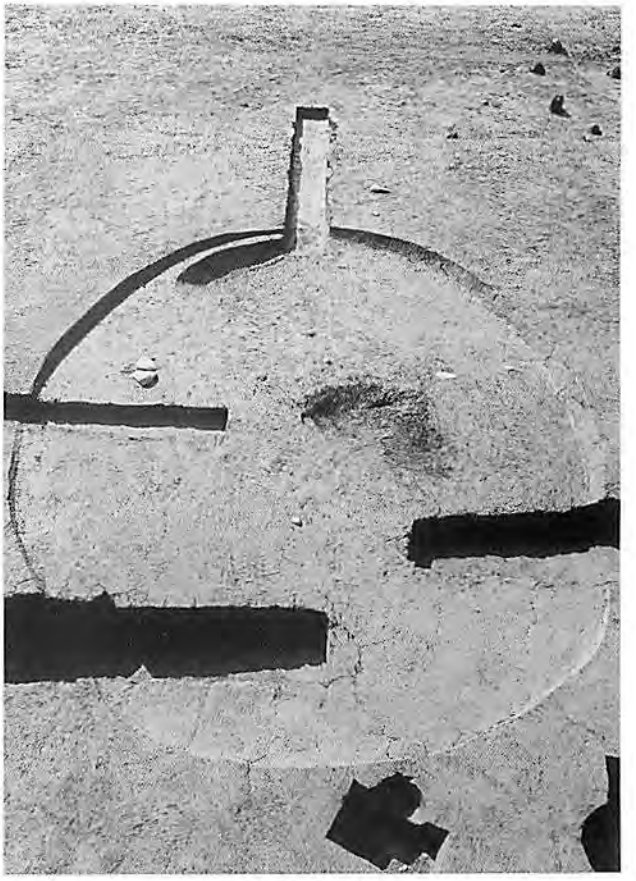
PL.6

2区SI02　炉土層断面

2区SI02　炉完掘状況

2区・3区SI02　完掘状況

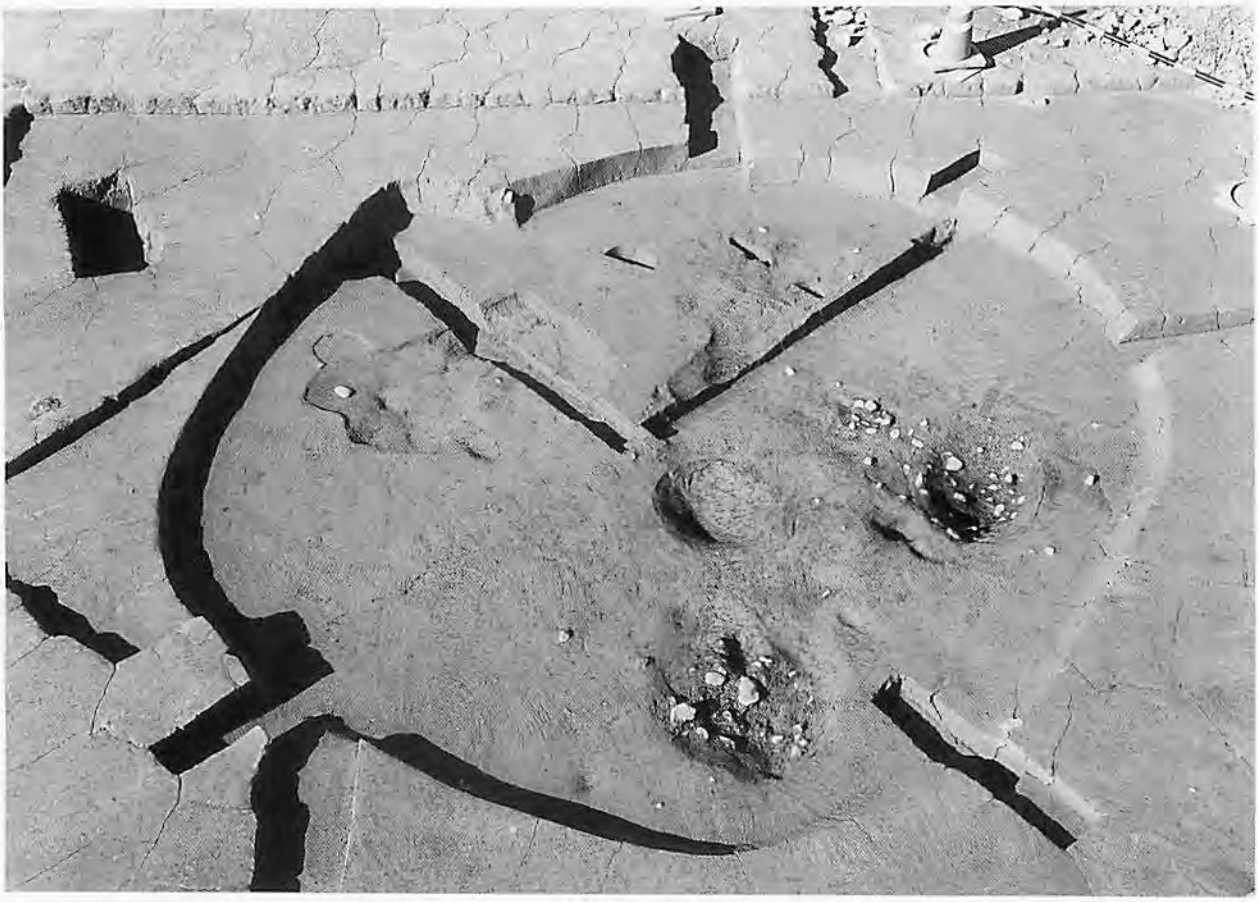
2区SI04　遺構検出時遺物出土状況



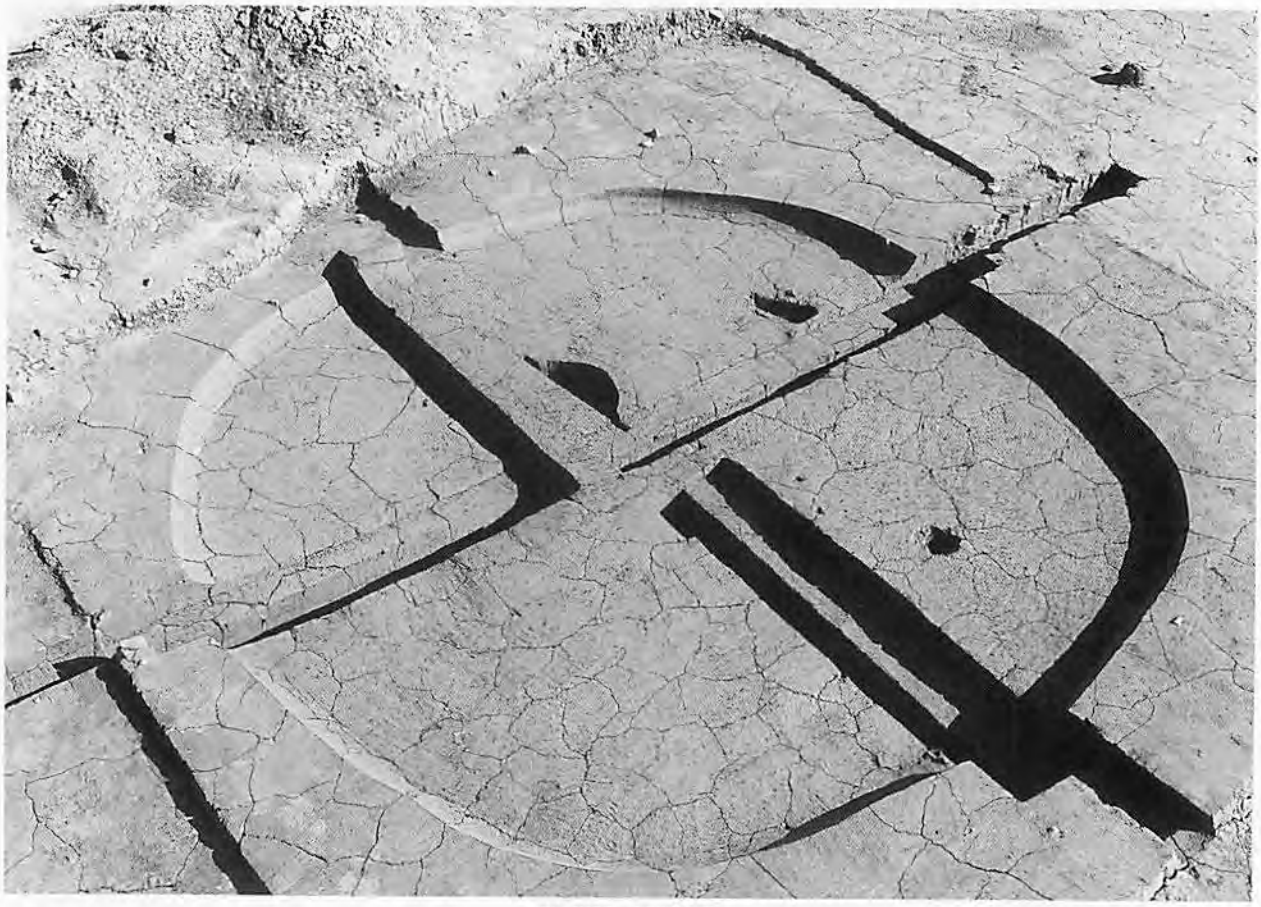
2区SI04　完掘状況

2区・3区　遺構完掘状況

PL.8



2区SI05　完掘状況

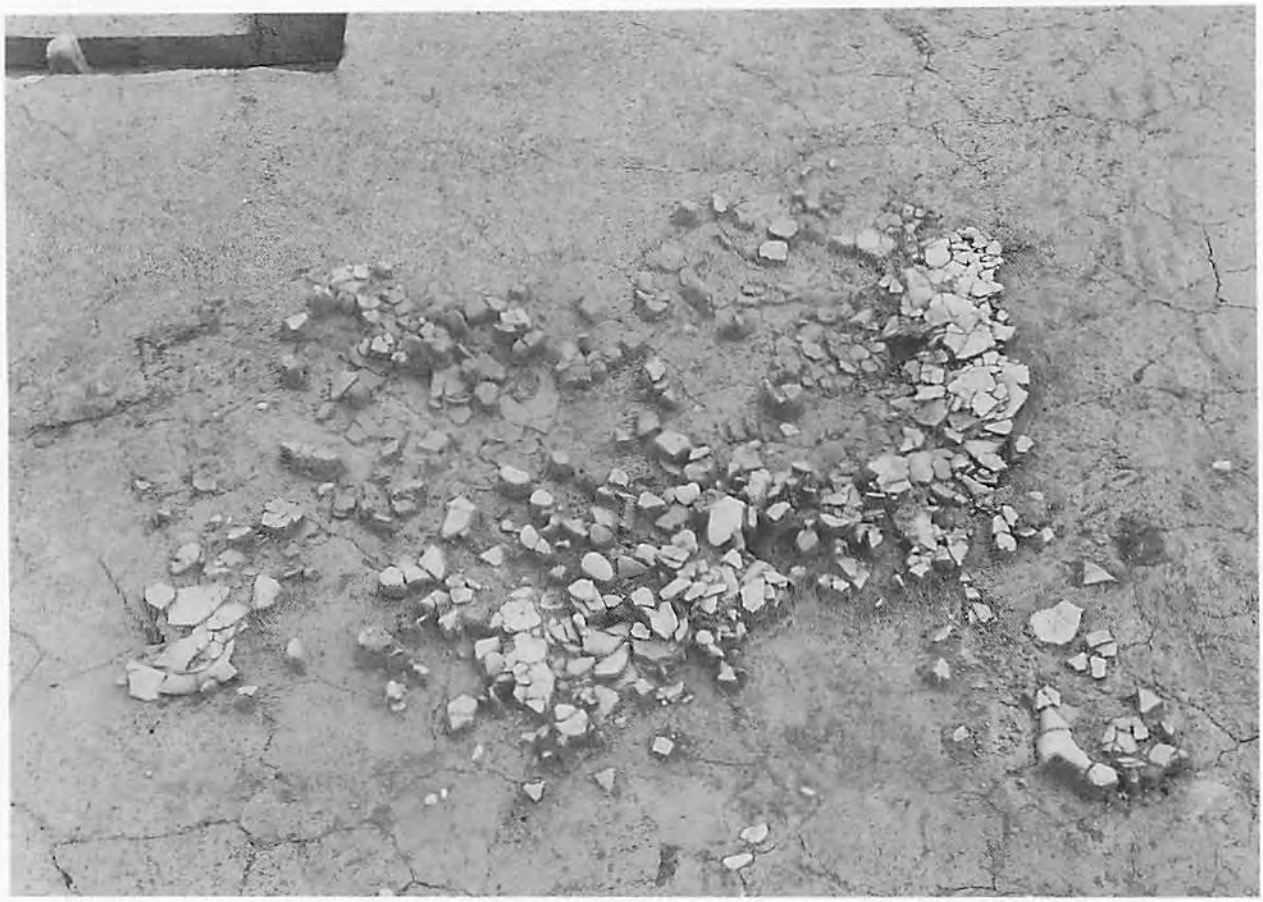


2区SI06　完掘状況

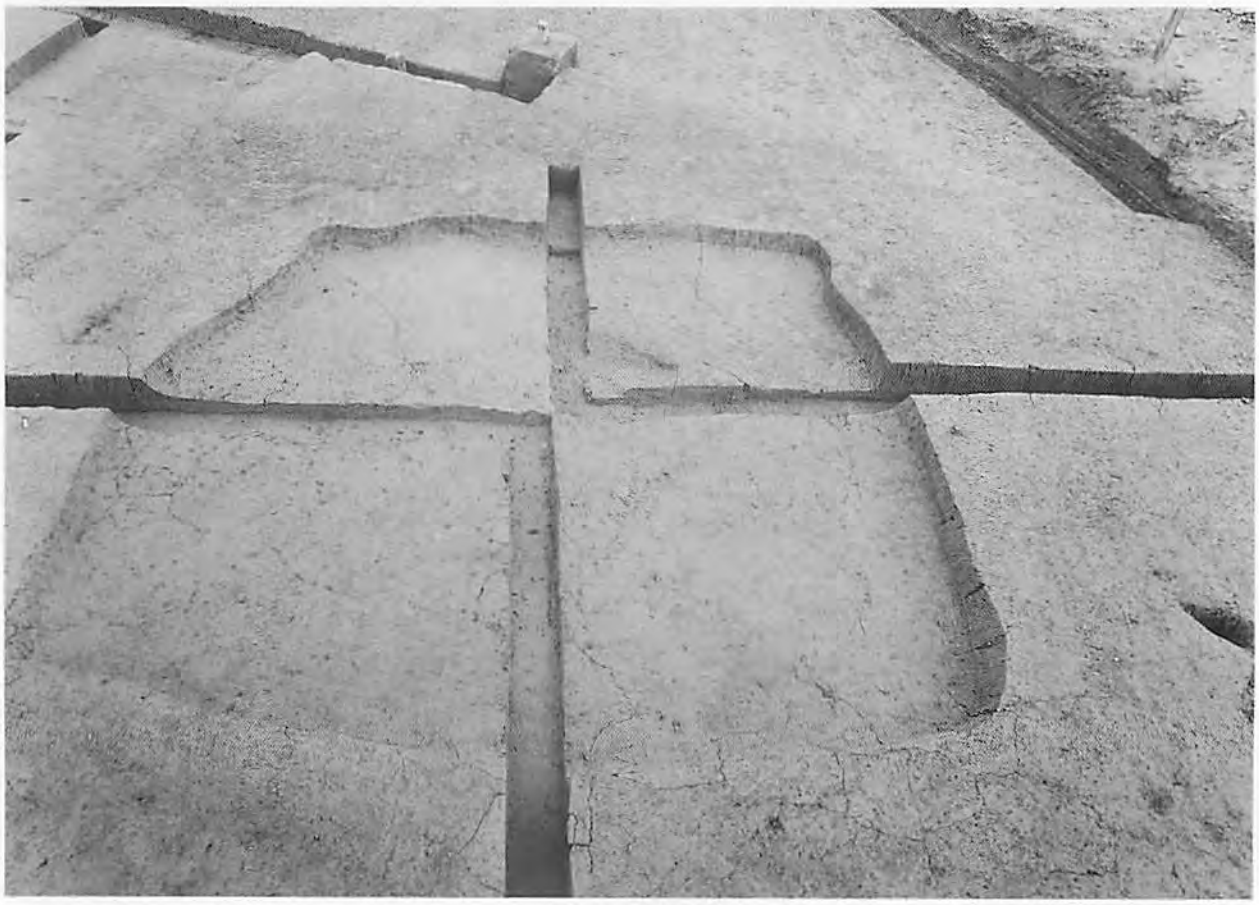
3区SI01　遺物出土状況

3区　作業風景

3区SI01　完掘状況



3区SI02　遺物出土状況



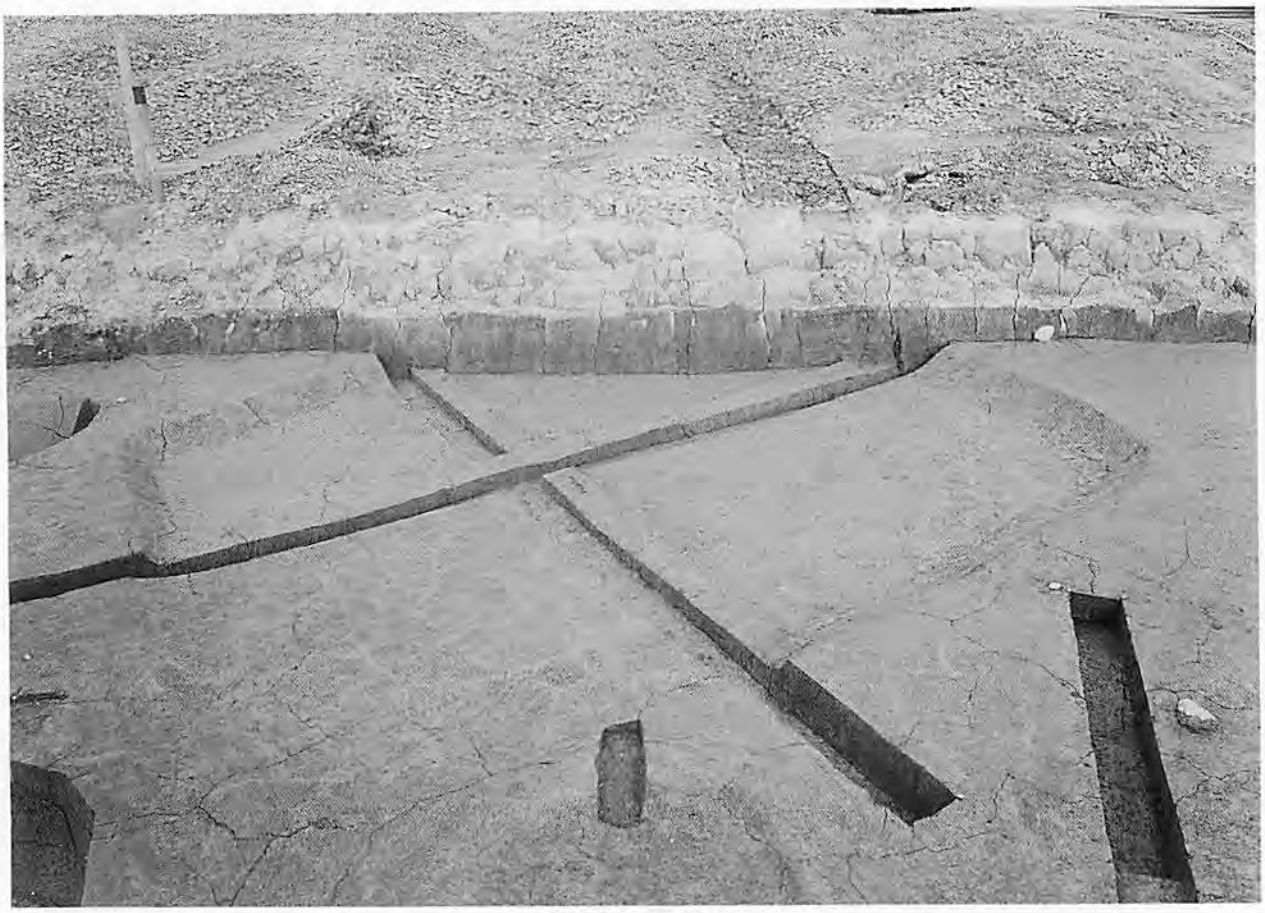
3区SI02　完掘状況

3区SI03　遺構検出状況

3区SI03　完掘状況

3区　焼失住居炭化物出土状況

PL.12



3区SI04　完掘状況

3区SK27・28　完掘状況

3区SI05　遺物出土状況

3区SI05　遺物出土状況

3区SI05　完掘状況

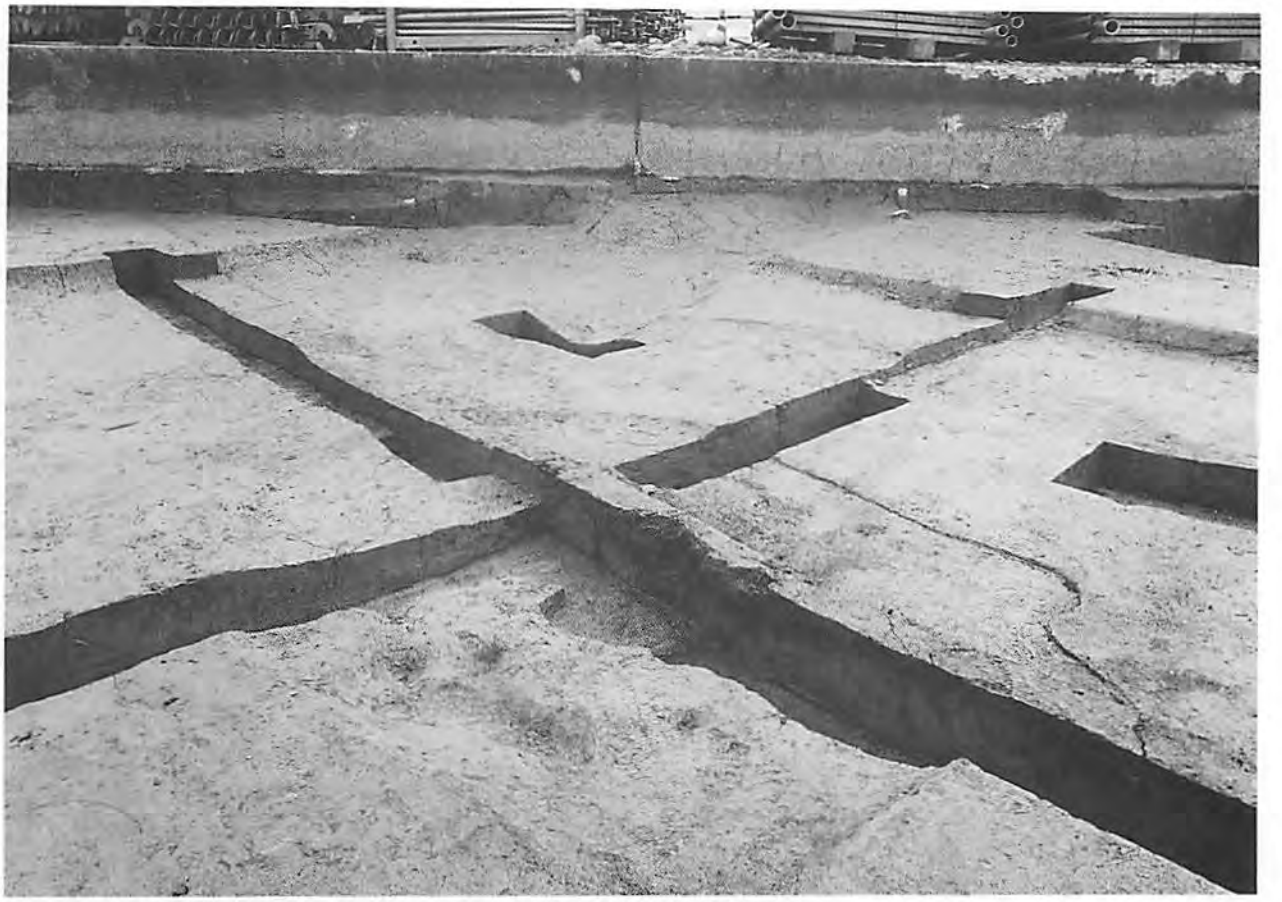
3区　作業風景

PL.14

3区　SI07遺物出土状況

3区SI07　遺構出土状況

3区SD01・02　溝状遺構完掘状況



3区SI07　遺物出土状況及び炉周辺完掘状況

3区SI07　完掘状況

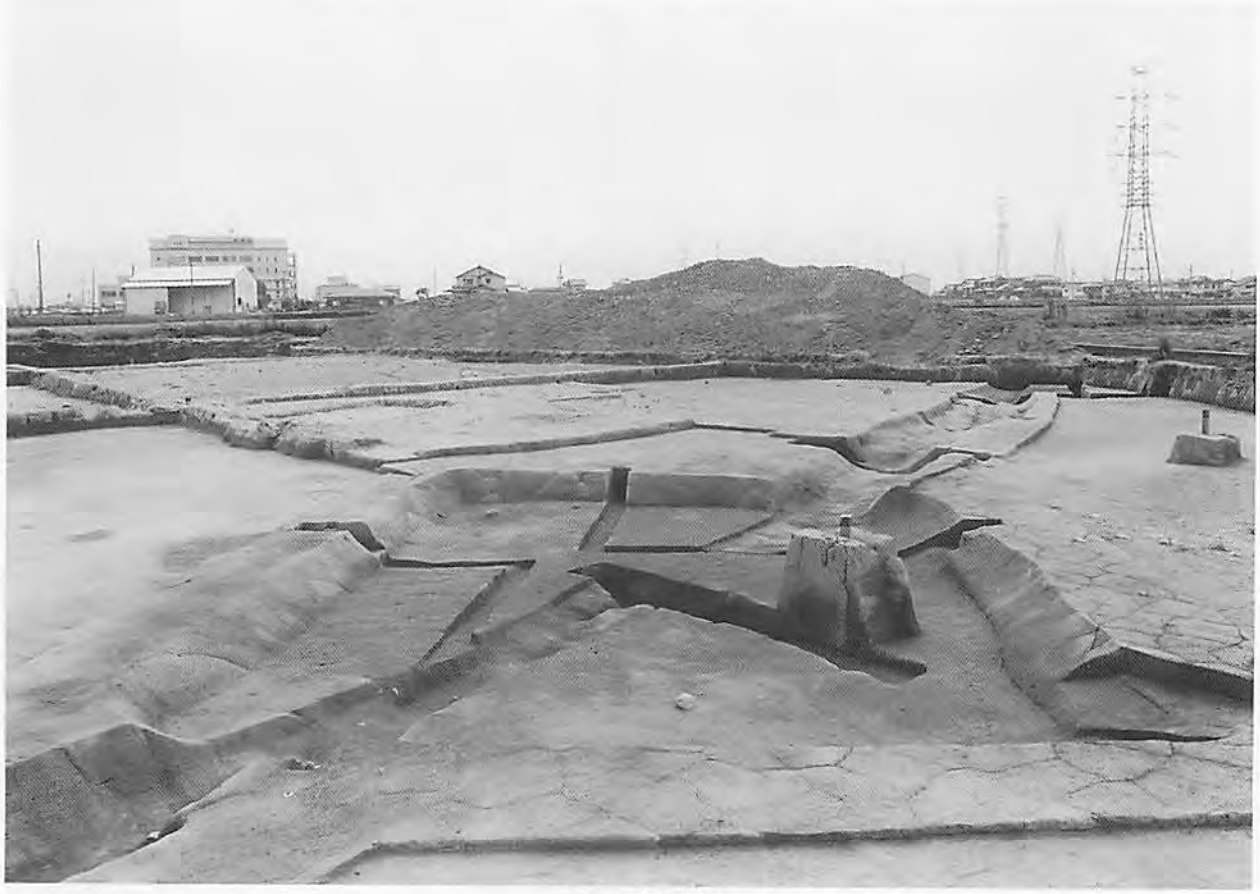
3区　遺構完掘状況（一部引渡し済）

4区SI02　遺構出土状況

4区SI11　遺物出土状況（近接）

4区SI11　遺構出土状況

4区SI03　完掘状況



4区SI09　完掘状況

4区SI05　遺構検出状況

4区SI05　遺物出土状況

PL.20

5区　完掘状況

5区SD02　完掘状況

5区SD03　完掘状況

7区SD03・06　完掘状況

7区　完掘状況（中心の溝はSD02）

6区SI01　遺物出土状況

6区SI02　遺物出土状況

6区　溝状遺構調査状況

6区　調査風景

6区　完掘状況

7区SK10　遺構出土状況

7区SK10　遺物出土状況（近接）

7区SK10　甕内小型丸底壺出土状況

7区　SK10　完掘状況

2

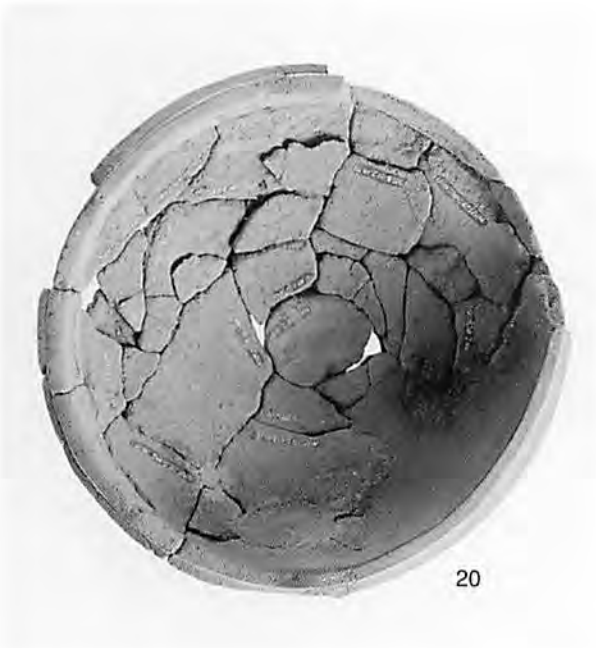
3

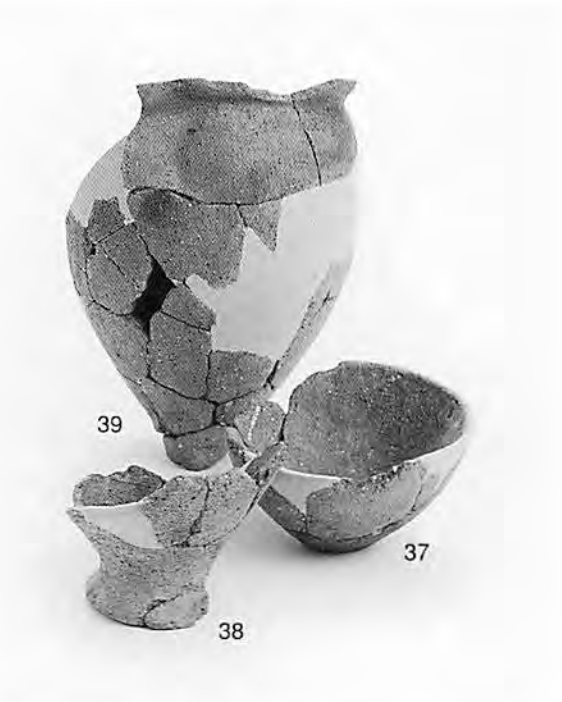
14

4

1・2区　遺物

2区　遺物

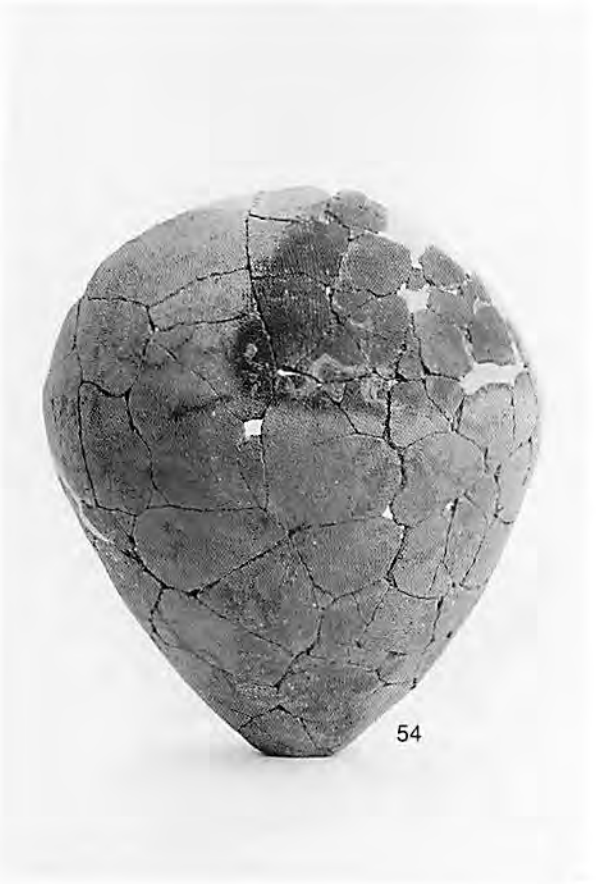




2区　遺物

PL.28

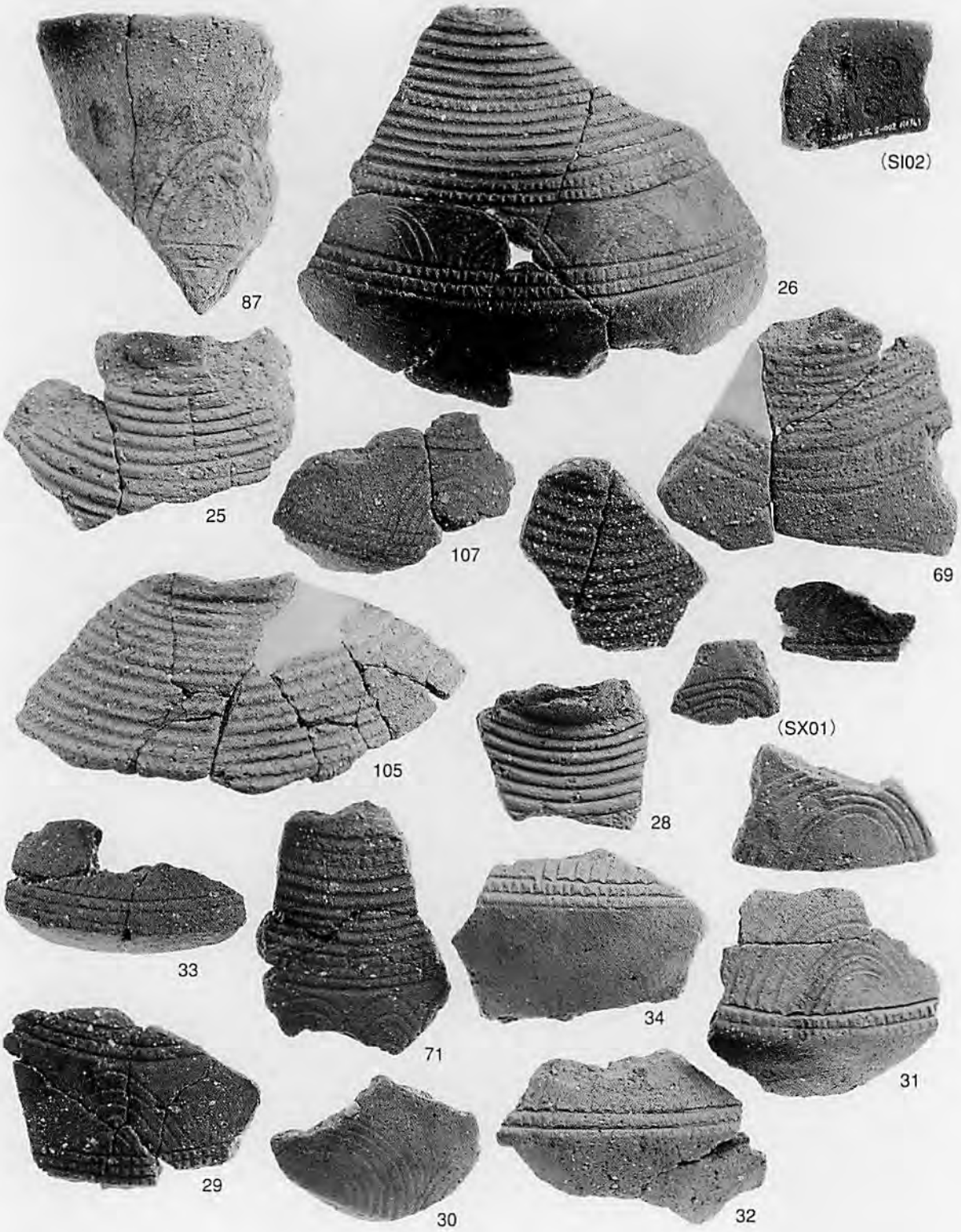
2区　遺物



2区　遺物

2区　遺物

2区　遺物



2区　遺物

2区　遺物

PL.34

114

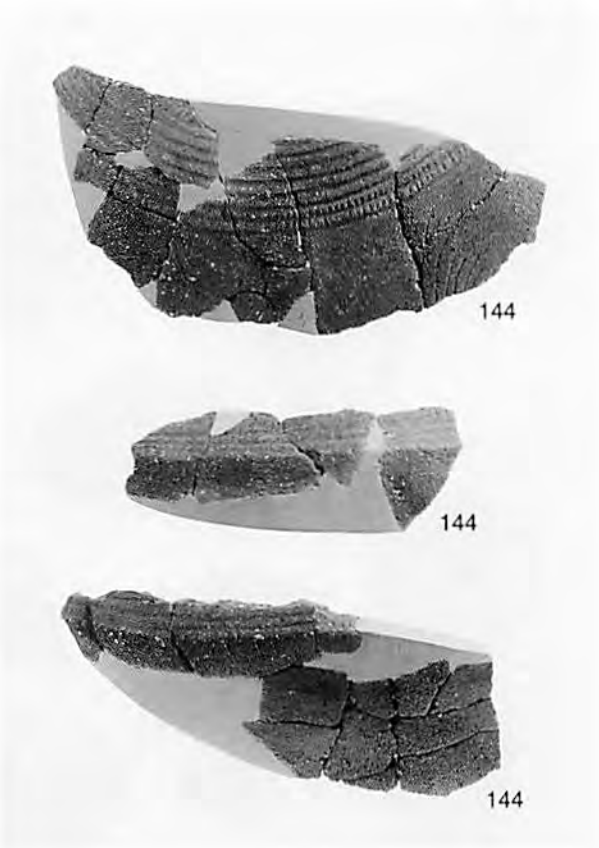
139

142

133

132

3区　遺物



3区　遺物

2・3区　遺物

4区　遺物

PL.38

173

215

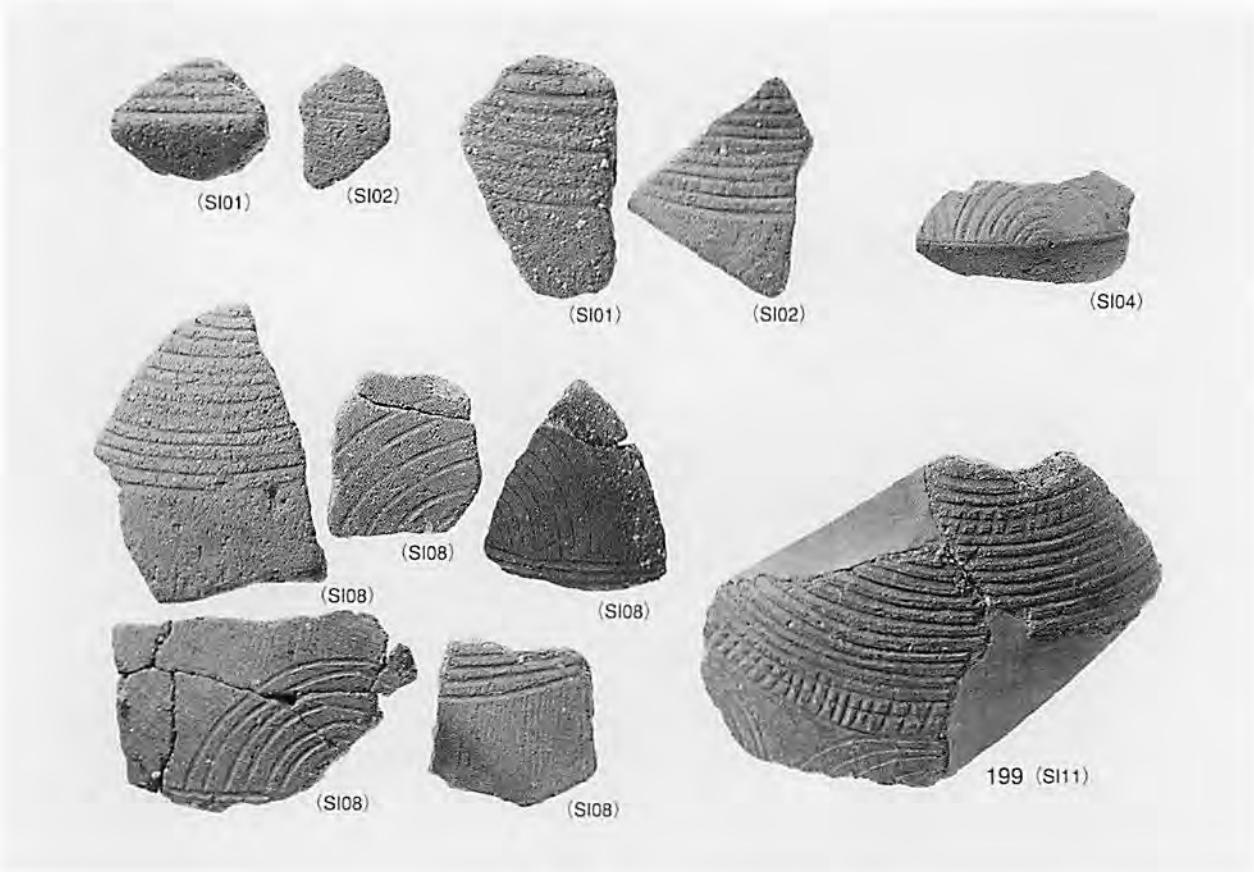
195

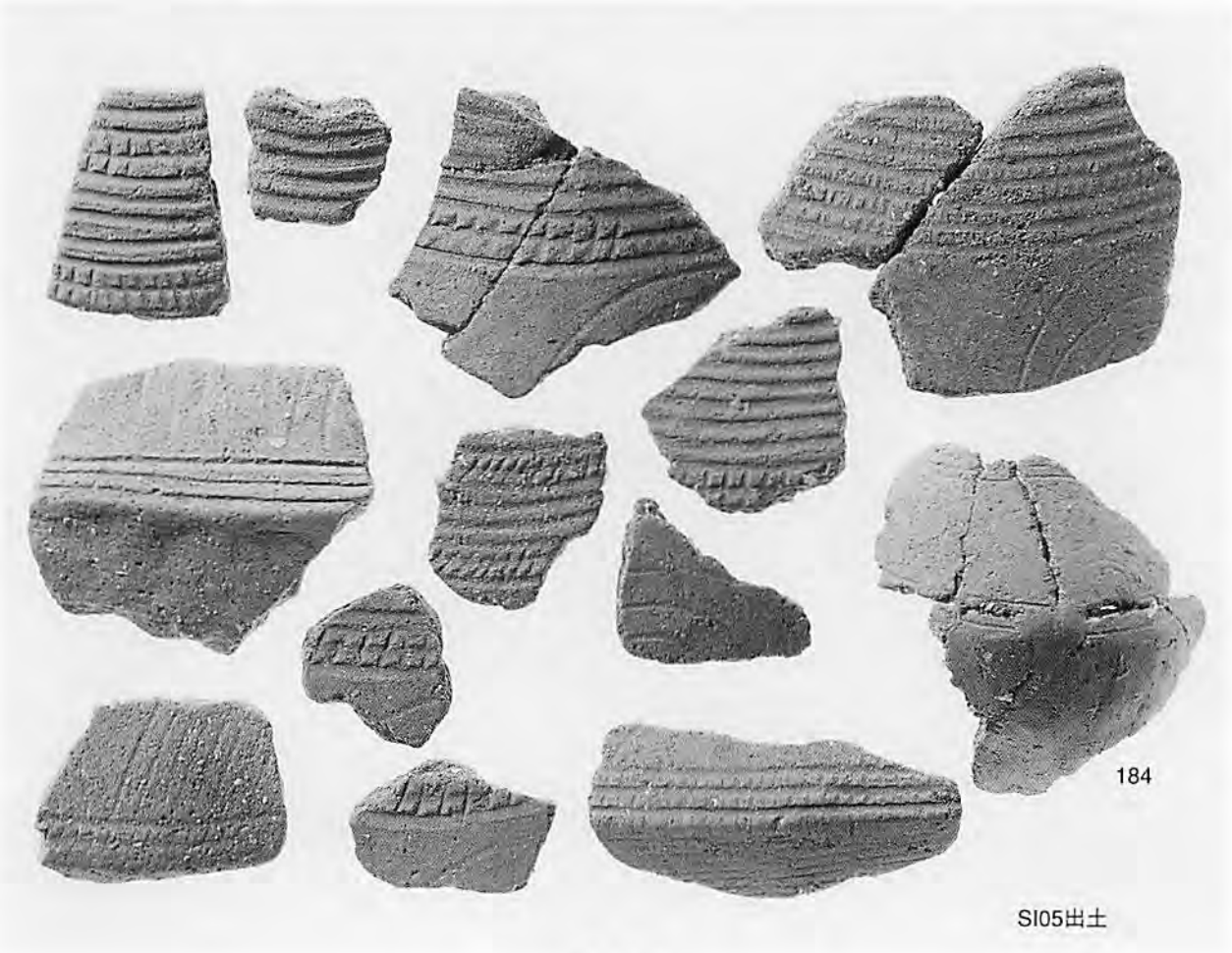
172

4区　遺物

4区SI05　出土遺物

PL.40


(SI01)
(SI02)
(SI01)
(SI02)
(SI04)
(SI08)
(SI08)
(SI08)
(SI08)
(SI08)
199 (SI11)


184
SI05出土

4区　遺物

包含層出土

4区　遺物

(SD02)

(SD02)

(SD02)

(SD03)

5区出土

261

238

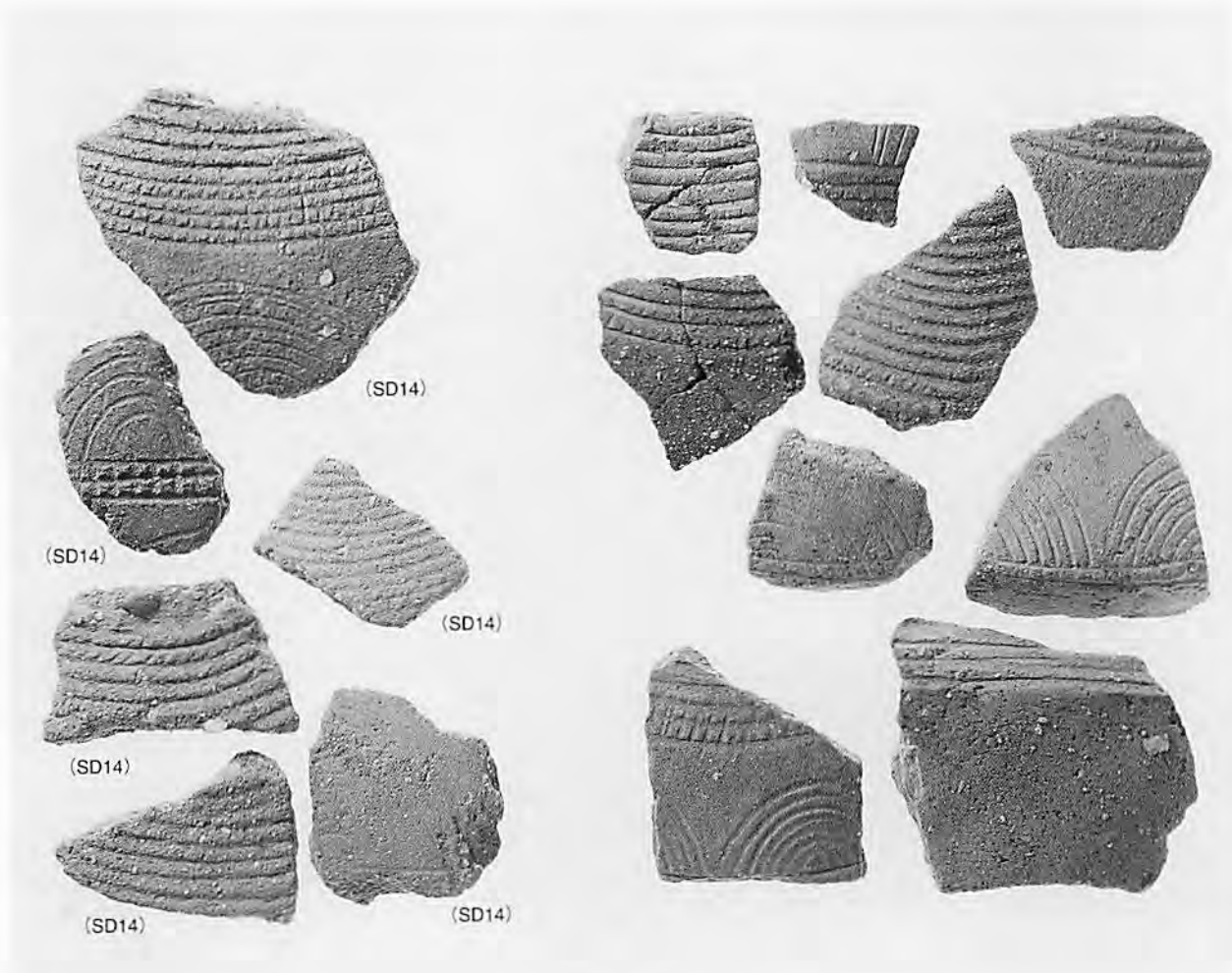
224

239

5・6・7区　遺物

6区　遺物

PL.44



6区　遺物

6区　遺物

7区SK10　出土遺物

7区SK10　出土遺物

PL.48

歷史的環境参考資料

歴史的環境参考資料（大鼠蔵貝塚出土資料）

PL.50

歴史的環境参考資料（大鼠蔵貝塚出土資料）

報告書抄録

ふりがな	にしかた　ひゃくた　いせき
書名	西片百田遺跡
副書名	九州新幹線建設に伴う埋蔵文化財
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第242集
編集者名	上髙原　聡　長谷部善一
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2007年3月31日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西片百田遺跡（にしかたひゃくたいせき）	熊本県（くまもとけん）(43)	八代市(202)	226	32°30′43″2153	130°38′17″0958	H12.8.1～H14.4.19	6487.6㎡	鉄道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西片百田遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代初頭	竪穴式住居 溝状遺構 土坑 遺物埋納遺構	八代在地系弥生土器、搬入系弥生土器、土師器、石庖丁等石器類 ガラス玉	土坑SK10から出土した埋納された土師器等の検出

印刷仕様

- 判型／A4判
- 頁数／244頁
- 組版／写真写植（13級　ゴッシク基本）
- 印刷／オフセット印刷
- 製版／スクリーン線数200線で製版
- 用紙／表紙（アートポスト4/6判220kg）
  本文（上質4/6判90kg）
  （アート4/6判110kg）
- 製本／左無線綴じ

熊本県文化財調査報告　第242集

西片百田遺跡

平成19年3月31日

発行　熊本県教育委員会

〒862-8609　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　株式会社　協和印刷

〒862-8609　熊本市出水5丁目11番31号いずみビル2F-D

18 教委 教文
② 0·0 9

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 242 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：西片百田遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/